

国道11号バイパス  
埋蔵文化財発掘調査報告書

福音寺遺跡（竹ノ下・川付・筋違）

星ノ岡遺跡（旗立・北下）

北久米遺跡（常堰・乃万の裏・農免）

1983

松山市教育委員会

国道11号バイパス  
埋蔵文化財発掘調査報告書

福音寺遺跡（竹ノ下・川付・筋違）

星ノ岡遺跡（旗立・北下）

北久米遺跡（常堰・乃万の裏・農免）



福音寺遺跡・竹ノ下地区出土  
獸形木製品（玉杖柄頭）

## 序

昭和49年1月から昭和50年3月まで、建設省四国地方建設局の委託を受けて、国道11号線バイパス、松山東道路新設工事に伴う事前発掘調査が行われ、既に概報であらましの報告がなされているところであります。各界から待望されていた道路も数年前から供用が開始されております。

今回の報告は、先の概報に続くものとして、補充並びに未報告分を収めていますが、資料が膨大なため2次に分け、前期分として刊行するものであります。

この国道11号線バイパスは、この調査に引き続き県の埋蔵文化財センターの手によって松山平野の東部地域を横断する形で調査が行われ、温泉郡重信町まで延びています。これらの報告書とあわせご利用いただければ、当平野の古代史解明に大きく貢献するものと思われます。

本調査に御協力をいただきました関係各機関並びに関係各位に心より感謝を申し上げますとともに、本書が学術、教育の分野において広く活用され、埋蔵文化財により一層の御理解を賜りますようお願いを申し上げる次第でございます。

昭和59年3月31日

松山市教育委員会

教育長 西原 多喜男

## 例　　言

1. 本書は国道 11 号線バイパス工事に伴い、建設省四国地方建設局の委託を受けて、松山市教育委員会が、昭和 49 年 1 月から昭和 49 年 8 月 31 日までに実施した発掘調査報告書である。なお昭和 50 年 3 月 31 日の発掘調査概報を補足するものである。
2. 本調査は中村町 1 丁目から北久米町にいたる 2.56 km の道路予定地内の調査の内、福音寺町より北久米町間の遺跡調査をまとめたものである。
3. 本書の執筆は主に森光晴（松山市立勝山中学校教諭）が担当し、木器の一部については、奈良国立文化財研究所技官黒崎直（現文化庁調査官）の執筆をもって充当した。
4. 本書の作成にあたっては、上記の執筆者のほか木器の一部の実測については、奈良国立文化財研究所の協力を得た。また造構、遺物の実測には大山正風（松山市立内宮中学校教諭）をはじめ、山本忠尚、岩木正二、西尾幸則、池田学、松村淳、越智武志、沖野新一、仙波五月、仙波千春の協力を得ており、遺物、造構の写真撮影は、西尾幸則の協力を基本として、本報告書を作成し、遺物、造構の実測、製図を最終的に森光晴が補足し作成した。
5. 本書に記載された、出土遺物及び、造構実測図及び、その他の資料一切は、古照資料館に展示公開と保存がなされている。

### 調査組織

#### 松山市教育委員会

教　育　長	西原多喜男	調　　査　主　任	森　　光晴
〃	関谷　勝良（前任）	調　　査　員	西尾　幸則
教　育　次　長	森田富士彌	調　　査　員　補	池田　学
	中村　安定（前任）	〃	松村　淳
文化教育課　長	藤原　涉	〃	越智　武志
〃　補佐	坪内　晃幸	〃	沖野　新一
〃	岸　　郁男（前任）	〃	
〃　係　長	大西　輝昭		

## 凡　例

1. 本書は国道 11 号線バイパス工事に伴い、建設省四国地方建設局の委託を受けて、松山市教育委員会が、昭和 49 年 1 月から昭和 49 年 8 月 31 日までに実施した発掘調査報告書である。なお昭和 50 年 3 月 31 日の発掘調査概報を補足するものである。
2. 本調査は中村町 1 丁目から北久米町にいたる 2.56 km の道路予定地内の調査の内、福音寺町より北久米町間の遺跡調査をまとめたものである。
3. 本書の執筆は主に森光晴（松山市立勝山中学校教諭）が担当し、木器の一部については、奈良国立文化財研究所技官黒崎直（現文化庁調査官）の執筆をもって充当した。
4. 本書の作成にあたっては、上記の執筆者のほか木器の一部の実測については、奈良国立文化財研究所の協力を得た。また遺構、遺物の実測には大山正風（松山市立内宮中学校教諭）をはじめ、山本忠尚、岩本正二、西尾幸則、池田学、松村淳、越智武志、沖野新一、仙波五月、仙波千春の協力を得ており、遺物、遺構の写真撮影は、西尾幸則の協力を基本として、本報告書を作成し、遺物、遺構の実測、製図を最終的に森光晴が補足し作成した。
5. 本書に記載された、出土遺物及び、遺構実測図及び、その他の資料一切は、古照資料館に展示公開と保存がなされている。

# 目 次

I	自然的環境及び歴史的環境	1
II	調査の方法と経緯	4

## 福音寺遺跡

I	福音寺遺跡の概況（地形と集落）	6
II	福音寺遺跡竹ノ下地区における地形	7
III	川付地区での遺構	60
IV	福音寺遺跡筋違（すじかい）地区	63
V	福音寺遺跡筋違A区における小考	96
VI	福音寺遺跡筋違B区の概況	98
VII	福音寺遺跡筋違B区における小考	140

## 星ノ岡遺跡

I	星ノ岡地区の概況と遺構の概況	142
II	星ノ岡旗立A区での遺物出土状況（未掲の遺構を含む）	143
III	星ノ岡旗立B区での遺構と遺物	146
IV	旗立C区での遺構と遺物	170
V	旗立地区における小考	202
VI	星ノ岡遺跡北下A区の概況	205
VII	北下A区における小考	223
VIII	北FB区の概況	224
IX	北下B区における小考	250

## 北久米遺跡

I	北久米遺跡常坂A区における遺構と遺物	252
II	北久米遺跡常坂B区における遺構と遺物	258
III	北久米遺跡乃方の裏地区における遺構と遺物	284
IV	北久米遺跡農免地区における遺構と遺物	291
V	北久米遺跡における小考	294

## 挿 図 目 次

### 福音寺

第1図 遺跡の分布図	3
第2図 福音寺遺跡竹ノ下地区発掘位置図	7
第3図 ドレンチ調査による地質略図	8
第4図 竹ノ下地区遺物出土状況図	10
第5図 木製品実測図 ①	12
第6図 " " ②	14
第7図 " " ③	16
第8図 " " ④	18
第9図 " " ⑤	19
第10図 " " ⑥	20
第10図の2 " " ⑦	21
第11図 弓生式土器実測図 ①	23
第12図 弓生式土器実測図 ②	26
第13図 嵌环形土器実測図 ①(土師器)	29
第14図 " " ②	33
第15図 " " ③	38
第16図 嵌形土器実測図 ①(土師器)	39
第17図 " " ②	42
第18図 嵌形土器実測図	44
第19図 小型丸底壺実測図	47
第20図 須恵器嵌形土器実測図 ①	51
第21図 " " ②	57
第22図 手づくね土器実測図と鉢実測図	57
第23図 川付地区掘立柱建物遺物実測図	60
第24図 塚出土遺物実測図	61
第25図 墓実測図①~③	62
第26図 福音寺遺跡筋違地区発掘位置図	64
第27図 福音寺遺跡筋違A区遺構全測図(折り込み)	65~66
第28図 S B 01遺構実測図	67
第29図 S B 01土器実測図	67

第30図	S B 04遺構実測図	69
第31図	S B 04上器実測図 (1)	70
第32図	S B 04上器実測図 (2)	76
第33図	S B 05遺構と遺物出土状況図	78
第34図	S B 06遺構と遺物出土状況図	80
第35図	S B 07遺構と遺物出土状況図	81
第36図	S B 07遺物実測図	82
第37図	S B 08遺構実測図	84
第38図	S B 08遺物出土状況図	85
第39図	S B 08上器実測図 (1)	92
第40図	S B 08上器実測図 (2)	93
第41図	S B 04遺構実測図	94
第42図	筋造A区出土の須恵器実測図	95
第43図	S B 04住居家屋復元図	97
第44図	S B 01遺構実測図	99
第45図	筋造B区遺構全測図 (1) (折り込み)	101~102
第46図	S B 01遺物実測図	103
第47図	S B 02遺構実測図	104
第48図	S B 03遺構実測図	105
第49図	S B 04遺構実測図	106
第50図	S B 04遺物実測図	106
第51図	S B 05遺構実測図	108
第52図	S B 05遺物実測図	109
第53図	S B 3 遺構実測図	113
第54図	S B 5 遺構実測図	114
第55図	S B 7 遺構実測図	115
第56図	S B 8 遺構実測図	116
第57図	S B 1・S B 2 遺構実測図	117
第58図	S B 9 遺構実測図	118
第59図	S B 11 遺構実測図	119
第60図	S B 12 遺構実測図	120
第61図	S B 13 遺構実測図	121
第62図	S B 14 遺構実測図	121
第63図	S K 01・S K 02・S K 05 遺構実測図	122

第64図	S K07・S K08・S K09遺構周辺の遺物出土状況実測図	123
第65図	S K07遺構実測図	124
第66図	S K06遺構実測図	125
第67図	S K08・S K09遺構実測図	125
第68図	S K15・S K16遺構実測図	128
第69図	S K19石枕実測図	129
第70図	S K21~25遺構実測図	130
第71図	S K26~28遺構実測図	132
第72図	鉄器実測図	134
第73図	石器実測図	135
第74図	青磁及び高麗白磁実測図	135
第75図	筋造B区遺構全測図 ②(折り込み)	137~138
第76図	筋造B区周溝内の土器と土壤基出土の土器実測図	139
星ノ岡		
第1図	星ノ岡遺跡旗立地区発掘位置図	142
第2図	旗立A区全測図	143
第3図	ぬるめ遺構平面断面図	145
第4図	旗立B・C区遺構全測図	146
第5図	S B01遺構実測図	147
第6図	S B01遺構実測図	149
第7図	S B01遺物実測図	150
第8図	S B02土器実測図	152
第9図	S B03遺構実測図	154
第10図	S B03土器実測図	155
第11図	S B04遺構実測図	157
第12図	S B04遺物実測図	159
第13図	S B05遺構実測図	160
第14図	S B05遺物実測図	161
第15図	S B1遺構実測図	165
第16図	S B2~6遺構実測図	166
第17図	S B5遺構実測図	167
第18図	S B6遺構実測図	168
第19図	S K1~3遺構実測図	169
第20図	S K遺構に伴う遺物実測図	169

第21図	旗立C区S B01・S B04・S B05遺構実測図	171
第22図	S B01土器実測図 ①	174
第23図	S B01土器実測図 ②	177
第24図	S B01遺物実測図	183
第25図	S B02・S B03遺構実測図	184
第26図	S B02土器実測図	186
第27図	S B03遺物実測図	187
第28図	S B04・S D・S K遺構実測図	190
第29図	S B05遺構実測図	191
第30図	S B05遺物実測図	192
第31図	S D遺物実測図	192
第32図	S B06遺物実測図 ①	200
第33図	S B06遺物実測図 ②	201
第34図	S B06遺物実測図 ③	202
第35図	S B06遺構実測図	203
第36図	北下地区発掘位置図	207
第37図	北下A区遺構全測図	208
第38図	S B01遺構実測図	209
第39図	S B01遺物実測図	210
第40図	S B02遺構実測図	211
第41図	S B02遺物実測図	214
第42図	S B03遺物実測図	216
第43図	S B03・S B04遺構実測図	218
第44図	S B1遺構実測図	221
第45図	S K1遺構実測図	222
第46図	S K2遺構実測図	222
第47図	S K2土器実測図	223
第48図	北下B区遺構全測図(折り込み)	225~226
第49図	S B01・S B1遺構実測図	227
第50図	S B01遺構実測図と遺物出土状況図	228
第51図	S B01遺物実測図	232
第52図	S B02遺構実測図	234
第53図	S B02土器実測図	236
第54図	S B03遺構実測図	240

第55図	S B 03遺物実測図 ①	241
第56図	S B 03遺物実測図 ②	242
第57図	S B 04・S B 05の土器実測図	245
第58図	S B 01遺構実測図	246
第59図	S B 03遺構実測図	247
第60図	グリッド内検出土器・石器実測図	248
北久米		
第1図	北久米遺跡常堀A区発掘位置図(水田遺構)	253
第2図	常堀A区溝状遺構図	254
第3図	水田遺構全測図	255~256
第4図	常堀B区発掘位置図	259
第5図	常堀B区遺構全測図	260
第6図	S B 01遺構実測図	262
第7図	S B 01遺物出土状況図	263
第8図	S B 01遺物実測図 ①	264
第9図	S B 01遺物実測図 ②	265
第10図	S B 01遺物実測図 ③	266
第11図	S B 02遺構実測図	271
第12図	S B 02遺物実測図 ①	272
第13図	S B 02遺物実測図 ②	275
第14図	S K 1~3 遺構実測図	275
第15図	S B 1 遺構実測図	276
第16図	S B 2 遺構実測図	277
第17図	S B 3 遺構実測図	278
第18図	S B 4 遺構実測図	279
第19図	S B 5 遺構実測図	280
第20図	中心杭N69付近の遺構実測図	282
第21図	北久米遺跡乃万の裏地区発掘位置図	283
第22図	乃万の裏地区 S B 01遺構実測図	285
第23図	S B 01遺物実測図	287
第24図	S K 遺構と遺物実測図	288
第25図	農免地E発掘位置図	290
第26図	農免地区遺物実測図	293

# 図版目次

## I 福音寺遺跡

図版1	竹ノ下地区発掘状況	1
図版2	竹ノ下地区護岸遺構	2
図版3	竹ノ下地区遺物出土状況(木製品)①	3
図版4	" " ②	4
図版5	" " ③	5
図版6	" " ④	6
図版7	" " ⑤	7
図版8	" " ⑥	8
図版9	" " ⑦	9
図版10	" " ⑧	10
図版11	" " ⑨	11
図版12	" (土器)①	12
図版13	" " ②	13
図版14	" " ③	14
図版15	" " ④	15
図版16	" (土器)⑤	16
図版17	" " ⑥	17
図版18	" " ⑦	18
図版19	" 木製品 1	19
図版20	" " 2	20
図版21	" " 3	21
図版22	上部器と石器	22
図版23	" " 4	23
図版24	" " 5	24
図版25	" " 6	25
図版26	須恵器 1	26
図版27	" 2	27
図版28	須恵器と上部器 1	28
図版29	土師器 2	29
図版30	川付地区土壤堆出土物	30

図版31	筋造A区発掘状況	1	31		
図版32	筋造A区発掘状況	2	32		
図版33	筋造A区発掘状況	3	33		
図版34	筋造A区 S B04遺構発掘状況		34		
図版35	〃	S B04遺物出土状況	35		
図版36	筋造A区 S B06遺構と遺物の出土状況		36		
図版37	〃	S B05の遺構と遺物	1	37	
図版38	〃		2	38	
図版39	〃		3	39	
図版40	〃		4	40	
図版41	〃		5	41	
図版42	〃		6	42	
図版43	筋造B区発掘区全景			43	
図版44	筋造B区	1		44	
図版45	〃	2		45	
図版46	〃	3		46	
図版47	筋造B区発掘状況	4		47	
図版48	筋造B区	〃	5		48
図版49	〃		6		49
図版50	筋造B区遺物出土状況		①		50
図版51	筋造B区周溝内出土遺物状況		②		51
図版52	〃	遺物出土状況	③		52
図版53	〃	〃	④		53
図版54	筋造B区埋葬遺構発掘状況		①		54
図版55	〃	〃	②		55
図版56	〃	土壤基及び土壤状遺構	③		56
図版57	〃	〃	④		57
図版58	〃	〃	⑤		58
図版59	筋造B区における主な遺物				59
図版60	筋造B区旗立B区の完掘状況				60

## II 星ノ岡遺跡

図版61	星ノ岡旗立地区発掘状況	1	61
図版62	"	2	62
図版63	"	3	63
図版64	"	4	64
図版65	星ノ岡旗立B区S B05の遺構	1	65
図版66	"	2	66
図版67	"	3	67
図版68	" S B05の遺物		68
図版69	星ノ岡旗立C区発掘状況	1	69
図版70	"	2	70
図版71	"	3	71
図版72	"	4	72
図版73	発掘現場の公開状況		73
図版74	星ノ岡遺跡発掘状況	1	74
図版75	星ノ岡北下A区発掘状況	1	75
図版76	"	2	76
図版77	"	3	77
図版78	"	4 (土壤状遺構1)	78
図版79	"	5 (" 2 )	79
図版80	星ノ岡北下B区発掘状況	1	80
図版81	" "	2	81
図版82	" "	3	82
図版83	" "	4	83
図版84	" "	5	84
図版85	" "	6	85
図版86	" "	7	86
図版87	" "	8 (掘立柱建物遺構と堅穴)	87
図版88	" "	9 (" " )	88
図版89	" "	10	89
図版90	星ノ岡北下B区発掘状況	11	90
図版91	"	12	91

### III 北久米遺跡

図版92 常壌A区全景	93
図版93 常壌B区全景	94
図版94 "	95
図版95 常壌地区発掘状況	96
図版96 " 遺物出土状況 1	97
図版97 " " 2	98
図版98 常壌地区発掘状況	99
図版99 " 遺物出土状況 1	100
図版100 " " 2	101
図版101 常壌B区発掘状況	102
図版102 " " (SB 5付近) 1	103
図版103 " " (SB 5付近) 2	104
図版104 " 出土遺物 石器	105
図版105 " " 土器	106
図版106 乃万の裏地区発掘状況	107
図版107 農免地区発掘状況	108
図版108 農免地区発掘完了後の状況	109
図版109 乃万地区 (土壤墓出土遺物)	110

# I 自然的環境及び歴史的環境

## 1 自然的環境

四国山地を南東に、高縄山地を北東に仰ぎ、西方に瀬戸内海を望む松山平野（道後平野）は、古くは伊予川（重信川）と右手川の二大河川の活動により形成された沖積平野である。両河川は共に水流は速く、平時は水量も少なく、河床を現し河原を旱している。だが一度雨をみれば流れは、川岸を穿ち、しばしば氾濫を繰り返している。いわゆる両河川は荒川である。

現在は、高縄山地に水源を発する石手川は、溝辺付近で西流し、下流の出合で、四国山地の豊峰石錦山に水源を発した重信川と合流して瀬戸内海の伊予灘に流入しているが、古くは共に独立河川として、開析谷を形成しながら山麓地帯では扇状地を形成し、また扇状地を回春して、下流に沖積地を形成していった。

これら二大河川の旧河道を、古地図より考察するならば、共に流路を幾度か変遷したものと考察される。右手川では岩堰の岩盤の妨げにより、河道は左右に流路を変えて西流し、開析活動を繰り返しているが、江戸時代の勝山独立丘陵に平山城を築き、城下町の形成にあたり、足立重信による大規模工事により、石手川は岩堰の岩盤を穿ち今日の右手川を、また伊予川の堤防を補強し、下流地帯の安全と水の確保という一大工事がなされ、彼の功績をたたえ伊予川は、重信川と呼ばれるにいたった。

さらに重信川の支流には、内川、小野川、前川、川付川等があり、これらの諸河川は共に北東部の高縄山系の南麓地帯の舌状に広がる洪積台地を開析しており、台地の西端部に天山、星ノ岡、東山、上要山の残丘（伊予の香具山）がある。

## 2 歴史的環境

鳥足状に発達した、川付川、前川、内川、小野川は開析作用（活動）を繰り返し現在に至り、高縄山系の南麓地帯の舌状台地をはじめ、小河川の織りなす大小の河岸段丘を形成しているが、これ等河岸段丘の形成された地域一帯は、早くより古代人の居住の地として、広く活用された地域でもある。

これらの地域における生活遺構をはじめ、生産遺構や、祭祀遺構、また墓域等の調査が日々と進められ、やがては松山平野の全貌が解明される日も近い。特に松山平野の東部地域は、国道11号線バイパス工事として帶状に横断する形となり、これらの工事により大きく古代史への解明がなされよう。

とりわけ予定地は、前述するごとく、二大河川に挟まれた地域を諸小河川が50m～150m

間隔でやや平行して西流し、天山の独立丘陵付近で一部は合流し、また残る河川も僅かに西流して石手川及び重信川に合流する。これらの小河川もまた数条の支流を合わせ流れているところから、諸河川の開析活動により洪積台地は小さく縦断され起伏の豊かな地形となり、これらの小規模な洪積台地に刻まれた平坦面には、大小さまざまな集落が形成され、またあるときは、田畠として利用されたものと推察される。さらに台地の起伏に加えて、平野部中央に点在する独立丘陵は、かつては、天山独立丘陵の連山の外に、石手川南岸地帯には、小隆起をする丘陵が点在したが、今は石手川の堤防工事により消滅した。(素鷺小学校付近と祇園町素鷺神社付近)これらの丘陵の南面に指手の間に点在するのが、天山の独立丘陵である。

この地域一帯こそ古くより、自然の恵み豊かな安住の地として活用され、現在これら舌状台地上に知られる遺跡は多く、縄文時代の遺物を包含する地域としては、久米山田池周辺地をはじめ、天山星ノ岡丘陵があり、縄文時代以前の遺物も五郎兵衛谷遺跡や天山遺跡、小坂釜ノ口遺跡に出上している。続く弥生時代の遺跡は実に多く、しかも弥生前期としては、久米高畑遺跡や来住V遺跡、東石井(今在家)遺跡があり、弥生中期の遺跡では、来住庵寺跡遺跡、来住1、2、3、4遺跡の外、久米窪田遺跡、鷺ノ子遺跡、天山遺跡、星ノ岡遺跡、東本I遺跡、中村町I遺跡等が群集する。また弥生後期の遺跡としては、小坂釜ノ口遺跡、木塚遺跡、中村町II遺跡、天山北遺跡、浮穴小学校遺跡、来住庵寺跡遺跡、桑原高井遺跡、東本II遺跡等枚挙にいとまがない程に各遺跡は重複、または過密化している。この重複と過密化は時代と共に加速度的に増加している。いいかえれば特に弥生～古墳～歴史時代における埋蔵文化財の豊富でもある。中でも弥生時代前期の櫛棺を出土した東石井小学校遺跡をはじめ、古墳時代の前方後円墳が6世紀初頭か5世紀末に位置付けられる、経石山古墳をはじめ、三島神社古墳、東山神社古墳、星ノ岡古墳、消滅した双子塚古墳、また6世紀終末か7世紀初頭と推定される波賀部大塚古墳が点在して造営されている。なかでも北久米に後円部のみを現存する桜塚古墳は王冠を出土したと伝えられるものであり、前方部に埴輪列(農免道路工事中確認)が配置されていた。さらに歴史時代の代表とされるもので、氏寺と見られる来住庵寺跡は、回廊をもつ法隆寺式伽藍配置として国指定の史跡とされた。この寺院の東方200mには郡衙と推定される遺跡があり、数個の木簡をはじめ、須恵器製造時の叩きしめ工具等も出土している。これ等の外に中村庵寺や中ノ子庵寺跡が工事予定地より僅かに離れて点在する。

その外に生産遺構としては、米住III遺跡よりパン小麦2粒の検出がなされ、弥生中期の土器包含層と帰属するもので、弥生時代での畑作農耕が確認され、また来住I遺跡では弥生後期から古墳時代初期と推定される水田遺構が検出されている。

またこの台地を取りまく、周辺部の低位山稜地帯及び丘陵部には、低地の生活舞台に対して、聖域としての墳墓や、祭祀的な行事を行った遺跡、須恵器の生産跡等が群集している。ちなみに列举すれば、5世紀の群集墳であるお茶屋台遺跡をはじめ東野、爛寺、山田池、芝

第1図 遺跡の分布図



— 3 —

ヶ岬、天山、東山、星ノ岡、久米大池、今吉、かいなご、駄場、播磨塚等が、それぞれに群集する古墳時代後期古墳群をなしている。

これら埋蔵文化財の農庫としての久米地区は、古くは日本書紀に伊余国造が任命され、統いて国造本記では、応神天皇の御代に久味国造、小市国造、悠麻国造、風速国造が任命されたとあり、伊与主命による久味の統治がなされた。久味とは今の久米地区あたりをさすものと推定される。

## II 調査の方法と経緯

松山市東道路予定地及び国道11号バイパス道路予定地の内松末町～北久米町農免道路に至る間の遺跡確認調査を、建設省松川工事事務所との立ち会いで行い、発掘調査可能な場所と地表面に現われている遺物の採集を行い、さらに下記の確認調査を実施した。

### 1 確認調査の方法

- イ. 対象地全域の予備調査として関係機関と共に踏査。
- ロ. 遺物の散布地点については、ボーリング調査を1×1mで実施した。散布状況とボーリング調査の結果により、遺構の確認を深めるため、トレンチ調査を実施した。

### 2 トレンチ掘りによる遺構の確認

前項イ、ロの実施により、トレンチを工事予定地の両側端に幅60×深さ80cm（深度は遺構との関係により上下した）の溝をいれ、その溝に見られた土質の変化する状態を通じて、遺構が存在するか否かを調査検討を行った。なおトレンチ掘りは、1月より3月まで実施し4月よりの発掘調査への手がかりとした。以上の調査により、第1図に示す地域は遺構へと発展する可能性のある地域であると断定した。これらの地域をそれぞれに区画名を付し、発掘調査実施へのグリッド構成を行った。

- イ. 中村町1丁目と2丁目、弥生中期後半から後期にかけての集落跡と後世の墳墓地
- ロ. 小坂町2丁目、3丁目、弥生後期から古墳時代の集落と牛產遺構
- ハ. 枝松町5丁目、6丁目、古墳時代の集落跡（特に掘立柱建物遺構）
- ニ. 福音寺町
  - 河岸段丘上には歴史時代の遺構（掘立柱建物遺構と墳墓）
  - 川付川河岸流域では、護岸遺構としての牛產遺構と、河川の開析作用による浮遊遺物
  - 筋違（すじかい）地城では集落跡及び墳墓（祭祀遺構）
- ホ. 星岡町  
弥生時代の終末から古墳時代の集落跡及び墳墓

へ、北久米町	弥生時代の終末期から古墳時代の集落跡と墳墓
ト、その他	道路工事予定地内に点在する塚と無縁墓地（近世）

### 3 グリッドの設定

発掘地区はすべて、グリッドを組み基準はすべて磁北において。グリッドは1区画を5×5mとして構成したが、すべて表土（耕作土）の排除後に区画しポイント打ちを行った。

表土の排除作業は、事前のトレンチ調査により確認している層序を基準として、ハンドドーザ…を使用してその効率を計った。

トレンチ調査と平行して調査を実施したものに塚の調査がある。グリッドはトレンチ調査の結果に従っての設定であるが、発掘調査名はできる限り各地域での小字名（ほのぎ）を中心とする区名とした。

#### イ) 発掘実施にあたっての調査区名（本報告分のみ記載）

福音寺遺跡 中心杭 No.19~23 を竹ノ下地区、No.24~29 を川付（かわつけ）地区、No.33~38 を筋達（すじかい）地区とした。

里ノ岡遺跡 中心杭 No.38~43 を旗立（はたたて）地区、No.45~52 を北下（きたさがり）地区とした。

北久米遺跡 中心杭 No.53~65 を常坂（じょうせき）地区、No.66~71 を乃万の裏地区、No.83~85 を農免（のうめん）地区とした。

さらに発掘調査にあたっては、これらの地区名の内を、遺構の状況や、地形の様相等により、A区、B区、C区と細分割を行いながら調査を実施した。

#### ロ) 各調査地区における発掘調査日数

旗立地区発掘調査延日数 30 日、筋達地区発掘調査延日数 73 日、北下地区発掘調査延日数 46 日、乃万の裏発掘調査延日数 25 日、竹の下地区発掘調査延日数 33 日、川付地区発掘調査延日数 20 日、仙波健吾氏宅の裏庭における塚調査延日数 12 日、の総計延日数は 298 日を要しての調査となった。その外にトレンチ調査に要した延日数は 55 日間であったことを記しておきたい。

## I 福音寺遺跡の概況（地形と集落）

福音寺遺跡は、筋違と川付、竹ノ下の「保の木」をもつ小字名があり、この小字名をそれぞれ発掘調査の小地区名として、筋違地区をA区とB区に分割し、川付地区を、川付川の川駒を竹ノ下地区、川付川の河岸段丘上を川付地区とした。

福音寺遺跡における発掘対象面積は、筋違約1,500m<sup>2</sup>、竹ノ下約800m<sup>2</sup>、川付約450m<sup>2</sup>で、川付地区では約117m<sup>2</sup>が墓碑を持たない墳墓である。

なお福音寺遺跡は、南接して星ノ岡の低位な独立丘陵の北面に広がる星ノ岡遺跡に接しており、大きくは、星ノ岡、天山、東山の独立丘陵を核とする遺跡内に含められよう。とはいっても調査対象地域一帯の地形は、総括的には洪積台地であるが、細部にわたれば小規模の起伏がみられ、しかも僅かな低地（窪地）にはそれぞれに湧水する泉が分布している。

当地区はバイパス完成後は、陸橋を横架しての道路が予定されており、川付地区で旧星ノ岡線と平面交叉を予定されている。したがって川付地区と竹ノ下地区は共に陸橋下に位置する範囲となる。

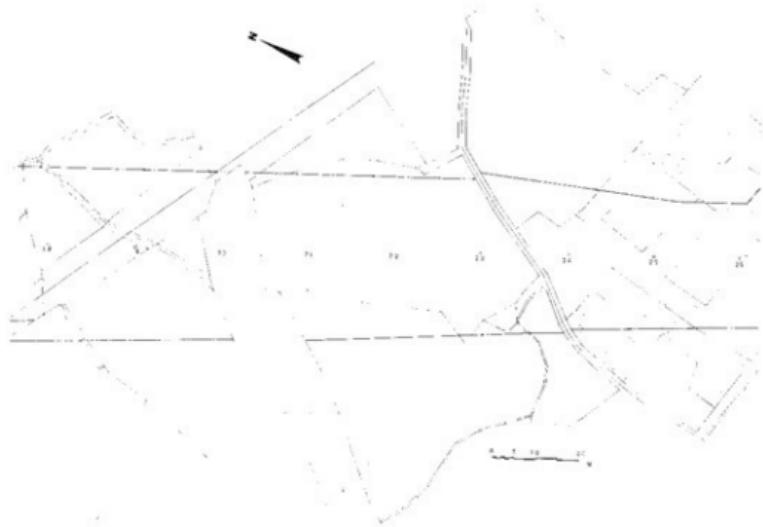
筋違地区には無住居地帯で南接する星ノ岡遺跡との境に四国電力の高圧線の鉄塔がある。この鉄塔と平行して農道が東西に延び、西端部は星ノ岡線の市道に連絡している。この農道を境として北面が筋違であり、南面側は旗立である。

筋違地区は、現在は一面の水田地帯であるが、水がかりの悪いやや台地の背にあたる場所で、戦前は畑作地帯として活用されていたと古者は説明する。筋違地区には民家ではなく農地である。

川付地区は、筋違地区的北面に続く位置で、筋違と川付との境には、現在は防火用水池が2基設置されている。かつては2基ともに清水の湧く泉であった。この泉の周辺部に6戸の民家が古くより集落を形成していたが、現在はその面影すらとどめない程に住宅化が進んでいる。いまも集落の周辺部に竹林の小叢がある。これらはいづれも塚である。

川付地区的下方に一段低く広がる地帯が、竹ノ下地区である。竹ノ下とは館の下とも理解される地名であり、古くはやかた（館）の下に広がる地域と推察される「保の木」である。ちなみに前述の筋違は、俗にいうすじとは道違いとか、条違いとかを意味するものと解される地名であり、筋違とは、道がちがい、または条が違うという意味に解され、竹の下との保の木を総合すれば、やかたの下であり、やかたの上部は筋違となる故に、他地区とは道がちがうとも解される地名である。このように理解する時、筋違とは、他地区とは番地違いとも理解される。このように理解するならば、筋違の保の木は後世に言う番外地ともとれる保の木である。

第2図 福音寺遺跡竹ノ下地区発掘位置図



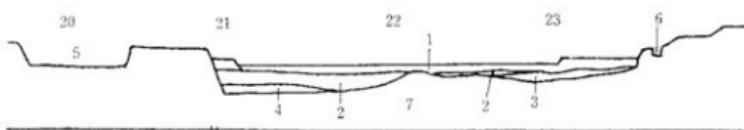
## II 福音寺遺跡竹の下地区における地形

道路予定地内のトレンチ調査により、すでに深度 80 cm 前後にて植物遺体や須恵器、土師器の土器片を多量に出土した。当地区の地目は現在水田であるが、全般的に湿地帯の一毛作地域であり、特に川付川の増水時には容易に冠水の被害にあう地域でもある。しかし地力はあり水田耕作地としては多収穫な上田である。

トレンチ調査により、当地は断面図にみられるごとく、川付川の河床の移動がみられ、少なくとも 2 度の流路変更があったと想定された。

中心杭 No. 23 は僅かに冠水状態の出水をみた可能性がうかがえるが、第 3 層が植物遺体を含む有機物層であり、黒色の泥炭であるが、第 2 層に僅かに砂層があり冠水の状況がしのばれる。中心杭 No. 21 と 23 の間は、明らかに河床であり、第 4 層の層序は上部が砂礫層で、下部に向かうにつれ礫岩は大きく、また密度を増加させている。さらに中心杭 No. 21 での第 3 層ではなく、第 2 層の砂層による層序であることがトレンチ調査で確認された。さらに中心杭 No. 21-22 の基盤面（地山）である乳白色の洪積粘土層は、大きく水流による侵蝕をうけており、かなりの水流があったものと推察された。

第3図 トレンチ調査による地質略図



1 耕作土 2 砂層に骨を含む 3 有機物を含む黒色泥層 4 砂礫層(礫岩は下層部密となる)  
5 川付川 6 用水路 7 乳白色の粘土地山層、地山部は埋層がある 20~23は中心杭  
(現在の川底)

## 1 調査と遺物の概況

発掘調査は48年8月~10月にかけて実施した。調査対象面積は、中心杭No.22より東部地域を調査対象地域とした。面積は東西約30m、南北15mの約450m<sup>2</sup>の範囲を深度80~170cmにおいて実施した。

出土遺物は実に多く、特に植物遺体を中心とする遺物456点の大量出土をみた。これらの遺物の内訳は、建築用材、農工具、植物の種子、流木とに分類される。なかでも建築用材のはほとんどは、杭木でもって地山面に打ち止められているものが多く、護岸的機能として構築されており、建築用材は転用されている状態にあった。

また土器類の出土数も多く、しかも完形品の出土が実に豊富であった。土器は弥生式土器をはじめ土師器と須恵器である。またこの外に手づくりによる小型の土師質土器があり、特記されるべき出土遺物もある。さらに少量ではあるが、石器類の出土遺物もあり、土器、石器類の出土件数は558点を数える。

## 2 主な出土遺物の内訳

転用材、柱材4本、梁材1本、枘穴の穿たれた材数点

農工具類、鍬2個、鎌の柄5本、鉄斧の柄1本、鋤3隻、木槌1点、工作台1点、穂の子1点、生活工具類、カキ棒、火器、盆、自在、縦形桶、竹籠、コホリ籠、弓、琴の一部? 模倣舟1、木舞1

その他、植物遺体をはじめ、種子やひょうたん、歯頭を模倣した枘頭

石器類、砥石、磨製石器、石剣、白玉

以上が出土遺物の概況であるが、詳細は出土遺物の項で記述する。

### 3 遺構

#### (1) 護岸遺構

護岸遺構は中心杭 No. 22 付近に、建築用材を杭木により打ち止める形で構築されていた。第4図の出土遺物の内 T 19 及び T 23, T 26 にみられるものである。護岸遺構はさらに L 字形に折れて T 2, T 1 へと続いている。護岸遺構に使用されている構築方法は、垂直に打ち込まれた杭木と、40°~30°に傾斜した杭木が、建築用材(転用材)を横転させて固定しておき、杭材で固定させた横材を母体として、その表面(流水側面)にオギや、直径 1~2 cm の若年木の枝材を利用して、護岸の機能を高めている。遺構の大部分は破壊されていたが、垂直に打ち込まれた杭木列をたどることにより、往時の遺構を尋ねることが出来た。遺構は地山の粘土層に杭木を打ち込んでおり、かつての自然堤防上に構築された護岸施設と判断された。ただ横材の浮上を防止した傾斜する杭木より見るならば、杭木は砂礫層の中に打ち込まれており、明らかに急激な出水による浸蝕を防止するための護岸構築であり、その後の失流により、杭木の上層に泥層及びシルト層(細砂層)の互層を形成したものと推測される。

#### (2) 旧河川地域での遺物

第3図トレンチ調査による地質略図に示す中心杭 No. 20 は、現在の川付川の河中に位置しており、中心杭 No. 21~22 の図示は旧河川地域である。現在伊予鉄道株式会社の軌道が設置されている下流 10 m 付近より大きく蛇行して、本発掘地域の付近が最も湾入する地点となっている。

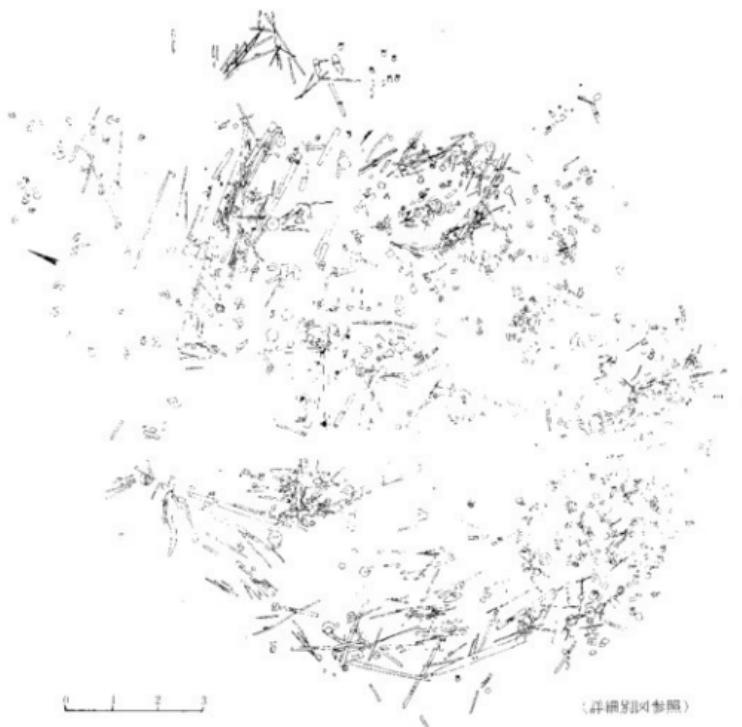
### 4 出土遺物 1

#### (1) 木製品類

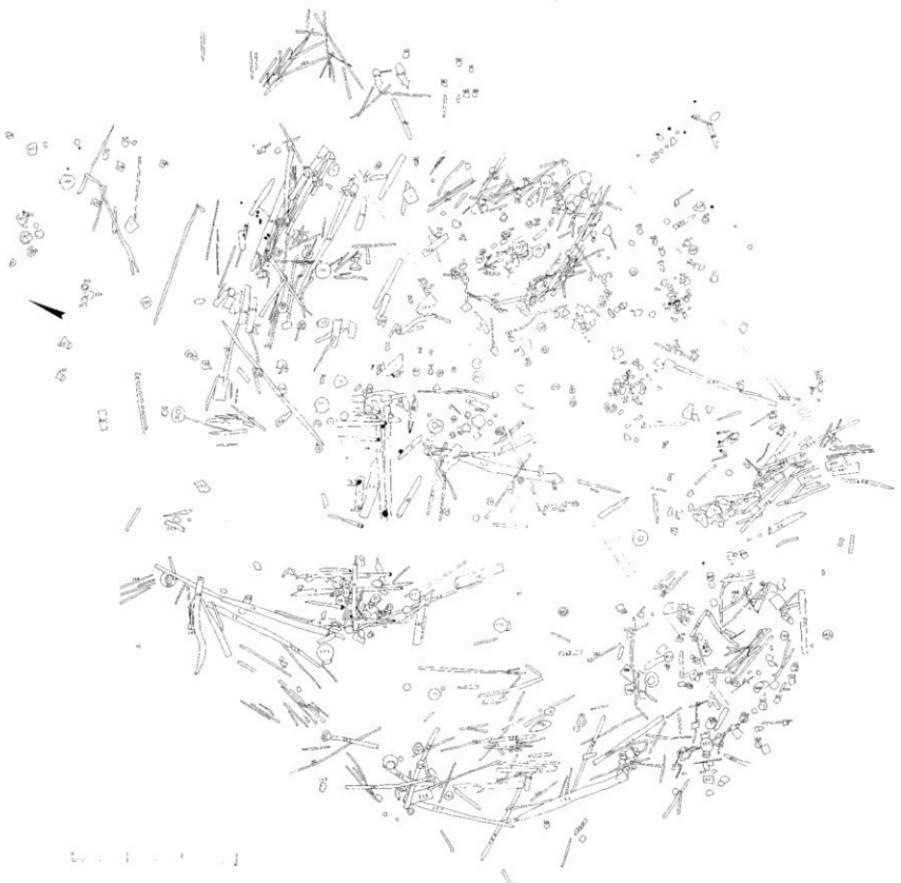
竹ノ下地区から出土した木器には、農耕具、工具類、容器類など各種のものがある。以下では、このうち用途の判明する木製品を中心にして記述したい。

**農耕具** 農耕具には、スキ 4 点、エブリ形農具 1 点、クワ 1 点、スキの柄とみられる棒状品 2 点がある。

第4図 竹の下地区遺物出土状況図



スキ（1～3） 何れも柄と身を別木で作るスキの身部で、ナスピの縦断面形に近い形状をもつ。これらは、耕起部分である刃部と柄をとりつける基部からなるが、刃部の形状で2種類に分類できる。Aは刃部先端にU字形スキ先を装着するもので、先端を丸くおさめる。Bは刃部が2股に分岐するもので、スキ先は装着しない。1はAに分類できるスキで全形をとどめる。刃部中央下寄りには、両側縁からほぼ直角に抉り込んだ闕があり、以下をスキ先の装着部とする。装着部の周縁は、稜をおとし丸く削り、先端はU字形に作っている。刃部上半は次第に幅を減じて基部に移行する。刃部と基部との境には突起を作るが、その上部はさらに幅を減じ、柄を受ける断面舟底状の基部端となる。突起下端と基部先端で柄を装着するのであろう。全長45.2cm、最大幅14.5cm、厚さ1.7cm、スキ先装着部長9.5cm、最大幅



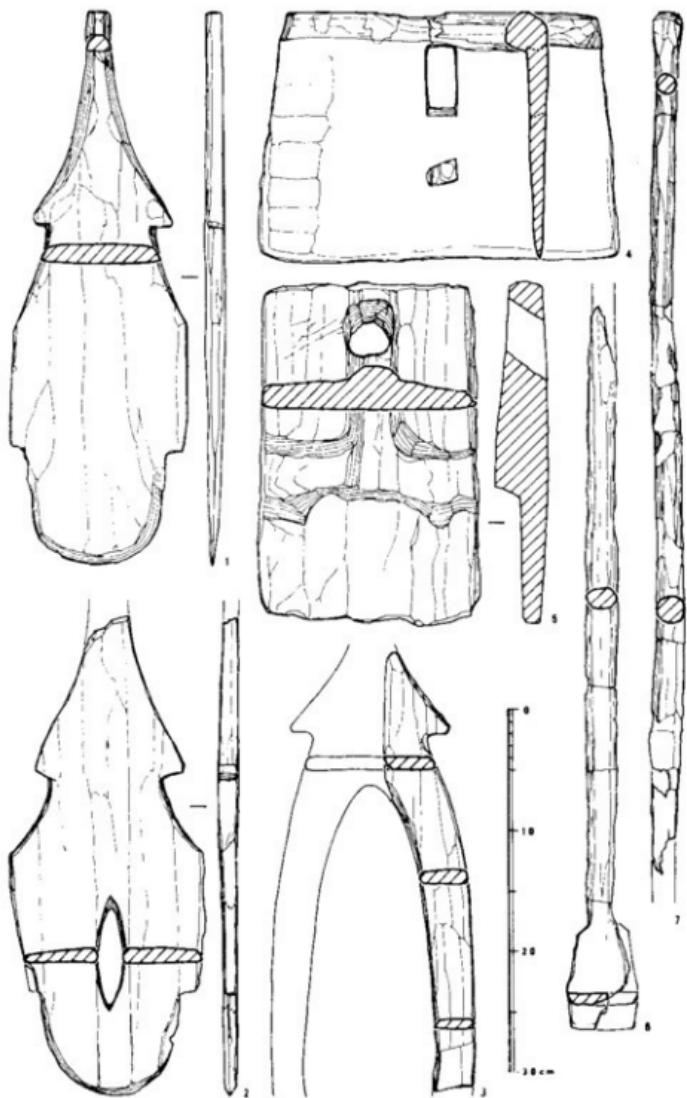
11.2 cm、厚さ 1.0 cm。2 も A に分類されるスキで 1 に近い形状をもつが、刃部中央には刀子状の利器で斜めに削り込んだ橢円形の孔があり、その下端は闊からやや下にまでおよぶ。おそらく耕起土との粘着をやわらげる工夫であろう。現存長 39.1 cm、最大幅 16.0 cm、厚さ 1.7 cm、装着部長 8.4 cm、最大幅 11.4 cm、厚さ 1.2 cm、孔長径 7.8 cm、短径 2.1 cm、3 は B に分類できるスキである。基部の形状は A のスキと同様に作るが、刃部は 2 股に分岐している。スキ身の縱半分をとどめるもので、分岐した刃部側縁には明確に刃を作り出していない。刃部先端を失うがおそらく鉄製のスキ先は装着しないものであろう。現存長 35.9 cm、復原幅 26.0 cm、厚さ 1.2 cm。図示しなかったスキが 1 点ある。これは A に分類できるもので、1 と同じ形状をもち、刃部先端にスキ先を装着できる。全長 44.1 cm、最大幅 15.0 cm、厚さ 1.5 cm、スキ先装着部長 9.8 cm、最大幅 10.9 cm、厚さ 0.8 cm。これら 4 点のスキは、何れもカシ属の材を用いて作り、木取には原本の中心に向かって割り裂く狂目(筋目)に近いものである。

**エブリ形農具 (4)** 横長の板材の下縁を薄く削り出して刃部とし、中央上縁寄りに方形の柄つぼを穿ち、上縁には帯状の突起を作り出したもの。柄つぼは長さ 5.1 cm、幅 2.5 cm の長方形を呈し、柄は鋭角に挿入される。柄つぼ下方には柄の支木があった痕跡がみられる。上縁の突起は幅 3.3 cm、高さ 1.8 cm の帯状で断面形は台形に近い。全長 20.5 cm、幅 29.6 cm。スキと同様にカシ属の材から作るが、木取りはスキと異なり木目方向と平行に刃部を作る。

**クワ (5)** 長方形の板材に逆 T 字形の隆起を削り出し、下方に刃部を、上端中央に柄つぼを作るクワである。全形をとどめるが、材表面の腐蝕が著しい。柄つぼは径 4 cm の円孔で、柄は隆起に対し鈍角に挿入される。刃部は他の部位に比して厚味を減じているが、周縁辺には刃を作り出していない。鉄製のクワ先を装着したか否かは不明である。材質および木取りはスキと同じである。全長 28.2 cm、最大幅 18.0 cm、厚さ 4.4 cm。

**スキの柄 (6、7)** スキの柄とみられるカシ属の材から作った棒状品が 2 点ある。6 は丸棒の端部を抜げて板状に作り、スキ身との装着部としたもの。おそらく板状に抜がるくびれ部とスキ身の突起下端部とを固縛したのである。柄尻部は欠損する。現存長 59.4 cm、丸棒径 2.5 cm、端部長 8.5 cm、幅 5.2 cm、厚さ 1 cm。7 は柄先部をとどめるものでスキ身との装着部は欠損する。丸棒上端部付近の周囲を削って係を減じ、それから先端までを柄尻部とする。このため柄尻部と柄中央部との径はほぼ等しい。現存長 70.5 cm、径 2.3 cm。6、7 から復原できる柄は全長約 1 m、くびれ部まで約 90 cm である。これにスキ身およびスキ先を装着すると全長 125 cm 前後の着柄勘が復原できるであろう。ただ 6、7 の棒状品をスキの柄とするには、装着部の形状がスキ身に比して幅が狭く、厚味が大きすぎるという疑問点もある。一応ここではスキの柄としたが、さらに検討を加えなければならない問題であろう。

第5図 木製品実測図①



- 工具類** 工具類には、横棒、工作台、手斧や鎌などの柄、槌の子などがある。
- 横槌（8）** 柱状の身部と棒状の柄部とからなる。身部と柄部との境はほぼ直角に削りおとして明瞭である。柄尾部は若干削り残している。全体に腐蝕が著しいが、身部の周辺部に使用痕跡がみられる。全長 28.3 cm、身部径 11 cm、柄部長 13.0 cm、柄部径 3.7 cm。広葉樹である。
- 加工台？（9）** 直方体の身部と丸棒状の柄部からなり、1本から作りだす。身部中央部分は刃物で切り刻まれ凹面をなす。柄の端部は欠損する。本来は何かの工具の未製品であり、工作用の台に転用された可能性もある。広葉樹の芯持ち材。現存長 48.2 cm、身部長 26.8 cm、復原幅約 14 cm、厚さ 8.8 cm、柄部径 3.8 cm。
- 手斧柄（10）** 2股に分岐する輪と枝を利用して作る手斧の柄である。刃部を装着する身部を幹から、柄部を枝から作り出す。身部は粗く削って仕上げる。身部両端とも一部欠損する。柄部は樹皮を取り除いたのちかるく削り整形を施している。刃先を取りつけた痕跡は明確でない。柄端部は欠損する。身部現存長 11.5 cm、幅 4.0 cm、厚さ 2 cm。柄部現存長 32.5 cm、径 2 cm、広葉樹。
- 鎌柄（11、12）（図版第3図）** 何れもほぼ全形をとどめる鎌の柄である。11は丸棒状の柄の一端を山形に突出させて柄尻とし、地端を板状に削り出して柄元とする。柄元下部には側邊を貫通する基孔があり、孔は柄の軸線に対しほぼ直角に穿たれている。柄は直線に作られ湾曲しない。全長 39.2 cm、柄元部幅 3.2 cm、厚さ 1.2 cm、柄部径 1.7 cm、茎孔長 3 cm、幅 0.6 cm、広葉樹。12は丸棒状を呈する大型の柄である。柄尻は周囲から削りおとして尖らし、柄元は幅を拡げて丸味をもたせている。柄元先端を一部欠損する。柄元下部には柄側邊を貫通する茎孔があり、柄の軸線に対して約 118 度で穿たれている。柄は、僅かに湾曲がみられる全長 64.0 cm、柄元部長 4.3 cm、厚さ 3 cm、柄部径 2.4 cm、茎孔長 7.8 cm、幅 0.5 cm、カシ属の材から作る。（14と第8図20）は何れも柄元部で欠損する。
- 槌の子（13）** 自然木を短く切断し、中央部を削り込んで細くした。俵編みのおもりである。切断面および中央部周辺は粗く削るが、削りのおよばない部分には樹皮をとどめる。広葉樹の枝ないしは細い幹から作る。全長 12.2 cm、径 6.8 cm。（図版第8図）
- その他の木製品** 前述した農耕具、工具類以外に容器類や円筒形の木製品である。
- 容器類（17～19）** 17は両端に耳状の突出部をもつ丸い盤である。底部から口縁部への立ち上がりはゆるやかでその境は明瞭でない。全体に厚手の作りで、底部と口縁部下半の厚味はほぼ等しい。口縁端部へ次第に厚味を減じる程度である。器形に丸味をもたせ、両端の突出部への移行も丸味がある。針葉樹の板目材から削り出して作る。木裏を盤の上面に木取りしている。全長 27 cm、器高 3.8 cm、柄部径 19.5 cm、深さ 2.8 cm。18と19は共に長方形の厚味の中央部を削りぬいた盤である。18は両側邊を欠損するが、ほぼ全長の判るもの、底部への削り込みはゆるやかで明瞭な棱はみられない。針葉樹の板目材から作るが、17と同様に

第6図 木製品実測図②



木裏を盤の上面に木取りする。全長 66.2 cm、現存幅 5 cm、器高 2.9 cm、深さ 2.0 cm。19 は脚をもつ盤である。欠損が著しく、1 脚のみをとどめる。盤口縁部から、底部の削り込みはゆるやかであるが、底部との境には稜がみられる。底部には削りの痕跡がたどれる。脚は削り出して作り横断面台形を呈し、木口方向の外面は直にて内面は斜めに削りおとす。おそらく盤の四隅に脚を作り出したものであろう。針葉樹の板目材から作り、17・18 と同様に木裏を上面に木取りしている。現存長 61.0 cm、現存幅 13.5 cm、器高 7.4 cm、深さ 2.5 cm、脚長 13.3 cm、幅 5.0 cm、高 3.5 cm。（第 7 図木製品実測図③）

弓（20・21）20 は細い自然木を利用してつくった丸木弓である。全長のはば半分をとどめる。枝あるいは細い幹の縱半分を削りのこして横断面楕円形の棒状に作る。弓頭部分は、先端に向かって厚味を減じて扁平に削り、両側辺にはゆるやかな抉りを入れる。全体にゆるやかに湾曲している。穂はみられず、櫛皮を巻きつけた痕跡もない。現存長 107.2 cm、幅 4.1 cm、厚さ 2.1 cm。21 は細い自然木を利用した丸木弓である。33 は全長 154.4 cm、最大径 3 cm、最小径 1.8 cm と細い幹を利用した心材である。両端部には弓弭がある。弓弭部分は、本弭、末弭とも心材を削り弔位置に平行に長軸をもつ弭を工夫している。本弭断面は平行四辺形に、末弭は断面長楕円形である。弔位置は 74.4 cm にあると見られることで、上長下短の直弓と推測されるが、その差は僅かに 10 cm 内外である。いま本弭より 10 cm 上部に L 字状に抉り込みがある。この L 字の抉り込みは弓力の平均を保つための工夫と推測される。穂や櫛皮巻き等はみられない。広葉樹。

不明木製品 前述した木製品以外に用途の不明な木製品が多い。ここではそれらのうちほぼ全形をとどめる 2～3 のものに限って記述する。（第 6 図木器実測図②、第 7 図木質尖測図③）

④は扁平な身部と丸棒状の柄部からなるもので全形をとどめる。柄端部は削りおとしてやや尖り気味に作る。柄部は断面楕円形に削り、次第に幅を拡げて身部に移行する。身部周側辺は両面から削って刃を作り出している。身部先端は片側がすり減っている。全長 38.8 cm、柄部長 1.3 cm、身部長 2.8 cm、厚さ 0.8 cm。広葉樹。農工具の一種であろうか。

⑤は分厚い方形板材の一辺を両側に削りおとして不整六角形とし、その上辺に方形の削り込みを入れたもの。全面に削りの痕跡がみられる。おそらく製作途中のものであり、上辺に削り込みを仕口とする脚状の製品になるものとみられる。全長 10.6 cm、幅 10.0 cm、厚さ 4 cm、広葉樹（カシ属か）の板目材。（後編に使用する尺木？）

⑥は扁平な角棒で両端付近は削って幅を狭める。一端付近に平面五角形の孔が穿たれている。両面ともに削り面を多くとどめる粗い作りである。全長 70.7 cm、最大幅 3.5 cm、厚さ 1.3 cm、孔一辺長 0.6 cm。針葉樹の柱目材。

21 は幹を粗く加工して作った太い棒状品。一端は両面を削って平坦に作るが、他面には幹の丸味をとどめる。端部は直に切断する。他端は周囲から削り込んで丸く作り、端部は瘤状に削り残す。中間部分は粗く削っており断面不整多角形状を呈す。方形をなす一端には方孔

第7図 木製品実測図 ③



を一つ穿っている。全長 101 cm、最大幅 5.9 cm、厚さ 4 cm、広葉樹（カシ属か）の芯持ち材。

前述したこれらの木製品は、何れも 5 世紀頃の遺物とみられ、愛媛県では初めての例であろう。全国的にみても出土例はさほど多くなく、重要な資料であるということができる。

とくに農工具のうち、スキについては、J 字形スキ先の装着部を明確に持つものが 3 点あり、類例としては大阪府四ツ池跡の出土例があるにすぎない。エブリ形農具については、上端に穴を開けた例は少なく、松山地方の特色である可能性も考えられる。今後さらに竹ノ下地区出土の木製品を通して、当時の生活の様子を復原していく必要がある。

## (2) 建築造材（第 4 図遺物出土状況図参照）

川付川への護岸用材として転用された建築用材について記述したい。

出土遺物状況図（第 4 図）に記載された、出土番号 19 は全長 522 cm で、内根元 30 cm は土中に埋め立てられた腐蝕がみられ、先端部は欠損する。丸木の芯持材で全面を平面多角形に削り殺をなす。上半部 145 cm 間の断面形は半截楕円形となり、先端部は半円形で柄部の痕跡はとどめるが欠損する。針葉樹。

14 は柄をもつ用材である。柄は全長 15 cm の長径幅 5 cm、短径幅は 3 cm である。柄平面は継割りによる平面で、切断面は斧状工具による数条の切断痕が残る、現存全長 135 cm の丸木材で樹皮をはぎ取ったのみで加工痕はなく、他端部は欠損する。針葉樹。

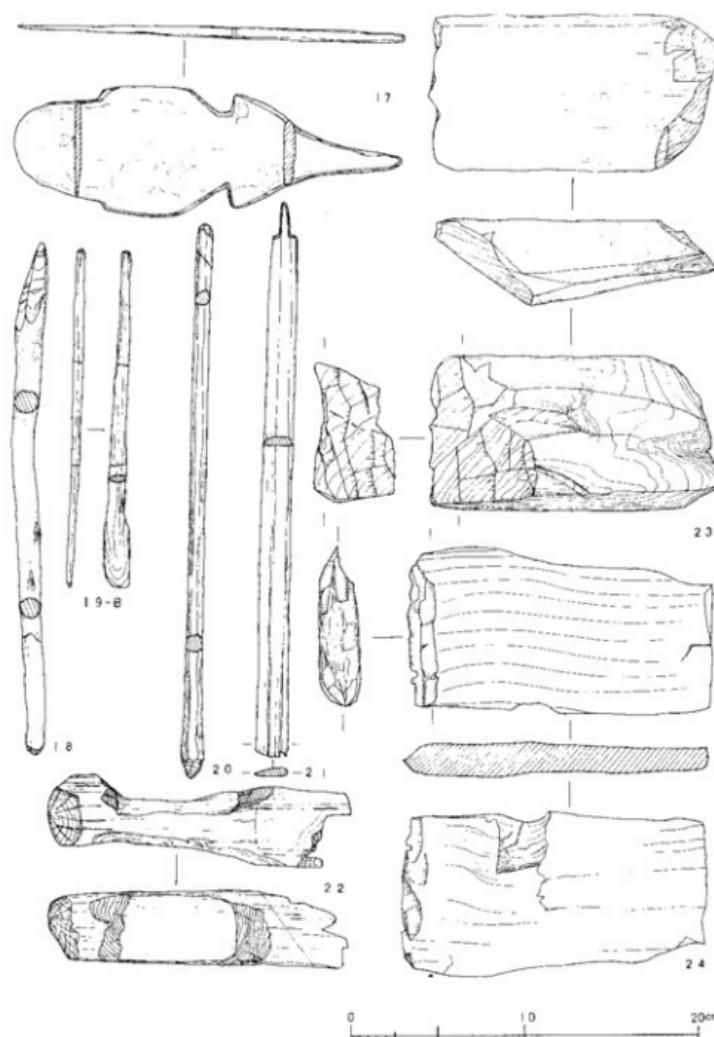
20 は S 字状に蛇行する芯持材で、芯材の蛇行にあわせて平面四角形に削り、元部は一辺 10 cm・5 cm の長方形であるが、他端部は一辺 5 cm・3 cm にすぼまる、平面はチョウナ削り。広葉樹。現存全長 175 cm。

1 と 2 は丸木材で両端部に抉り込みの受け部をもつ。抉り込みは片面は直に他面はやや傾斜する。受け部上面長径 20 cm、下部面長径 15 cm を抉り込み、背面部分には大きく僅かに凹む抉り込みがある。他端部はトレンチ調査による切断である。復原全長は 1、2 ともに 300 cm、元部直径 12 cm、末部 8 cm、針葉樹。

186 は平面四角形に削り、端部直下に直に切断して受け部を作る。他端は両側面より削り減厚し先端部を尖らせている。全長 220 cm、最大幅 18 cm、受け部長 17 cm、広葉樹。

155 は平面五角形に削る。平面四角形の一面のみに三角形に削り平面五角形となす。現存長 150 cm、端面は鋸による切断が見え、端面直下 10 cm 位置に柄穴長径 5 cm、短径 2 cm が穿たれている。他端は欠損している。遺物 133 は平面五角形の削り面をもつ類似遺物である。現存全長 115 cm、幅 7 cm で両端部は欠損している。芯持材の針葉樹。

第8図 木製品実測図④



### (3) その他の木器

#### 舟形木器（第10図の2木製品実測図⑦の32）

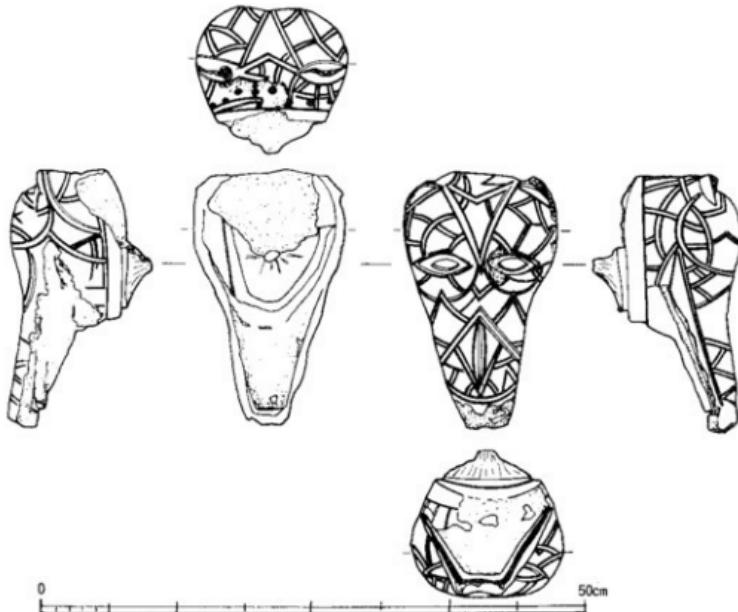
丸木材を削り抜いた丸木舟形木器で、全長62.6cm、最大幅7.3cm、器高後尾4.5cm、中央部3.2cm、舟首部3.4cmで、舟底は平面である。舟腹はU字状にくり抜いている。原木は10cm前後若干年木を平截した広葉樹。

#### 獣頭形木器（第9図木製品実測図⑤）

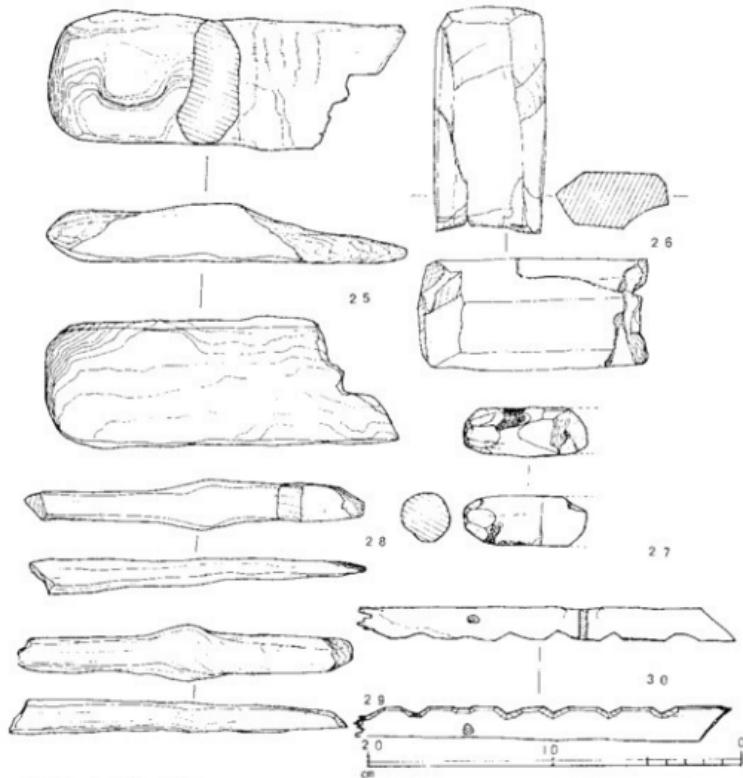
遺物は広葉樹を素材とする彫刻された遺物で、目・口・耳を刻み、全貌から受ける感じはキツネの顔面によく類似する。口唇部からアゴにかけて腐蝕しているほか、左目の部分にも僅かに腐蝕がみられる。獣頭は一本造りで現存では欠損しているが、円柱の棒状部があり上端部に卵形の台座をもち、その台座の上部に獣頭を造り出した逸品である。

獸面は頭上より大きく削り込み顔面を作り、口唇部は顔面の両側面を削り込み長く突きだす口部となっている。後頭部は頭上より弧を描く傾斜を作る。後頭部の両側端部に三日月

第9図 木製品実測図⑤



第10図 木製品実測図⑥

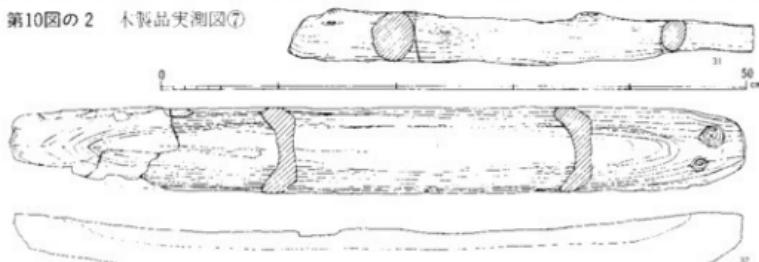


第8図・第10図の様相

色 板	固 番 号	法 cm	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考	数 量
黒	17	長幅 2.1 幅 7.5 最大厚 1.1	扇子形のスオで、最大の幅を有する。中央部から上部に向かい大きく両端部が抉入する。抉入した後、水平に側面に向かい櫛をつくる。櫛部より再び抉入して突出する先端をつくる。下部には万先を装着する孔をつくる。	突出する先端部への櫛の抉入は柄部の装着のための作業であり、下部の孔には袋状の銀先を装着するための作業である。	カタキ材	1
杭 木	18	全長 19.5 断面厚 1.3~ 1.2	自然木の元詫を鉄斧で削る。 杭木である。	杭先の開脚は5~6段階で完了し、5角形である。	不明	1

種類	調査番号	注釈	形態の特徴	技法の特徴	備考	数値
杖	19	全長 幅面径 最大幅	19.5 1.0 1.5	背面は僅かに円面である。	一端は把手として口くつくられ、いま一端は扁平なヘラ状に減厚してつくりだしている。	
棒状木器	20	全長 断面径	32.0 0.6~ 0.8	両端部を多角形に切断している棒状木器で、中央部は8角形に形を調整している。	両端部の直径が異なる。元部の側が、特に入念に調整されている。	1
木材	21	全長 断面径 厚	32.0 1.6 0.5	片側は欠損していて不明、一方にホゾを作る。一面は平削であり、背面は2つの棱を持ち、凸面である。	杉または桧材と推定される。尖端ホゾで2 cm×0.5 cm	1
把手	23	全長 幅 厚	16.5 9.0 5.0~3.5	長方形で両端面及び内側面を鉛斧状の刃具で切断している。	切断面は平行する角度で、鉛斧状刃具の最大幅3 cmが計測される。	1
未完成品	22	全長 幅 厚	17.5 4.2 4.5~2.5	材の先端は多角形に切断、中央部に6.5~9.5の相欠ぎをつくる。一方は欠損しているか、中央部に施するホゾ穴がある。	相欠ぎは背面に平行してつくられ、彌留するホゾ穴は、相欠ぎ面に対し24度の切入角をもち穿たれている。	杉材 1
未完成品 板材	24	全長 幅 厚	17.5 9.2 1.9~1.2	肉端面を鉛斧で切断した板材である。	鉛斧幅最大3 cm、板材は中心部で板目である。	
木状 木器	25	長径 短径 厚	19.0 6.7 3.0	扁平な棒状の木器で、欠失しており全齊は不明である。	端部は使用によりよく磨耗している。	松材、肉端面は炭化している。 1
木明	26	長径 短径 厚	12.6 6.0 3.0	背面は偏りな台形をなす。一面は欠損しておりハリである。	木材の先端部は斧で切断している。	桧材、鉛斧の最大幅3.5 cm 1
丸	27	直徑	2.6	自然木を一並加工している。	先端部を粗かく切断している。丸木円の一部と推定される。	不明 1
木材	28	長径 加長	17.2 2.6	細大(前)	先端部が炭化している。一部に加工の痕跡が残り、塗材の利用がみられる。	1
木明	29	長径 短径	17.0 1.8	四木(前)	木	1
木明	30	長径 短径 厚	2.2 1.5 0.4	舟子の板材を利用している。半截の欠損品である。6か所に山形の切り込みがあり、1孔が穿たれている。	長辺の両面はよく研磨されている。山形の切り込みは鋸利な刃物による加工。	松材 1

第10図の2 木製品実測図⑦



形の耳部を作り出したのも直に削る。下頸部は下方より大きく切り込み、僅かに上方に向かって上昇して下頸部を作る。上頸端部とは1cmひかえた下頸で、上下のアゴは薬研彫りを鋭く彫り込みに向ける。頭部側面は大きく弧を描く球形である。

獸頭の顔面をはじめ、後頭部から側面にかけて直弧文様の薬研彫り彫刻が施されている。文様は顔面中央部を軸として左右対称に刻まれ、側面での文様は左右対称とはなっていない。眼は二重に筋縫形の輪郭を作る。眼球は平面球の表現である。獸頭部全面を黒漆塗で仕上げ（木地に和紙を使用せず）薬研彫りの直弧文は朱漆塗で仕上げる外、眼珠及び口を朱漆塗で表現している。全長9.5cm、最大幅5.7cm、現存器高5.3cm、玉状の柄部？

#### 槌状木器（第10図の2図31）

31は槌状木器である。丸木材であるが熟年木で枝木の節がよく磨滅し突出しており、叩き棒として使用されたものである。木元は丸く磨滅している。他端部は鋸による直な切断面で、切断面より8cm間は柄部とした使用痕が残る。広葉樹。全長39.5cm、最大直径4.4cm。

#### 板状木器（琴造材？）

國版第23圖木製品10の木器がある。

## 5 出土遺物2

### (1) 弥生式土器

弥生式土器は、発掘区トレンチ断面層序に示す中心杭No.21~22間の第4層中より出土した遺物である。堆積層序が砂疊層であるわりには遺物の磨滅が少なく、また全体の形がわかるものが多い。上器は中期に属するものではなく、すべて弥生後期のものである。土器には壺・甌・鉢・高杯・土製支脚等がある。

#### 壺形土器

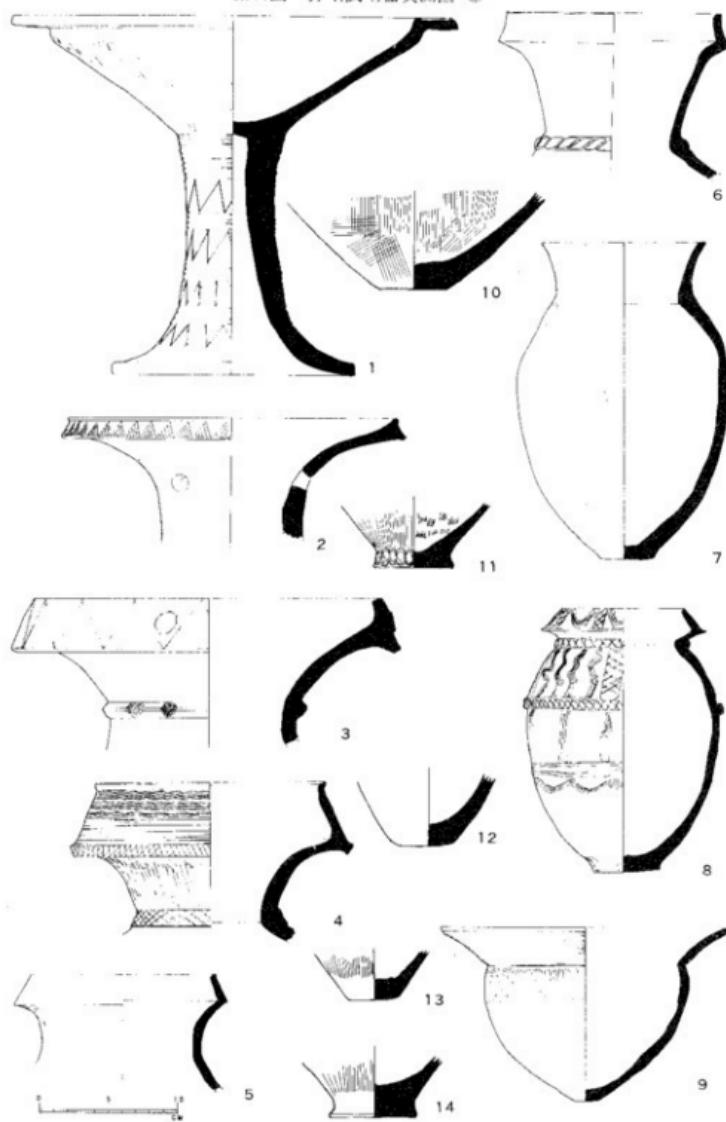
壺形土器の内口縁部の様相から、下記のごとくに形態を分類することができる。

**A形式**としては、口縁部が頸部より外上方向に外反するもので、この形式に含まれるもの内の、口縁部が頸部より外反したのち、口唇端面が肥厚するものがある。また肥厚した口縁端面に浮文または鋸歯文を施文するものと、無文のものがある。

**B形式**としては、口縁部が頸部より外上方向に外反した口縁に、さらに内傾または外傾した口縁端部（複合口縁）が付く形態のものである。この形式の口縁は2形態に細分類される。

**B形式**の1形態は、頸部より外上方向に外反した口縁部を内傾または外傾させるものと、2形態は、頸部より外上方向に外反した口縁部に輪積技法による口縁部を接合させるものがある。

第11図 弥生式土器実測図 ①

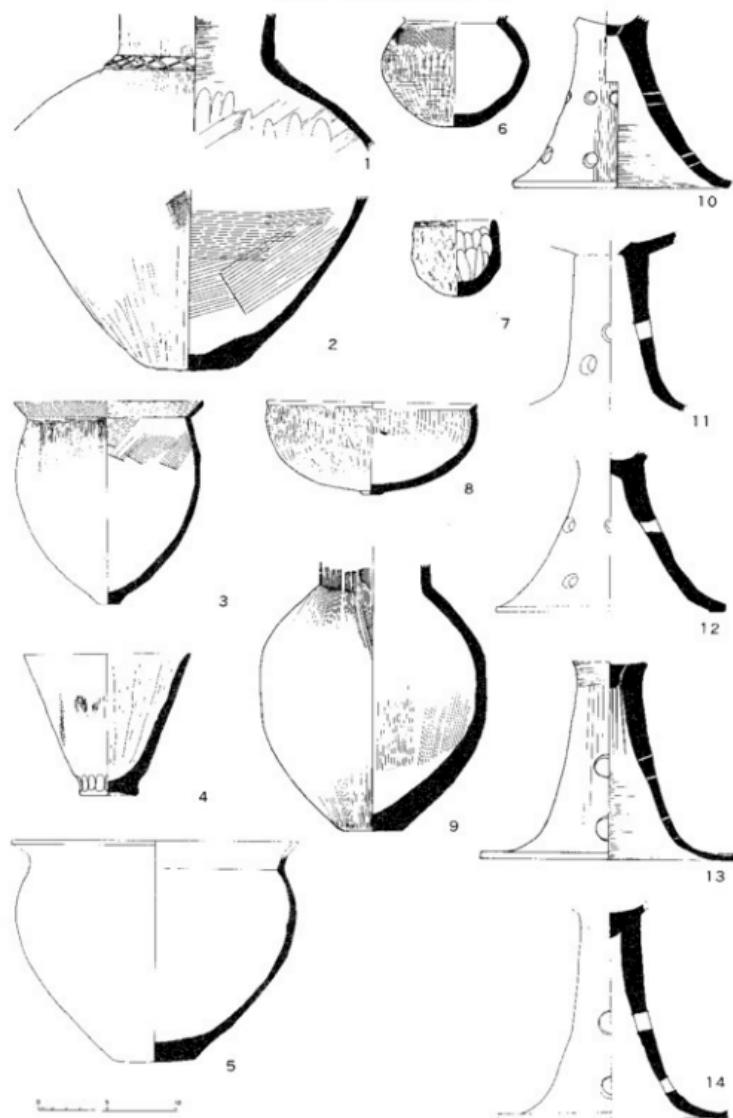


## 弥生式土器①

種類	名 目 別	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
高环形 土器	1 264	口径 32.5 基部径 8.0 器高 26.0 脚部径 17.5	(杯部) 平底の基底部より外 上向にのびたもの、口近部で 直立し、水平に屈曲し、大き く四面の口唇部をもつ。(脚 部) 数条の凹縫で四段の鋸歯 状の施文等をもち、脚端部は 平面をなす。	口唇部及び杯内面はナガ調整。 杯体部はタマにハケ目整形 である。脚部は貼付けて、 杯底部に接合の補助としての ヘラガキ痕あり。脚部内壁に 凸頭痕あり。	焼成良好、胎 土に粒子 0.5~0.2を多 量に含む。	1
壺形土器	2 546	口径 23.7 頸部径 10.2 現口頸部高 9.0	口頸部片、長く立ち上がった 頸部から大きく朝顔状に外反 したのち、口唇部を下につ まみ外方に傾斜する平面をつ くる。端面に锯歯状の施文あ り。頸部上端部に円孔、三方 に向穿孔がある。	頸部横口横断形。口唇端は肥 厚し、端面を上に張り出し、 四面となす。頸部内壁にヘラ 削り(横方向)あり。	焼成良好、胎 土に粒子 0.5~0.2の石 英、長石粒を 含む。 帶黃赤褐色。	1
々	3 278	口径 25.0 頸部径 14.0 現口頸部高 10.7	口頸部片、短い頸部に断面三 角形の突唇を配す。頸部より リッパ状に開く口縫部は口唇 部で大きく屈曲し、端面は内 傾する平面をなす。さらに口 唇部の腹面位置で台形状の張 り出しをつくり、口近部にバ ラベットをなす。	内面底付工具による整形の 後、ナガ調整を施す。突唇は 貼付け、二方向に円形浮文を もつ。バラベットにヘラによ る鋸歯状文様を施す。突唇に も二方向に1対の布目升痕あ り。	焼成良好、胎 土に0.5~0.3 の粒子を多量 に含む。 褐色。	1
々	4 550	口径 16.7 頸部径 10.2 現口頸部高 11.3	口頸部で体底部欠失。頸部よ り上外向にリッパ状に開き、 口近部で大きく外反した口縫 部である。口縫部を複合させた 口縫である。複合口縫部は大 きく内傾し、口近部で立ち上 がり、端面は内傾する平面。	二重(複合)貼付口縫、頸部 に貼付け突唇。内面ナガ調整、 頸部ハケゴ調整、頸部と接合 部に網向格子目文様を施す。 口縫部に堆積による波次 文。	焼成良好、胎 土密、0.2以下 の粒子を少量 含む。 茶褐色。	1
々	5 173	口径 13.3 頸部径 11.5 現口頸部高 8.5	口頸部で体底部欠失。体部よ りゆるやかに内ぼり壁かに 直立する頸部。頸部より外上 方にのびた後大きく屈折し、 内傾する口縫部をつくる。口 縫端面は内傾する平面をな す。	内聚向はナガ調整。頸部はハ ケ目整形、口縫部はナガ調整。	焼成やや軟、 胎土に粒子を 0.5以下を多 量に含む。 帶黃褐色、器 厚やや一定。	1
々	6 363	口径 15.5 頸部径 9.7 現口頸部高 11.3	口頸部で体底部は欠失、大き くくぼった口縫から外上方 にのびたあと、口縫部は大き く外方に屈曲し、さらに内に 傾折して直立した口縫をつく る。口縫端面は内傾する円面、 頸部に断面圓面の突骨をも つ。	頸部に複合工具による整形後 ナガ調整、頸部に突唇。突唇 上面を平ヘラ工具による施文 あり。	焼成やや軟、 胎土に粒子を 含む、0.4以 下。 帶黃褐色、胎 土厚やや一 定。	1

種類	番号 又復印上	広 幅cm	形 品 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考		数
					成良好	胎土	
壺形土器	7 385	口径 頸部 胸部 底部 器高	11.8 10.0 15.2 3.7 29.3	平底の乳頭より、外上方向に内凹気味にのび、体部上部で内側してすぼまり頸部をつくる。胸部より外上方向にのびたくの字の跡をなし、口縁裏面は水平な平面をなす。	輪横工法で頭部に接合指圧痕が残る。内壁面に指頭によるナデ痕が残る。外表はハケ目調整である。	焼成良好、胎土に粒子(0.5以下)を多量に含む。基底部に黒斑あり。茶褐色。	1
ク	8 168	口径 頸部 胸部 底部 器高	8.7 9.5 13.8 4.7 19.1	平底の基底部より、外上方向に内凹気味にのび、体部上部よりすぼまり、頸部をつくる。頭部より大きく外方に膨曲しくの字の跡をつくる。(の字の跡に内傾する複合口縁を接合させる。実窓が体部、肩部、口縁部、頸部に貼付けられている。)	輪横工法、複合口縁、器表面ハケ目整形の後ナデ調整、下腹部に波状文とヘラがき文、腹尖部にヘラがき波線で区画(5)と亂状の波状文、各部位に突帯を貼付け斜行格子目文を施す。肩部に横に筋出長方形の突帯(5条)、1/4周に4条の横波状文、頸部に1条の突帯、口縁部に5条の突帯と波状文。	焼成やや軟、胎土に粒子を多量に含む。カーキ色。	1
鉢形土器	9 154	口径 頸部 底部 器高	20.8 14.2 1.5 12.6	乳頭次の底部より、上外方に内凹気味に立ちあがったのち、大きく外反しては縫部をつくり出す。口唇端面は丸くおさめる。	内部に輪横痕を残し、内底部は指頭ナデ痕、腹部から口縁部はナデ調整、口縁外面ナデ。体(腹)部上端はタシダナデ。下腹部から底辺ナデ調整。	焼成良好、粒子を僅か含む。青苔茶褐色。	1
底 部 片	10	底部径 現器高	4.8 7.0	平底の基底部より上外方向にのびる壺形土器底部片。	内部に輪横痕を残す。内外面櫛搔き整形、底部内壁に指頭によるナデ痕あり。	焼成良好、粒子を多量に含む。骨黄褐色。	1
ク	11 154	底部径 現器高	5.7 5.2	平底の基底部に凹みあり、基部より上外方向に直線状にのびる。胎土は歯手である。	内部前後にタシによる整形である。内壁面はタシ整形の後粗鈍な指頭ナデ調整がある。基底部指頭押圧文。	焼成良好、粒子を僅かに含む。	1
ク	12	底部径 現器高	3.0 6.0	平底で基底部より上外方向に内凹気味にのびる底部片。	外面ともに入念なナデ調整。	焼成良好、粒子を多量に含む。茶褐色。	1
ク	13 584	底部径 現器高	3.8 4.0	平底の底面片。	表面に櫛状工具による整形、底部内面にヨコナデの指頭痕が残る。	焼成良好、粒子を多量に含む。茶褐色。	1
ク	14	底部径 現器高	6.0 5.0	平底の底面から内凹気味に上外方向にのびる。	表面に櫛状工具による整形、底面は特に体部壁厚より肥厚している。	焼成良好、粒子を含む。	1

第12図 弥生式土器実測図②



## 弥生式土器②

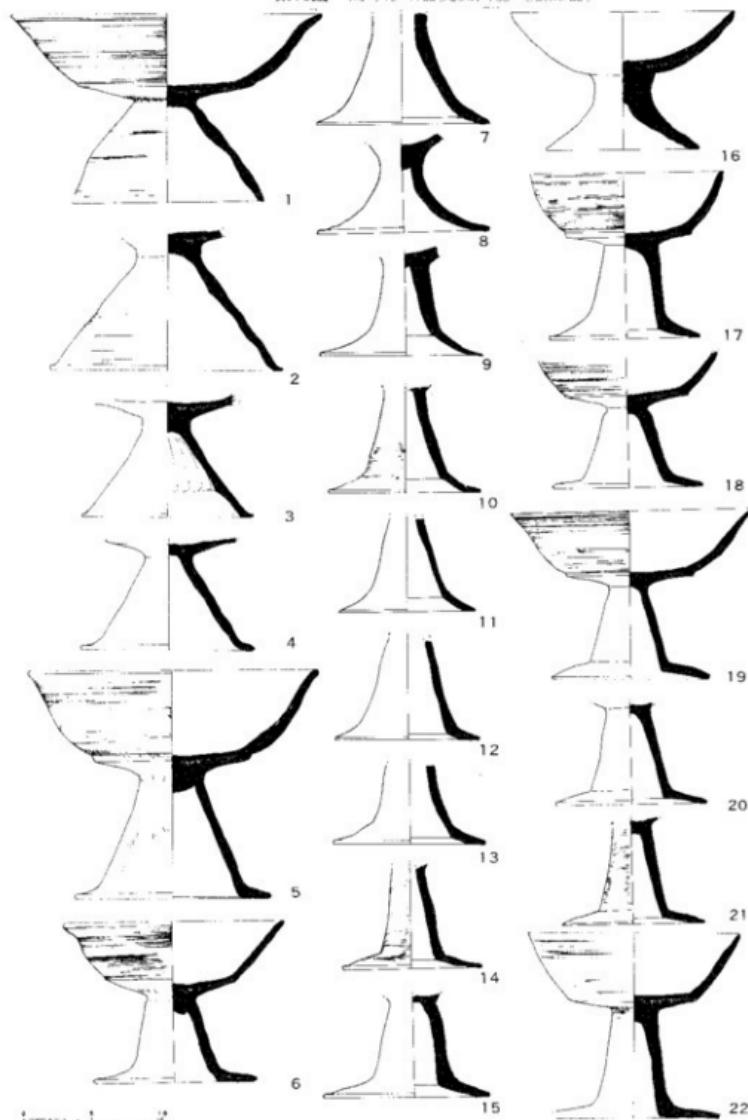
種類	番号	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
壺形土器	1	320 頸部径 11.0 現器高 7.5	肩部よりすぼまり直立する頸部をつくる。頸部に断面長方形の偏平な凸唇がめぐる。	タシ状工具による縦方向の整形、器内壁面の体部は指頭によるナデ上げ整形後、ヘラ切りが施されている。頭部はヨコナデ調整。実器上端面にタシ状のヘラ工具による格子目刻み	焼成良好、胎土に粒子多量。	1
〃	2	379 底部径 6.0 体部現径25.5 器高 12.0	平底の底部より上外方向に胎土厚は等しく伸びている。底体部片である。	表面の体部下部はヘラ研磨である。中央部は交叉するハケ日調整、内部はヘラグシによる整形、底部には横ナデ指頭痕がみられる。	焼成良好、胎土に粒子多量。 茶褐色。	1
壺形土器	3	口径 13.6 頸部径 12.0 底部径 1.7	乳頭状の平底から大きく内唇しながら上外方向にのひたも体部外でやや直立したのも、僅かにすぼまり頸部となる。口縁部はくの字口縫。	体部内面はハケ日調整、内面壁は指頭によるナデが底体部に、肩部よりタシ状ヘラ工具による整形で、口縁部はヨコナデ、口縫部外側は同様工具による施行ナデ。	焼成良好、胎土に粒子多量、茶褐色。 底部付近に黒斑。	1
鉢形土器	4	219 口径 12.0 底部径 5.2 器高 10.2	高台状の平底の基底部より上外方向に直線状にのび、口唇部は減薄され、内面は傾斜する。	体部外張はハケ日調整、内部は底面より難にヘラ整形の後、口唇部のみヨコナデ、基底部に指頭による押圧文がある。底底部のつまみ出しで底部内外面はナデ調整。	焼成良好、胎土に粒子多量。 帶黃茶褐色。	1
〃	5	口径推定20.5 頸部径 18.3 底部径 6.0 推定器高16.0	平底の基底部より上外方向にのびた後体中位で大きく内唇して頭部をつくる。口縁部はくの字口縫だが僅かに反転する口縫であろう。口唇部欠損。	内外面入念なナデ調整、体部上位部は横研磨痕が残る。	焼成良好、胎土に粒子を含む。 帶黃茶褐色。	1
小型 丸底 埴	6	91 頸部径 7.3 体部径 10.8 現器高 8.0	口縫部欠損物、平底に近い平底、球形の体部で刃位置で僅かに屈曲している。	内部ナデ調整。外表面は肩部は紙ハケ、体部はタシ状ヘラ工具による横研磨き整形後、ヘラ研磨を粗筋に施す。	焼成良好、胎土に粒子多量。	1
手づくね 土器	7	501 口径 器高 5.8 5.5	コップ状の手づくね土器である。	内取面に指頭によるナデ痕が鮮明に残る。外表面は電鋸が多く指痕があり、器厚は一定せず、口唇部は内外面ナデである。	焼成やや軟、胎土に粒子多量。 帶黃茶褐色。	1
壺形土器	8	314 口径 器高 底部 15.0 6.7 1.5	乳頭状の平底風のつまみより僅かに内唇気味にのびたのちたちあがり、喉部は近く屈曲して、口縫部をつくる。口縫部面は内側する平面である。	内外面ともに入念なヘラ研磨、天井部はヨコナデが僅かに残る。口縫部内側面はヘラ切である。	焼成良好、胎土滑で精緻。 帶赤茶褐色、天井部に黒斑。	1
壺形土器	9	114 頸部径 8.0 体部径 16.4 現器高 19.5 底部 5.2	口縫部欠損、平底の基底部より上外方面にのびたのも、大きく内唇して肩部から内側してすぼまる。頭部は直立する。	基底部が最大の器厚で上方にのびるに従い減厚する。体部中位の外表面は削りにより平面向をなす。内外面ともに柳状ヘラ工具による整形である。	焼成やや軟、胎土に粒子を含む。 黃灰色。	1

種類	番号 （回復件）	法量cm	形態の特徴	技術的特徴	備考		数量
					内面ナデ調整、外面タテに押状ヘラ工具による彫形後外表より円孔の穿孔を施す。脚基部に凹盤状の粘土押入。	焼成良好、胎土に粒子を含む。茶褐色。	
高杯形 土器	10 194	基部径 5.5 脚高 12.0 脚根幅 15.0	基部より下外方向に頸頭状に開き、脚根端は平面、2段の円孔が6方向に穿たれる。	内面ナデ調整、外面タテに押状ヘラ工具による彫形後外表より円孔の穿孔を施す。脚基部に凹盤状の粘土押入。	焼成良好、胎土に粒子を含む。茶褐色。	1	
ク	11 473	基部径 5.3 脚根高 12.0	基部より下外方向に僅かに開き、直立する。脚根部で大きく屈曲する。脚根端は欠損2段に2方向に円孔あり。	内外面ナデ調整後、円孔を外より穿孔。	焼成良好、胎土に粒子多量。茶褐色。	1	
ク	12 194	基部径 5.0 脚根幅 16.5 器高 11.0	基部より下外方向に頸頭状に開き、脚根部で屈曲する。脚根端は平面。2段の円孔あり。	脚部に凹凸がある。内外表面はナデ調整。円孔上段4孔、下段3孔を外側より穿孔。	焼成良好、胎土に少量の粒子あり。帶黄茶褐色。	1	
ク	13 3	基部径 5.3 脚根部 18.4 脚高 14.4	基部より下方にのびたのち、中央で大きく渦巻して開き、脚根部で大きく屈曲する脚根端面は平面で上端は綾をなす。2段2方向の円孔あり。	基部はヨコナデ、外はクシ状ヘラ工具で整形、脚基部内面にしづり日、他はヨコナデ調整。基部に凹盤状粘土押入。	焼成良好、胎土に少量の粒子。帶黄茶褐色。	1	
ク	14 3	基部径 4.5 脚根幅 16.5 器高 15.5	上同様の器物。	上同様。脚根部の渦巻方法は同様であるが器厚は厚い。	ク	1	

口縁部の施文は、前者のものにおいては無文であるが、複合口縁部をなす接合部をつまみ有段を造るものは、（有段部は断面台状突帯をなすもので）第11図の4にみられるものである。この器形には突帯上端面を平面につくり出すものが多く、この平面に格子目文や列点文や、竹管文を施文する外に半截竹管を交方に反転させたS字状文の施文もみられ、また、突帯の両端部に半截竹管文を施し、中央部に凹面を残すものや、凹線をもつものもある。さらに口辺部は素文のもの外、口辺部に凹線文や波状文をはじめ、浮文や突帯を持つもの等多種多様であるが、その多くは柳状工具による、条痕や、波状文様が大勢をしめ、波状文では円弧文となるものと波状文になるものとに分類され、さらに円弧文では、反転させるものと、反転しないものとがある。反転するものでは、円弧の中央部位に半円端部が基準点になる施文となっている。

C形式には、頸部に突帯を有するものと有しないものとに分類される。いま無突帯のものをC形式の1とすれば、C形式の2は有突帯の器種といえよう。C形式の2では素文の突帯と施文の突帯とに大別される。さらに突帯の断面形状により、断面三角形と断面長方形の突帯に二分される。いま施文と突帯との関係は、断面三角形突帯では列点文か指頭押圧文が主流で、指頭押圧文では、布目押圧文となるものは、大型壺形土器にみられ、まれに小型の壺形土器にもみられる。断面長方形の帯状突帯では、ヘラ状工具による、平面正方形の連続する押圧文やヘラ状工具の先端部を垂直に押圧するものから斜傾するものや、また交叉する格子目文もあり、この施文方法によるものが最も多くみられる。

第13図 高环形土器実測図①(土師器)



第13図 高坏形土器

種類	番号 採取番号	法 直cm	形態の特徴	技 法 の 特 徴	備 考	表記
高杯	1 578	口径 22.2 坏高 5.5 基部 4.5 脚高 7.5 脚部径 13.7	坏部は平底に近い底盤から有段をなして立ちあがりゆるやかな内弯をみたのち、口縁部で屈曲して開き、口唇端は丸い。脚部は基部より大きく開き、脚部は屈曲しない。	坏部は内外面共にヨコナデ仕上げである。脚部外表面はヘラ切りがみられ、そのヘラ切り調整間にナデがみえる。内壁面に輪積みがのこる。	焼成は良好、堅硬、胎土は密である。 赤褐色。	1
ク	2	脚高 9.0 基部 4.5 脚部径 16.7	坏部欠失して不別である。空洞の脚部は大きく扇状に開き、脚部で屈曲し、平行な著地部をつくる。	脚表面はヨコナデ調整である。内壁面に輪積の後、指頭ナデ痕をのこす。	焼成良好、胎土は密、赤褐色。	1
ク	3 140	脚部高 7.5 基部 3.5 脚部径 12.2	坏部の平底部と脚部、坏底部に回転ナデあり。脚の形態は1、2と同様であるが、脚部は大きく開いたのち水平な屈曲をみる。	表面はやや剥離しており不明である。内壁面は基本から、脚高付近まで指頭ナデがみられる。下部のヨコナデと段をなす。	焼成良好、胎土密。	1
ク	4 44	脚部高 7.0 基部 3.5 脚部径 12.5	坏部平底、有段部より欠失。脚の広がり1~3と同様漏斗状で内外面僅かに凸凹あり。脚部は屈折し、端部は丸くおさめる。	全面ナデ調整、脚基部には接着のための接合痕が坏底部と共に明らかに残る。	焼成良好、胎土密。 茶褐色の黄土色。	1
ク	5 153	口径 21.0 坏高 7.0 基部 4.5 脚部高 9.5 脚部径 14.0	平底の底盤から立ちあがる基部に有段をなす。体部はゆるやかに内弯気味に立ちあがり、口縁部で外反する。端面は丸い。脚部の広がりはややせばまり、脚部の屈折は大きく安定感あり。	坏底部に指頭ナデによる凹凸あり。内外面ハケによる整形の後、ヨコナデ仕上げ、脚部も同様手法をとる。坏底部と脚基部とに押出しによる接合痕が残る。	円柱の脚基部に坏底面の突出あり。焼成良好、胎土に粒子少量。	1
ク	6 370	口径 16.0 坏高 5.0 基部 3.5 脚部高 6.7 脚部径 11.8	平底の底盤から、基部に僅かに腰を作り直線的に外反し、端部は外に傾斜する。脚部は小さく、広がりも少ない。端部は屈折して水平である。端面は丸くおさめる。	坏部の内外面はヨコナデ調整である。脚基部に横目の後指頭による接合痕を残す。脚部内外面ナデ仕上げ。	ク	1
ク	7 587	基部 4.0 脚高 8.0 脚部径 12.5	脚柱部を僅かにもち、ツバ状に開き、底盤はさらに屈曲する。端部はすぼまり鋭角である。	円柱の内壁にしほり目を僅かに残す外は、内外面はヨコナデ調整である。	焼成良好、堅硬、胎土に0.3以下の粒子を含む。	1
ク	8 177	基部 4.0 脚高 6.3 脚部径 12.5	中型の脚部に丸底の坏底部を残す。円柱部を僅かにもち、弓部分より大きくツバ状に開く。脚端面は丸くおさめる。	ツバ状の脚部に坏底部を押入した形態をとる。内外面共によくナデ整形されている。	焼成良好、堅硬、胎土に0.3以下の粒子を含む。	1
ク	9 187	基部径 3.5 脚部高 6.7 脚部径 12.6	円柱部に接合させた高杯で、丸底の坏部である。脚部は弓位置で屈曲するが、脚部高を有し、端部でさらに屈曲水平となる。	内外面共にナデ調整、脚部高は2段に屈曲、脚部端面ナデ。		1

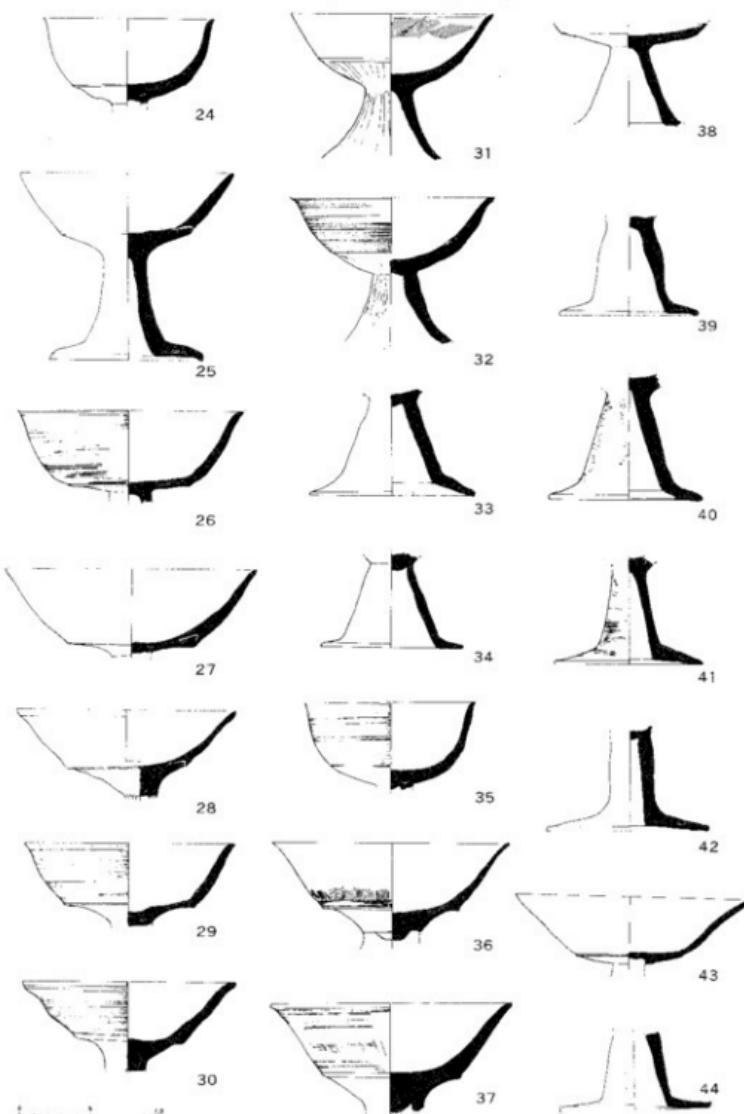
種類	番号 実験上	法 高cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数等	
高 坏	10 290	基部 脚高 脚部径	3.1 7.5 11.0	脚部の広がり小、脚部高2段構成、端面は水平である。	外面ハケ日調整、内壁面若干形取りによる整形、脚根部は2段屈曲となる。	焼成良好。若干の粒子をもつ。	1
ク	11 151	基部 脚高 脚部径	2.5 6.7 10.0	脚は円柱に近く、僅かに開き脚根部を有するものと水平の脚根部の2段構成。	内外面共にナデ整形、脚根端面は僅かに垂直な面となる。脚根内部はヘラ切り。	焼成やや軟弱、胎土密。	1
ク	12 160	基部 脚高 脚部径	3.1 7.0 10.5	11と同様脚部、脚根部は2段整形。脚根高は低く0.5となり、端面は胎土厚を減じ面をなす。	内面は大きさ3丁程。上段形抜き、中段指頭ヨコナデ、下段(脚根部)ヘラ切り。	焼成良好、胎土密。	1
ク	13 487	基部 脚高 脚部径	3.5 5.5 11.0	10~12と同様脚部、脚根部も同様。	ク	ク	1
ク	14 188	基部 脚高 脚部径	2.5 7.2 10.0	基部に対して、脚根部径4.8と強度に広がらず、円柱の脚部に僅かに2段の脚根部を有する。端面は面をなす。	脚の円柱部は形抜きによる手法、脚根部僅かに2段整形、表面はヨコナデ、脚根部内面ヘラ切り、外表ナデ。	ク	1
ク	15 163	基部 脚高 脚部径	3.5 7.3 12.0	脚基部より内弯し直立した円柱脚部、脚根部は大きく屈曲したのち端面は面をなす。	脚柱部は形抜き、ナデ整形、脚根部に僅かに2段のヘラ整形あり。窓部は肥大する。	ク	1
ク	16 10	坏口径 坏高 基部 脚高 脚部径	16.0 4.5 4.5 5.5 11.0	底平の底部より大きく外方に開き、僅かに内弯した坏部、脚部は2cmの柱部を残し、端部状に開いた脚部。	全面ナデ調整、脚部内壁に僅かに指痕を見る。	焼成軟弱、胎土密。赤褐色色塗が残る。	1
ク	17 372	口径 器高 基部 脚高 脚部径	14.0 5.0 4.0 7.5 10.8	底平の底部から有段をなし、内弯した坏部、口端部は円面、脚部は円柱部と脚根部で根部は大きく屈曲し端部は面をなす。脚根高0.7。	坏部内外面ヨコナデ仕上げ、脚部同様に外表はナデ、脚柱部形抜き、脚根部内面にヘラ研磨。	焼成良好、胎土密。	1
ク	18 27	現口径 現器高 基部 脚高 脚部径	13.0 3.5 3.0 5.0 10.8	17同様の坏部で口端部欠失。脚部は直線に開いた後、脚根部で大きく屈曲し、端部は円をなす。脚根高0.5。	坏部17と同様、脚柱部形抜き、脚根部表面に僅かにふくらみ。	焼成良好、胎土密。	1
ク	19 132	口径 器高 基部 脚高 脚部径	17.5 5.0 3.0 7.2 11.2	平底の底部より有段をなし、内弯気味に立ちあがり、口辺部で外反し、底厚した口唇端は円面、脚部は18同様、脚根高0.6。	18と同様、脚根部の肥大化と、根部が大きく弓曲する。窓部は面をなす。	ク	1
ク	20 45	基部 脚高 脚部径	3.5 7.4 10.8	坏部欠失不明。脚根部で大きく屈曲し、僅かに脚根高0.4がみられる。	脚根部内面にナデ痕あり、端部は僅かに円面。	ク	1
ク	21 48	基部 脚高 脚部径	3.0 7.5 10.2	脚部欠失不明。脚部は広がらず、脚根部は大きく屈曲する。脚根高0.5。	17~20と同様手法。脚根部は不安定なハリカ。全面ナデ仕上げ。	焼成軟弱、剝離がみられる。赤褐色。	1

種類	高さ mm	径 mm	法 mm	形 容 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考	意 見	
高 环	22	14	口徑 器高 基部 脚高 脚部径	15.2 5.5 3.5 8.0 12.0	平底の基部から直線的に外反して立ちあがり、口唇端面内外に面をなす。脚部は広がらず、脚根部は水平に屈曲し大。	坏部全ナデ、脚部は形抜きの後僅かにナデがみられる。脚根部は水平に広がり、表面は凸状、端部欠失不規。	焼成良好、胎土密。 帶褐黃土色。	1

### 高环形土器

第11図No.1の高环形土器は、第12図No.10~14の高环形土器と異なる器種である。No.1の土器の脚部は脚高もあり、区画された施文帯に合わせ、坏部の広がりと口辺部が水平な平縁をなすところから推測して、盛皿的な機能をもつ叶器と思われ、脚部の強靱性が求められた胎土厚であろう。No.10~14はいずれも竹管による円孔が2段に穿たれており、脚高も12cmから15cmとやや均一性を持つ叶器である。脚部内壁面にみられる相異は、11、13、14では脚基部の下部にしばり目がみられ、10、12では指頭によるタテナデがみられる。脚部中位より下部にかけては横ナデ調整で共通している。坏部は有段をもち、口縁部が外反するものと、やや内溝するものの破片が検出されている。脚基部に粘土円板を詰める技法をNo.10、13、14では取っている。

第14図 高环形土器実測図②



## 高环形土器②

種類	基盤寸法 cm	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
高环形 土器	24	环口径 12.3 器高 5.0 脚基部 2.7	环部は平底で腰を基底部に僅かに造る。体部はゆるやかに内弯気味に立ちあがり、口辺部で外反する。脚部欠失しているが、中空の脚柱接着痕がある。	内外面共にナデ調整である。	焼成良好、堅緻、胎土密。	1
〃	25	环口径 15.4 器高 5.0 基部 3.5 脚高 7.5 脚部径 11.0	脚部は中空で腰部は厚く大きい。端部は折り曲げて直立する。环部は平底で基底部を腰をなす。直線状に外反し口唇端面は円弧。	环の接（有段）以上は、輪削による貼付け、口辺部で八字形の器台形土器が基本体である。高环の外面はヨコナデ調整。脚根高0.3。	〃	1
〃	26	562 环口径 16.3 器高 6.0 基部 3.0	环部は水平な平底で基底部に僅かな後がある。身部は大きく外反して立ちあがり、口唇端で外反し、内部に縫合する面あり。	环部内外面共に入念なヨコナデ、脚部欠。	〃	1
〃	27	环口径 18.0 器高 6.0 脚基部 3.0	平底の底部から内弯気味に腰を減厚しながら立ち上がる。脚部は欠失しているが中空ではない。	环部内外面共にヨコナデ調整。脚基部は円柱状である。环基部に接合痕があり、輪削である。	〃	1
〃	28	环口径 15.7 器高 5.0 脚基部 4.5	左右が歪む。胎土は謹手である。脚基部直下で欠失している。	环基部に外面では接合の指痕が残る。脚基部は貼付けが見られず、环底部は舞台の上部と一致する。	〃	1
〃	29	569 环口径 15.0 器高 5.5 脚基部 3.0	环底中央部に凹みあり。环基部に僅かに腰をもつ。身部は外反して立ちあがり、口唇端で僅かに外折する。脚部は基部で欠失するが、貼付けず。	环部は内外面共に入念なナデ仕上げ。环底部に僅かに腰をなし、接合痕あり。脚部は中空でない。	〃	1
〃	30	环口径 15.5 器高 6.0 脚基部 3.5	环底中央部はやや凸出する。基部で有段をなし、大きく述べたものも、口唇端で僅かに外折する。脚部は基部より大きくラバ状に開き、脚根部で屈曲する。端部欠。	内外面入念なナデ調整。环身中央部に凹みあり。环底部で接合痕あり。脚基部は接合痕はみられない。	〃	1
〃	31	253 环口径 14.8 器高 5.5 脚基部 3.5	底部よりゆるやかに内弯気味に外反して立ちあがり口唇端で僅かに外折。脚部は基部に僅かに脚部をなし、脚根部へと大きく開く。	环外周ヨコナデ、内面はクレセ形のものヨコナデ。环基部より脚部にかけて、ヘラによる研磨がみられる。基底部に深い凹溝で环底部と区画。	焼成良好、胎土に0.3以下 の砂粒を含む。	1
〃	32	263 环口径 15.0 器高 5.5 脚基部 3.5	底部より内弯しながら立ちあがり、口唇端で僅かに外反する。脚部は基部に僅かに脚部をなし、脚根部へと大きく開く。	环部内外面は入念なナデ仕上げ。环底部から脚部にかけてクレセ形がみられる。ナデとタシにより环底部を作り出す。脚内面はヨコナデ。	焼成良好、胎土に0.3以下 の砂粒を含む。 全体に肉厚。	1
〃	33	181 脚基部 3.5 脚高 7.3 脚部径 1.2	脚部欠。脚部は中空で基部より大きく開き、脚根部で出張する。脚根高1.0、脚根内面は丸面。	形抜脚部、脚根部はヘラ切り整形。脚根部表面にふくらみあり。表面ナデ調整。	焼成良好、胎土密。 胎土厚大。	1

### 高坏形土器

高坏形土器にみられる成形上の特徴としては、まず坏部と脚部を別個に成形をするものをA形式とし、兀状の脚台部を成形した後に、坏部の口辺部を成形するB形式とに分類される。

A形式に含まれる高坏形土器の内、脚部について細分することができる。いま脚部の成形の内、円柱または円錐形の形枠を使用しないものをA形式のIとする基本的な脚部成形に対して、円柱または円錐形の形枠を使用するA形式のIIとがある。

A形式のIにみられるものとして、第13図No.16がある。16は脚基部は中空にならず、円柱の基部より脚裾部に向かって外方向に胎土を減厚しながら開く脚部のものに対して、中空の円筒状の脚柱部を作りだした、第14図No.31とがある。A形式のIにみられる脚部は、第14図No.27~30にみられる柱状の脚部の裾部が朝顔形に開くものと、第13図No.1~4の脚部にみられる脚基部より、漏斗状に開くものとがある。脚部の着地部は直立するものから、わずかに曲折するものとがある。脚部の内壁面はNo.3に示す指頭によるナデ調整がみられ、ナデ調整は2段から3段におよぶものもある。脚裾部は共通して横ナデ調整がみられる。以上差異からして、前者をA形式の1aとし、後者をA形式の1bとすることができよう。

A形式のIIにみられるものとしては、第14図のNo.33~37やNo.41~44、第15図のNo.46、47の器形の器種をあげたい。この種の脚部にも2種に細分される。その1つは円柱形の脚部と裾部からなるもので、脚裾高は0.5cm以下で、脚裾部の曲折は大きい、中空の脚部である。その2は、断面二等辺三角形の円錐状枠形による整形である。前者をA形式IIaとし、後者をA形式IIbと分類できる。

B形式に含まれる高坏形土器は、大きく2分類することができよう。A形式同様に形枠によらないものと、形枠を使用するものとの2種である。いま前者をB形式I式とし、後者をB形式II式と仮称して、

B形式I式土器の特徴は、第13図No.5や6にみられるもの、第14図No.25にみられる器種である。これらの土器は中空の断面兀形の脚部で中央部に円形の粘土の詰がみられるものである。脚部内壁面には整形過程の指頭圧痕が無数にみられ、外壁面には櫛状工具と刷毛状工具による調整が脚基部に明瞭に残る。また、口辺部の接合部にも同様工具の接合痕を残し、(第13図No.5にみられるもの)口辺部の輪積手法が明らかである。

B形式II式土器の特徴は、断面兀形の脚基部が中空にならず、第13図No.17~19やNo.22にみられる器種のものである。脚部は形枠を使用し、調整痕はみられない。また脚基部の内壁面にも凸状の粘土詰も認められない。脚裾部はやや脚裾高がみられ、脚裾端面に接着点があり、脚裾部表面はレンズ状の張りがみられ、内部はナデ調整である。

B形式では坏部に明瞭な有段を有するものと、有段をみないものとが共にみられるが、後者の場合、接合部に亀裂を生じるものが多い、または接合部で剝離するものが多くみられる。

た。

第15図No.45にみられる高杯脚部は、前述の分類にしたがえば、A形式1bに分類される器物であるが、細部にわたり観察すれば、調整にやや異なる技法が取られている。まず脚基部にシボリ目がみられ、内部底面は櫛描による成形となり。杯部底部（脚基部）に円盤粘土が詰められ、詰め粘土は脚部面からも入念に押圧調整が施されている。

#### 土師器の壺形土器と壺形土器

弥生式土器の内、壺形土器のB形式のI式を踏襲する土器として、第11図のNo.8の上器と第17図のNo.9の壺形土器がある。9の器形については、後述の福音寺遺跡筋違A地区SB-05遺構出土の遺物もあり、本市における上部器の編年に重要な遺物である。また特殊な土器として第11図No.8の土器がある。

いま第16図、第17図と第15図にかけた壺形土器は、竹の下地区出土の土師器の壺形土器における、器形上の特徴を示すもの外、完成品に近い造物を実測したものである。

壺の体部外表面は、櫛描きを主とするものから、刷毛目を主体とするものが多い。成形工具の成形方向は縦方向にのみよるもの第16図No.6、第17図No.2と4がある。成形工具を縦方向と横方向に十字に交叉さす工具方法は第16図No.1にみられる。横方向にのみは第16図No.3と第15図No.50がある。斜方向に交叉する成形は、第16図No.4、第17図No.1、3、5がある。なお成形痕を入念にナデ調整により消滅させているものとして、第15図No.49、第16図No.2、5、8、9と第17図No.7～9がある。

体部内面の壁面成形にもことなりがみられ、内壁面に輪積み技法を明瞭に残し、接合のための指頭圧痕文を残す第16図No.2と3、9、第17図No.1、4、6、7がある。また底部より頸部にかけて指頭ナデ調整を施すものに、第16図No.4、7、第17図No.5があり、ヘラによる成形は第17図No.2、3と8がある。

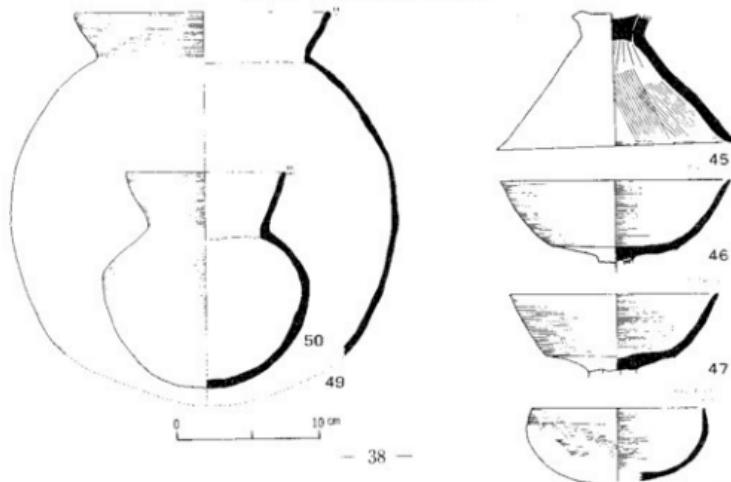
口頸部の成形は第16図のNo.9を除いて、内外面は共に横ナデ成形である。内でも口頸部を頸部で繋ぐものには、第15図のNo.49、50、第16図No.2～9、第17図No.1～9があり、壺形土器のそのほとんどが、この手法によるものであり、特に内頸部をヘラ切りするものが多い。

口縁部の様相も種々異なりがみられる。口縁部中央に外表面にふくらみをもつものとして、第16図No.4、6、第17図No.1、3、6、7がある。また口唇端面が水平な平面をなし、内面に陵をなすもの第16図のNo.4、第17図No.4があり、外方向に陵をなすものは第17図No.1がある。さらに口縁部が、内湾気味に立ち上がるものに第16図No.3、7、第17図No.2、6があるが内第16図のNo.7は、口唇部の水平面中央に凹線1条をめぐらしている。また口唇端面が外方向に傾斜するものは、第16図No.1と9があり、第17図No.6とがある。その他の口唇面は円面をなす。特にこれらの壺形土器の内、ヘラ記号を付す土器が、第17図No.7にみられる。ヘラ走行は上部より下方向に引き抜く技法を取り、これらヘラ記号

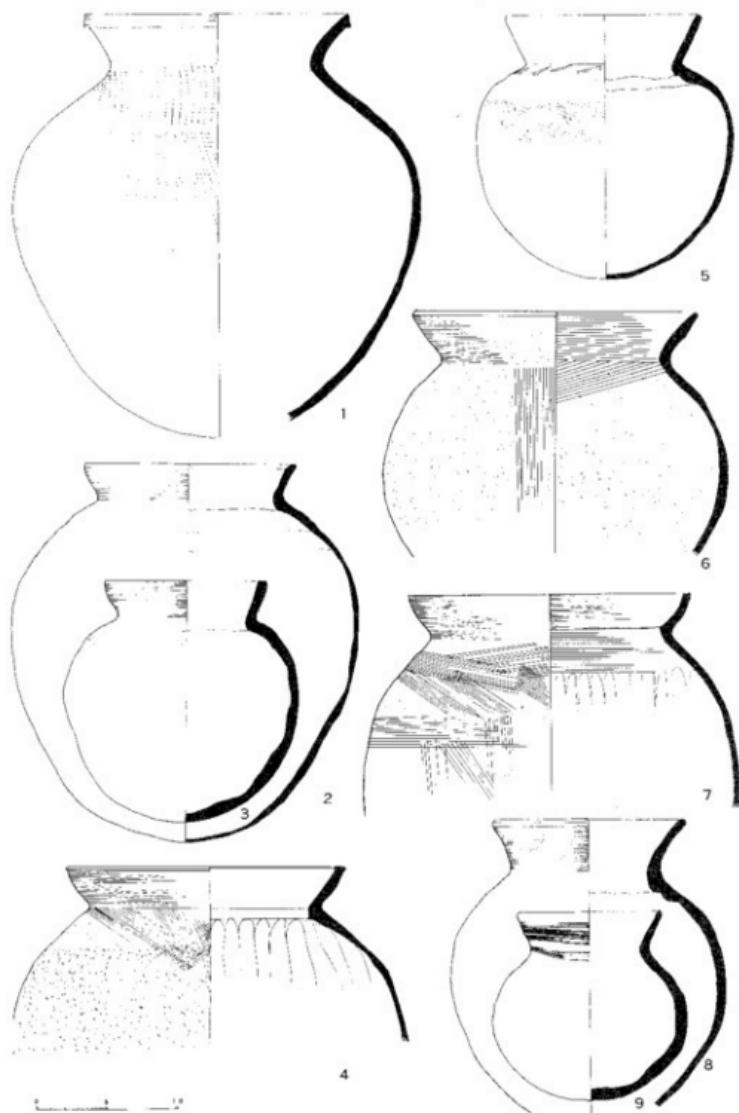
種類	番号	法量cm	形態の特徴	技術的特徴	備考	数量	
高 土 器	34	380 脚基部 脚高 脚底径	3.0 6.5 10.4	脚部欠失。脚部は中空で基部より大きく開き、脚底部で水平に屈曲し、端部は丸くおさめる。	型抜の脚部で表面はナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。 胎土は薄手である。	1
ク	35	坏口徑 器高 脚基部	12.3 5.5 2.8	丸味のある底部で、胎土を減厚しながら内面気泡に立ちあがり、口部で僅かに外反し、内傾斜。脚基部から柱状の脚部が推定される。	坏部は内外面ヨコナゲ調整。 3段に大きく凹面をつくり出す。	焼成良好、胎土密。	1
ク	36	坏口徑 器高 脚基部	17.2 6.0 3.5	平底の基部より、外反しながら立ちあがり、口辺部で僅かに内傾する。口唇部は平面、円柱の脚部基部にツメによるコブ状の凸起あり。	ツメ形の踏台を脚部と底底部とした高杯。底底部に凹盤状粘土を詰め、平底器とする。壁は強く、タテのハケ目がみえる。口辺部ナゲ調整。	焼成良好、胎土密。 胎土は薄手である。	1
ク	37	344 坏口徑 器高 脚基部	17.5 6.5 3.5	平底の基部より有段をなし、外反しながら立ちあがる。口唇部に僅かに平面あり。脚部欠失。基部内部に突出するツメあり。	坏内面ヨコナゲ、表面はハケ出し具による整形の後入糸なヨコ南盤。底底部に凹盤状粘土の詰め直し。	焼成良好、胎土密。 器厚は全体に厚手である。	1
ク	38	67 脚基部 脚高	10.0 2.8 5.5	坏口辺部と脚部を欠失する。脚部径は大きく10 cm。基部の棱はない。脚部は基部より大きく開き、脚底部は水平である。	脚部企画ナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
ク	39	183 器高 脚基部 脚底径	3.5 5.5 10.0	脚部のみ。脚中央部は内外間にふくらみあり。脚底部で僅かにすぼまる。脚底部で扁曲し、横幅四倍。脚底高0.2と僅かに開度する。	脚内壁面に指跡ヨコナゲ、表面はナゲ調整。	ク	1
ク	40	576 脚基部 脚高 脚底径	3.0 8.0 11.0	脚内形は二等辺二角形で脚部高さ7で屈曲し、氣泡割れは丸くおさめる。坏底部は平底と推定される。	型抜による脚部。脚部はナゲ、器表厚もヨコナゲ調整。	焼成良好、胎土密。 全体に厚手である。	1
ク	41	178 脚基部 脚高 脚底径	2.5 7.2 10.8	脚部内形は二等辺二角形で、脚部高さ0.3で屈曲する。脚底部外表は大きく折厚している。	型抜による脚部。脚底部と表面はナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
ク	42	105 脚基部 脚高 脚底径	3.0 7.0 11.7	垂直する円柱（中空）を脚部で極端に屈折させた脚部で窓部は壁をなす。脚底部高さ0.3。	型抜によ心脚部、柱中央にふくらみがある。	焼成良好、胎土密。 胎土はやや厚手。	1
ク	43	295 坏口徑 器高 脚基部	17.0 4.5 2.5	平底の基部から大きく外反して立ち上がり、中央部で内弯した後、口辺部で外反する。口唇部は凹底、後あり。円柱の脚基部の刻離痕を残す。	内外面共にヨコナゲ調整である。脚部は円柱で中空でない。	焼成良好、胎土密で粒子を含まず。 器厚は全体に薄い。	1

種類	番号 文庫出寸	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
高環形上器	44 109	脚部基部 3.5 脚高 3.5 脚部径 11.0	脚部片で基部より直線的に広がり、脚根部高0.1の後屈曲し、端面は面をなす。	口等辺三角形状の抜取り脚部で、脚根部にヘラ削痕あり。器表面は入念なナデ調整である。	焼成良好、胎上密。	1
高環	45 不明	基部 4.5 器高 9.5 脚部径 17.0	正五角形の外脚部で、脚中央部に僅かに企みがある。	脚基部にしづり目が残る。内壁部に横縞の形成が施され、脚根部はナデ調整である。器表面は全面ナデ調整、杯底部に円盤粘土。	焼成良好、胎士に若干の粒子を含む。	1
*	46 562	环口径 16.7 器高 5.5 基底部 10.0	环基底部に僅かに棱を持つ。基底部より内唇気味に立ち上がり、口唇部に向い薄く、口唇部は内傾する。	环部は内外面共に入念なナデ調整。脚部は僅かな中空脚部。脚は中空。	焼成良好、胎土密。	1
*	47 569	环口径 10.0 器高 5.5 基底部 9.7	平底の基底部より内唇気味に立ち上がる。脚部は中空。	外部内外面共に入念なナデ調整。环底部中央に凹みあり。脚は中空。	〃	1
鏡形土器	48 572	口径 12.4 器高 5.2 器腹最大12.8	丸底の底部より大きく内窓して立ち上がり、口辺部で若干内傾して、口唇部は円面。	内部全面ココナデ、外表面部はハケ目が縱縞の成形痕、口辺部はココナデ。	焼成良好、胎土密。底部欠失。	1
変形上器	49 1	口径 18.3 脚部 15.2 脚部 27.4 器高推定28.0	丸底の土器で、脚部は球形、多くの半状の口縁部、口唇部外面に棱をなす。	内壁面に凹凸がある。器表面はハケ目調整、口縁部は内外面ナデ調整、脚部内貼面にヘラ切りがある。	焼成良好、胎上密。器厚は薄く、輪郭。帶青茶褐色。	1
球形土器	50 583	口径 11.5 脚部 8.6 脚部 14.6 器高 15.5	丸底の小型丸底器である。脚部には口をもたせた。肩部と口縁部長く、僅かに内窓する。	内壁面は凹凸がある。口縁部は内外面共に入念なナデ調整。脚部中位以下には成形痕を残すが、肩部から脚部にかけてはナデ。脚部にヘラ切りあり。	焼成良好、胎土に若干の粒子0.2を含む。	

第15図 高環形土器実測図③



第16図 帯形土器尖測図①（土師器）



## 壺形土器①

種類	品目	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数値	
壺形土器	1	3	口径 19.4 頸部径 16.0 体部径 29.0 器高 30.7	丸底の底部より上外方向に大きく内寄気味にのび、体部外側で最大幅の体部径をとる。肩部より内寄しながら内傾してすぼまる。頸部より上外方向に直線にのびる口縁部は、口唇端面で屈曲した平面。	輪削手法で内壁面に無数の凹凸が波状模様として残る。頸部内壁と口縁部内外側はナガ調整、器体部には交叉する斜行のクシ状ヘラ工具による整形。	内外面共に凹位に擦痕と汚染物付着、焼成良好、器土は精密、器厚0.5~0.3と薄手。 黄褐色。	1
*	2	313	口径 14.0 頸部径 12.2 体部径 24.2 現器高 14.0	体底部を欠損。肩部より内寄気味にすぼまり頸部をつくる。口縁部は人字型に屈曲して上外方向にのび、口唇端面は丸くおさめる。口辺部に僅かにふくらみがある。	口縁部は内外面共にヨコナデ仕上げ、体部内壁面はヘラ削りによる整形、表面はクシ状ヘラ工具で調整している。	焼成良好、胎土に粘子を含むが少々である。肩部の器厚が肥大。 帶黃茶褐色。	1
*	3	183	口径 14.5 頸部径 12.9 体部径 24.2 現器高 12.5	体底部を欠損。球形に近い体部が想定される。肩部の張りは少なく大きく円をえがいて頸部をつくり、口縁部は頸部で大きく屈曲して上外方向にのび、口唇部で僅かに立ちあがる。端面は腰をなす。	口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部内面はヘラ削りによる整形。外側はハケ目状のヘラ工具による調整である。体部内壁に輪削手法がみられる。	焼成良好、胎土に粘子少々あり。 帶黃茶褐色。	1
*	4	371	口径 14.0 頸部径 12.6 体部径 18.5 推定器高17.5	底部を欠失。丸底が推定される。球形の体部であるが僅かに肩部に張りがみられる。口縁部はくの字口縁で、口唇部で内に肥大し、端面は平面である。	体部に4段の輪削痕、口縁部の接合面を残す。内壁面は粗雑なナガ整形、多面はハケ目状のヘラ工具による調整、口縁部は内外面ヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に僅かに0.2の粘子、外表面は黒く、焼成が全面に行き。 帶赤茶褐色。	1
*	5	453	口径 17.2 頸部径 14.0 体部径 25.0 現器高 9.5	体底部を欠失するが、体部は球形が推定される。口縁部はくの字口縁で、口唇端面で外側に腰をつくる。	口縁部は内外面ともヨコナデ調整、頸部内壁面にヘラ切りがある。体部内壁は粗雑な腰方向の指揉ナガ整形、外表面はハケ目状のヘラ工具による整形となっている。	焼成良好、肩部が肥厚する。	1
*	6	219	口径 16.5 頸部径 14.5 体部径 24.9 器高 25.2	丸底の底底より上外方向にのび、体部外側で大きく内寄している。口縁部は強く外折して内寄気味に立ちあがる。口唇端面は円面である。	輪削手法による整形には内外面よりのしめによる凹凸がはげしい。口縁部は入念なナガ調整に対しても、体部内外面には凹凸を残したナガ調整である。	焼成やや軟、胎土は薄く、粘子はみられない。 帶青茶褐色。	1
*	7	87	口径 15.7 頸部径 13.2 体部径 20.9 推定器高20.2	丸底の底底欠損。体部外側に張りがみられる。口縁部は、頸部で僅かに立ちあがったのち、大きく外方に開き、口唇端面は円面をなす。口縁部中央部にふくらみをもつ。	輪削手法による体部で、肩部から頸部にはげしい凹凸がある。口縁部は入念なナガ調整、体部下位はナガ調整がよくなされている。	焼成良好、胎土に剛く粘子はみられない。肩部にヘラ記号。 蒸褐色。	1

種類	高さ cm	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
壺形土器	8	8	頸部径 13.4 体部径 21.0 推定器高 28.0	口縁部を欠く。卵形の体部で、 口縁部はくの字が推定される。	埴輪手法。全面に大きく凹凸 をもつ。内面はへり削りによ る壺形、外表はナデ調整。	完成はやや 粗、体部汚付 近に焼痕が付 着。	1
々	9	268	口径 17.5 口縁横幅 14.7 頸部径 11.6 器高 9.0	体底帯欠損。口縁部は、頸部 で僅かに立ちあがったのち上 外方に屈曲したのち、ふたた び立ちあがり、上外方向に開 き、口唇端面は円面。口唇端 直下に胸凹線と中位に棱をな す。	体部に対して、口縁部は肥厚 する。口縁部入念なヨコナデ 調整、体部に大きな凹凸が残 る。	焼成良好、胎 土密。 帶黄赤褐色。	1

を有する土器は、松山市釜ノ口遺跡、松山市小坂三丁目遺跡の遺物に多数検出されている。

### 壺形土器

以上の壺形土器の中でそれぞれ、各器部における特徴を壺形土器と共に取り扱い記述したが、これらの甌器の中で器表に模様が付着しており、明らかに壺形土器として使用された器物は、第 16 図の No. 4、5、6、第 17 図の No. 1、2、4、5、8、7 は壺形土器である。

### 坏形土器

坏形土器第 18 図及び第 19 図 No. 6 までについての各器種の計数値は、口径 11~12 cm のものが 17 個でもっと多く、器高は 5~6 cm のものが 16 個で 4~5 cm のものが 13 個である。いま器高が 6 cm 以上におよぶものは 8 個にすぎない。だが 8 個の内口径が 13 cm 以上の器と一致するものは 1 器種のみで、残る 3 個はいずれも器高は 5~6 cm に含まれる。逆に口径が 10 以下のものは 3 器あり、内 2 器は器高も 4~5 cm と低く小型である。これらの土器を総括すれば、口径が最大のものでも 13.9 cm であり、いずれも 14 cm 未満の口径以内にあり、器高も最大 6.5 cm で 7 cm 以下のもので統一されている。いま口径 12 cm 以上と器高 6 cm 以上という器形数は少なく、また逆に口径 11 cm 以下で、器高 4~5 cm の器種もやや数量的には減少しており、前述するごとく、口径 11~12 cm で器高 5~6 cm 以内のものが最も多く、数値による安定をみる。

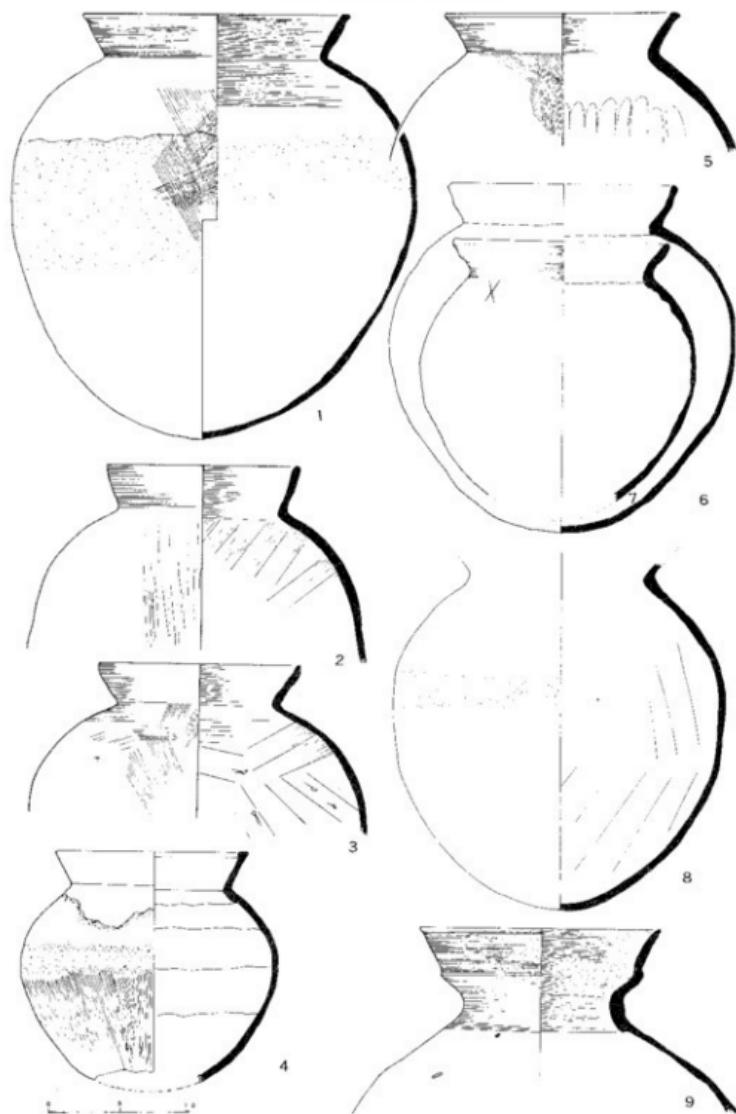
いま個々の器における細分には若干の差異がみられる。

#### 1. 口縁部における様相

- a. 体部最大径より垂直にたちあがり口唇端面を丸くおさめるもの No. 11、25
- b. 体部最大径より僅かに内傾し口唇端面は丸くおさめるもの No. 1~5、6~10、  
14~17
- c. 体部最大径より僅かに外反し口唇端面は丸くおさめるもの No. 27
- d. 体部最大径より折り曲げた後に立ち上がり、口縁直下に有段をつくるもの No. 26、  
28~31 第 19 図 No. 7、No. 9

#### 2. 底部における様相

第17図 壺形土器実測図②



## 安形土器

種類	番号 出土地	法 量cm	形 態の特 徴	技 法の特 徴	備 考	数 量
壺形土器	1	口径 19.0 頸部径 15.4 体部 29.5 器高 30.5	丸底の底盤から内窓しながら上外方向にのび、先位で内傾してすばまり頸部をつくる。頸部で大きく外反して口縁部をつくる。口唇端面は外方向に向をなし、鋭い。バラベットに翼凹線がある。	輪積手法による接合痕を体部に残す。内面はナゲ調整。体部外表面はくし日工具による整形の後カキ目調整。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	2 134	口径 15.2 頸部径 13.5 体部 20.5 器高 27.5	丸底の底部より内窓しながら上外方向にのびたのち、先位で内傾してすばまり頸部をつくる。口縁部は類で屈曲したくの字口縁をつくる。口唇端面は水平な面をなす。	輪積手法による接合痕あり。器厚は薄く凹凸が多い。頸部直下にへラ削り痕あり。くの字口縁部の強張にへラ削り痕あり。口唇端面を内部面でへラ削り。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	3 201	口径 11.5 頸部径 10.0 体部 16.9 器高 17.5	丸底で球形の体部である。くの字口縁をなす。口唇部はや直立し、端面は水平である。	口縁部内外面はともにヨコナゲ調整。体部内壁面に輪積痕を明瞭に残す。胎土厚は不均一である。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	4 278	口径 20.0 頸部径 16.5 体部 18.2 現器高 13.0	体部は球形が推定される。は縁部はくの字口縁である。口唇端面は水平な面をなし、内に棱をもつ。口辺中央位に外方にふくらみあり。	体部内面は指頭タテナゲ成形、頸部に一条のへラ削りあり、外表面はクシ状へラ工具で整形したのちナゲ調整を行う。表面に媒體が付着する。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	5 小型	口径 14.4 頸部径 11.4 体部 18.5 器高 19.0	丸底の底部より内窓氣味に上外方向にのび、体部先位で大きく内傾してすばまり、頸部をなす。口縁部はくの字口縁で上外方向に直線状にのび口唇端面は円面をなす。	輪積手法による。全面ヨコナゲ調整による仕上がりである。頸部に接合痕を残し、外面にクシ状へラ工具による整形が下地にみられる。先位にススの付着がみられる。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	6 不明	口径 20.5 頸部径 16.5 体部 24.7 現器高 17.5	球形の体部にくの字口縁を配する土器である。	輪積手法がみられ、胎土不均一である。くの字口縁の中央外面上にふくらみあり。内外面クシ状へラ工具による整形あり。媒體が内外面に付着する。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	7 20	口径 20.3 体部 27.0 頸部径 17.5 現器高 15.0	やや蹲形の体部に、頸部より内窓氣味に上外方向にのび、口唇端面は水平で中央部に擬凹線を配する。	内面は口縁部のヨコナゲ調整と頸部のへラ削りの後、頸部直下はナゲ調整、先以下は指頭タテナゲ、体部表面はクシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
ク	8 130	口径 13.0 頸部径 10.9 推定器高 21.5 体部 19.7	底部を欠失するが、蹲形の体部が推定される。器身に不統一の面があるが、口縁部は入念なるヨコナゲ調整である。	頸部に明瞭な接合痕あり。口縁部内外面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1
小 型 丸 底 片	9 11	口径 10.5 頸部径 8.5 体部 9.0 器高 13.8	球形の体部よりくの字にのびる口縁である。	口縁内外面に指頭による粗いナゲ痕あり。体部表面はナゲ調整である。口縁部にヨコナゲ調整のあとハケ目をつけている。	焼成良好、胎土密。黄褐色。	1

第18図 壺形土器尖削図



種類	高さ （cm）	法量 cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
环形土器	1 22	口径 器高	13.9 6.0	腹部はややとがり、胴部で大きく弯曲する。	口縁部外面はナデ、内部企画ナゲ調整。	焼成良好、胎土密 0.6~0.4。	1
环形土器	2 176	口径 器高	11.1 4.5	底部内壁に凹凸あり、口唇部肥厚する。	全面ココナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	3 573	口径 器高	12.0 5.6	底部内底に凹凸あり、口唇部ややくぼくなる。	内部全面と口縁部ココナゲ、腹部傾向にナゲ整形。	焼成良好、胎土密、胎土厚 0.6~0.3。	1
环形土器	4 575	口径 器高	12.0 5.5	腹部は大きく内窓し、口唇部僅かに内傾する。	腹部は傾向によるハケ日整形、他はココナゲ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	5 15	口径 器高	12.2 5.2	4同様の形態。	口縁部と内底はココナゲ調整、腹底部はクン日整形。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	6 560	口径 器高	13.5 5.5	底盤は厚く、口縁部は極端に薄い。やや歪む。	口縁部と内底はココナゲ、腹底部クシ日整形。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	7 小型	口径 器高	13.0 5.1	底部は厚く、腹部で大きく内窓し、口唇部内傾肥厚。	全面ナゲ調整による整形。	焼成良好、胎土密、底盤厚 0.5。	1
环形土器	8 不明	口径 器高	11.8 5.1	腹部で大きく内窓し、口唇部で僅かに内傾。	内面と腹部中央部までココナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	9 5	口径 器高	11.0 4.8	平底に近い、腹部で大きく内窓する。	内面と腹部中央部までココナゲ調整、胎土均一。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	10 140	口径 器高	12.0 6.0	平底の底部中央部が僅かに内に突出する。内窓する腹部に口縁部は内傾する。	内面はココナゲ、口縁部から腹部にかけて入念なココナゲ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	11 584	口径 器高	11.7 4.9	底盤より内窓し、腹部より直立する。	内面と腹部中央部までココナゲ、腹底部ハケ日整形。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	12 315	口径 器高	12.0 6.8	やや平底、腹部で大きく内窓し、口唇部内傾し、輪形凹面。	内面と口唇部ココナゲ、腹底部はハケ日整形。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	13 137	口径 器高	11.5 4.7	平底の基部より大きく内窓し、口縁部はやや内傾し、腹部は円窓。	内外面口縁部より腹部にかけてココナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	14 309	口径 器高	9.5 5.6	平底4cmが僅かに肉厚である。蓋底部より大きく内窓気味に立ちあがり、口辺部で内傾する。	ヘラ切りの平底の底盤、内窓する腹部に凹凸あり、口縁部は内傾する。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	15 26	口径 器高	11.0 5.2	平底2cmより大きく外方に開いたもの、腹部で大きく内窓しそのまま口縁部にいたる。	底部にヘラ切りあり、他は内外面ココナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	16 564	口径 器高	11.0 5.6	底盤が大きく内部へ突出、腹央部に最大の内窓あり。	内面と口辺部に入念なココナゲあり。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	17 97	口径 器高	11.2 5.6	2cm内外の平底、基部より外方に開き、腹中央で大きく内窓し、口縁部に至る。	外表面に2段の形整模あり、内曲及び口辺部にナゲ模あり。	焼成良好、胎土密。	1

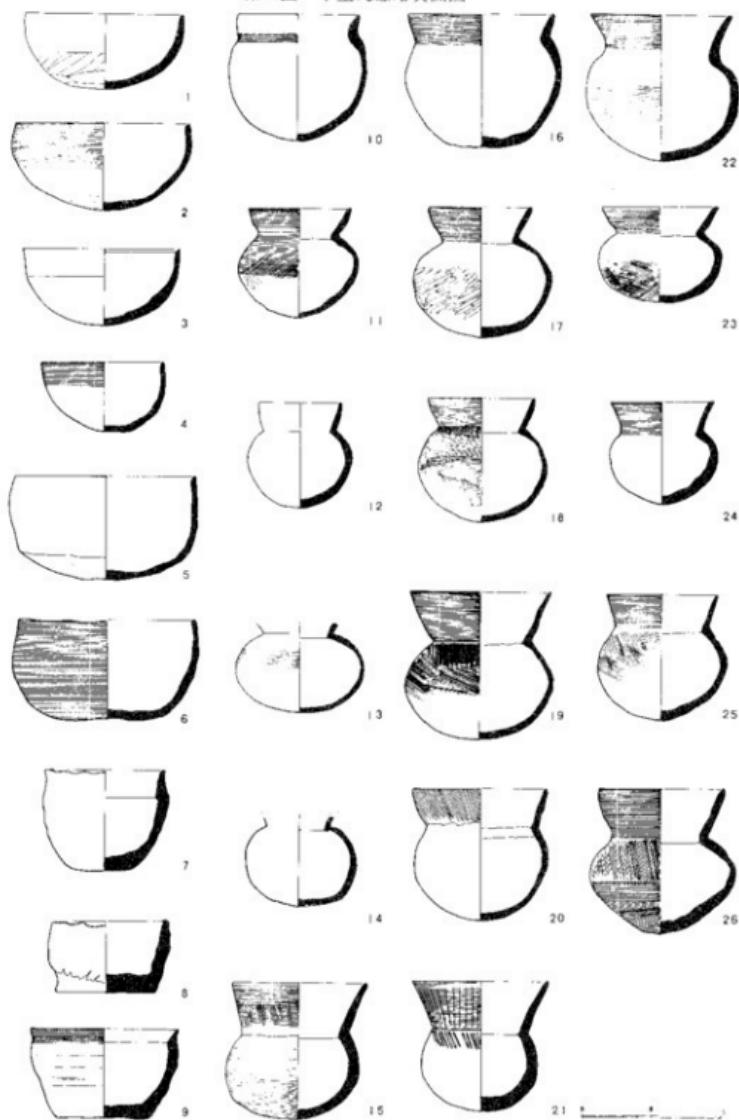
種類	器 名 次第 番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備 考	数量
环形土器	18 415	口径 器高 11.7 4.5	肥厚な底部より底厚気味に立ちあがり、口唇部は直立する。	円底部に回転ナデ痕がみられる。中腹部までヨコナダ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	19 19	口径 器高 11.3 4.6	内向に凸面を有する平底で、基部より内凹している。	内部及び腹央部はヨコナダ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	20 11	口径 器高 12.3 5.1	内へ凸面を有する平底5cm、基部より外向に開き腹央部より直立して口唇端面は内傾する。	底部が肥厚し、口縁部に向かい傾厚する。内外面ナダ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	21 140	口径 器高 12.5 4.9	平底6cmで内窓して立ち上がり、口唇端面は内傾する平面。	内面入念なナダ、外表腹央部までヨコナダ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	22	口径 器高 13.5 5.7	平底3cmの基部より外向へ開きながら立ち上がり、口縁部で直立した端部は円面。	底部に回転ナダ底あり、内面及び外側ナダ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	23 6	口径 器高 11.7 5.2	丸氏の氏底より立ち上がり、腹央部で大きく内窓する。口辺部從かに内傾、口唇端面は平面。	内部及び口辺部入念なナダ調整、口辺底下にハケ目整形がある。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	24 570	口径 器高 11.3 5.2	平底の基部より内窓気味に立ちあがり、口辺部で内にやや傾斜する。口唇端面は内傾する。	口唇部外表面下に凹面がある。外表腹央部より底部にかけて、ハケ目整形がある。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	25 43	口径 器高 11.8 4.2	平底で基底部より立ち上がり、腹央部より直立し、口唇端面はやや内傾する。	内外面ヨコナダ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	26 46	口径 器高 11.3 5.3	平底より内窓気味に立ち上がり、口唇部は僅かに外方に曲がり、端面は内窓した平面。	内部と腹央部にヨコナダ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	27 25	口径 器高 13.5 5.5	平底はやや外向に凸面する。基部より直立したのち、口辺部で外向に屈曲する。	内外両面に入念なナダ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	28 562	口径 器高 11.6 6.0	丸底の環で、僅かづつ立ち上がり、腹央部上位で僅かに内傾する。端面は内窓する。	全面ヨコナダ調整、口唇部底下に回転ナダによる凹みをもつ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	29 6	口径 器高 11.5 4.4	平底に僅かに歪みあり。大きく外反した後僅かに立ち上がり、口縁部は直立。	全面ナダ、口唇部底下はふくらみ回転ナダ（ミズビキ）	焼成良好、胎土は極薄。	1
环形土器	30 86	口径 器高 10.3 5.5	平底3cmにより大きく内窓しながら立ち上がり、口辺部で内に屈曲して、口唇部は直立さす。	全面ナダ調整、口辺部は28、29と同様。	焼成良好、胎土全体に肥厚。	1
环形土器	31 24	口径 器高 11.0 6.0	平底3cmより大きく内窓しながら立ち上がり、口辺部で内に屈曲して、口唇部は直立さす。	全面ナダ調整、口辺部は28、29と同様。	焼成良好、胎土全体に肥厚。	1

a. 底部は平面でわずかに内部に凸面を有するもの No. 17, 19, 20, 21, 30, 31 第 19 図 5

b. 平底の底部で内部に凸面をなさないもの No. 2 ~ 8, 10 ~ 15, 23 ~ 29 第 19 図 7 ~ 9

c. 底部がやや底尖に近いもの No. 1, 22 第 19 図 No. 1 ~ 4

第19図 小型丸底壺実測図



## 小型丸底世

種類	名	高さ 内底出土	法 量	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
环形土器	1	37	口径 器高	11.5 5.5	丸底の底部から内窓しながら立ち上がり、口唇部で直立し、端面は内窓。	内面は全面をコナゲ、口唇部はミズビキが施される。底部はヘラ削りで、下腹部に及ぶ。口辺部はナゲ。	焼成良好。	1
环形土器	2		口径 器高	12.4 6.8	基底部を内面にもつ。外底部はやや丸底。基底部で外反したのも、腹尖部で直立させ、口唇部は内窓する平面。	外表面方にコナゲ調整、下腹部から底部にかけては根據である。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	3	87	口径 器高	11.2 5.6	丸底の底部で直立した口縁部を持ち、端面は内窓した平面。	底面から腹部にかけてマキアグ痕、口辺部は内面にミズビキ。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	4	137	口径 器高	8.7 5.0	歪みがある。3と同様で、口唇端面は円凸。やや腰がかかる。	3と同様。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	5	104	口径 器高	12.8 7.5	廉かな平底から大きく外反したのち直立する。口唇端面内窓する平面。	内面は3、4と同様。基底部から底面にかけてヘラ削りの變形。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	6	14	口径 器高	12.6 7.5	平底8cmの基底部より内窓して立ち上がり、口唇部で僅かに内窓。	外表面に入念なコナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	7	20	口径 器高	8.5 7.2	平底4cmの肥厚な底部より直線状に立ち上がり、口辺部で一気にすぼまる。	内部回転ナゲ、外面もナゲ、口縁内面に核をなす。	焼成良好、胎土密。	1
环形土器	8	95	口径 器高	8.2 5.0	平底7cmの基部より直角に折り曲げた複雑な土器。	内部と口辺部にナゲ痕あり、手づくねである。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	1
环形土器	9	117	口径 器高	10.5 6.5	平底6.5cmの基部より内窓した立ち上がり、口縁部は内窓する端部と共に。	内部及び口縁部はミズビキが施されている。腹尖部より基部はヘラ削り。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	1
小型丸底世	10	5	口径 頸部 器高	8.7 8.6 9.2	肩部僅かにすぼめて頭部をつくり。口縁部鋭い。	今面コナゲ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
小型丸底世	11	90	口径 頸部 器高	7.4 5.8 7.8	大きくすぼまり肩部は張る。口縁部は内窓気味に外反。	底部より胸尖部に刷毛目斜内の變形。外はコナゲ。	焼成良好、胎土は密。	1
小型丸底世	12		口径 頸部 器高	6.0 5.3 7.5	肩部の張りが胸尖より上位にある。口縁部僅かに内窓する。	全面入念なコナゲ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
小型丸底世	13	247	口径 頸部 器高	不明 5.1 6.5	口縁部欠失、錐状の体部で胸尖部に鋭い張り。	全面入念なコナゲ調整の後、胸尖部にハケ目ナゲが現れる。	焼成良好、胎土は密。	1
小型丸底世	14	82	口径 頸部 器高	不明 4.6 5.2	口縁部欠失、器身に歪み。	全面入念なコナゲ調整。	焼成良好、胎土は密。	1

d. 底部中央部にわずかに凹面を有するもの No.9、16、20 第19図 No.6

以上土師器の环形土器について、口縁部と底部について、若干の差異と共通点がみられることから、これらのわずかなる形態の変化が、時代的なへだたりを示すものと推察される。

種類	高さ 内径部上	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
小型丸底堆	15.156	口縁 頸部 器高	9.7 7.7 9.9	球形の胴部、くの字口縁、口縁は大ききのびる。	内部入念なヨコナデ、口縁部にハケ目整形の後ヨコナデ調整がみられる。	焼成良好、胎土密、胎土は全般的に肥厚。	1
小型丸底堆	16.540	口縁 頸部 器高	10.5 9.8 9.6	10と同様に頸部すぼまりとは頸部の短さ共通。	全面ヨコナデ整形、特に口縁部は入念である。	焼成良好、10より大眾で胎土も肥厚。	1
小型丸底堆	17.63	口縁 頸部 器高	7.5 5.6 9.4	頸部のすぼまり大きく、13の頸部と共通。	体部の中央部へラ研磨が、その他はヨコナデ。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	18.128	口縁 頸部 器高	7.8 5.2 9.0	球形の体部、口縁部外方にふくらみ、内向ミズビキによる頸部に棱をもつ。	頸部と下腹部にハケ目整形痕が残る。他にヨコナデ。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	19.264	口縁 頸部 器高	10.2 7.2 10.6	球形の体部(胸)によくのびたくの字は縁。	口縁部は入念なヨコナデ、体部はハケ目整形。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	20.101	口縁 頸部 器高	9.8 8.0 9.5	10と15、16に類似する器形。	内部はヨコナデで頸部にヘラ切り、口縁部外側ハケ目整形。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	21.150	口縁 頸部 器高	9.8 7.0 9.4	15と類似、にぶい頸部のすぼまりの後大ききのびた口縁部。	内部ヨコナデ、口縁外表はクレジット整形の後ヨコナデ、頸部より肩部にクシ目が残る。	焼成良好、胎土密、胎土は肥厚。	1
小型丸底堆	22.	口縁 頸部 器高	10.2 8.2 10.5	10、16に類似、並みがある。口縁は大きき開く。	特に胴央部にヨコナデを入念に施す。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	23.158	口縁 頸部 器高	8.5 6.4 6.9	特に小型である。11、13に類似の肩張。	口縁部ミズビキ、胴央から底部にかけてハケ目整形。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	24.196	口縁 頸部 器高	7.5 6.0 7.5	底部はやや尖底、口縁部は直線状に開く。	体部内面に指頭ナデ痕あり、口縁部ミズビキ。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	25.391	口縁 頸部 器高	8.0 6.8 9.2	底部はやや尖底、口縁部は直線状に開く。	口縁部はミズビキ、体部はハケ目整形。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底堆	26.120	口縁 頸部 器高	9.0 7.0 10.5	底部はやや尖底、口縁部は直線状に開く。	25同様で体部はタケ、ヨコのハケ目整形。	焼成良好、胎土密。	1

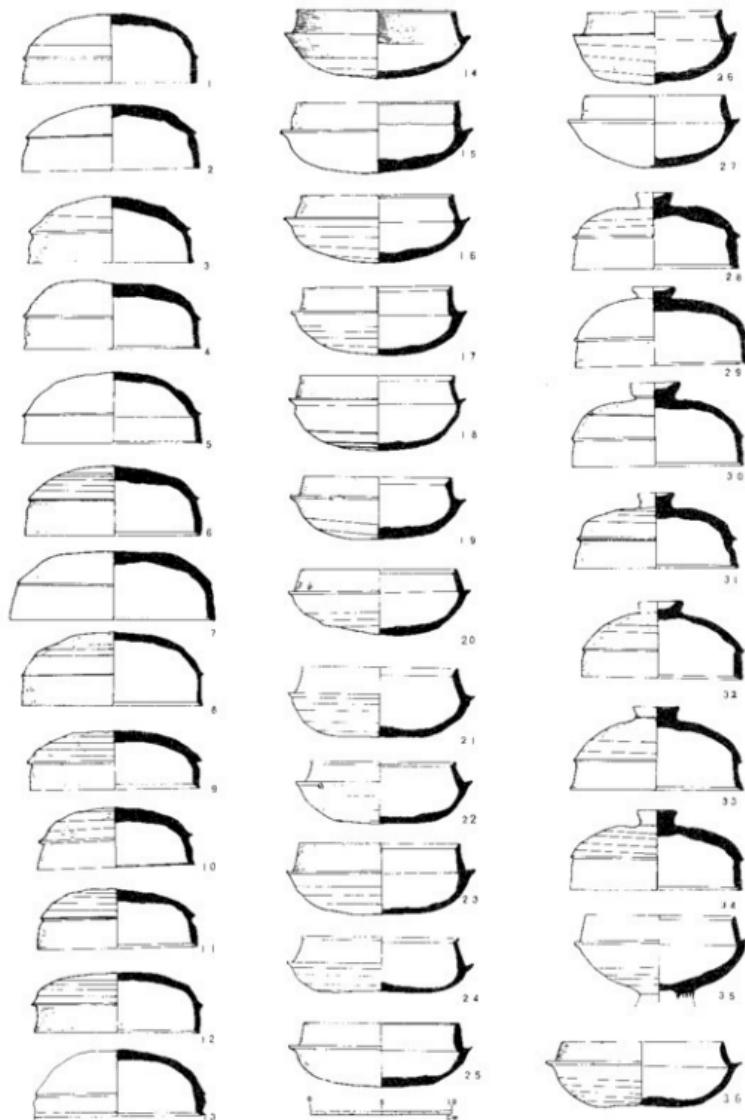
### 小型丸底堆

この種の十器の出土数は以外と多く、すべてを記載することは不可能であり、内でも完形か、完形品に近く特に変化のあるもののみを収録した。

本遺跡出土の小型丸底堆は、概して球形の胴部(体部)に口縁部を胴部最大径より小さい口径をなすものが多く、わざかに第10図No.15、19、21の3個である。また口縁部高が、器高の1/2以上に立ち上がるものにはNo.15、19~22とNo.26の6個体であるが、破片の内にもこの比を保つ個体が多い。内でも器に対する比が1/2以上1/2以下の口縁部高を示すものが、全

体の $\frac{3}{4}$ 以上をしめる出土数である。口縁部高が $\frac{1}{4}$ 以下の比を取る個体は最も少なく、全体の $\frac{1}{4}$ にすぎない出土数である。また胴部最大径から口縁部を作りだす器は1個体も検出されていない。胴部最大径よりわずかにすぼまり口頸部を作る No. 10は $\frac{1}{4}$ の割合にある。大半の器は $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{2}$ 以内の割合を保つものがほとんどである。特例として No. 13, 14 にみられるように、その比が $\frac{1}{2}$ をこえるものもあるが、個体数としてごく少数である。

第20図 須恵器環形土器実測図①



## 須恵器环形土器(1)

種類	高さ 内径(上)	法 量cm	形態の特徴	技 法の特徴	備 考	数 量		
蓋杯(蓋)	1	6	口径 器高 口縁部高	12.5 5.0 1.8	口縁部はやや内傾し端部は水平な平面。天井部は高くて丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	2	324	口径 器高 口縁部高	12.7 4.8 2.6	口縁部は下外方向に下がり端部は水平な平面。大井部は丸くて高い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外面は回転へテ削り、他は回転ナガ調整(天井部内面弧がナガ調整)。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	3	7	口径 器高 口縁部高	12.0 4.8 2.3	口縁部は下外方向に下がり、端部は水平な平面。口縁部外面にふくらみがある。大井部は低くて丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部回転へテ削り、他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	4	2	口径 器高 口縁部高	12.7 4.7 2.25	口縁部は内傾したのも下外方向にのび、端面は僅かに内傾する平面。天井部は中央部で凹む。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	5	172	口径 器高 口縁部高	13.0 5.0 2.3	口縁部は短く垂直で、端面は水平な平面。天井部は高くて丸い。(3 cm)	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部回転へテ削り、他面は回転ナガ調整(天井部内面弧がナガ調整)。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	6	159	口径 器高 口縁部高	12.6 5.0 2.6	口縁部は下外方向に下がり内窓有、端面は内に傾く平底。大井部はやや傾斜である。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部回転へテ削り、他面は回転ナガ調整(天井部内面弧がナガ調整)。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	7	423	口径 器高 口縁部高	14.7 5.0 2.6	口縁部は下外方向に下がり、端面は内傾する凹面。天井部は扁平である。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整(大井部内面弧がナガ調整)。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	8	139	口径 器高 口縁部高	13.0 5.4 2.3	口縁部は下方に僅かに内傾し、端面で外反して内傾する凹面。天井部は高くて丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整(天井部内面弧がナガ調整)。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	9	94	口径 器高 口縁部高	12.2 4.2 2.1	口縁部は下外方向にのび、端面して垂直に下がる。端面は内傾し僅かに内窓、天井部は低くて偏平。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	10	93	口径 器高 口縁部高	11.4 4.5 2.2	口縁部は下外方向に下がり、端部は天井部中位でひずむ。端面は水平な平面、天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部端は回転へテ削り、他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	11	不	口径 器高 口縁部高	11.5 4.3 2.25	口縁部は下外方向に下がり、端面は内傾する平面、後面下に凹み、天井部は深め偏平である。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1
蓋杯(蓋)	12	12	口径 器高	12.0 4.5	口縁部は下にのび、端部で僅かに内傾する。端面は内傾する平面、天井部やや偏平である。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部内面回転へテ削り。他面は回転ナガ調整。	焼成良好。胎土密、青灰色。	1

種類	番号	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
若林(蓋)	13	107	口徑 12.2 器高 4.7 口縫部高 1.5	口縫部は僅かに底面に下がり、外向にふくらみをもつ、端面は内傾する平面、受部は丸くて高い。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部頂に僅かに回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	14	小	口徑 11.4 器高 5.0 口縫部高 2.0	たちあがりは僅かに内傾し端面は内傾する平面、受部は上方にのみ端窓で平底、底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	15	10	口徑 11.7 器高 5.0 口縫部高 2.2	たちあがりは内傾したのも屈曲してたちあがる。端面は僅かに内傾する平面、受部は上方にのみ端窓で平底、底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部に僅かに回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	16	3	口徑 10.0 器高 5.0 口縫部高 2.0	たちあがりは内傾し、端面も内傾する平面、内部腰をなす。受部は上外方にのみ鋸い。底部は丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	17	4	口徑 10.7 器高 5.0 口縫部高 1.9	たちあがりはおりこみである。端面は内傾する平面、受部は水平に端部は鋸い。底部は丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	18	13	口徑 11.2 器高 5.5 口縫部高 1.8	たちあがりは内傾したのち上外方にのみ、肥厚した腹部で、端面は内傾する平面、受部は僅かに上外方にのみ鋸い。底部は偏平な丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形、腹部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	19	2	口徑 10.5 器高 4.7 口縫部高 1.6	たちあがりは内傾してたちあがり、肥厚した腹部で、端面は内傾する平面、受部は僅かに上外方にのみ鋸い。底部は偏平な丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	20	9	口徑 10.0 器高 4.8 口縫部高 1.65	たちあがりは内傾してのみ、端面は内傾する平面、受部は水平に端部は鋸い。底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	21	559	口徑 11.0 器高 5.1 口縫部高 1.6	たちあがりは内傾してのみ、端面は内傾する平面、受部は水平に端部は鋸い。底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部全面回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	22	バ	口徑 10.3 器高 4.5 口縫部高 1.9	たちあがりは大きく内傾してのみ、端窓で外に傾曲し腰をなす。端面は内傾する平面、受部は上外方にのみ鋸い。底部平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1
环身	23	576	口徑 11.5 器高 5.2 口縫部高 2.0	たちあがりは僅かに内傾してのみ、外部は内傾する平面、受部は上外方にのみ鋸い。底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部は回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内部引回転ナダ）。	焼成良好、胎土密、青灰色。	1

種類	番号	直径mm	形態の特徴	投げの特徴	備考	数量	
环身	24	4	口径 11.2 器高 4.0 口縁部高 2.0	たちあがりは大きく内傾して るび、端部で外に屈曲し後を なす。端面は内傾する平面。 受部は上外方にのび、端部は 鋸い。底部は平底。	マキアゲ、ミズビキ成形。底 部はヘラ削り、他面は回転ナ ゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
环身	25	84	口径 11.2 器高 4.6 口縁部高 1.8	たちあがりはオリコミで直立 する。端面は鋸く後をなす。 受部は上外方にのび、端面は 鋸い。底部偏平な丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形。底 部回転ヘラ削り、他面は回 転ナゲ調整(底部内面は回転 ナゲ)。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
高环形 环身	26	1	口径 9.8 器高 5.4 口縁部高 2.0	たちあがりはオリコミで内傾 してのひ、端面で黒塗して肥 厚する。端面は内傾する平底。 受部は上外方にのび、底面は 丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形。底 部は回転ヘラ削り、他面は 回転ヘラ削り(底部内面は回 転ナゲ)。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
环身	27	8	口径 10.0 器高 5.2 口縁部高 1.8	たちあがりは内傾してのひ。 端面は水平な平面。受部は水 平にのびる。底面は丸底。	マキアゲ、ミズビキ成形。底 部は回転ヘラ削り、他面は 回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋环	28	92	口径 12.0 器高 5.5 口縁部高 2.3 宝珠径 2.5 宝珠高 1.1	口縁部は内傾したのも外方へ 屈曲して直立して下り。端面は 内傾する。天井との接は鋸く。 天井は僅かな平面をもつ。 中央部に偏平な擬宝珠のつま み。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は以上回転ヘラ削 り、他面は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋杯	29	34	口径 12.5 器高 5.7 口縁部高 2.0 宝珠径 3.2 宝珠高 0.8	口縁部は下に直立して下り。 端部で外に屈曲して、端面は 内傾する。天井との接は鋸く。 天井部は丸く、中央部に擬宝珠 のつまみをもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は以上回転ヘラ削 り、他面は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋环	30	5	口径 12.4 器高 6.0 口縁部高 2.0 宝珠径 3.6 宝珠高 1.1	口縁部は下へ直立し、端部は 内傾する。天井との接は鋸く。 天井部は丸く、中央部に擬宝珠 のつまみをもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は上に板ヘラ削り、 他面は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋环	31	91	口径 11.8 器高 5.5 口縁部高 2.0 宝珠径 2.6 宝珠高 1.0	口縁部は下へ直立したのち大 きく外に周曲して下外方への びる。端部内傾し、中央に凹 みあり。接は鋸く、偏平な天 井中央部に擬宝珠のつまみを もつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は回転ヘラ削り、 他面は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋环	32	不	口径 11.5 器高 5.5 口縁部高 1.9 宝珠径 3.2 宝珠高 0.7	口縁部は僅かに内傾気味に直 立して下る。端部は内傾、接 は鋸く、天井は丸く、中央に 擬宝珠のつまみ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は上に板ヘラ削り、 他面は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1
宝珠付 蓋环	33	4	口径 12.4 器高 6.0 口縁部高 2.0 宝珠径 3.3 宝珠高 0.75	口縁部は下へ直立したのち、 端部で外に屈曲して圓く。端 部に内傾する。接は鋸く、天 井は丸い。中央部に擬宝珠 のつまみ。	マキアゲ、ミズビキ成形。天 井部外面は上に板ヘラ削り、他面 は回転ナゲ調整。	焼成良好、胎 土密、青灰色。	1

種類	番号 発掘(年)	法 量	形 貌 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考	数量	
宝珠付 蓋杯	34 50	口径 器高	12.4 3.8	口縁部は下に直立し、端部は内傾する。後は鋸く、天井部は丸く、中央部に擬宝珠のつまみ。 宝珠部 空座高	マキアゲ、ミズビキ成形、天井部外周部以上回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎上密、青灰色。	1
有蓋高杯	35 10	口径 器高 口縁部高	10.7 6.0 1.8	端部のたちあがりは内傾してのび、端面は内傾する平面。受部は「外方にのび、端面は鉤い」。底部は丸底、脚詰欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部外周部以上回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整。	焼成良好、胎上密、青灰褐色。	1
环身	36 559	口径 器高 口縁部高	11.5 4.6 1.6	たちあがりは大きく内傾してのび、端面は内傾する。受部は漸かに上外方にのびる。底部偏平。	マキアゲ、ミズビキ成形、底部外周部以上回転ヘラ削り、他面は回転ナダ調整（底部内面%はナダ）。	焼成良好、胎上密、青灰色。	1

## (2) 須恵器の様相

須恵器はいずれも土師器と共に、文化層序を共にする出土遺物である。环形上器には蓋杯と环身がある。さらに环蓋の天井部につまみをもつものと、环身に短高的脚をもつ高杯とがある。蓋杯の内、天井部の様相が丸味をもつもの、やや偏平なものや、口縁部の口唇端面が水平面を呈するもの、内傾する平面をなすもの、凹面をなすものがあり、また口縁部の立ちあがりが、垂直になるもの、外方向になるものや、内傾するものがある。

これらの様相からみて、当遺跡出土の須恵器の編年及び分類を陶邑報告書に求めるならばI型式に属する時期が求められる。いまこれら蓋杯と环身にその特徴を観察すれば、A～C類に分類ができる。

蓋A類 口縁部高2.5cm以上の器物で、口縁部はほぼ垂直に下がるか、下外方向に下がるもので、口唇端面は内傾するか、凹面か平面もみられる。稜は鋸く（一部丸味のものあり）、天井部は高く丸味をもつものや、やや平らな天井のものもある。成形はマキアゲ、ミズビキ成形である。

蓋B類 口縁部高2.0～2.3cmのもので、口縁部は垂直か、下外方向に下がる。端部は内傾する段、凹面、水平面、円面をなすもので、天井部はやや平らなものから丸いものもある。稜は比較的長く鋸い。成形はマキアゲ、ミズビキ成形である。天井部に回転ヘラ削り整形が%～%程度施されている。

蓋C類 口縁部高1.8cm未満のもので、口縁部は垂直に下がり端面は内傾する稜と平面とがある。天井部は丸い。成形はマキアゲ、ミズビキ成形で、天井部に回転ヘラ削り引前後にみられる。

身A類 口縁部のたちあがりが2.0以上のもので、たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段か、凹面である。底部は丸いもの14、23があり、平底の24がある。受部は外上方にあり、端部は丸い。成形はマキアゲ、ミズビキ成形で、底部に%～%に回転ヘラ削りがある。

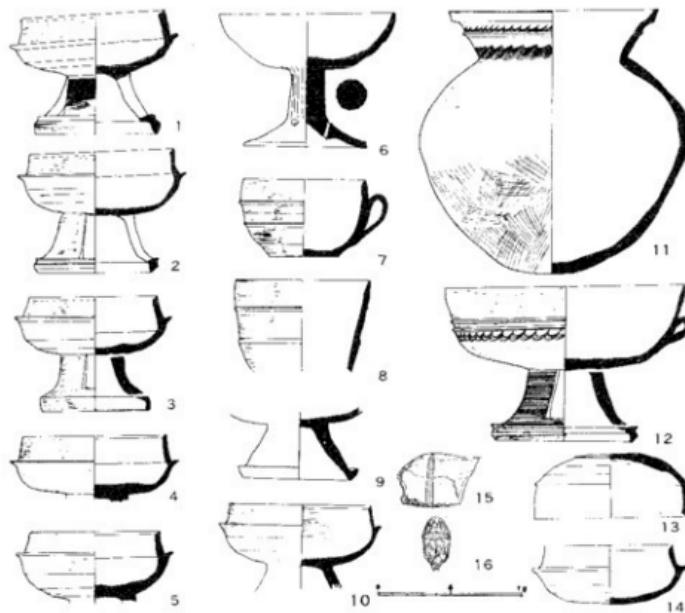
身B類　口縁部のたちあがりが、1.8~2.0 cm 未満のもの 17、18、22 で、たちあがりは内傾し端面は内傾する段と凹面とがある。受部は外上方方向にのび端部は鋭い、成形はマキアゲ、ミズビキ成形で、底部に3%~5%前後のヘラ削り調整がある。

身C類　口縁部のたちあがりが、1.8 cm 未満のもの 19~21 がある。たちあがりは内傾し、端面は内傾する段と平面のものがある。受部は外上方方向にのび端部は丸面である。成形はマキアゲ、ミズビキ成形で、底部に向転ヘラ削り3%前後の調整がある。

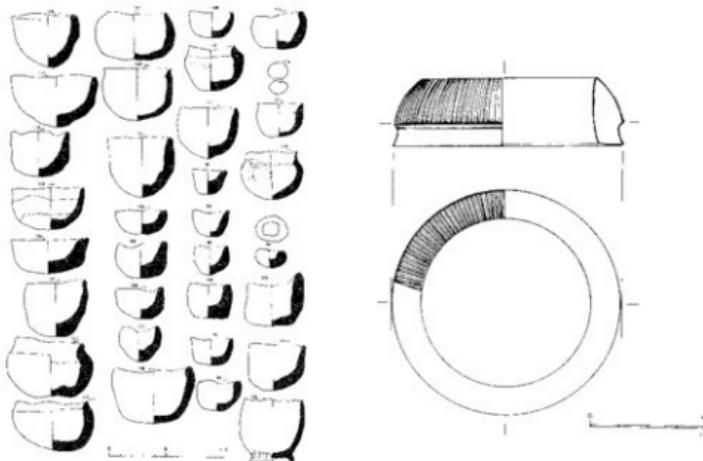
#### 高杯

高杯には有蓋高杯の 39 と第 21 図の 1 ~ 5 ある。杯部は A 類に 1、2、4、10 が、B 類には 3、5 と第 20 図の 35 が同一のものである。無蓋の高杯には把手がある。脚部のすかしは 2 方向にある。高杯形土器第 21 図 2 の時期と同時期の土器と理解される。2 は杯身の B 類に属する土器である。また杯蓋の内、高杯形土器の内、有蓋高杯の杯蓋として宝珠付の蓋杯が使用されたかは不明であるが、いま検出された遺物の分類は蓋杯の分類方法によれば、I 形式の B 類と C 類に分類されるものである。この分類からみれば、有蓋高杯の A 類に属するものには、宝珠付杯蓋ではなく、B 類の有蓋高杯には B 類の宝珠付杯蓋が使用された可能性はある。

第21図 須恵器环形土器実測図②



第22図 手づくね土器実測図と鉢実測図



## 須恵器环形上器(2)

種類	番号	高さcm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
有蓋高杯	1	35	口径 10.0 脚基部 5.0 脚裾部 9.5 器高 9.2 口縁部高 2.0	(杯部) たちあがりは高く僅かに内傾し、端部は内傾する面を受部は上外方向へのび端部は面をなす。 (脚部) 短く外反し、脚裾部で屈曲する。端部は段をなし、凸線があぐる。スカシは三方に長方形を配する。	环部成形後脚部貼付け、ミズビキ、マキアゲ成形、环底部はヘラ削り、ロクロ回転左。	燒成良好、堅緻、青灰色、たちあがりが特に肥厚である。 実測者大山	1
有蓋高杯	2	44	口径 11.2 脚基部 6.0 脚裾部 8.7 器高 9.5 口縁部高 2.0	(杯部) たちあがりは高く、内傾した後直立。受部は短く上外方向にのび、端部は鋭い。底部は平底。 (脚部) 脚基部は大きく僅かに外反し、脚裾部で屈曲する。端部は段をなす。三方に長方形のスカシ。	环部成形後脚部貼付け、ミズビキ、マキアゲ成形、たちあがりはオリコくによる。底部ヘラ削り右、ロクロ回転左。	燒成良好、堅緻、青灰色。 実測者大山	1
有蓋高杯	3	282	口径 10.0 脚基部 5.0 脚裾部 8.4 器高 8.8 口縁部高 1.8	(杯部) たちあがりは高く僅かに内傾、端部は内傾する面。受部は上外方向にのび、端部は円面。底部は平底。 (脚部) 基部より僅かに外反し、脚裾部で大きく外反し、端部で屈曲して直立する。三方に長方形のスカシ。	环部成形後脚部貼付け、脚部貼付けによる环底部に寄せあり、环底部はヘラ削り、ロクロ回転左。	燒成良好、堅緻、青灰色、たちあがりが特に肥厚。 実測者大山	1
有蓋高杯	4	282	口径 11.0 脚基部 4.8 脚裾部 5.0 器高 2.0	(杯部) たちあがりは高く直立する。端部は内傾する面。底部は平底である。受部は上外方向にのび、端部は鋭い。脚部は欠損している。	环部成形後脚部貼付け、脚部貼付けによる环底部に寄せあり、たちあがりはオリコくである。	燒成良好、堅緻、胎土密、青灰色。 実測者大山	1
有蓋高杯	5	7	口径 10.0 脚基部 5.2 脚裾部 5.0 器高 1.8	(杯部) たちあがりは高く僅かに内傾し、端部は内傾し凹面。受部は上外方向にのび、端部は円面、底部平底。 (脚部) 欠損する。	环部成形後脚部貼付け、底部にヘラ削り左、ロクロ回転左、ミズビキ、マキアゲ成形。	燒成良好、堅緻、胎土密、青灰色。	1
無蓋高杯	6	162	口径 13.5 脚基部 2.8 脚裾部 9.5 器高 11.3	(杯部) 平底の基底部より内弯気味に上外方向にのびる唇端は半圓。 (脚部) 円柱の脚部4.5cmで、底部は2段に広がり、脚端部は平面、円孔を3方向に穿つ。	杯部ミズビキ、マキアゲ、脚部ヘラ削りによる多角形。	燒成良好、堅緻、胎土密、灰黄色。	1
盤	7	A型	口径 9.4 底盤径 5.5 器高 6.0	平底の基底部より内弯気味に上外方向に立ちあがり、口沿部で僅かに内弯する。口縁内面は傾斜する面、全体に2条の凸溝、上段の凸溝位から下段の突帯下部に把手を貼付けた。	ミズビキ、マキアゲ成形、底面外向ヘラ切り、把手貼付け把手は断面長方形の偏平である。内外面回転ナゲ調整後、把手貼付け。	燒成良好、堅緻、胎土密、青灰色。	1

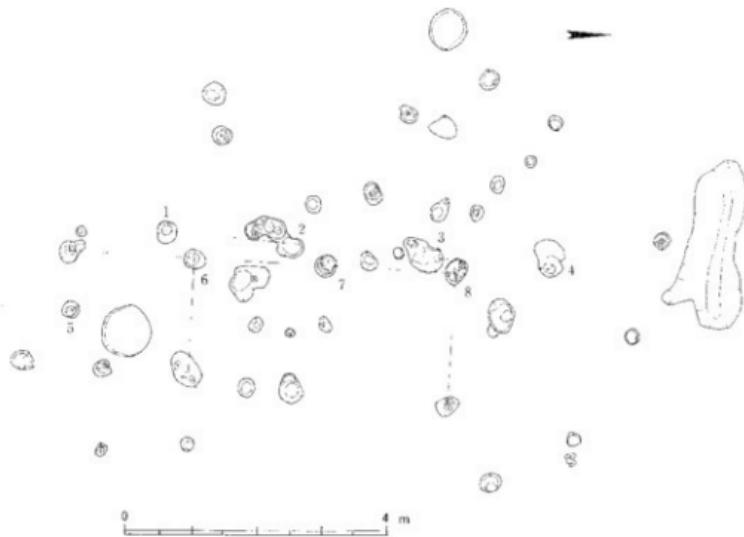
種類	番号 [回数]	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	基盤
浮	8	口径 10.4 器高 7.0 推定 底部径 7.0	底部と把手部を欠損。基底部より上方にのびる僅かに外反する。口唇部ですぼまり端面は丸。2段の突堤はナデによる成形。	ミズビキ、マキアゲ成形。把手は接合部で欠失點付。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
有蓋高杯	9	基部 4.7 脚底部 8.2 現器高 5.2	杯体部を欠損。底盤は平底。脚部は基部より大きく下外方向にのびて脚部で上外方向に黒曲する。	ミズビキ、マキアゲ成形。脚根部で胎土厚は薄い。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
有蓋高杯	10	口径 10.8 脚底部 5.0 現器高 6.5 口縁部高 1.8	平底の基底部より上外方向に内彎したのも、たちあがりは高く僅かに内傾する。口唇端面は内傾する平面。受部は細く上外方向にのび、脚部は鋭い。脚部は基部で欠損しており不明。	ミズビキ、マキアゲ成形。脚底部付け、底盤部にマキアゲ痕をのこす。	焼成良好、堅硬、胎土密。	1
変形土器	11	口径 16.2 頸部 11.5 体部最大 20.7 器高 20.2	丸底の底盤より、上外方向に内彎しながらのび、体部劣位よりは内傾してすぼまり、脚部をつくる。口縁部より屈曲し外方向にのびたのち、口辺部で僅かに折れたのち、ふたたび口唇部は棱をなす。	ミズビキ、マキアゲ成形。叫きしめ痕に入企にナデ消している。体部上位と底部にかけてカギ目(静止)調整。口縁部に断面三角形の棱をもち、2段に流水文を付す。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
把手付 高杯	12	口径 18.4 脚底部 5.7 脚根部 10.5 器高 12.0	(杯部) 平底の基底部より上外方向に立ちあがり、口唇部は鋭い。 (脚部) 基部より下外方向にのび、脚底部で屈曲したのち直立する。脚部は鋭く、脚根端に断面三角形の棱をなす。長方形の透孔2方向。	マキアゲ、ミズビキ成形。脚外面回転カキ目調整。底中央部に2条の断面三角形の突堤をめぐらす。突堤下部に流水文を施す。把手2方向にあり、一方は欠損。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
杯蓋	13	口径 11.7 口縁高 2.5 器高 5.0	ヘラ削りの天井部より下外方向にのびたものも断面三角形の棱をもち、口縁部は垂直で口唇端面は内傾した平面。	天井削りへラ削り、内元部にマキアゲ痕を残す。口縁部内外面ナデ調整。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
杯身	14	口径 9.7 受窓径 12.0 口縁高 1.8 器高 4.6	丸味をもつ底盤より上外方向に内彎してのび、受部は上方にのび、端部は面をなす。口縁部は僅かに内傾する。口唇部は内傾し面をなし、端部は鋭い棱をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。底盤へラ削り、たちあがりはオリヨミ。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
石包丁片	15	推定長径 10.0 幅 4.2 厚味 0.6	長方形の石材を利用。背面は直線状、刃部は円弧状、片面は側面面、片面は粗稚な円弧。	長方形の内端部を抉入していく。背面は磨拭による平面、刃部はノミ状に研磨。	砾泥片岩。	1
石鎌	16	現在長 4.3 軸 2.1 厚味 0.6	有柄部は基部を残し欠く。	両面磨拭され、有柄部も磨拭による断面は円形。	砾泥片岩。	1

### III 川付地区での遺構

#### 1 川付地区にて検出された掘立柱建物跡遺構

掘立柱建物遺構として柱穴は多数検出されたが、建物遺構として梁間及び桁行間をたどれるものは少ない。今柱穴 1・2・3・4 と 5・6・7・8 は共に柱間間隔を 2 m とする等間の柱穴列である。相対応する柱穴をそれぞれ実線で結ぶと、何れも柱間の心心間距離を異なる柱穴遺構となる。なかでも 5・6・7・8 を基準とする柱穴では、掘立柱建物として可能な柱間が推測されはするが、何れも推測の域を脱しない。今まで民家があり、旧家のために床下は深く掘り下げ排水効果を計ったことが、遺構の破壊に関連している。

第23図 川付地区掘立柱建物遺構実測図



## 2 福音寺534番地2の塚の調査

### (1) 造 構

調査は約9×13mを実施した。塚は土地所有者により祀られているが、葬られている人物も時代も不明である。また墓碑もない。第25図に示すもので一面に河原石を配石しており、墓地一面にリュウゼツランが繁茂し、その中央部にカエデとサンショウの木が自生していた。

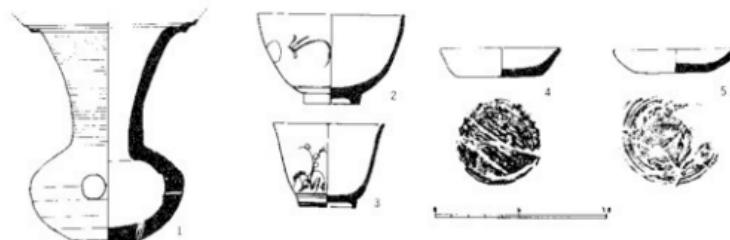
調査は配石の測量後深度20cmで隅丸方形、橢円形のピット7基を検出した。上塚墓は2種に分類すれば、副葬品を有するもの、有しない無遺物のものと、土壤の掘り方からみて、深度30cm以内の浅いものと30cm以上の深いものに分かれる。

出土遺物は、寛永通宝と伊万里焼の磁器を出土することから、江戸時代の中期か中期以後と考えられる。なお全遺物に共通するものとして、僅かな木質遺体を検出しているが、木棺とは考えられず、図版第30図に示す小箱であろう。土壤の規模からみて幼児の墳墓と思われる。

### (2) 上塚の規模

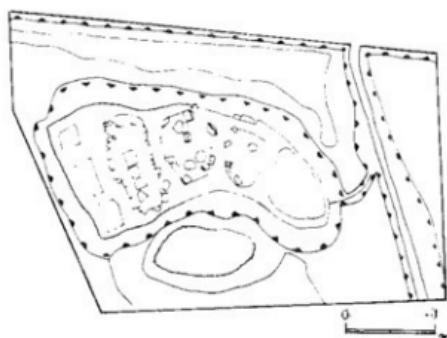
上塚番号	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	主軸方向	出 上 遺 物
1	50	40	20	北45° 東	なし
2	74~67	57~50	30	北35° 東	漆器片、伊万里1ヶ
3	53~37	50~37	46	北31° 東	寛永通宝6ヶ、土師皿2
4	89~68	68~53	48	北35° 東	伊万里2点と寛永通宝6ヶ
5	48~40	40~33	22	北30° 東	寛永通宝6ヶ、伊万里1
6	67~63	48~38	42	北45° 東	寛永通宝6ヶ
7	60~50	42~30	40	北30° 東	なし

第24図 塚出土遺物実測図

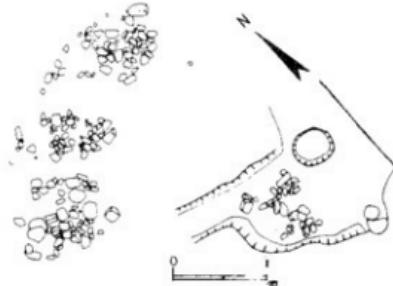


第25図 塚実測図 ①～③

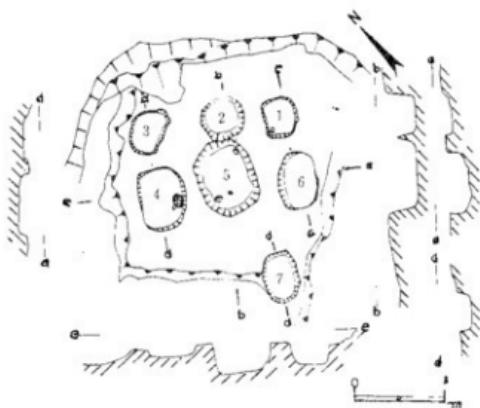
福音寺遺跡534番地2の塚①



福音寺遺跡534番地2の塚②



福音寺遺跡534番地2の塚③



(3) 上塙墓内の遺物

竹ノ下(福音寺仙波塚出土遺物)

種類	高さ mm	法 量cm	形態の特徴	技術的特徴	備考	数量
羽衣振	1	口縁縦部10.5 頸部 4.3 現高 13.0 体部径 9.3	口縁部を欠損した遺物。球形の体部に扁平状の頸部が上外方向に大きくのびたのも、2枚に屈曲して外反する口縁部をつくる。体部の中央に凹孔を穿つ。	体部の中位までヘラ削り、沿削はナゲ調整、頸部はカキ目整形、内面はナゲ調整。	焼成良好、胎土密。 青灰色、頸部は黒褐色で光沢。	1
古伊万里	2	口径 8.7 器高 5.3 底部径 3.5	高台の底部より基底部で内側したのち、僅かに上外方向にのびる。口縁部は円弧。月と鳥の文様、革底部に1枚の紫羅がめぐる。	(ズビキ、マキアグ。紫羅の手書き文様、全面に施。)	焼成良好、高台内面以外白釉。	1
古伊万里	3	口径 6.5 器高 4.9 底部径 3.5	高台の底部より基底部で内側かに上外方向にのび、口縁部でやや外反する。口縁部は円面。草花の文様、高台部と革底部に2枚の紫羅がめぐる。	(ズビキ、マキアグ。紫羅の手書き文様、全面に施。)	焼成良好、高台内面以外白釉。	1
十師小皿	4	口径 7.2 器高 1.8 底部径 5.0	平底の基底部より上外方向に僅かにのび、口縁部ですばり内面。	(ズビキによるナゲ調整。底部は同軸糸切りの後ヘラで削る。)	焼成良好、胎土密。 赤褐色。	1
上齋小皿	5	口径 7.2 器高 1.3 底部径 4.8	平底の基底部より上外方向に僅かにのび、口縁部は円面。	(ズビキによるナゲ調整。底部は同軸糸による糸切り、底部内面が僅かに凸向をなす。)	焼成良好、胎土密。 赤褐色。	1
古鏡		24面	寛永通宝、永承通宝、開元通宝、隆通宝			24

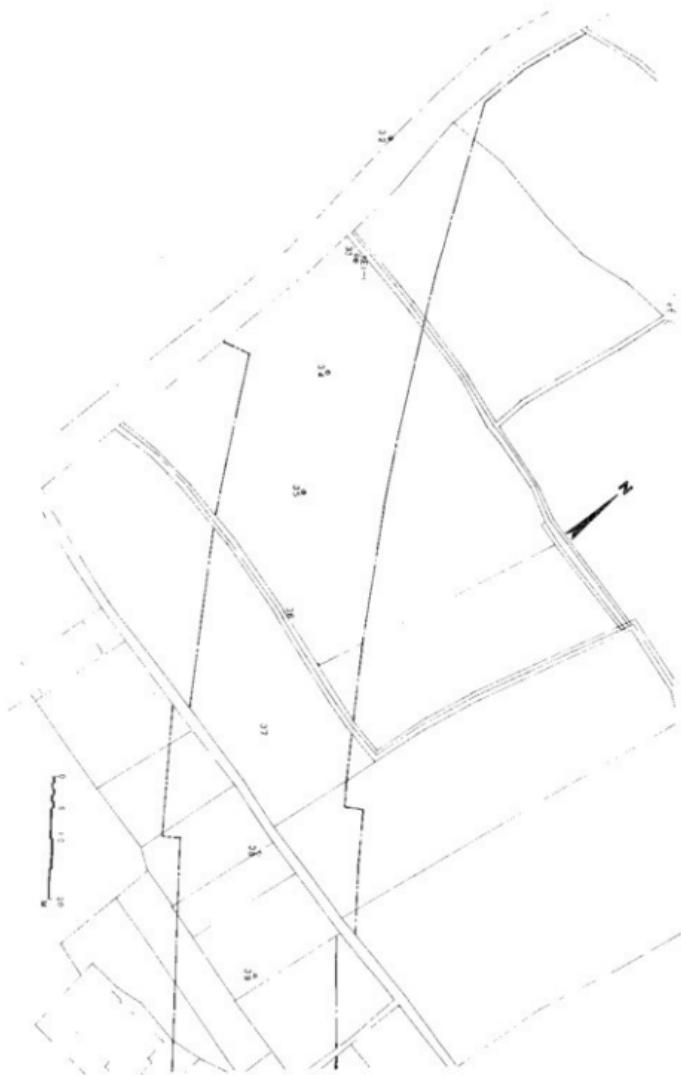
## IV 福音寺遺跡筋違地区

筋違地区は、さらに細分してA区を道路予定地中心杭No.37を中心に農道と農業用水路に囲まれた範囲とし、B区は道路予定地の中心杭No.33~36の間を設定した。A区は2面の水田地であり、発掘実施後ににおいても、やはり2面の耕作地であった。これに対して一方張りのコンクリートによる灌漑用水路(幅60cm)の北方B区では、No.33付近とNo.34付近では南に向かって耕作土は深まりをみた。

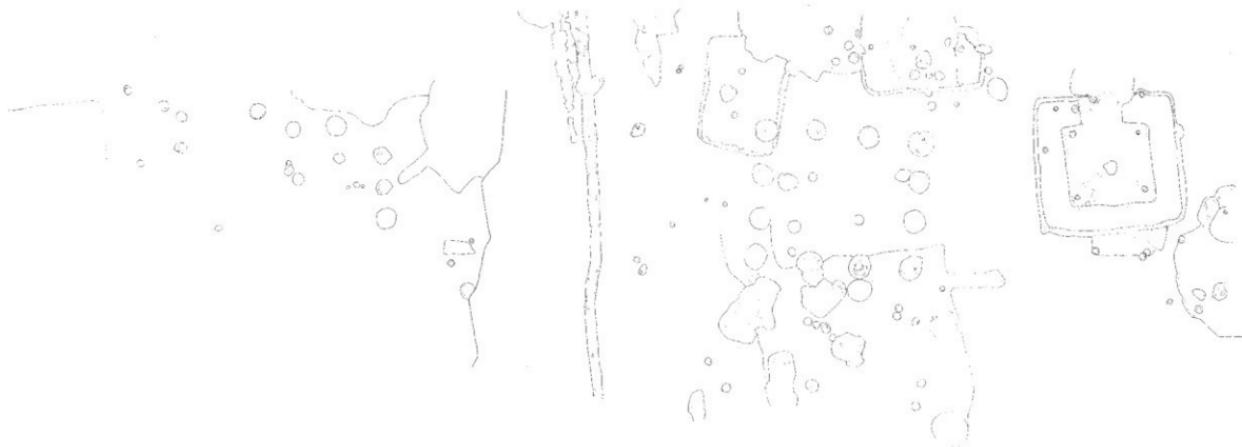
遺構はA区、B区ともに豊富で、A区では堅穴式住居跡8基(内2基は完掘)と掘立柱建物遺構3基が検出された。この外に上旗状遺構1基と溝状遺構がある。A区における調査地の内西方に検出されたSB08遺構は、土地所有者の好意により完掘することが出来た遺構である。

B区における遺構は、実に多く、堅穴式住居跡5基、掘立柱建物跡14基、土壇墓及び土壤状遺構31基、溝状遺構2条がある。さらに長方形に掘りめぐらされた周溝があり、遺構の最も集中する発掘地区であった。

第26図 福音寺遺跡筋道地区発掘位置図



第27図 福音寺遺跡（筋造A区）造構全測図



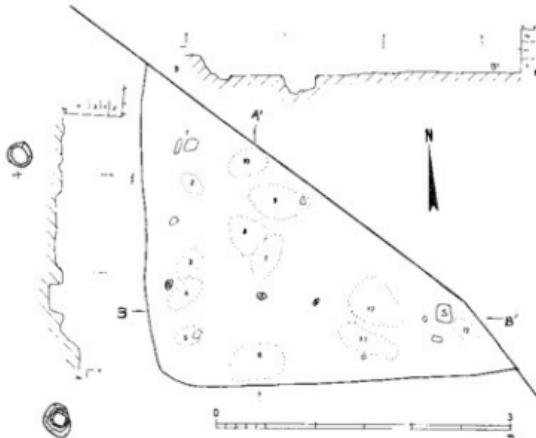
## 1 福音寺遺跡筋違A区の竪穴式住居跡遺構と遺物

### (1) 竪穴式住居跡 (SB 01) 遺構

SB 01 の遺構は筋違 A 区グリッド No. 1 において検出された遺構である。遺構は方形の隅丸が推定される竪穴式の住居跡で、発掘調査により知る限りでは一辺 5 m 内外の規模と推測される。だが遺構は一辺の概観をしのばせるものであり、完全な一辺を検出していない。また出土した遺物も 10 数点であり、内実測可能なものは数点にすぎない。遺構の東隅において、平面は平坦なしかも研磨面を有する一辺 15 cm の砂岩による砥石を検出した。

なお遺構は暗茶褐色の苦土層直下で検出され、地山を 11 cm 握り込み住居の床面としている。主柱は 4 本柱が推定される。

第28図 SB 01 遺構実測図



第29図 SB 01 土器実測図



種類	名号 （測定上）	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	重量
竪形土器 口縁	1	口径 16.0	大きく外反した後、口辺部は水平にのび、口唇端面は外に垂直な平面をなし、端部下方につまみ出す。	全面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1
	2	口径 16.0	大きく外反し、口辺部は水平にのび、口唇端面は外方に垂直な平面をなす。	全面ナゲ調整で、頸部に指圧痕がある。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1
竪形土器 体部片	3	体部径 18.0 現器高 5.0	体部下位の破片である。円錐する体部片である。	内面はナゲ調整で、外表面はクシ状ヘラ工具による調整である。	焼成良好、胎土に0.2の粒子を含む。	1
竪形土器 体部片	5	体部径 32.0 現器高 9.0	体部下位の破片である。体部の内窓状況からみて丸底の底盤が想定される。	輪積手法による。体部内面はヘラ削り整形で、外表面はヘラ削り整形の後クシ状ヘラ工具による調整である。	焼成良好、胎土に0.2の粒子を含む。	1
竪形土器 体部片	6	体部径 15.5 現器高 8.5	体部下位の破片である。体部の内窓状況からみて丸底の底盤が想定される。	内面はナゲ調整。外表面は平行印ししめ整形で、下側はタデに叩きしめを行う。	焼成良好、胎土に0.2の粒子を含む。	1
高环形 土器 基部片	7	基部径 4.0	基部は平底である。脚部は欠失して不明。	全面にナゲ調整がみえる。脚部は貼り付けである。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1
竪窓部	8	頭部径 13.0	薄子の十器片である。頭部は外反気味にたわみがあり、窓部上端部で大きく外折している。	全面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土に粒子を含ます。	1
竪形土器 底部	4	底部径 3.5	底部の中央部をくぼまし、基底部位置をつまみだし高台をつくる。	全面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1

## (2) 竪穴式住居跡 (SB 04) の遺構

SB 04 は方形の 7.45 m を一辺とする平地式住居跡である。住居の主柱は 4 本で、それぞれの主柱の柱間の心心間距離は、P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub> は 350 cm, P<sub>2</sub> と P<sub>3</sub> は 365 cm, P<sub>3</sub> と P<sub>4</sub> は P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub> 等間と推定される。住居の主軸は磁化ほとんど一致する。住居の平面プランに対する柱間の比は先に相前後する数値を示している。また住居の出入口部は東側壁面を延長する形をとる。

入口部は、僅かに有段をなし、やや屋内の床面が低く整地されている。主柱の中心よりやや P<sub>1</sub> 柱寄りに施土が検出されており、炉址と見られる。だが主たる火事場は、東壁面の中央部 KD-1 が特に灰層も厚く、統く左右のくぼみからは什器類のほとんどが集中的に出土を見たことから推定して、この住居における炊事場であり、KD-1 はカマドとしての可能性が高い。

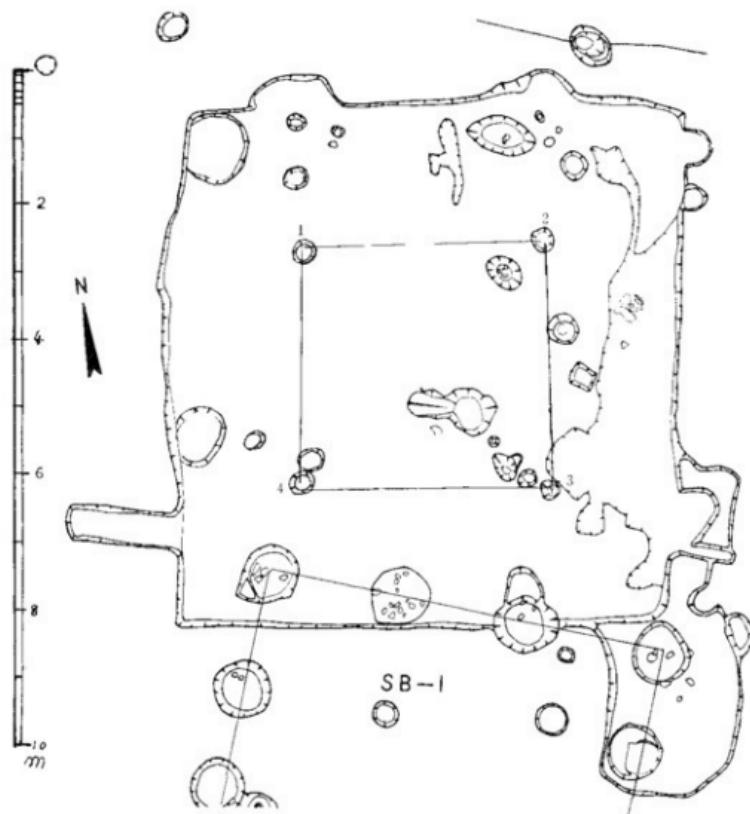
さらに住居の両側面の南角に全長 2 m、幅 50 cm の突出した溝状の遺構が検出された。突出した溝状遺構は西方向に僅かに傾斜を保っており、溝に充填された土壤は 2 層からなり、

上層は青灰暗褐色土であり、下層は黒褐色土であった。

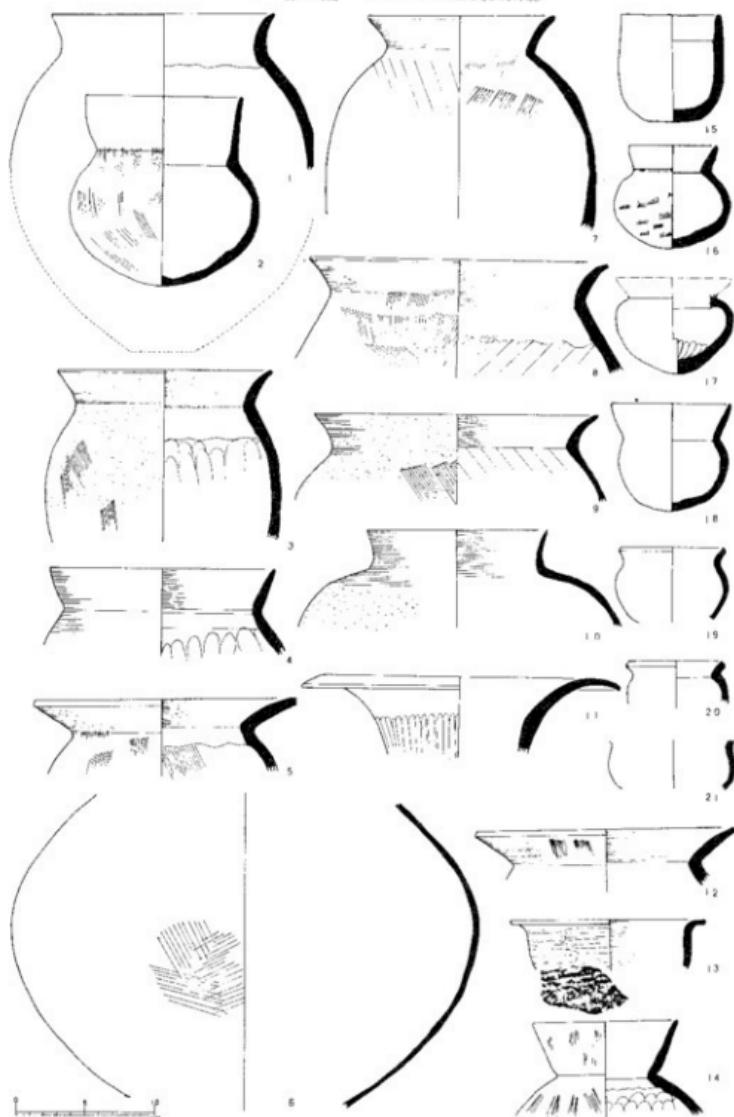
### (3) 堅穴式住居跡 (SB 04) の遺物

SB 04 の遺物は主に、東側壁面部より集中的に検出した。なかでも壁面の床面を僅かに掘り凹められた位置に集積された状態での出土状況であった。

第30図 SB 04 遺構実測図



第31図 SB 0 4 土器実測図①



## SB04遺物

種類	名 字 記載	法 量cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	参考	
変形土器	1	口径 16.0 頸部径 14.7 器高 11.6	球形の体部に頭部の大きい口縁部をもつ。口縁は僅かに外反する。口唇端は鋭い。	横積手作である。頸部に接合痕を残す。全面ナガ調整である。	焼成やや軟、胎土は密。	1	
変形土器	2	口径 11.3 高さ 13.7	胴張りのある偏平な体部に、僅かに外傾する長い口縁をもつ。口縁部に凹みがある。	体部内面は指頭によるナガ調整、口縁部は内外面ともに入念なナガ調整、器表はタシ坑ヘラ工具による粗い整形。	焼成良好、胎土は密。	1	
変形土器	3	34	口径 15.5 頸部径 13.0 器高 12.4	球形の体部にくの字の口縁で頭部は大きい。口縁部の胎土は口唇部に向かい狭くなり、端面は丸くおさめる。	体部内面にタシ坑方向の指頭によるナガ痕が残る。外表面はハケ状ヘラ工具で整形、ヌスが付着。口縁部はヨコナガ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	4	26-6	口径 16.0 頸部径 14.3	3と同様であるが、口縁部は外傾してのびる。胎土は口唇端に向かい薄くなる。	体部内面は3と同様。頸部にヘラ削りあり、他面は全面ナガ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	5	35	口径 18.7 頸部径 13.0	后部の張りが大きく、口縁部も頸部で大きく屈折して上外方向にのびる。端向は外方に向をなす。	体部内外面ともにタシ坑ヘラ工具による整形、内面がやや粗い。頸部にヘラ削り、口縁部はナガ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	6	12-11	体部径 33.6 残高 23.0	偏平な球形の体部で、器底に反対して、胎土は薄い。	輪積手法で、内面に整形時凹凸を残す。外表面に施し痕を残す。	焼成良好、胎土は密、黄褐色。	1
変形土器	7	36	口径 13.6 頸部径 10.7 残高 14.5	頸部のしまった球形の体部で、頸部より口縁部が上外方に外反気味にのび、口唇端に向は丸い。	体部内面はタシ坑ヘラ工具による整形、外表面はヘラ削り、輪積、口縁部はナガ調整、輪積手法。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	8	8	口径 21.7 頸部径 18.5	胴張りのある器形が確定される。口縁部の横積は1、3と同様である。	輪積手法、頸部内下に接合痕が明瞭に残る。体部内面ヘラ削り、外表面タシ坑ヘラ工具整形、口縁部ナガ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	9	14	口径 20.7 頸部径 18.0	8と同様の形態で僅かに胎土厚がない。体部からは縁にかけてヌスが付着している。	輪積手法、体部内面ヘラ削り、方向は8と逆である。外表面はタシ坑ヘラ工具整形、口縁部はナガ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	10	37-1	口径 13.1 頸部径 12.5	肩張りのある器部に直立する頸部より、僅かに外傾する口縁部で口唇部は鋭い。	輪積手法、口縁部は内外面ヨコナガ調整、体部内面はナガ、外表面にはヌスが付着する。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	11	23	口径 23.0 頸部径 10.5 残高 6.0	頸部よりリップ状に開いた口縁部で、口唇部は口唇端より下位に位置している。	内面はヨコナガ調整、器表面の頸部付近はヘラ研磨である。	焼成良好、胎土は密。	1
変形土器	12	5-2	口径 18.6 頸部径 13.5	くの字の口縁部で、頸部で屈曲して、上外方向に直進する。口縁部内面にふくらみあり。	口縁部内外面ヨコナガ調整である。口縁部外側ではナガの下地にタシ坑ヘラ工具痕が残る。	焼成良好、胎土は密。	1

種類	高さ [cm]	口径 [cm]	深さ [cm]	形態の特徴	技法の特徴	備考	数等
鉢形土器	13	不明	口径 14.0 頸部径 11.7	直立する体部より、外方に90°折れて、頸部と口縁部をつくる。口唇端面は外に垂直な平面をなす。	体部内面はナデ調整。外表面は平行タタキしめがある。	焼成良好、胎土は密。	1
壺形土器	14	6	口径 10.4 器高 7.0	球形の体部で、頸部でくびれ、上外方向にのびる口縁部は外間に膨がるふくらみをもち、口唇端面は丸い。	体部内面に指頭押圧痕、体部外周と口縁部外周にクシ状に見による整形あり。	焼成良好、胎土は密。	1
コップ形	15	15	口径 7.0 器高 7.9	U字形の肥厚な土器である。口縁部内面は削られ傾斜をもつ。	内面はナグ調整、外表面は粗なナデ調整である。	焼成良好、胎土は密。	1
壺形土器	16	20	口径 6.4 器高 7.5	球形な体部に上外方向に直線状にのびる口縁部で外表面にふくらみがある。	手づくね上器で、内面ナデ調整、外表クシ状ヘラ工具による整形の後ナデ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
壺 小豆丸形 先型 壺	17		推定器高 7.0 頸部径 5.3	口縁部欠損、底部は丸底でハート形の体高である。	手づくね上器で、底部内底部に指頭によるナゲ痕あり、他面はナデ調整。	焼成良好、胎土は密。	1
壺 小豆丸形器	18	不明	口径 8.5 器高 7.8	丸底で球形の体部であり、頸部でのすぼまりは少ない。口縁部は上外方向に直線的にのび口唇端縫は鋭い。	手づくね上器で、内面の調整は粗雑で凹凸が多い。	焼成良好、胎土は密。	1
小型鉢形 土 器	19	18	口径 7.5 器高 5.4	底部を失く、口縁部はくの字口縁で、口唇端縫は内摺して縫をなす。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土は密。	1
小型鉢形 土 器	20		口径 7.0 器高 3.3	体部を欠損、口縁部は短かく、頸部で屈曲し、口唇端縫は外方に傾斜する平面をなす。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土は密。	1
小型鉢形 土 器	21	11	頸部径 8.7 現器高 3.5	筒形より偏平な体部が推定される。頸部でのすぼまりは少ない。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土は密。	1
鉢形土器 体 部	22	19	体部径 40.0 現器高 12.0	大きくなり内側する体部片である。体部の胎土層は底層より逐次薄くなる。	体部内端面はクシ状ヘラ工具によるヨコ方向の整形、外表面は交錯するクシ状ヘラ工具による整形である。	焼成良好、胎土に0.3以下の粒子を含む。	1
浅鉢形 土 器	24	14	口径 22.5 器高 8.7	丸底の底部より大きく内折して上外方向にたちあがり、口唇端面は水平な平面である。	底部より口唇部にかけ頸次胎土厚を減じている。内面はクシ状ヘラ工具による整形、外表面は平行卯き目文による整形である。	焼成やや歛、胎土に0.2以下の粒子を含む。 帶赤黄褐色。	1
瓶上器 底 帯	25	13	底部径 11.0	壺形土器の底部(スノコ)の一部片である。中央に円孔を穿ち、周間に4個の円孔が推定される。由取りは何れもへり解り。	底厚は3cmと厚く、中央部に半径1.5の円孔を穿ち、周間に4個の円孔を配している。	焼成良好、粒子を含まない。 茶褐色土で一部に帯黄褐色。	1

種類	番号	高さ 基部	長さ cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	重量
変形土器 体 部	26	不明	体部径 23.8 現器高 15.0	体部片である。胎上は底部より上に向かって減厚している。体部は基底部で大きく内弯気味に立ちあがり、口唇端面は直立する。	円面下部は指頭によるナデ上げ成形、体部中位ではラン形状ヘラ工具による整形を、体部外面も同様である。	焼成良好、胎上に粒子を含まない。	1
変形土器 体 底 部	27	1	体部径 29.0 現器高 24.0	丸底の底部より大きく内弯気味に上外方向に立ちあがり、体部中位より上外方向に直線的にのびる。	胎上は丸底の底部より順次減厚されている。内面は入念なナデ調整、外面は斜行と平行の叩きしめ整形である。	焼成良好、胎上内に粒子は含まない。内面黄褐色、表面黒色でスジが付着している。	1
浅鉢形 上 器	28		口径 11.0 底部径 2.5 器高 5.5	僅かな平底の基底部より内弯気味に上外方向に胎土を減厚しながらのび、口唇端面は頗るく模倣をなす。	内部はクシ形状ヘラ工具で、放射状に整形している。内部に対して、外表面は叩きしめの痕が残る程度のヘラ削り整形である。	焼成良好、胎上に若干の粒子。	1
口 線 部	29		口径 11.2 頸部径 8.5 現器高 2.0	頸部で僅かに直立したのも、外反して口縁部をつくる。口唇端面は外に頗る平面である。	胎厚は一定で、外表面ともにヨコナデ調整である。	焼成良好、胎土に若干の粒子。	1
	30	50	口径 11.2 現器高 5.5	頸部より外反しながら上外方向にのび、口唇端面は丸くおさめる。	外表面ともにヨコナデ調整。肩部の胎土厚に対して、口縁部の盛厚は弱である。	焼成良好、胎土密。	1
口 線 部	31	32	口径 8.2 現器高 6.5	肩張りの少ない口縁部は、頸部より内弯気味にたちあがり、口唇端面は丸い。	体部内面は指頭汗痕を残す。ヘラ削り整形、口縁部は入念なナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
變形土器	32		頸部径 14.5 現器高 29.0 体部径 25.1	体部は卵形の丸底の並である。頸部は長く直立する面と外反する面があり、歪みが残る。	輪積手法で、頸部までに4段隠合がある。外表面ともに叩きしめによる凹凸が残る。全面ナデ調整。	焼成良好、胎土は密。煤煙付着。	1
變形土器	33	3	底部径 3.5	平底の基底部より上外方向にのみたのち、大きく外に膨張し上方向にのびる。	底底ナデ、内壁面はヘラ削り、ヘラ目状ヘラ工具による調整。	焼成良好、胎土は密。	1
基 部	34	17	底部径 2.5	平底で、上外方向にのびる。	内面ナデ、外表ヘラ目状のヘラ工具による調整。	焼成良好、胎土は密。	1
高 瓶 形 土 器	35	23	基部径 3.3 現器高 7.3	脚基部より上外方向に開き、脚根部で外方に屈曲している。	内面はヘラ切りの後クシ形状ヘラ工具で調整。外表面ヘラ研磨、算基部中央に胎土を押入している。	焼成良好、胎土に若干の粒子。	1
高 瓶 形 土 器	36	1	脚根部径 13.5	脚基部で大きく外方向に屈曲する。屈曲した脚部は上に凸面をつくる。	外表面ヘラ研磨、内面はナデ調整、脚根部高は0である。	焼成良好、胎土は密。	1

種類	番号	出土地	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
高坏形土器	37	1	脚基部径 4.0 器高 8.0	脚部の一部、基部よりゆるやかに下外方向にのび、脚基部で外向性に脚基部を窪く。	外表面へラグ署、内面はナデ調整。	焼成良好、胎上は密。	1
高坏脚部	38	14	口径 17.0 有段部径 9.8 脚基部 3.0 脚端部径 10.7 器高 12.4	坏部は半径に近い。基部に僅かな梗をなす。基部より内湾気味に上外方向にのびて、口唇端面は丸くおさめる。脚部は基部より下外方向にのび、脚根部で大きく外方に屈曲している。脚端面は水平な平面。	全周ナデ調整、脚柱部は型抜きである。坏底部中央は胎上板押入による凹みがある。	焼成良好、胎上は密。 黄褐色。	1
高坏の基部	39	46		高坏の底部片であろう。脚基部より大きく上外方向にのびて不規をつくる。	脚部にとりつく坏底部にさらには胎上を貼りつけて内面を平坦にする。全面ナデ調整。	焼成良好、胎上は密。	1
筋錘車	40	不等	直径 5.7 器厚 1.0 円孔 0.9	片面は水平で、表面は凸面である。中央に円孔あり、端面は円弧。	粘土円板に穿孔し調整している。	焼成良好、胎上は密。	1

#### (4) SB04 の遺物の様相

SB 04 遺構に伴う遺物には、壺形土器、壺形土器、甌形土器、鉢形土器、高坏形土器、小型丸底壺、コップ形土器、甌形土器と筋錘車を検出している。

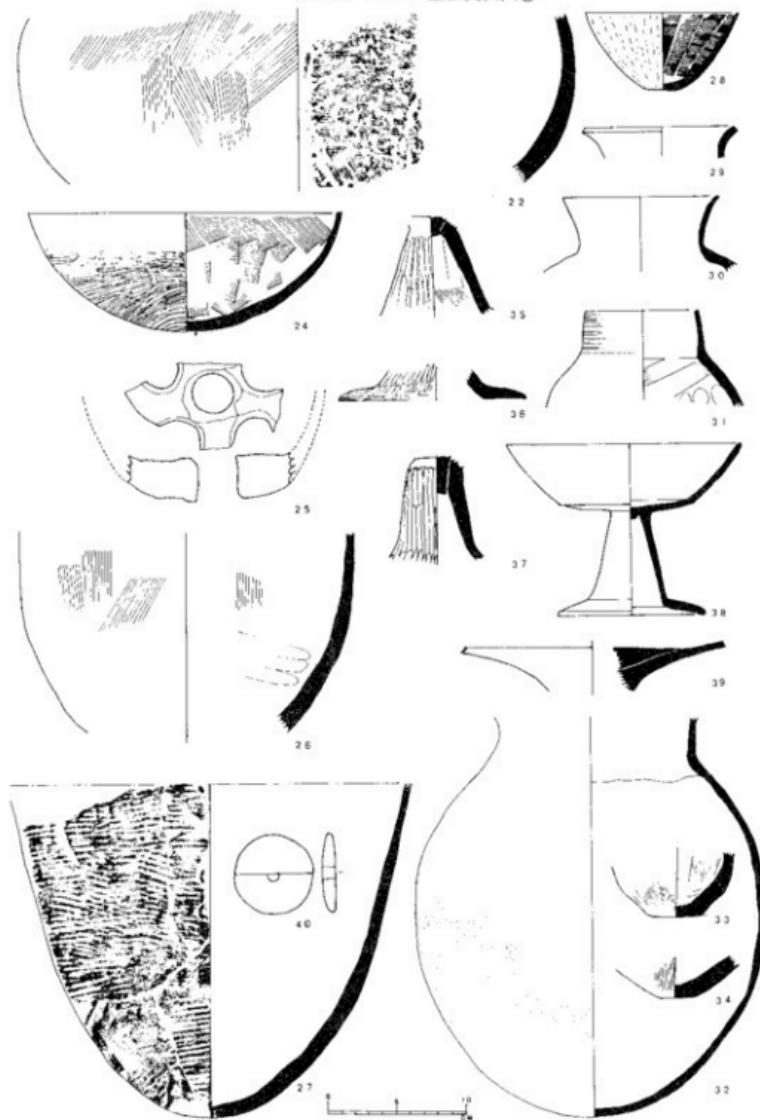
壺形土器では、1、6、7、11、12、22、26 がある。口縁はくの字口縁であるが、11 にみる口縁は漏斗状に広がり、口唇部は反転している。頸部内壁面は垂直に窓切り整形が施されている。頸部外表面は入念な箋研磨による整形である。1 と 2 の口縁は僅かに外湾し口唇端面は内傾する。この口縁部の様相は甌形土器の口縁にも共通するもので、3、8~10 に認められる。いま甌形土器の口縁部の形態から 3、8~10 にみられる一形式と、4 にみる頸部より上外方向にのびる一形式、くの字口縁で頸部内壁面に窓切りがあり、口唇端面は外方向に平面をなす 5 の一形式が認められ、この口縁部の形態は壺形土器にも共通する。

壺形土器に 2、14、31 がある。壺形土器の成形は 2 は直立する口縁部で頸部内壁面には腰をなすが、14 では頸部ですぼまり上外方向にのびる口縁で僅かに中央部にふくらみがある。31 は肩張りは弱くなじ耳である。頸部でのすぼまりはゆるやかで、口縁部は頸部より直立して立ち上がり、口辺部で僅かに内湾する直口の口縁部である。

小型丸底壺と小型浅鉢形土器がある。小型丸底壺 16~18 はいずれも手づくね土器で、内壁面に多数凹凸面(指正痕)が認められる。18 は頸部でのすぼまりは強く、17 は頸部内壁面に窓切りによる整形がなされている。窓切りの両端面には腰がみられる。16 は完形品で全体的に胎土は肥厚である。器の表面は刷毛目整形が施されている。19~21 は小型の鉢形土器で、器形は小型丸底壺に類似するが、完形品がなく底部の状況は不明であるが、口縁部はくの字口縁で口縁部は短く、口唇端面はヘラ切り整形である。24 と 28 は鉢形土器で共に、丸底の底部より上外方向に延びながら内湾して立ち上がり、口唇部は水平をなす 24 と円面をなす 28 で

ある。24 の器形の整形に平行叩き目がなされ、体部から底部にかけて叩き目は残り、口辺部のみ横ナデ整形となっている。28 も同様の器形の整形を取りながら器表面は箒研磨を施している。内面は櫛状工具による整形が施されているが、28 の器物は放射状に入念な整形である。平行叩き目の整形を残すものに 27 の壺形土器がある。口縁部は欠損している。内部は横ナデ整形である。32 の土器は土器形態からすれば、壺形土器であるが、体部に煤煙が付着しており、壺形土器として使用された土器である。口縁部は欠損している。頸部直下に口頭部接合痕を残している。高杯形土器は 5 点検出された内 3 点の高杯形脚部は、いずれも箒研磨による整形がなされる。38、39 はともにナテ整形で、38 は明らかに杵形による脚部成形である。

第32図 SB 04 土器実測図②



(5) 壁穴式住居跡 (SB 05) の遺構

SB 05 の遺構は、耕作土の下部互層に広がる苔土（羽土層）4 cm 層下に 5 ~ 4.5 m の直径をもつやや変形した円形の壁穴で、床面は平坦であり、中央部には植物の炭化遺物が検出された。図中の A ~ F には粘土層の堆積がみられ、しかも堆積層 A · B · C では明らかに赤色に変色した焼成痕がみられた。さらに B · C では若干の灰層とこれに混入した炭化物も検出された。

だが平坦な床面には柱穴等は検出されず、住居としての主柱ではなく、また周辺部の精査にもかかわらず、壁穴の周辺部にも柱穴は検出できなかった。ただ南西の位置に幅 22 cm 内外の深度 10 ~ 13 cm の溝状遺構が検出されたことを付記しておきたい。

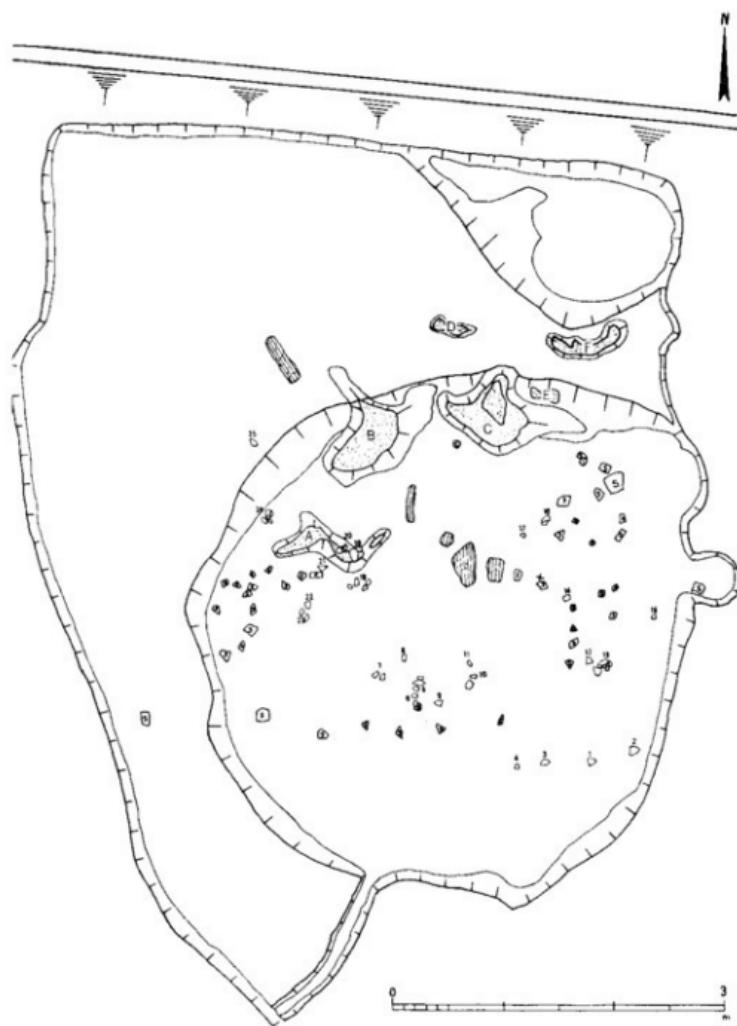
さらに出土遺物の多くを占める人頭大の石を中心に入れば、直線的に配列されるものと円形に配列されているものがある。これらの配石がどのような機能内容をもつものかは不明である。

この列石及び配石と平行して土師器の出土があり、特に 1 ~ 11 や、12、13、18 ~ 23 及び 24 は集中しての出土状況であり、しかも復原可能な器物が多いことも特徴である。また図中に示す斜線での表示は、植物遺体の炭化物であり、明らかに建物の焼失に伴うものとみられる炭化物である。

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
出土レベル	37	32	33	36	26	26	16	23	28	35
器種	口縁部 と体部	体 部	〃	〃	口縁部 と体部	体 部	〃	底 部 と体 部	体 部	口 縁
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
出土レベル	23	23	20	19	37	27	32	23	26	29
器種	体 部	底 部	体 部	〃	〃	体 部	底 部	〃	須 息	須 息

遺物番号	21	22	23	24	25	植物遺体	A	B	C	D	E
出土レベル	32	14	13	32	20	出土レベル	33	25	33	33.7	40
器種	体 部	体 部	〃	糞 形	体 部	器種	建築材	〃	〃	〃	〃

第33図 SB 0 5 遺構と遺物出土状況図



#### (6) 壓穴式住居跡 (SB 06)

筋造 A 区南面の農道に遺構の広がりをもち、発掘調査により図 34 に示す SB06 の遺構が検出された。SB06 は一重(トリブル)の遺構である。遺構面の遺存状況から推測して、SB06A が最も新しく、SB06B が SB06A にやや先行した遺構である。SB06C は最も早く構築された遺構と見られる。

#### (7) SB06C の遺構

SB06C は、長方形の隅丸である。長辺 4 m、短辺 3 m で、主軸を北 20 度東にとった南北棟の竪穴式住居跡である。床面は平坦に地山整地がなされ、中央よりやや東壁面寄りに 2 本の主柱がみられる。主柱の間隔は、心心間距離で 160 cm が計られる。南北への壁面距離はともに 110 cm と等間距離である。堅穴の東壁面中央部より、北壁面及び西壁面には、浅い溝が検出されているが、南壁面には検出されなかつた。

主柱と東壁面の中央位置(壁面より 1 m 位置)に、長径 70 cm の凹地が検出されたが、焼土等の検出はできなかつた。床面の北西の隅に穿たれた柱穴は、掘立柱建物 SB3 の柱穴である。床面での出土遺物は土師器を主体とする細片であり、計測等是不可能であった。

#### (8) SB06B の遺構

SB06B の遺構は、SB06A と SB06C の中間位置で検出された円形もしくは、梢円形の竪穴式住居跡である。住居の規模は未掘のため不明である。床面は平坦に調整されているが、住居に伴う柱穴は P<sub>2</sub> が推定されるが、その他の柱穴は不明である。

主な出土遺物は No. 1 ~ No. 15 がある。特に出土遺物 15 は一括して出土しており、復原可能な土師器である。出土遺物の器種とコンターは下表に示すものである。

出土 遺 物 番 号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
出土の微コンター	16	12	14	8.5	7	18	18.5	15.2	16.2
遺 物 の 器 種	II 緑	II 緑	底 部	底 部	頬忠忠	II 緑	II 緑	II 緑	II 緑
出土 遺 物 番 号	10	11	12	13	14	15	16		
出土の微コンター	11.5	14.0	14.0	10.12	18.5	19.0	18.5		
遺 物 の 器 種	II 緑	II 緑	底 部	II 緑	II 緑	II 緑	II 緑		

#### (9) SB06A の遺構

SB06A は、一辺 460 cm が検出された隅丸方形と推定される堅穴式住居である。堅穴の東壁面位置にはやや高いベッド状のプラン幅 100~150 cm がつくり出されていた。またこの東

壁面と同様のつくりが西壁面においても検出された。西壁中央部と推定される位置に、室内

第34図 SB06造構と遺物出土状況図



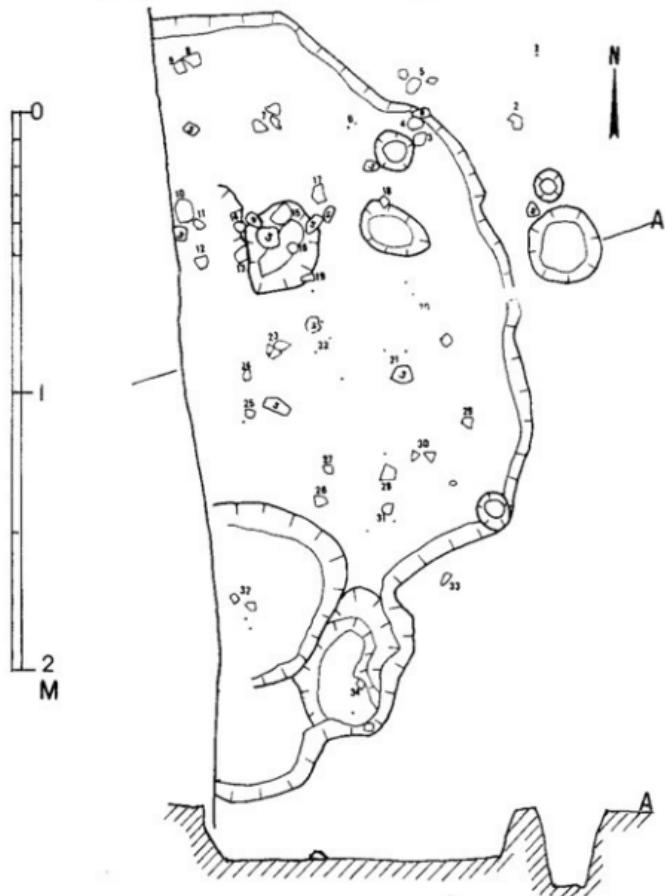
ヘベッド状の床面と同様な高低差を有する入口部がある。

床面において植物遺体の炭化物を検出した外に 10~15 cm の作業石をはじめ、No. 17~No. 62 の出土遺物が確認された。

(10) SB07 の遺構

SB07 は SB08 の北面にて検出された遺構である。遺構は全面発掘に至らず、不明の部分が

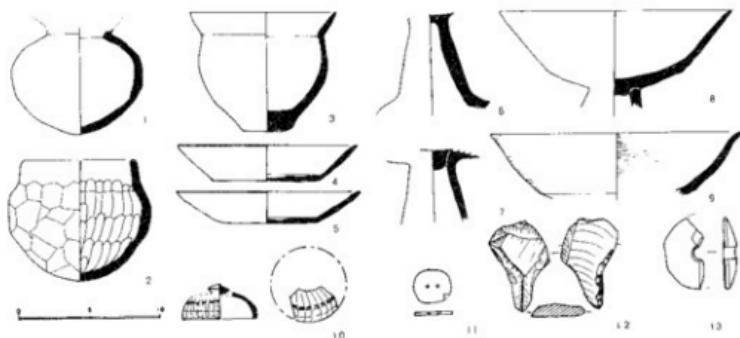
第35図 SB07 遺構と遺物出土状況図



多いが、円形の堅穴式住居跡と推定されるが、出土遺物 No. 33 付近の壁面の様相は不安定ではある。また出土遺物 No. 32 と 34 を伴う土壘状の掘り方は、据立柱建物に関係する柱穴と推定され、SB07 の遺構と同様に未掘範囲内に埋蔵されているものと思われる。

出土遺物には No. 1 ~ 34 が検出されているが、これらの遺物は下表に示す様相であった。

第36図 SB 0 7 遺物実測図



(11) SB07 の遺物の様相

SB07 に共伴する遺物は第 36 図に示すものである。検出された遺物は、小型丸底壺、高環形土器、浅鉢形土器、手づくね土器、皿形土器（坏）のほかに、耕作土排除中に検出された合子片と錐状石器がある。また 16 の欠損遺物ではあるが、滑石製の紡錘車を検出している。

1 の小型丸底壺は球形の体部内外面にぶい陵面を残す。この手法は 3 の浅鉢形土器にも器表整形にみられる。3 の平底底部は小径の割に肥厚な底部で安定している。1、3 は共に頸部位置で内面に陵を作るくの字口縁である。2 は僅かに内傾する直口の口縁部をつくる。笠切り整形と指頭撫整形で仕上げているが、頸部内面に輪積み技法の痕跡が認められ、全体的な成形は手づくね手法による遺物であろう。4 と 5 は底部を入念な笠切り整形でまとめ、口唇部に僅かに 2 段整形の痕跡が認められる。内壁面は横ナデ整形であるが、底部内面には回転によるナデ痕が残る。口縁部と底部の径は 4 では  $12.8 : 8.0$ 、5 は  $13.2 : 7.0$  cm と底部径が大きく皿形土器とみなす土器であろう。6 ~ 9 は高環形土器である。坏部の陵はにぶく僅かに認められる程度である。脚部は欠失するが、欠損する遺物で完形品がなく、不明確であるが、8 は脚部に坏部の嵌め込みがみられ、6 は脚部の貼り付けがみられ、7 は脚の中空部に粘土の詰めが認められる。10、12 は共に時期を異にする遺物である。11 は SB-1 遺物遺構柱穴内で検出された遺物である。13 は滑石製の紡錘車である。

SB 07 の遺物

種類	直 角 底 部 高 さ (cm)	法 量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
小丸底壇	1	20	頸部径 4.5 体部径 9.2 現器高 7.5	球形の体部で底部でややとがる。口縁部欠損。	全面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
コップ状土器	2	74	口径 8.0 体部径 10.0 器高 8.6	球形の体部で直立する口縁部で、口唇部端は僅かに内傾する。	口縁部は円凸ナゲ調整。体部内面は人念な指頭ナゲあげを3段に施し、外表面はヘラによる乱切り整形である。	焼成良好、胎土密。	1
小型浅鉢形	3	6	口径 10.5 体部径 9.1 器高 8.5	平底3.5 cm の基底部より上外方向に内窓してのび、頸部は僅かに内傾し、近く外反し、外表面は正面をなす。	全面ナゲ調整である。胎厚な平底である。	焼成良好、胎土密。	1
皿形	4	9	口径 12.8 底部径 8.0 器高 2.6	平底の基底部より上外方向に直線状にのび、口唇端面は内傾して鋭い。	全面ナゲ調整、底部内面に凹輪ナゲ底を残す。外底面はヘタ切りである。	焼成やや軟、胎土密。	1
皿形	5	10	口径 13.2 底部径 7.0 器高 2.3	平底の基底部より上外方向に直線状にのび、口唇端面は円弧である。	全面ナゲ調整、底部内面に凹輪ナゲ底を残す。外底面はヘタ切りである。	焼成やや軟、胎土密。	1
高杯形土器	6	13	基部径 3.0 器高 7.0	脚基部より下外方向にのび、脚喉部で外方に大きく屈曲する。	全面ナゲ調整である。基部に円板状の粘土を詰める。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形土器	7	12	基部径 3.2 器高 5.0	脚基部より下外方向にのびる。	全面ナゲ調整である。基部に円板状の粘土を詰める。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形土器	8	不明	口径 16.5 基部径 3.7 現器高 7.0	杯部は底部より内窓気味にのび、基底部で僅かに後をなす。基底部で上外方向にのび口唇部は鋭い。	全面ナゲ調整である。脚部は基底部に押入している。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形土器	9	8	口径 18.0 現器高 4.5	杯の口縁部がとある。口縁部は内窓して上外方向にのび、口唇部で外折し、端面は鋭い。	全面ナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
合子	10	造 構 外	口径 5.3 器高 2.5	宝珠と口縁部分である。円面の天井部から内窓して下外方向にのび、口縁部は直立する。	マキアケ、ミズビキで全面に自釉がみられる。	焼成良好、胎土密。	1
有孔円盤	11	埋 立 柱 穴	長径 2.7 短径 2.4 厚味 0.2	やや不規則な円形で、中央部に0.1 cm の円孔をもつ。	全面を研磨している。	滑石 SB1 出土遺物。	1
錐状石器	12	5の2	長径 6.5 厚味 0.9	剝離石材を利用した利器である。	錐部は断面二角形で、二日継状である。剝離の片面にチヤビングがある。	玄武岩	1
効鍛車	13	4	直径 5.1 厚味 0.9	円孔0.8 cm を穿っている。半截された遺物。片側は半面で片面は凸面である。	人念に研磨を施している。	滑石	1

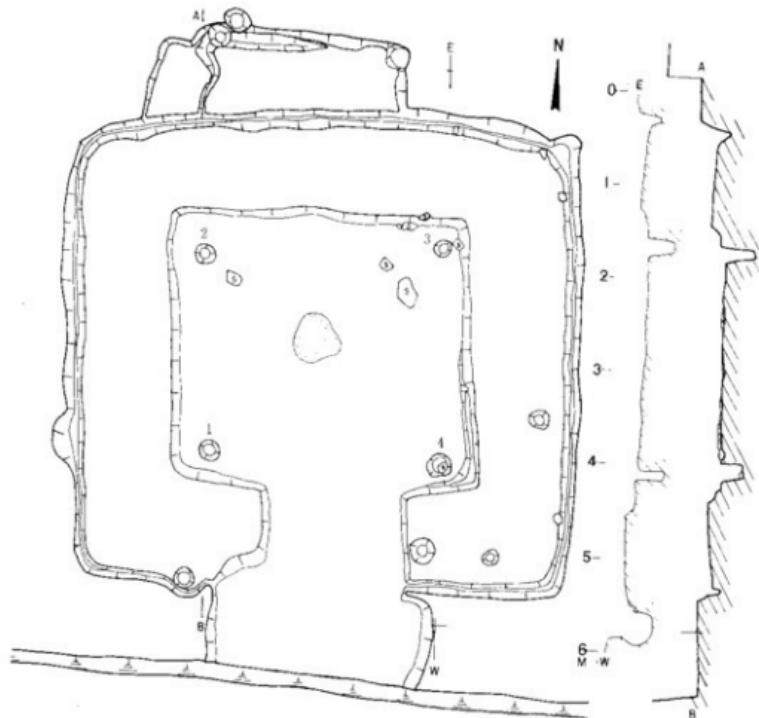
(12) SB08の遺構と遺物

遺構

本遺構はA区の拡張区に検出された竪穴式住居跡である。住居の規模は1辺5mと5.6mの隅丸方形であり、主軸方向は北 $10^{\circ}$ 西を示している。住居の入口部は南面に位置しており、一辺の中央にある。周囲の壁面は垂直に掘り込み、壁面には周溝をめぐらしている。入口部を除く各壁面には幅1mのベッド状の床面を構え、住居の中央部に $3\text{m}^2$ の床面とは12cmの比高を保つ構造となっている。床面の中央部（各隅よりの対角線の交叉点より僅かに北に寄る）には1mの梢円形の炉跡が検出された。

住居の支柱は4本柱を中心柱とする柱穴が、それぞれベッド状遺構の前面位置で検出され、

第37図 SB08 遺構実測図

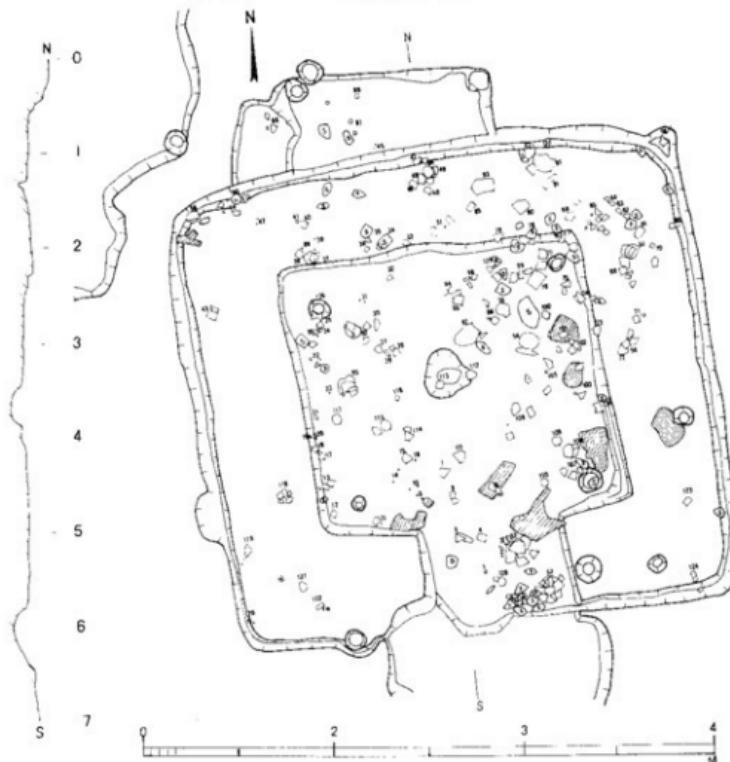


各対角線上位置から 190 cm という定位置に穿たれている。さらに柱穴は直径 20 cm 内外の垂直な素掘である。各主柱の柱穴の法量は、 $P_1$  径 12 cm、深 30 cm、 $P_2$  径 20 cm、深 30 cm、 $P_3$  径 18 cm、深 32 cm。 $P_4$  径 20 cm、深 25 cm であった。また柱間の心心間距離は  $P_1 \cdot P_2$  で 215 cm、 $P_2 \cdot P_3$  では 255 cm、 $P_3 \cdot P_4$  では 230 cm、 $P_4 \cdot P_1$  で 245 cm が計測され、各柱位置が僅かにずれている。

入口部は南側壁面中央に幅 2 m の有段を壁面線上に構える構造であるが、入口部の南面は農道直下にあり発掘不可能である。入口部壁面線上に穿たれた柱穴は、主柱よりやや浅く、ともに深度 20 cm であり、入口部の取り付け柱と推定される。

また北壁面の中央部より、僅かに西に片寄った位置に、幅 2 m 奥行 90 cm の長方形の浅い掘り込みが検出された。この遺構が SB08 遺構に付随するものなれば、櫛状遺構といえよう。

第38図 SB08 遺物出土状況図



### (13) SB08 における遺物 出土状況

図 38 に示すように、出土遺物は、入口部に復原可能な No. 52 と No. 53 の他は、その主たる遺物は、主柱 P<sub>1</sub> と P<sub>4</sub> の線上より内側での出土遺物が多く、特に主柱 P<sub>2</sub> と P<sub>3</sub> の位置で完成品をはじめ、復原可能な遺物の出土をみた。

#### 主な出土遺物の出土状況

検出された出土遺物には、主柱 P<sub>3</sub> の周辺部において出土をみた砥石の外に P<sub>3</sub> の炉面部にも P<sub>3</sub> 前面位置出土の砥石より小片の砥石を検出している。その他の出土遺物には炭化した木質部をはじめ、124 点に及ぶ土器片の出土をみた。さらに検出された出土遺物はその殆どが、4 主柱の内、P<sub>2</sub> と P<sub>3</sub> の主柱位置から、ベッド状遺構に集中的に出土をみている点に本遺構の出土傾向を示すものとして理解されよう。

### (14) SB08 の遺物の様相

SB01 の遺物は多く、今後復原整理の段階において、新たな遺物が検出される可能性もあり得る遺物の出土状況にある。現在整理し得た遺物の器種は、壺形土器をはじめ、壺形土器、壺形土器、高壺形土器、壺形土器、瓶形土器把手である。また石器には、石包丁及び砥石が検出されている。壺形土器には複合口縁の SB08 上器実測図 2 に示す 31 があり、31 の口縁部には口辺部に流水文の施文が施されている。30 は肥厚口縁であり、口唇端面には 4 条の凹線があげらされている。また 31 の壺形土器は球形の体部に、直立する頸部が僅かに外傾した後外折したのち、有段を形成して僅かに立ち上がり、再び外上方向にのびる口辺部を作った後、口唇端部は下方向に開き、口唇端面は外方に垂直な平面を作り出している。器の内外面は入念なヘラ研磨の後にナデ調整により整形されている。当器形は酒津式土器や船橋遺跡にみられる出土遺物と類似する土器形態である。47 の壺形土器は SB08 遺構の入口部付近で検出された遺物である。当土器は内壁面に輪積技法を明瞭に示す遺物である。体部器厚の割には、口縁部は肥厚な口縁成形であり、口縁部は入念なナデ調整に対して、体部には整形の指圧痕を表面に残している。1~19 にみられる口縁部は、1 をのぞき体部の様相が不明であるため、壺形土器の口縁部か、壺形土器の口縁部かは即断しかねる。いきこれらの口縁部の口唇端面及び、口辺部の様相から、くの字口縁ではあるが細部にわたっての観察ではかならずしも一定するものではなく壺形上での相違がみられる。同器種の体部整形には、ヘラ研磨によるもの 19、櫛状工具による横方向の整形 20、櫛状工具による斜向整理によるもの 21、櫛状整形が交叉状整形になるが、素地成形は叩きしめによるもの 26 がある。32~36、38 は壺形土器の口縁部及び肩部を含む遺物である。遺物 32 と 33 は頸部に輪積み痕を残した上器片である。32 には口縁部外表面に指頭圧痕あり、口辺部の指圧による口辺部の押正整形がみられる。16 の壺形土器にも輪積技法がみられる。壺形土器、壺形土器、壺形土器の口縁部の整形には、口

## SB 08 の遺物

種類	形態	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	状態		
変形土器	1	20	口径 頸部 器高	15.4 13.0 16.0	球形の体部にくの字口縁で口 端面は平面欠なす。	輪削手法、内面端部カア、頭 部に接合部の凹内あり。 口縁部ナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	2	74	口径 頭部	17.0 12.8	頸部で屈曲の大きいくの字口 縁、口唇端面は僅かに内傾す る。	体部指頭タケナデ上げ、表面 と口縁部ヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	3	36	口径 頸部	15.0 10.8	頸部でラバ状に聞く。口唇 端面は丸。	口縁部ヨコナデ調整。頸部は ヘラ切りがみえる。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	4	91	口径 頭部	13.0 9.6	僅かに直立する頸部より上外 方向にのび、口唇部は外方に 平窓をなし、端面は斜をなす。	頸部内壁にクシ目を残す。口 縁部はヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	5	96	口径 頭部	16.7 12.0	頸部より大きく上外方向にや や内曲気味にのび、口唇端面 は下方に折れて外方に面をつ くる。	口縁部はヨコナデ調整で、口 唇端面はヘラ削り。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	6		口径 頭部	16.0 11.0	ラバ状に聞く口縁部。	口縁外側はヨコヘラ削き、内 側はヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	7		口径 頭部	11.5 7.7	ラバ状に聞く口縁部で、口 唇端面で下方に折れて外傾す るマ角をなす。	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	8	52	口径 頭部	20.0 16.0	頸部より上外方向にのび、口 唇端面を丸く形成し、内面に 凹あり。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 茶褐色。	1
変形土器	9	99	口径 頭部	8.5 6.5	頭部こりし外方向にのびたの ち、口唇部で大きく外に拡曲 し、端面は内窓。	内外面ともヨコナデ調整。		1
変形土器	10	11-3	口径 頭部	8.5 4.0	頭部より上外方向にのびて、 端面は丸くおさめる。	内外面ともヨコナデ調整。		1
変形土器	12	12-1	口径 頭部	11.3 7.2	頭部片である。	ナデ調整。		1
変形土器	13	98	頭部	12.5	くの字口縁部で口唇端面は平 面に押え、両側に棱をなす。	内外面ともヨコナデ調整。 内頭部に1点のヘラ切りが残 る。		1
変形土器	14	236	口径 頭部	20.0 16.0	複合口縁の接合部より、直 線部端面16.0	内面はクン法ヘラ工具による ヨコ整形、外表は側向の刃を 横く整形。	焼成良好、胎 土に斑子若 干。	1
変形土器	15	5	口径 頭部	21.5 18.5	頭部より上外方向にのびるに 接合部端面18.5	内外面ともヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土に斑子若 干。黃褐色。	1
変形土器	16	94	口径 頭部	11.2 9.2	体部の張りは少なく、頭で大 きく傾曲し、口唇部端面は丸 底。	輪削手法で接合部が残る。口 縁部と外表はヨコナデ調整。	焼成良好、胎 土に斑子若 干。茶褐色。	1

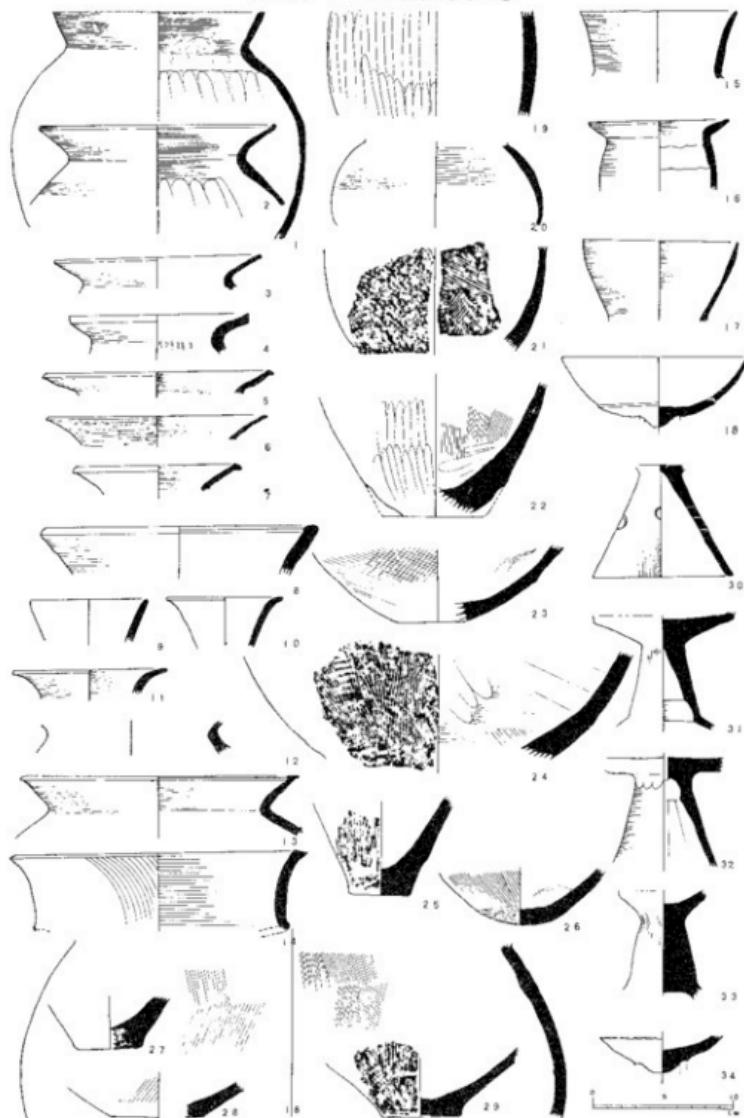
種類	実験 No.	出土 番号	直 通cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	系	
壺形土器	17	103	口径 体部径	10.0 8.4	頸部より上外方向に内窩気味にのび、口唇端面は鋭い。	内外面ともにココナゲ調整である。	焼成良好、胎土に粒子若干、茶褐色。	1
壺形土器	11	103	口径 頸部径	11.0 7.6	頸部より朝顔状に開く口縫。	内外面ともにココナゲ調整。	焼成良好、胎土密、茶褐色。	1
高环の 环部	18	41	口径 基部径	13.5 3.0	僅かな平底の底面より上外方向に内窩気味にのび、口唇端面は凹面。	内外面ともにココナゲ調整。基部に有隙あり。脚基部に抜合のクシ目施あり。	焼成良好、胎土密、茶褐色。	1
高环の 环部	19	106	体部径	15.2	体部片。	表面へラ研磨、内部ナゲ調整。	焼成良好、胎土密、茶褐色。	1
高环の 环部	20	98	頸部径 体部径	10.3 15.3	体部片。肩部から頸部にかけての片。	内面クシ状へラ工具による整形、ハケ目状のナゲ整形。	焼成良好、胎土密、茶褐色。	1
高环の 环部	21	129	体部径 基底部	16.0 12.0	体底基部片。基部より内窩気味に上外方向にのびる体部片。	内面クシ状へラ工具による整形、表面剥離がみられる。クシ状へラ工具整型。	焼成良好、胎土密、茶褐色。	1
高环の 环部	22	106	底部径	7.5	平底が推定される。上外方向に立ちあがる。	底部折頭ナゲ、体部クシ状へラ工具による整形、外表へラ研磨。	焼成良好、胎土に粒子を含む、内部黒色、外表茶褐色。	1
高环の 环部	23	4	底部径	5.0	肥厚する平底で胎土は不均一である。	内面ハケ目状工具による整形、外表面交叉するクシ目状へラ工具による整形。輪積痕が残る。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	1
高环の 环部	24	115	基底部推定	16.5	肥厚な土器で、基底部より上外方向に内窩気味にのびる。	底部にクシ状へラ工具痕、沿縫ナゲとへラ切り痕、表面クシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	
高环の 环部	25	59	底部径	4.5	肥厚な平底で上外方向にのびる。底部片。	内面ナゲ調整、外表クシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	
高环の 环部	26	16	丸底		丸底で内面は平底をなす。上外方向に内窩気味にのびる。	底部に叩き目、内外面はクシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	
高环の 环部	27	7	底部径	5.0	平底の肥厚する底部より上外方向にのびる。	内外面ナゲ整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	
高环の 环部	28	15	底部径	6.7	平底で基底部より上外方向へのびる。	内面ナゲ、外表面クシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	
高环の 环部	29	1-1	底部径	5.7	平底で中央部にやや凹みあり。基底部より上外方向にのびる。	内面ナゲ、外表面クシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	

種類	試験 No.	山下 番号	寸 法 mm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数値
高坏の 坏部	30	112	基部 脚底部 脚部	3.0 10.0 8.0	基部より外方に漏斗状に膨らみ、中央部に4方向に内孔 凹き、中央部に4方向に内孔 あり。	内面ナデ、外芯向シ状ヘラ 工具による整形。	焼成良好、胎 土に粒子を含 む。
高坏の 坏部	31~34	38 51	脚基部 脚根部	3.5~4.0 5~7.4	5Rの底部と脚の一部。	31は内部ナデ調整、32はヘラ 削り、表面はハケとナガによ る整形。	焼成良好、胎 土に粒子を含 む。
高坏の 坏部	33~34	49 107	脚基部 脚根部	3.3~4.0 5~	脚基部と脚根部片。	33の脚部は脚根部で開く。	焼成良好、胎 土に粒子を含 む。
壺形土器 口縁	35	15	口径 器高	20.0 4.0	頸部円錐形で端面に4条の凹 溝をめぐらし肥厚する。	内外面ヘラ研磨による整形。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	36	4	口径 器高	16.0 4.0	頸部より大きく外反し、口縫 部直立。口縫端面は半円形で、 バラベットに半統竹管文を配 する。	口縫部は純積による複合で、 内外面シム状ヘラ工具による 整形。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	37	8	口径 頸部径 体部径	16.5 13.0 21.0	球形の体部より頸部から頸部 にかけて肥厚し、その上口縫 をつくる。口縫部中位でやや 内弯する。	輪椅子法による複合状を残す。 内外面ともにシム状ヘラ 工具による整形。口縫外面に 指印痕あり。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	38	8	口径 頸部径	16.5 12.5	口縫部はくの字口縫で口縫端 面は平面。	頸部では縫合部が現る。 全面シム状ヘラ工具で整形。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	39	8	口径 頸部径	17.5 13.0	口縫部中央位で内弯し、口縫 端面は水平な平面をなす。	内外面ともにヨコナデ調整で ある。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	40	小判	口径 頸部径	14.5 14.5	頸部で大きく屈曲して上方方 向にのび、口縫端面は円面。	内外面ともにヨコナデ調整。 若干シムガキ整形残る。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	41	小判	口径 頸部径	18.0 14.0	頸部で大きく屈曲して上方方 向にのび、口縫端面で内弯して、 端面は水平な平面をなす。	内面ヨコナデ調整、外面シム 状ヘラ工具による整形。頸部 内側にヘラ削りがある。	焼成良好、茶 褐色。
壺形土器 口縁	42	16	口径 核部径 頸部径 体部径 器高	17.7 11.4 5.5 17.6 22.0	丸底に球形の体部から、頸部 は直立して円柱をなす。頸部 中央位の外側にふくらみがある(高3.5)。口縫部は頸部よ り大きく屈曲して上方方向に のびて球形をなす。核位で内 側由て上方方にふたたび のび、口縫部で僅かに外反し、 端面は垂直な平面をなす。	内面は全面入念なヨコナデ調 整である。外表面はヨコナデ調 整であるが、肩部から頸部に かけてはヘラ研磨が施されて いる。器身は各部で均一な状 態にある。	焼成良好、茶 褐色、粒子を 含む。
壺形土器 口縁	43	14	口径 頸部径	21.5 18.0	頸部で大きく屈曲して上方方 向にのび、口縫端面は水平な 平面をなす。口縫部外側にや やふくらみを認める。	内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好。
不明	44	16	頸部径	21.0	体部より水平に外方に屈曲す る。	輪椅子法でヨコナデ調整。	焼成良好。

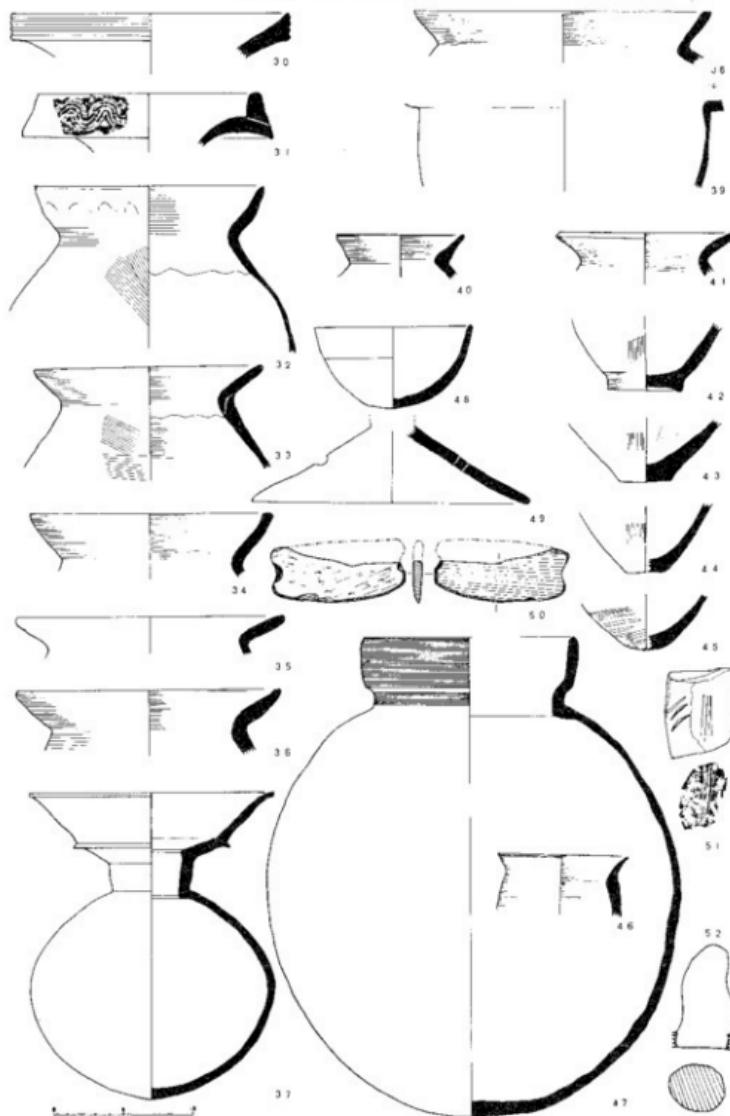
種類	回数 No.	出土 番号	法 量cm	形 態の特徴	技 法の特徴	備 考	
壺形土器 口 線	40	14	口径 縁部径	8.4 7.3	頭部で大きく屈曲して上外方 に向のび、口唇端面は円面。	内外面ともにヨコナデ調整。 頭部上端で器厚を減じて内面 に凹みをもたらす。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
壺形土器 口 線	41	84	口径 縁部径	13.0 9.0	頭部で大きく屈曲しくの字は 線で、口唇端面は外に向する 平面。	内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
高台付 底 部	42	15	底部径	5.5	高台付の基底部より僅かに内 凹気味に上外方向にのびる。	底部をつまみ出し、外面はナ ゲ、内に指圧痕あり。体部表 面はタシ次へラ工具による整 形。	1
底 部	43	六羽	底部径	3.6	平底の底部より上外方向にの びる。(45度)	内面ヘラ削り、外面クシ状ヘ ラ工具による整形。	1
底 部	44	雜	底部径	3.0	小窪の平底基底部より内凹気 味に上外方向にのびあがる。	内部ナデ整形、外面クシ状ヘ ラ工具によるタテ方向の整 形。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
底 部	45	2	底部径	2.5	丸底の底部より器厚を減じつ つ上外方向にやや内凹しなが らのびる。	内面ナデ整形、外面は平行叩 きしみがある。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
小 形 壺形土器	46	2	口径 縁部径 器高	9.4 8.0 4.5	器厚な削張りの少ない器形か ら上外方向に押出させた口縁部 である。口縁部は頭部より 口唇端に向かって胎上には減厚 する。	体部内面にヨコ方向のヘラ削 りが残る。全面ヨコナデ調整 である。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
壺形土器	47	35	口径 縁部径 体部径 器高	15.5 13.8 29.7 34.5	球形の体部に僅かに直立する (1.5 cm) 縁部がいくつ口縁部 は頭部より水平に近い曲折を したのち、ふたたび上方に折 した直立する口縁である。 口唇端面は円面。	体部内外面は叩きしめ整形 による凹凸が残るが全面ナデ調 整である。特に口縁部は人念 なヨコナデが施されている。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
小 形 鉢形土器	48	11	口径 器高	11.5 6.0	丸底の底部より内凹しながら 上外方向にのび口縁部で僅か に外方に開く。口唇端面は円 面。器厚はやや均一である。	内底部に指頭ナデが残る外 は、全面ヨコナデ調整で、特 に口辺部外面は人念である。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
高脚部	49	24	底部径 脚部厚 器高	3.3 20.0 5.0	脚基部よりリバッブ状に下外方 に向く。脚部の端面は円面。 脚部中央位置に一対の刃孔があ る。	内外面ともにナデ調整。	焼成良好、茶 褐色、胎土密。 1
石 匣	50	-	長径 器厚 加厚	9.5 0.6 4.0	良方形の匣子と推定される。 背面部一部欠損。正面は僅か に凸面をなす。	長径の両端中央部を抉入させ ている。刃は少少である。全 面を研磨している。	結晶片岩。 1
底 石	51	-	長径 短径 石厚	6.0 5.0 3.0	正方形の小型の砾石で、正面 に刃部を調整した使用痕が残 る。	長径の両端は折損したか、ま たは再利用の可能性が強い。	砂岩。 1
肥 手	52	-	長径 短径	7.5 4.0	把手は水平にのび、握位で強 かに上方に反る。	手づくねによる手法で、全面 に指圧痕が残る。	焼成良好、 胎土密。 2

唇端面が円面のもの、口唇端面が水平な面をなすもの、口唇端面が下外方向につまみ下げられているものの3形態がみられる。また上器底部25~29と42~45がある。底部にも平底底部、高台底部と丸底底部の3形態がみられる。いま丸底底部の26と45の底部には平行叩き目痕が残る。杯形土器48は2段成形の上器であるが口径と器高からみて碗形上器とみるべき遺物であろう。高杯形土器18~34があり、18と34は杯部でいずれも杯底部に脚基部に着表痕がある。31~33は脚部片であるが脚部成形にいずれも変化がある。20の脚部は脚基部より下外方向に開き脚裾部は曲折せず直立する。33の脚部は中空でなく、脚裾部をつまみ、だしつての脚裾部を成形している。49は20と同様の脚部であり、20、49はともに円孔を穿っている。50の石器石包丁は一部欠損しているが、長方形の端部には快入があり、4世紀初頭か中葉の時期に編年される遺構とそれに伴う遺物とみることができよう。

第39図 SB 0 8 土器実測図 ①



第40図 SB 08 土器実測図②

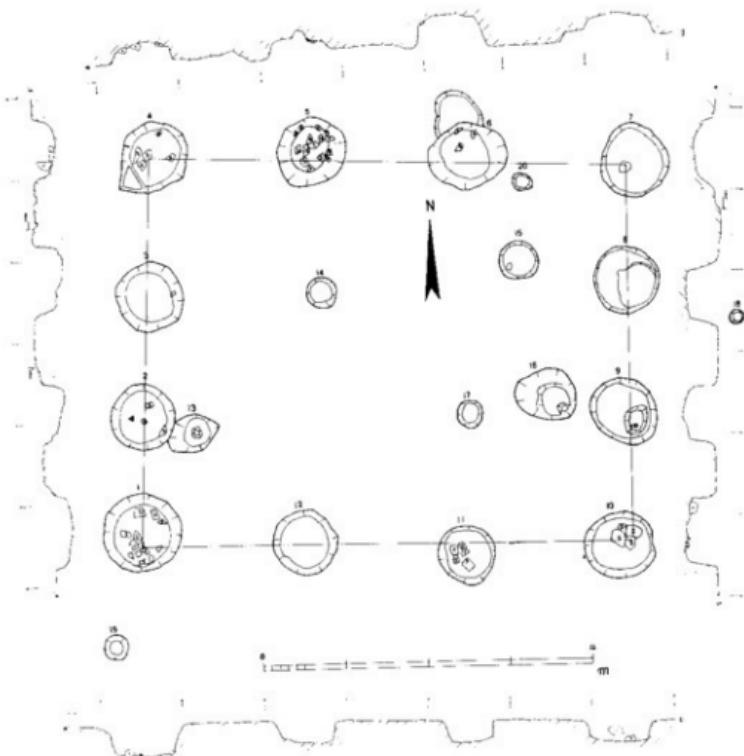


## 2 挖立柱建物遺構

### （1） 挖立柱建物（SB 1～4）の遺構

筋造A地区では、掘立柱建物遺構が推測され、遺構は4棟が考えられるが、SB 1～3は何れも完掘されておらず、掘立柱建物遺構として発展する可能性を有する遺構であるが、紙面の関係もあり割愛して、SB 4の完掘遺構のみ触れることとする。

第41図 SB 0 4 遺構実測図



## (2) 挖立柱建物 (SB 4) の遺構

SB 4 遺構は、SB04 と SB06 の遺構と重複して検出された遺構である。SB 4 遺構は主軸方向を東 2 度南にとる東西棟の掘立柱建物遺構である。柱間は何れも 4 間をとる建物である。建物の規模は桁行全長 6 m、梁間 450 cm の規模で、桁行間が 150 cm の長辺となる柱間である。桁行間の柱間の心間距離は 200 cm の 3 間で等間である。梁間も 150 cm の心間が測定される等間の建物である。建物遺構内部に柱穴 13~17 が穿たれており、高床式建物としての東柱柱穴とも推測されるが、不安定な柱穴位置にある。因みに柱穴 5 と 12 に対して 14 は上居が合い、柱穴 6 と 11 に対して 17 も上居が合う。また梁間での柱穴 3 と 8 に対して 14 は符合し、柱穴 2 と 9 とでも 7 は符合するが、13 と 15 と 16 は符合せず、いま東柱を 14 と 17 のみで支えたとすれば、強靭性に欠ける思いがするが可能ではある。だが当地では未だ免掘例がなく、本遺構を最も確実性のある掘立柱建物遺構として取り扱う。

柱穴の掘り方は、何れも円形の掘り方で統一されている。なかでも掘り方の底部に若干の差異があり、地山掘り込みのままのものと、図にみると底部に栗石状の自然石を基盤に置いた柱穴がある。No. 1, 4, 5, 11, 10。また柱位置を示す柱穴をもつものに 7 と 9 と 13 がある。

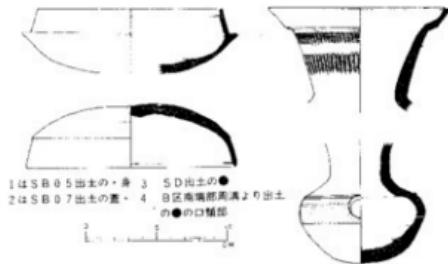
掘方内の土質は、地山層である洪積層を穿ち、その粘土と小石をつき固めた状況にあり容易に柱穴の柱位置が確認された。柱の直径は 15 cm を最大とするもので、梁間に対して桁行間の平柱はやや小振りな柱穴であった。(10 cm)

掘り方 No. 2 の柱穴では滑石製の円盤に 2 孔を穿った有孔円盤が底部より出土した。遺物は第 7 図の No. 11 である。(直径 1.9 cm、厚 0.2 cm、2 孔間の隔たり 0.5 cm)

## (3) 莖状遺構 (SD-1)

溝は北方より南面に緩やかに傾斜する幅約 30 cm の一定した溝で、深度は北面で 10 cm、南面で 25 cm と深度を増している。溝内では須恵器の隨遺物が出土した外、若干の土器片を出土した。

第42図 築造 A 区出土の須恵器実測図



## V 福音寺遺跡筋違A区における小考

福音寺遺跡は、発掘調査区を細分割し、筋違地区の灌漑用水路を境に、南面を筋違A区とし、北面する地域をB地区に分割し調査を実施した。また川付地区は川付川流域面を竹の下地区に、川付川の河岸段丘上を川付川地区とし、特に民家裏庭の塚を仙波塚として取り扱った。

筋違A区では全測図に示すように、SB01~03 及び SB06 の 2 と 3 をはじめ、SB07 は何れも農道の道路敷の下部に延長発展する遺構か、未掘地帯として道路計画路線外に発展する各遺構であり、完掘された竪穴式住居遺構は SB04 と SB08 の遺構であった。

その他の遺構としては、溝状遺構と掘立柱建物遺構及び壇棺墓であった。

特筆すべき遺構としては SB08 と 04 遺構である。SB08 は本文中で記述する状況であったが、特に住居の床面に表現された壁面一帯に（入口部を除く）ベッド状遺構をもつと、室内より出土した遺物とに特色がある。

遺構面でのベッド状遺構の造りは、旗立B区の SB03 にもみられ、松山平野では、桑原町で検出された桑原高井遺跡の SB01 の 6 角形の竪穴式住居遺構にその例を見るものである。

ベッド状遺構は平面な床面より幅 1m 比高 12 cm のベッド状遺構が工夫されており、平面的な旧来の床面に対して、床面に対する機能的な分離がなされている点に注目されよう。

さらにベッド状遺構の床面においても、またそれぞれに機能的な細分がなされていたことは、SB08 の遺物出土状況図によく物語られている。いま遺物の出土地点を 4 柱穴を基準に井形に区画し、さらに 4 柱穴の中間位置で十字形に区画すれば下図のごとくになる。

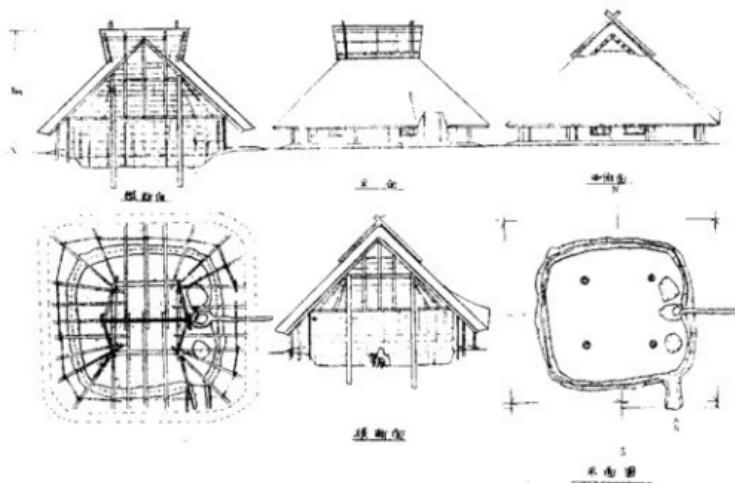
9	10	11	12
8	2	3	13
7	1	4	14
6	5	16	15

左図の内 1 ~ 4 ブロックは 4 本の柱穴で区画され、しかも、中央の交叉点には炉が確かに 2 と 3 ブロック寄りに構築されている。3 のブロックには平坦面を上面にもつ作業台があり、遺物実測図 2 No. 37 の遺物を出土している。その他の遺物出土状況図を参照されたい。これら出土状況図からみて明瞭であるごとく、出土遺物の集中度はブロック 4、14、15、16 に最も多く、次に 3、11、12、13 が多い。最も少数の出土地点はブロック No. 1、5、6、7 である。またベッド状遺構上の検出遺物は他とくらべ、件数は少なく、特に 5、6、7、8、9、10 は少量の出土遺物であった点で、SB08 竪穴式住居跡の室内での利用頻度は大きく 2 分される結果をみた。すなわち、ブロック 10、2、15 より左側と 11、3、4、16 より左側では明確な出土遺物の差がみられた。

いまた SB04 竪穴式住居跡遺構として本文中で記述した遺構についても、竪穴式住居跡と見るより、平地式住居跡として取り扱うべき遺構と判断をしている。その主なる理由として、遺構の断面図にもみられるように、竪穴とみるべき床面の掘り込みもなく、明らかに切り上げ桁か、壁面を有する家屋が推測される。第 42 図は家屋の復原図を遺構の実測図を元に

想定したものである。

第43図 SB 0 4 住居家屋復元図



## VI 福音寺遺跡 筋違B区の概況

筋違B区はA区とは三面コンクリート張りの用水路の北側に位置し、地区区分図の筋違の位置である。B区は北面で大きく地高差をもち、市道草ノ岡と久米線の交叉する位置とでは1mの地高差をもっている。B区での遺構及び出土遺物は共に豊富であり、また遺構及び遺物においても時間的にかなり長期間利用された地域であった。それだけに各遺構の切り合いが激しく、遺構の検出に大きく手間取りをみた。調査区全域を1期、2期、3期に分けて調査を実施したものである。

検出された遺構は、堅穴式住居跡、掘立柱建物跡をはじめ、方形の周溝及び土壙墓・火葬墓・木棺直葬墓であった。

### 1 遺構構築の時期

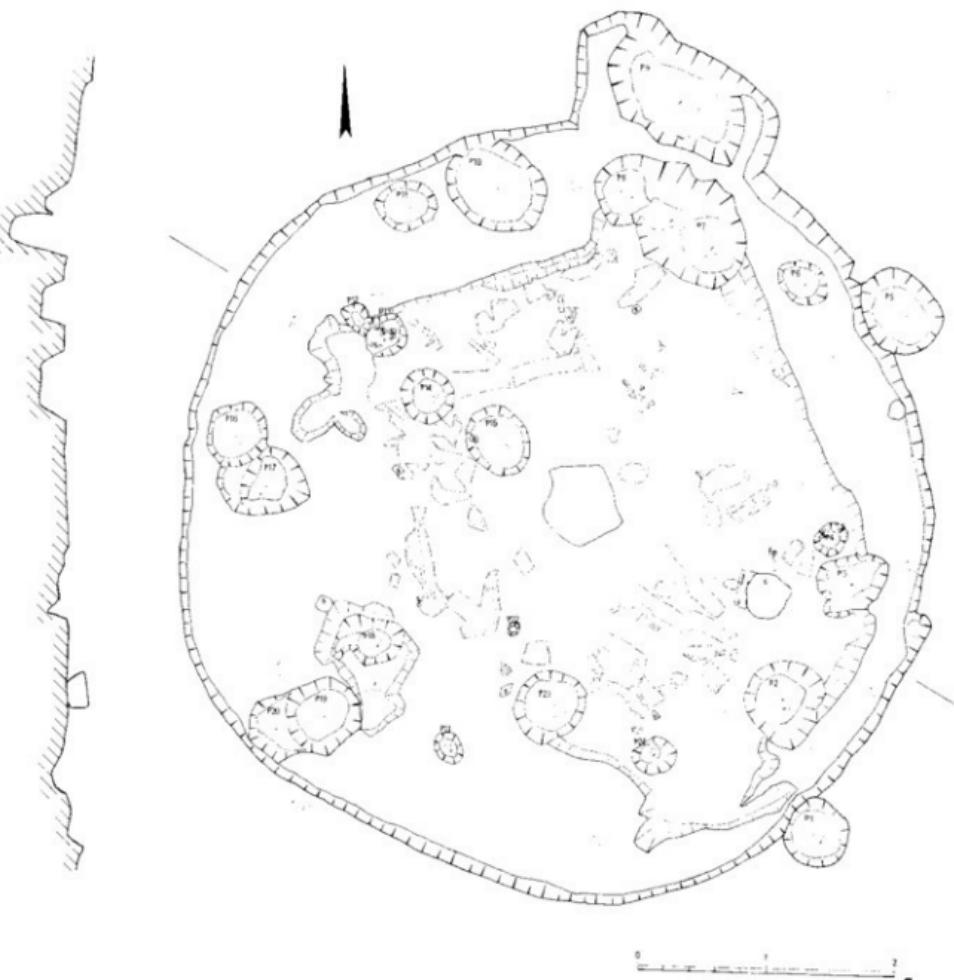
遺構構築の時期は、最初に円形の住居地としてSB01とSB02が少なくとも最初に構築されたと見られ第1期の遺構と判断している。続く第2期の時期は方形の堅穴住居跡と第3期の掘立柱建物とはあまり隔たりのない時期に構築された模様である。第3期は主に掘立柱建物を中心とする時期である。第4期の代表的な遺構は長方形の周溝を構築する時期であり、これと同時期のものとして木棺直葬による土壙墓をはじめ、周溝の周辺部にみられる土壙墓群である。最終の第5期は、火葬墓を中心とする時期である。

以上のごとく本地域はかなり長期にわたる遺構であるが、今一つには、機能的に遺構を分析すれば、堅穴式住居跡及び掘立柱建物跡という、生活遺構を中心とする時期に対して、生活遺構が廃絶した後に墓域として再活用される時期とに大きく区分される遺構である。

### 2 福音寺遺跡筋違B区の堅穴式住居跡遺構と遺物

堅穴式住居跡はB区では4基の住居跡が検出されたが、内3基は円形の住居であり、内1基は方形でしかも平地式住居跡を見るべきであろう。

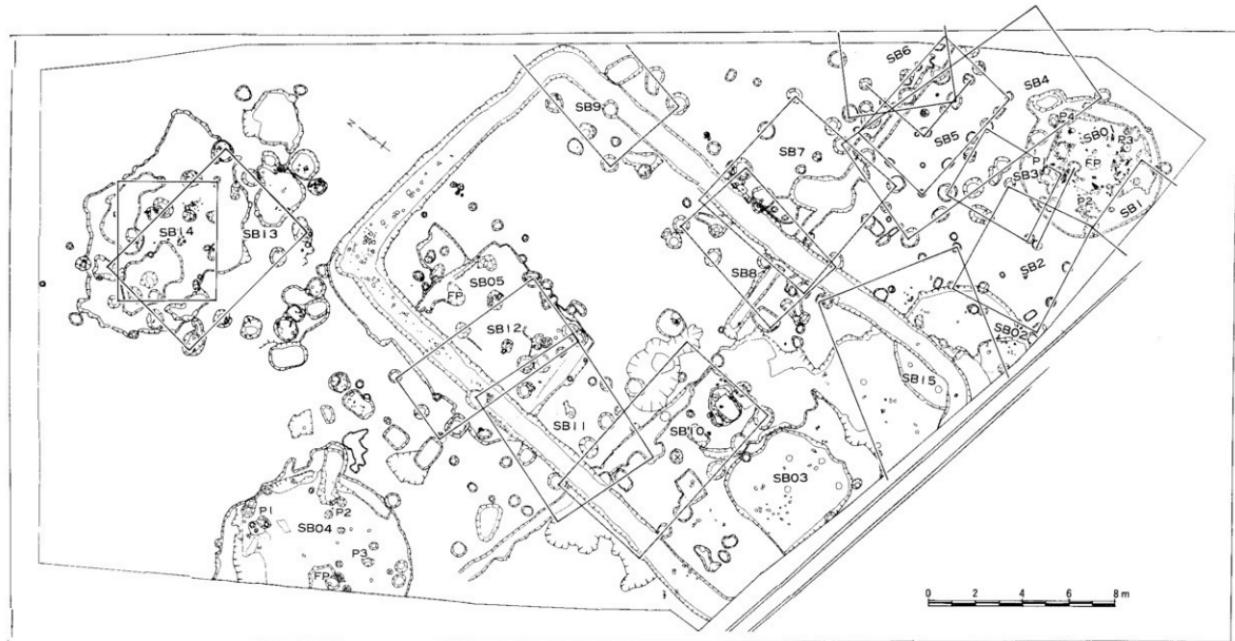
第44図 SB01遺構実測図



### (1) 駿穴式住居 SB01 遺構

SB01 は北東部に入口をもつ直径 6 m で主柱は 4 本である。入口幅は約 140 cm で約 1 m 外方に突出する。入口部の両端にはベッド状遺構がみられる。住居の中央部には炉跡が検出され長径 60 cm の不定形の炉跡であった。4 柱の柱間距離は不規則であり、その計測値は、 $P_1 \sim P_2$  は 240 cm,  $P_2 \sim P_3$  では 340 cm,  $P_3 \sim P_4$  では 320 cm,  $P_4 \sim P_1$  では 220 cm となる。だが今  $P_1 \sim P_2$  を 240 cm に、 $P_2 \sim P_3$  を SB 1 の第 3 柱列と複合するとすれば 320 cm,  $P_3 \sim P_4$  を SB 4 の No. 14 柱穴とすれば 360 cm となり、 $P_4$  を No. 14 柱穴と仮定すれば  $P_4 \sim P_1$  の心心間距離は 260 cm となる。何れにしろ 1 ~ 4 の柱穴にみられる柱間の心心間距離は 4 柱間に共に不規則な心心間距離となる。ここに検出された柱穴の数値(心心間)を前述の数値をもって、本遺構の柱間距離として規定したい。いま、SB01 にみられる炭化物遺体の検出があり、しかも出土した検出遺物は、意外に細片化された遺物が集中的に検出されていることは、星ノ岡遺跡の B 区における発掘例及び、C 区における発掘例に相共通するものがある。細片化された遺物の、実測可能な遺物から推察して、同時災害による消滅が考えられ、未調査地域にも類焼の可能性をもつ集落遺構が存在するものと推測される。

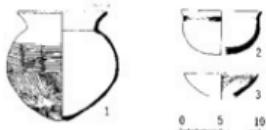
第45図 篠邊B1区遺構全測図①



## (2) 窓穴式住居跡(SB01)の遺物

SB02での出土遺物は図46に示す3点のみが計測可能な出土遺物であった。遺物1は、器表面に平行叩きしめ文を有する橢形土器であり、口径11.2cm、器高13.7cm、底部は平底でしかも1.7cmと極小径の底部である。叩きしめは基底部までに入念な工程である。以上No.1～No.3の遺物の細部は表を参照されたい。

第46図 SB01 遺物実測図



種類	番号	法寸	形態の特徴	技法の特徴	備考		数
					回数	出目	
壺形土器	1	口径 頭部径 底部径 器高	11.2 9.0 1.7 13.7	僅かな平底の基底部より上外方向にのびたもの、体部中位より内側しながら内傾して頭部をつくる。口縁部は頭で立ちあがったのち外反する。口唇端面は外方に平面をなす。	輪削手法で体部は平行叩きの成形を残し、他面は全面ナゲ調整である。	既成良好、胎土に0.2以下の粒子を含む。	1
壺形土器	2	口径 頭部径 器高	10.0 9.5 5.5	丸底の底底から胎土をはじつつ内側して上外方向にのび、体部中位で僅かに内傾して、くの字口縁をつくる。口唇端面は円面である。	全面ナゲ調整である。	既成良好、胎土は密。	1
器台形 土器部	3	口径 現器高	9.4 3.0	脚部より上外方向にのび、口唇端面は鋭い。	内面はクシ状ヘラ工具により成形、外面はナゲ調整である。	ク	1

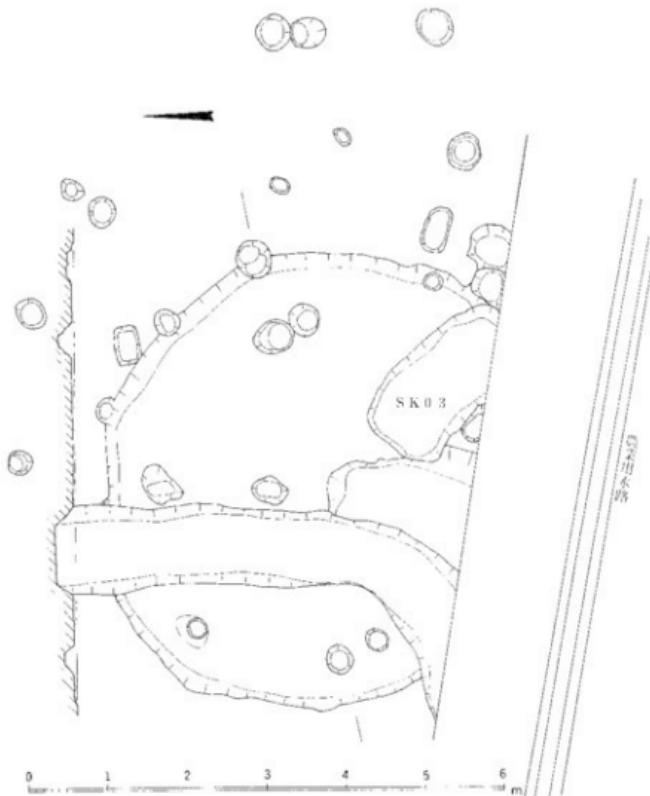
## (3) 窓穴式住居跡 SB02 遺構

SB02遺構は、B区の南端部農業用水路の北面で検出された遺構である。遺構は直径570cmの円形住居跡であるが、僅かに外周面に有角をもつ。遺構の中央部やや西側面に周溝があり、また南面部には2基の土壙状遺構の切り合いがみられる。住居の主柱は6本が推測されるが、柱間の距離は不統一な間隔となっている。また窓穴の外壁面上に柱穴が東面で検出されたが、内壁面は土壙墓と火葬墓の遺構が重層して、住居跡遺構として僅かに壁面がたどれたにすぎない。東壁面の柱穴と同様に外周の壁面上には通鳥尾の柱穴が推定される。東面での様相から推して、通鳥尾は10～12本が想定される。

SB02 遺構内に、幅 80 cm、全長 220 cm の長軸を北 45 度西にとる上擴と現長 180 cm、幅推定約 80 cm の長軸を北にとる土壙があり、何れも土壙墓と推定されるが、遺構内の出土遺物は、土師器の土器片を数点検出したにすぎない。深度は共に 25 cm である。

また東部外域面に長方形 30×50 cm と長椭円（隅丸長方形）33×60 cm の土壙が検出された。深度は共に 15 cm と浅い。床面は何れも水平に保たれており、木棺直葬の幼児埋葬墓と推定される。遺構内の遺物は皆無である。

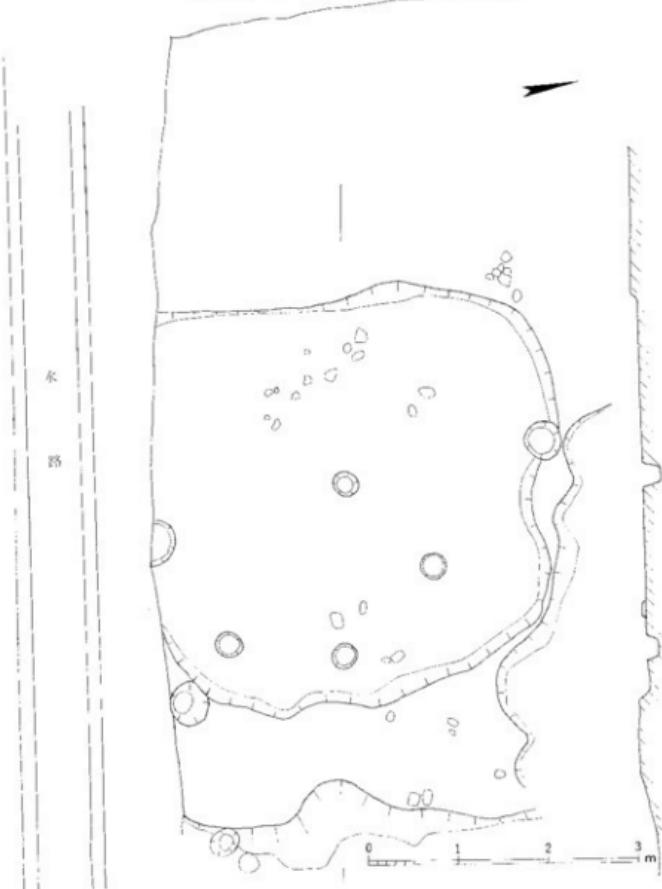
第47図 SB 0 2 遺構実測図



(4) SB03 遺構

SB03は、一辺400cmの方形規格による堅穴式住居跡として取り扱いをしているが、遺構内における柱穴及び、周辺部の切り合いが激しく、確実に住居遺構として把握することができず、残念な事態として雨期と工事進行工程から充分な調査が実施できなかった恨みがある。さらにSB03の上層部とSB15の上層の地層は共に後世における火葬骨片を検出したことも相まって、出土をみた遺物はことごとく細片化しており土器実測は不可能な状態であった。

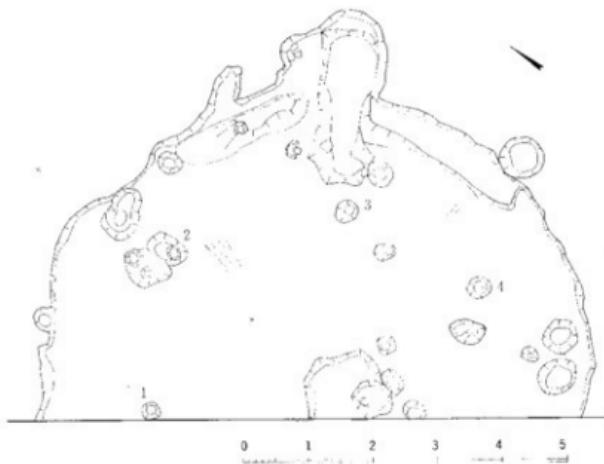
第48図 SB03 遺構実測図



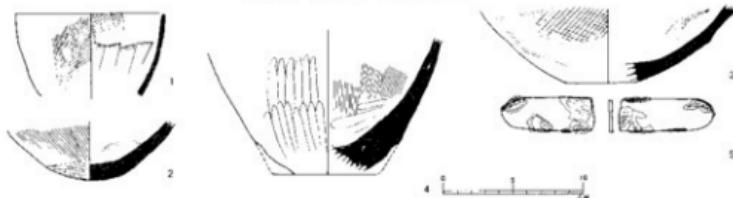
(5) SB 04 遺構

SB04 の遺構は、発掘区の西端部において検出をみた遺構であり、遺構の全容は未発掘地に包蔵され不明であるが、検出された遺構から直径 840 cm に及ぶ円形の堅穴式住居跡と推定される。住居への入口は SB01 と同様に東北部に突出する入口が推定される。入口部の規格は概 140 cm 以外で張り出し部も同様規模となる。住居の主柱は 4 本が推定されるが、図に示す P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub> の 3 本を主柱とすれば、やや住居の平面規格に対して偏する柱位置となる。以上の柱位置関係からすれば、松山市小坂釜ノ口遺跡にて検出された、SB 1 堅穴式住居跡と同様に 5 本の主柱を有する住居とも類推される。

第49図 SB 0 4 遺構実測図



第50図 SB 0 4 遺物実測図



## SB04 遺物

種類	番号 出上	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
碗形土器	1 4	口径 20.5 現器高 6.0	内輪気味に上外方向にたちあ がり、口唇端面は内面である。	内面はクシ状ヘラ工具による整 形、外表面は斜向と縱方向に タシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎 土に粒子を含 まない。	1
上器底部	2 1	現器高 4.0	丸底の底部より上外方向にの びる。	内面はタシ状ヘラ工具による 調整、底部外向に叩き目。体 部はタシ状ヘラ工具による調 整。	焼成良好、胎 土に粒子を含 まない。	3
土器底部	3 12	底部径 5.0 現器高 5.0 現体部径 18.0	平底の底部で、基底部より内 輪気味に上外方向にのびる。 -	輪積手法である。内外面とも にタシ状ヘラ工具による調 整。	焼成良好、胎 土に粒子を含 まない。	1
上器底部	4 22	底部径 7.3 現器高 10.0 現体部径 16.3	平底の底部で基底部より僅か に内輪気味に上外方向にのび る。	底部内面は指頭ナデ痕があ る。体部内面はタシ状ヘラ工 具調整、外表面はヘラによる 研磨が施されている。	焼成良好、胎 土に0.4以下 の粒子。	1
鉄器	5	長径 6.5 短径 2.3 厚 0.25	長径の板状鉄器で、短径の端 面を丸く調整。片側の端面は 欠損している。			1

## (6) SB04 遺物の様相

SB04 の遺物は細分化した遺物が多く、計測できるものは少ない。細片化された遺物の内叩き目を有する遺物が多く、実測図2に示す丸底の鉢形土器底部には共通して叩き目痕が認められた。碗形土器片も多く出土したが、いずれも薄手の良質な粘土が使用されている。

また当遺構伴出の上器輪形では、ほとんどの遺物が櫛状工具による整形がなされ、しかも斜向または交叉する整形手法を取っている。また内壁面の底部を指頭によるナデ上げ整形をするものや、底部に放射状に櫛状工具による整形を施すものとが目立った。内壁面の大半は前述の表面整形と同様に櫛状工具を使用しているが、整形方向は一定方向に順序よく施工している。金属遺物として幅2 cm、現在長6.8 cm、厚0.15 cmの端部が尖った鎧状の鉄片が検出されているが、不明の器物である。

#### (7) SB05 遺構

SB05 の遺構は、遺構建築の時期で触れたごとく、遺構は堅穴式住居跡とみるより、平地式住居跡とみるべきであろう。遺構は正方形に近い方形プランで、一辺 640 cm が計測される。床面は地山面より僅かに 5 ~ 7 cm の深度で、やや入口部に面して傾斜がみられた。

入口部は北面しており、北壁面の中央部よりやや東面に偏した位置に幅 160 cm、奥行 2 m とみられる造りとなっている。主柱は 4 本を各壁面に有している外に、入口部に貫通する位置に 2 本の柱穴が推定される。いま乾<sup>いわき</sup>位の位置における柱穴は、周溝との切り合いにより消滅したものと思われる。床面は前述するごとく僅かに北方向に傾斜しており、北壁面の中央位置（入口部の内に向かい右手）に粘土の集塊と灰層が検出されたことにより、カマドが設

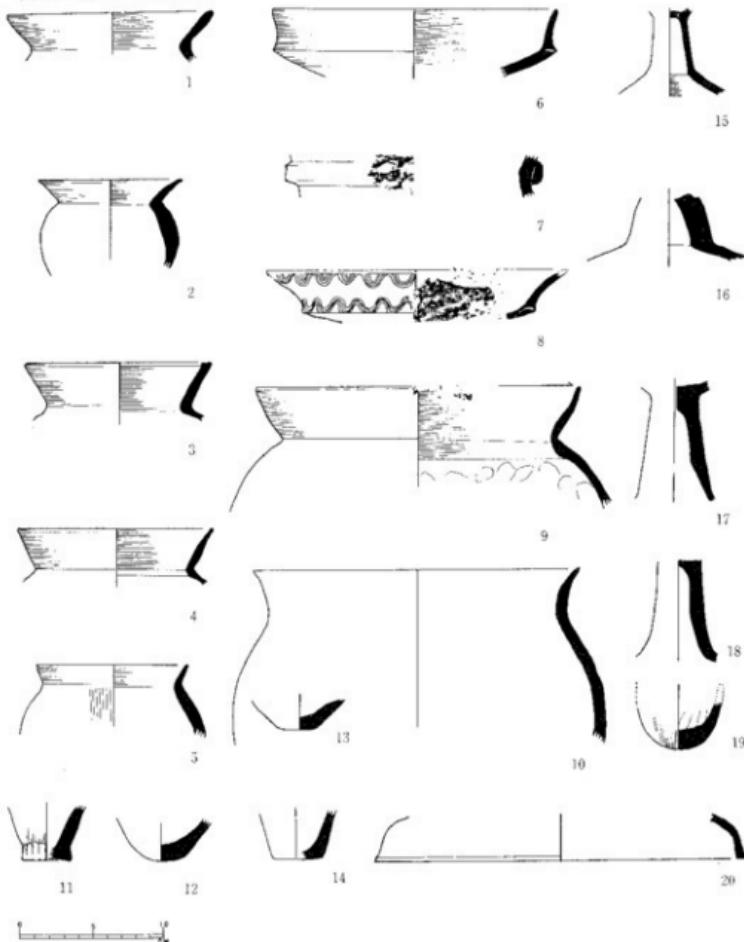
第51図 SB05 遺構実測図



置されていたものと推定される。

遺物は土師器であるが、遺構そのものが、耕作土の直下にあり、しかも戦時中畑作地より水田耕地として、耕地改良が実施されたことと相まって、細片化をみた遺物が僅かに検出されたのみである。

図52 SB05 遺物実測図



SB05の遺物

種類	番号 （図版番号）	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	基準
壺形土器	1 20	口径 14.7 頸部径 11.2 口縁高 3.0	口縁部はぐの字口縁で、口唇端部は丸く肥厚する。	器内外面共に入念なナデ仕上げである。	焼成良好で胎土に砂粒を含まない。 茶褐色。	1
壺形土器	2 7	口径 10.0 頸部径 7.3 器高 5.5	底部は欠損した遺物。球形の体部で肩部は特に肥厚し、口縁は大きく外反し、口唇端は心もち屈曲する。	器内外面共にナデ仕上げ、基底部に指頭痕が残る。	焼成良好、胎土に砂礫を僅かに含む。 茶褐色。	1
壺形土器	3 43	口径 13.2 頸部径 10.2 口縁高 4.5	頸部より直線に外反し、口唇端部は僅かに凹面がみられ、口唇内面に稜をなす。	器内外面共にナデ仕上げ、頸部には輪積による接合がみられる。	焼成良好、胎土に砂礫を僅かに含む。 茶褐色。	1
壺形土器	4 4	口径 13.8 頸部径 11.1 口縁高 3.0	口縁部ぐの字で口辺中央部に外面にややふくらみあり。口辺中央部で外折し減厚され、口唇端はオリカエシ、端面は丸くおさめる。	器内外面は共にヨコナデ仕上げ、頸部内壁面はヘラ切りがみられる。口唇端に僅かに折り返しの棱をなす。	焼成良好、胎土に砂礫を僅かに含む。 茶褐色。	1
壺形土器	5 16	口径 10.6 頸部径 9.7 口縁高 1.5	肥厚な体部がゆるやかにすぼまり、口縁部短く、外反するぐの字口縁で、端面は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ調整、体部はタテグンの整形である。	焼成やや軟、砂礫極少量。 棕色。	1
高杯形土器	6 17	口径 20.0 頸部径 20.0 器高 5.6	底平に近い丸底の底部から垂直に立ちあがったもの、口辺中央部から僅かに外反し、端部は丸くおさめる。	底部から口縁部にかけて、内外面ともヨコナデ仕上げである。口縁部は輪積による複合口縁技法がみられる。	焼成良好で胎土はよく精製されている。 黄褐色。	1
壺形土器の鉢部	7 不明	頸部径 18.2	ぐの字頸部に断面台状突起をもつ遺物片。	指頭大の押正文あり、凸帶上下はナデ仕上げ。	胎土に砂粒子多量。	1
高杯形土器	8	口径推定 21.0前後	底平に近い内湾した底部に大きく外反した口縁部を輪積し、口唇部と稜部に波状文を付す。	器内外面はヨコナデ、輪積手法が残る。内部ヘラ研磨あり。	焼成は良好。 内部茶褐色、外色黄橙。	1
壺形土器	9 25	口径 23.4 頸径 19.4 器高 7.5	肩張りの少ない球形の体部。口縁部は頸部より外反したもの、口辺部中央部で内肉気味に立ちあがり、端部は丸くおさめる。	内外面共に口縁部はナデ仕上げ、頸部内壁はヘラ切り、体部成形に指頭痕を残す。	胎土は精密、焼成良好。	1
壺形土器	10 不明	口径 23.4 頸部径 21.3 器高 11.3	肩部の張りは少なく、僅かにすぼまる。口縁部は垂直に立ち上がり、口唇端に曲折を生じる。	外表面はハクリにより不則、内壁面はナデ仕上げ。	焼成やや軟。 茶褐色。	1
壺形土器 底部？	11 不明	底径 3.4	僅かに凹面をもつ底部で、基底部は垂直に立ち上がった後直線状に外反する。	基底部周辺に指頭痕がある。表面タガ標による整形、内部ナデ仕上げ。	焼成良好。 茶褐色。	1
底部	12 16 13		若干肥厚した丸底の底部である。 13は2.5 cm の平底である。	表面ハク仕上げ、内面ナデ仕上げ。	焼成良好、砂質粘土。	2

種類	番号 図版 上	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数値	
壺底部	14	4	底部径 3.5 胴径 6.0	小瓶りであるが、安定した平底である。	内外面ともによく調整されている。 指頭ナデ痕を残す。	焼成良好。 茶褐色。	1
手づくね土器	19	不規	胴径 3.0 現高 1.5	小型の丸底である。底部は肥厚し、内堀気味に立ち上がる壁面は、次第に裁縫している。	手づくねによる土器で、内底部に指頭ナデ痕を残す。外面はハケによる調整。	焼成やや軟。 灰褐色。	1
高杯脚部	15 16	34 81	基部径 2.5 胴径 4.5	ともに脚部の凹曲の激しい脚部である。 16は脚柱部のハリが大きい。	両器共に内外面ナデ仕上げである。	器厚は15に対し16は3倍である。ともに砂礫は含まれない。 15は焼成やや軟。	2
高杯脚部	17 18	59 18	基部径 3.5 胴径 3.1	脚部はともに円柱をなす。内壁の基部直下は指先によるナゲが見られ、円柱中位以下をへら切りしている。脚の広がりは不明。	両器共に内外面ナデ仕上げである。	胎土に砂礫粒は混入しない。 焼成良好。 赤褐色。	2
脚部片	20	4	径 26.4	脚の根部片である。	内壁ナデ、外面にヘラ研磨が僅かに見える。	焼成良好、胎土に若干の粒子を含む。	1

#### (8) SB05遺物の様相

SB05の遺物には壺形土器、壺形土器、壺形土器、高杯形土器、手づくね土器が検出された。6は複合口縁の壺形土器の口縁部で11唇部は僅かに外反する。7は壺形土器の頸部で断面台形の貼り付け突帯がめぐり、凸帶上端面には菱形の圧痕が施されている。1、3、4は壺形上器の口縁部としているが、体部の様相不明のため概説にすぎない。2は壺形土器で底部は丸底が想定される。現状では肩部に胎土の最大肥厚があり、重量感のある壺である。3と4は口縁部の11唇端面は平面をなし、上器整形時の手法によるものと推測される。9は頸部内壁に窓切り手法が用いられている。この技法は3、4、10にも僅かに認められる技法である。高杯形土器8、15~19がある。8は杯部の口辺部である、大きく外反した口辺部に波状文が施文されている。15~19は高杯の脚部片である。脚部は16以外は、やや細身の脚幅部の開かない脚部となっている。確実な数値は不明であるが、共通して脚窓高のある形態にある。19は手づくね土器で、口縁部は欠失するが、内面には指頭による從ナデ上げ痕を、表面は刷毛目調整である。20は器台形土器の脚窓部と思われる。当遺物の様相から中期の土師器と理解されよう。

### 3 挖立柱建物遺構の概況

本区における掘立柱建物遺構は、検出された柱穴群より図第45図の全測図に示すSB1～SB15の建物遺構が想定される。これら掘立柱建物遺構は、その建物の方位関係や位置関係から見て2～3時期におよぶ建物群であろうと推定される。建物の規模は下表に示すごとくである。

(建物の主軸は乾位の角柱を基準)(単位:cm)

建物 ナンバー	建物の 主軸	桁行間と その全長	梁間とその全長	備 考
SB 1	磁 北	不明である。	2間の360等間	南北棟の建物と推定される。
SB 2	N 10° W	3間の 500	2間の400等間?	
SB 3	N 4° W	2間の 400	2間の320	
SB 4	N 15° E	6間の1050	3間の490	桁行全長は西東での全長に亘りあり。
SB 5	N 5° E	4間の 560	2間の380	桁行間及び梁間は等間が推定される。 〃
SB 6	N 44° E	不明である。	2間の460	発掘外に桁行間が推定される。
SB 7	磁 北	3間の 600	3間の600	桁行間及び梁間は等間が推定される。
SB 8	N 8° E	3間の 580	2間の370	2柱穴が未確認であるが等間と推定
SB 9	N 10° E	3間以上?	2間の390	未掘区があるが等間を推定する。
SB 10	N 5° E	3間の 480	5間の850	桁行間及び梁間とともに等間が推定される
SB 11	N 15° E	3間の 640	2間の500	〃
SB 12	N 15° E	4間の 730	2間の320	〃
SB 13	N 4° E	4間の 700	3間の500	〃
SB 14	N 50° E	3間の 510	3間?420	柱穴も小さく推定値が大きい。
SB 15	N 30° E	不明 800以上	3間?640	柱穴の未検出が多く、不安定な遺構。

#### (1) SB 1 遺構

SB 1 遺構は、北側梁間面を検出したのみの遺構で、桁行面における柱列は未検出であり、いまSB01の壁面部に検出された柱穴をSB 1 の桁行における第一柱穴と推定しうるが、西側での桁行柱穴が検出されていないため、柱心間を推定することは避けたい。だが推定されるSB 1 遺構として実線で示すごとく遺構の発展する推定値を予定した。

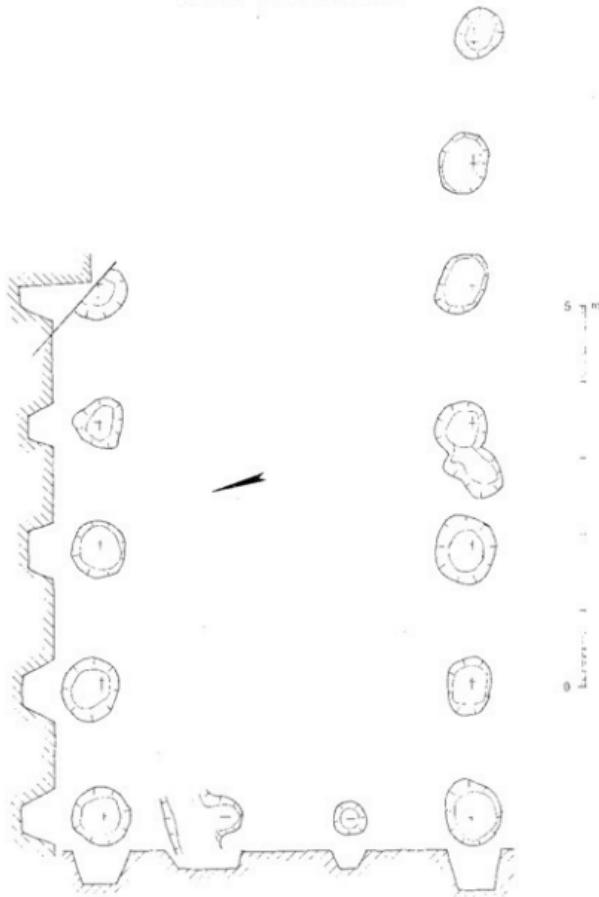
#### (2) SB 2 遺構

SB 2 遺構は梁間2間、桁行間3間が推定されるが、桁行間北側側面の乾位より第2柱穴はついに検出をみなかった。この外に梁間西側においても、中央の棟持柱と推定される柱穴は未検出である。だが検出された柱列穴からみて等間は推定されない。

### (3) SB 3 造構

SB 3 造構は、両間はとともに 2 間であり、全長距離における長径をもって、梁間と桁行間を推定して、南北棟の切妻式の掘立柱柱穴と断定した。実測値は梁間は等間であるに対して、桁行間は、西側での桁行間の柱穴位置は二分する位置に穿たれ、これに対して東側面では僅かに南に偏した柱穴位置となっている。

第53図 SB 3 造構実測図



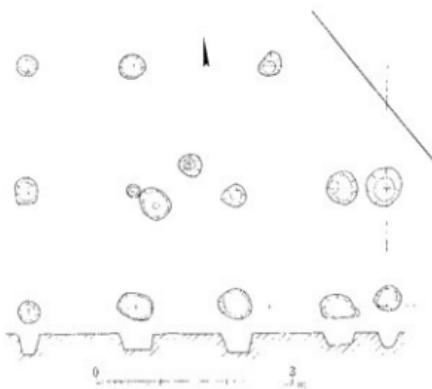
#### (4) SB 4 造構

梁間での東側面は未検出のため推定位置である。南北に検出された掘立柱位置は、相対する柱穴から各等間による柱位置が推定される掘立柱の位置と、内部床面に柱穴の検出をみなかったことから、掘立柱建物跡と推定される。桁行間の推定心心間は6間の全長1,050cmで、各間は175cmの等間である。梁間は全長490cmで、3間である。各間の柱間の心心間距離は163cm等間である。

#### (5) SB 5 造構

SB04 造構の内に重複した形で検出された造構である。規模は桁行間全長560cmの4間である。桁行間での柱間の心心間距離は、東側の梁間からみて第1間80cm、第2間150cm、第3間150cm、第4間170cmである。梁間は全長380cmの1間190cmの等間である。ただ東側梁間面での北隅の角柱は検出されていない。

第54図 SB 5 造構実測図



#### (6) SB 6 造構

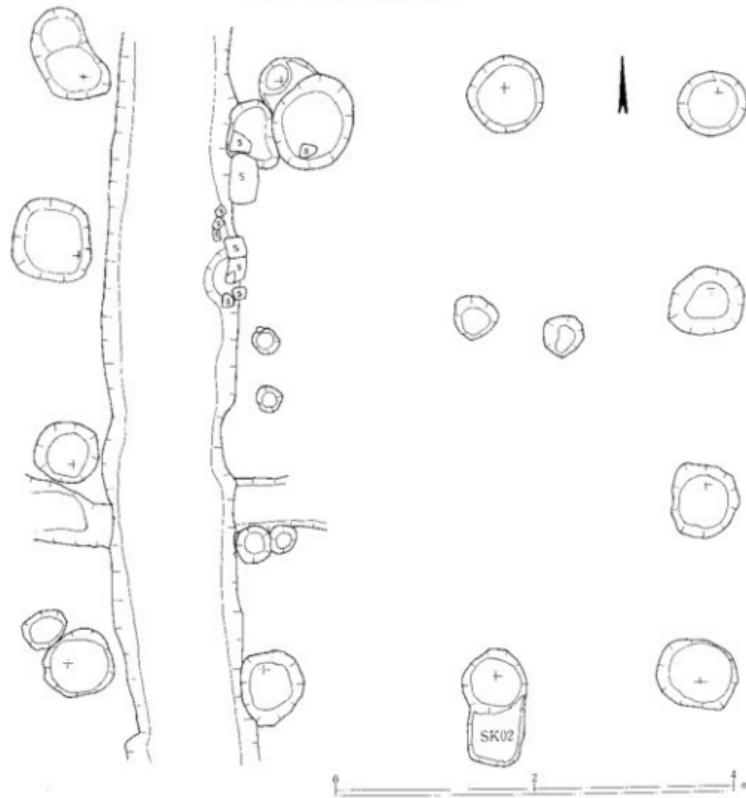
SB 6 造構は、SB 4 及びSB 5 造構とは主軸方向を大きく異にした掘立柱建物造構である。また梁間の南面する全面と桁行間の1間を検出したものであり、その大部分の造構は未掘地に延長している。さらに梁間の中心位置に東方より西方向に延びる溝状造構と重複している

棟持柱位置が推定されるが、溝造構の北側壁面に検出された柱穴から推定して、柱間の心心間距離は 200 cm と 260 cm が得られる。桁行において柱穴は 1 個のみの検出であり他の柱穴は未定である。検出された柱間は 250~260 cm の柱間距離が得られる。

#### (7) SB7 遺構

SB7 遺構は、SB4、5、6 遺構の西面で検出され、しかも東面と南面する位置で、SB4 遺構の西面位置が重複している。掘立柱建物の規模は梁間全長 6 m、桁行間全長 6 m の各々柱間の距離は 2 m 等間が測定される方形の建物である。ただ建物の西側における柱位置のみが若干異なる柱位置で、南角柱より 2 m、250 cm と 150 cm という柱間の位置にある。

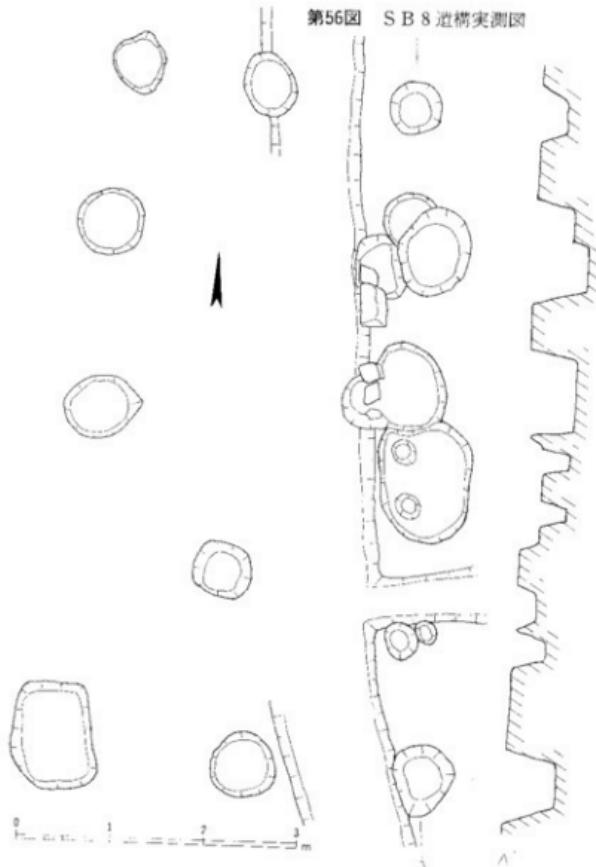
第55図 SB7 遺構実測図



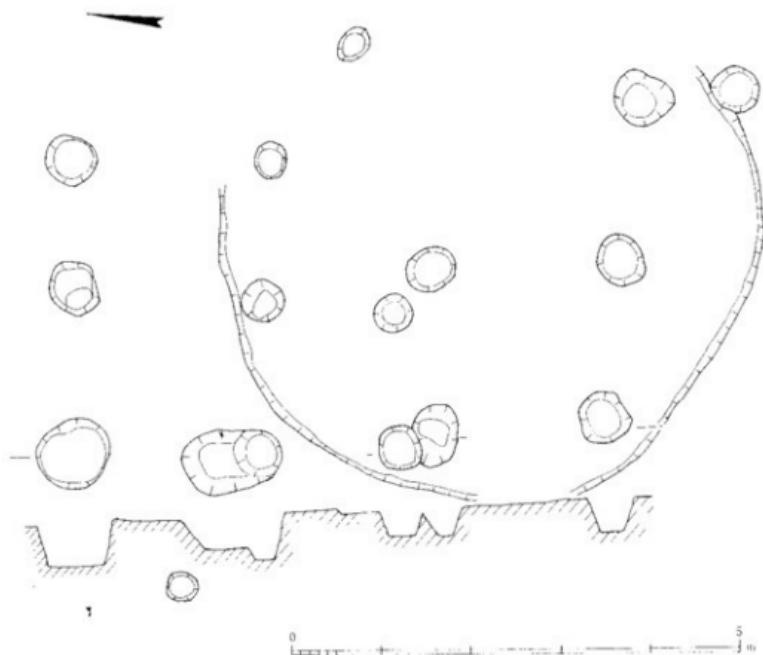
(8) SB 8 造構

SB 8 造構は、SB 7 造構に対して僅かに東に偏した主軸を取り、しかも SB 7 造構と建物の外面を重複する位置にある。建物の平面規模は梁間全長 370 cm の 2 間で 1 間の心心間距離は 185 cm が測定される。また桁行間全長 580 cm である。検出された桁行間での柱穴は 2 間で 400 cm と 180 cm の等間である。また梁間の北側壁面での棟持柱の柱穴は検出されず、発掘のミスと推定されるものである。建物の主軸方向は N 8 度 E を取る南北棟の建物である。

第56図 SB 8 造構実測図



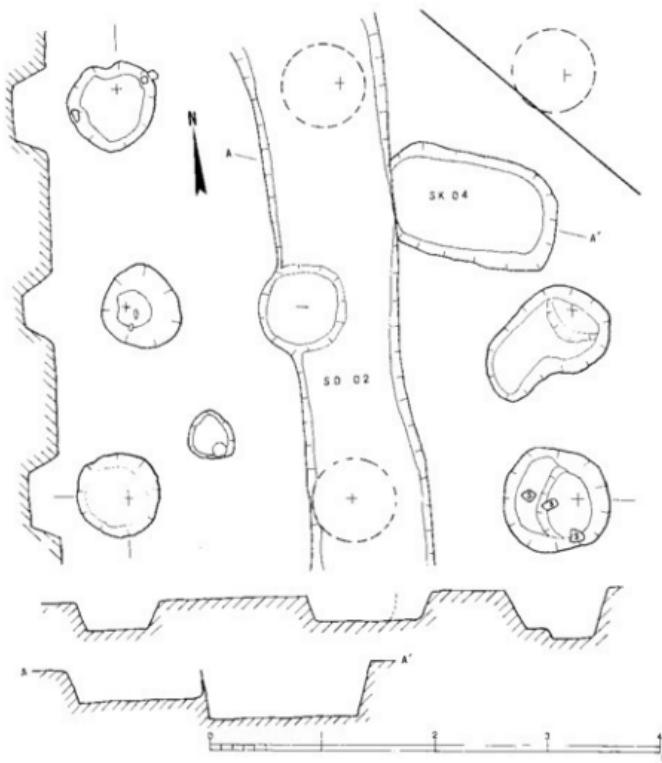
第57図 SB 1・SB 2 遺構実測図



(9) SB 9 遺構

SB 9 遺構は SB 8 遺構の北方 4 m の位置に、建物の主軸方向を N 10 度 E にとる南北棟の掘立柱建物である。建物の平面規模は未握地を含むため不確実であるが、検出された遺構(柱穴)から 380~390 cm の梁間全長が得られる。桁行間は 3 間の 530~550 cm が推定される。桁行間では西側で 3 間(内 1 柱穴は周溝と重複)を、東側壁面では 2 間の柱穴をみている。南側の梁間の棟持柱の柱穴位置も周溝による遺構により切り合いとなり不明である。だが桁行全長は 3 間で終わらずさらに 1~2 間延長する規模の建物が想定される。

第58図 SB 9 遺構実測図



(10) SB10 遺構

SB10 遺構は SB 8 遺構の西方 3 m にて検出された遺構であり、遺構の規模は梁間 3 間で全長 470~480 cm が測定される。また桁行間の全長は 850 cm の 5 間が測定される。

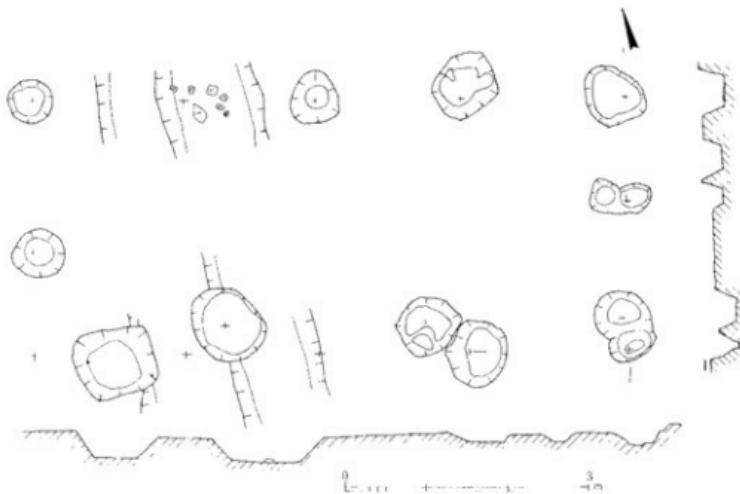
梁間の柱間における心心間距離は 1 間 160 cm の等間が計測され、また桁行間の柱間の心心間距離は 170 cm の等間が推定されるが、南側桁行面と北側桁行面では共に東面柱より 170 cm 等間、150 cm 等間、180 cm 等間であるが、第 4 柱目では北側の桁行面 140 cm、南側桁行目で 170 cm、第 5 柱では、北側桁行間で 210 cm、南側桁行間では、180 cm と大きく南北桁行面で異なる数値が得られる。

### (11) SB11 遺構

SB11 の遺構は、SB10 と SB12 遺構の中間位置に検出され、10・12 が東西棟の建物であるのに対して、主軸方向（位）が N 15 度 E を指向する南北棟の掘立柱建物遺構である。建物の平面規模は、梁 2 間で全長 480 cm、桁行間 3 間の全長 640 cm である。

梁間の 2 間は等間で 240～250 cm が推定される柱間の心心間距離が得られるが、これに対して、桁行間の柱間は厳密には東側面では 3 間で、南隅柱より、150・220・270 cm が求められる。この東側面での柱間に對して西側面では 320 cm の長径の等間の柱間距離が得られる。

第59図 SB11 遺構実測図



### (12) SB12 遺構

SB12 の遺構は、SB11 の梁間北壁面を重複する形で検出され、棟方向は東西棟である。建物の平面規模は、梁間 2 間の全長 330 cm、桁行間 4 間の全長 730 cm である。

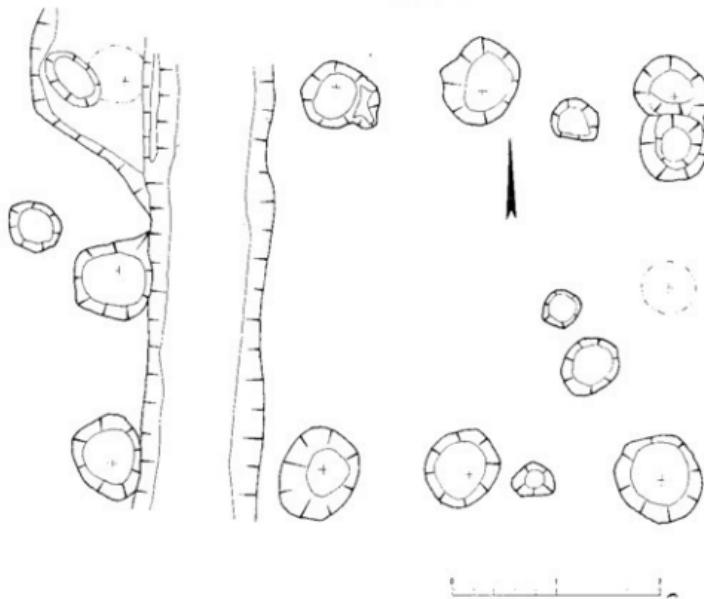
梁間の 2 間は、西側面での計測値は 150 cm と 180 cm の柱間が求められる。東壁面では柱穴検出がやや重複したため不明確となっている。桁行間の柱穴は南北柱列はともに周溝により欠損しているが、他の掘立柱柱穴列より推測すれば、両桁行間の心心間距離は東角柱より、200・180・175・175 cm の等間が推定される。

### (13) SB13 造構

SB13 造構は、当発掘区の最北端部で検出された造構であり、しかも SB14 と重複している。建物の平面規模は梁間全長 5 m の 3 間、柱間の心心間距離は 170・160・170 cm の等間が測定される。桁行間全長 7 m の 4 間、柱間の心心間距離は、桁行間の北側面では東角柱より 175・175・175・175 cm の等間の柱間である。これに対して南桁行間は北側の桁行間と等間であるが、中心（央）柱の第 3 柱穴がなく 350 cm の長間となっている。

建物の主軸方位は東西方向を指向している。

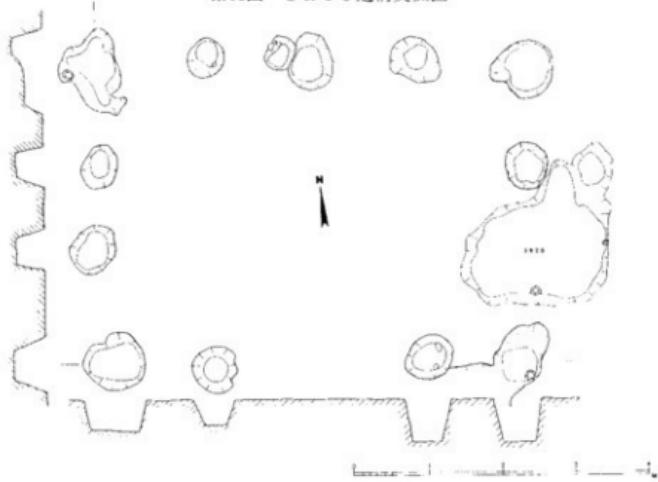
第60図 S B 1 2 造構実測図



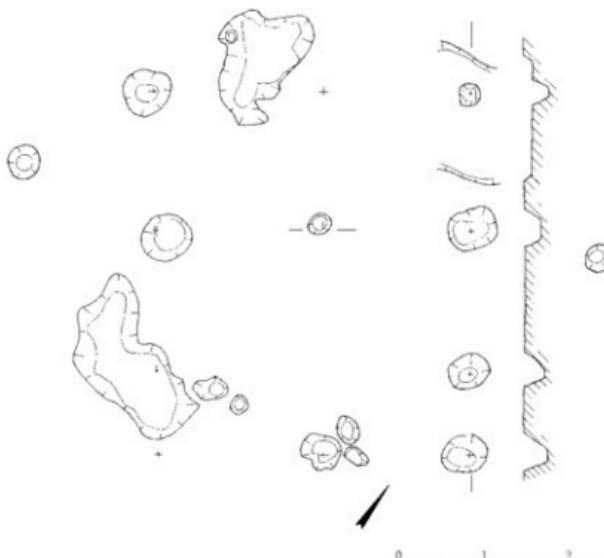
### (14) SB14 造構

SB14 造構は SB13 造構と重複しており、建物の主軸方位は N 50 度 E にある。当造構の柱穴の検出は貧弱であり、しかも有機物を含む黒褐色土層を地山面としたことにより、柱穴の掘方を完全に理解できなかったものと推定されるが、わずかな柱穴より、梁間全長 410 cm、桁行間全長 530 cm が推測される。柱間は梁間 3 間、桁行間 4 間と推定される。

第61図 SB 1.3 造構実測図



第62図 SB 1.4 造構実測図



#### 4 土壙墓及び土壙状遺構の概況

筋道B地区における土壙墓及び土壙状遺構は、厳密な数字を確認できなかった。その第1の原因は周溝内の検出が困難であったことと、第2には再度におよぶ耕地の整地が実施されていたことにある。

中でも土壙墓として確認されるものか31基あり、その埋葬形態も火葬墓・木棺直葬墓をはじめ、上蓋の規模にも数種の変化がみられる。また副葬品においても数種の変化がみられた。これら内様遺構の変化の他に、外様遺構の変化をみられるものもあった。さらに周溝において土器及び鉄器、磁器等の検出がみられ、周囲の配石等からみて土壙墓と推測されるものがあったが発掘の技術と時間的な制約がからみ、不確実な周溝内の調査に終わった。

##### (1) 1号土壙状遺構 (SK01)

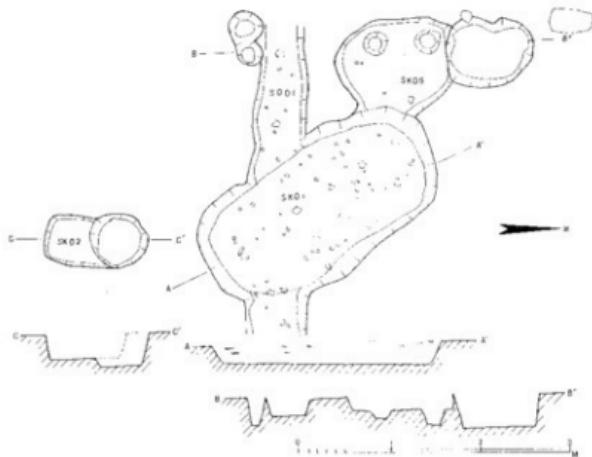
図第45図の筋道B区全測図、図第47図のSK部分図

SK01 遺構は、SD01 の溝状遺構が遺構の中央部を貫流しており、重複する遺構であるが、SD01 遺構の廃絶後に SK01 遺構が後続したものと推定される。

SK01 の規模は、長径 280 cm、短径 150 cm、深度 25 cm の長椭円形の土壙である。

第63図の断面図にみると、土壙の床面は水平である。また遺構内で検出された遺物は土師器の口縁部や体部、底部の破片があり、しかも出土層位はすべて上層にあり、後世の落ち込みと判断される遺物である。ちなみに上壙内の層序は2層である。

第63図 SK01・SK02・SK05 遺構実測図



(2) SK02 造構 図第 55 図、図第 63 図

SK02 造構は、掘立柱建物造構 SB 7 柱穴と重複している造構である。造構の規模は小型で長径 90 cm と短径 50 cm、深度 28 cm の長方形である。床面は水平な素掘である。造構内の遺物は SK01 と同様である。

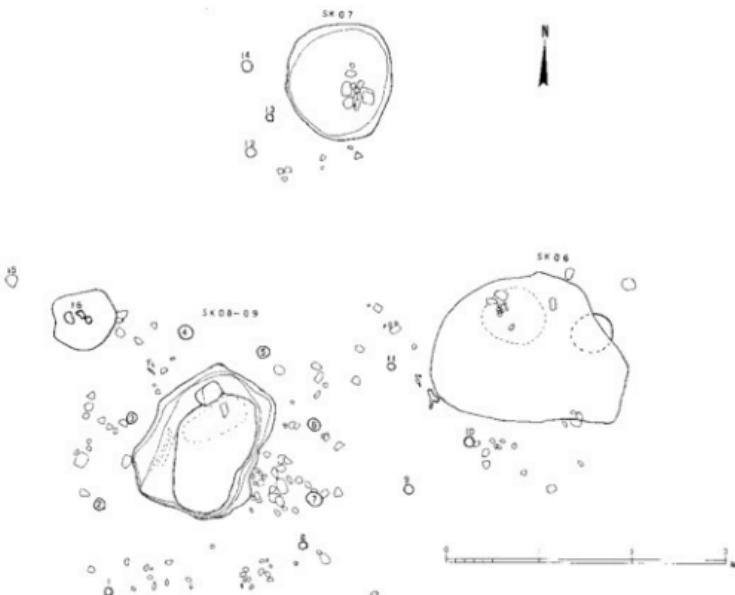
(3) SK03 造構 図第 47 図、全測図第 76 図

SK03 造構は SB02 の堅穴住居跡内に掘り込まれた造構である。造構の規模は直径 2 m、短径 130 cm、深度 30 cm の隅丸の長方形である。

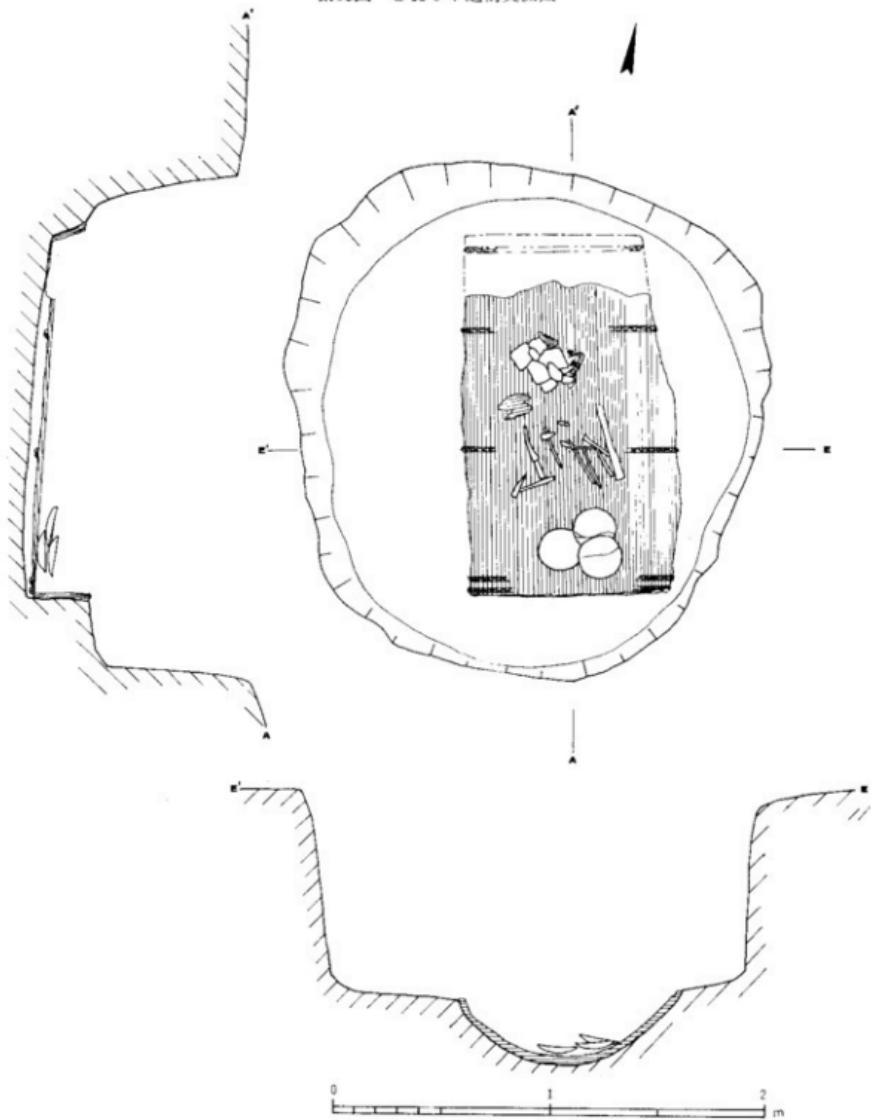
(4) SK04 造構 図第 58 図、全測図第 76 図

SK04 は周溝の内 SD02 の北隅にて検出された造構である。造構はまた SB 9 の高床式の掘立柱建物造構内にあり、長径 155 cm、短径 1 m、深度 50 cm の隅丸長方形である。出土遺物はない。

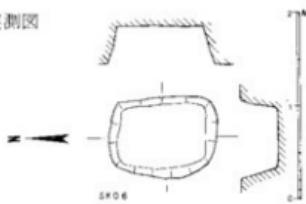
第64図 SK06、SK07、SK08、SK09 造構周辺の遺物出土状況実測図



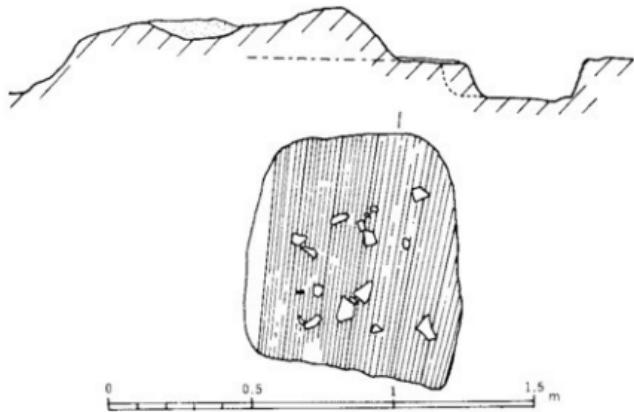
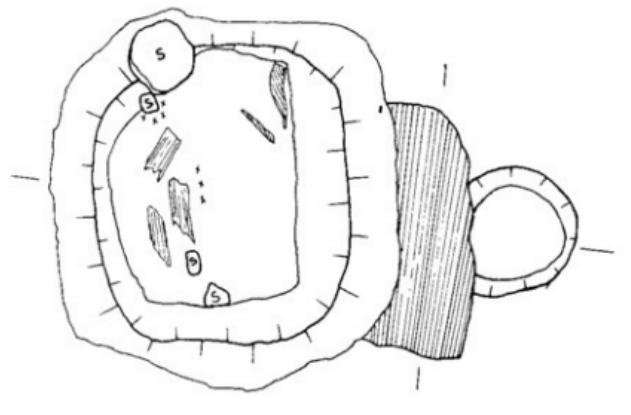
第65図 SK 07 造構実測図



第66図 SK 0 6 造構実測図



第67図 SK 0 8、0 9 造構実測図



(5) SK05 遺構 図第 55 図、図第 63 図

SK05 の長径 115 cm、短径 95 cm、深度 15 cm とやや浅い遺構である。土壇状遺構であり出土遺物はない。長軸に沿って 2 個の柱穴が検出されており、深度は 25 cm と 30 cm である。

(6) SK06 遺構 図第 64 図、図第 66 図

SK06 遺構は、小塚状の火葬骨層の下部より検出された土壇状遺構である。遺構の規模は長径 120 cm、短径 80 cm、深度 37 cm である。遺構内の出土遺物はない。

(7) SK06、07、08、09 遺構の外様状況

SK06~09 は図 64 図に示す位置にあり、いずれも耕作土を排除した直下に、黄褐色粘土でわずかに突出しており、周囲の地高差 12 cm 前後的小塚状であった。

SK07 の小塚の中央部には、人頭大の自然石が配石され、しかも小塚の西側 1 m の位置に 1 対になる十師器の碗が配置され中央位置には須恵器の有蓋杯が置かれていた。

SK09 は SK07 の小塚状の突出より、やや大きく 20 cm の地高差があり、しかも 4 層の層位がみられた。小塚状遺構の外周域に 7 個の有蓋杯が配置されていた。

SK06 遺構も同様の小塚状遺構で周囲に 2 個の有蓋杯と菱形土器の口縁部を検出した。

SK06 遺構の上層部が小塚状遺構であり、盛土中より火葬骨片が検出され、その下部に SK06 遺構を検出したものである。遺構は長径 120 cm、短径 90 cm、深度 45 cm の土壇墓であり、遺物は検出されなかった。

(8) 7 号土壇墓遺構 (SK07) の内様

土壇墓 SK07 号は南北に 2.25 m、東西方向に 2.10 m の梢円形の掘方による土壇で、地表より深度 90 cm まではやや垂直な掘り込みになっている。梢円形の底部中央位置より東側に主体部の埋葬位置が棺に合わせて掘り込まれている。埋葬方位は北 10 度西にとる。主体部は桶（樽）棺を横転させての埋葬である。桶には底部に 2 条、中央部に 2 ヶ所、天井部に 1 条のたががほどこされていた。桶棺は長径 170 cm で、直径は 1 ~ 0.9 m と推定される。棺材は松材で柱目が使用されている。埋葬位は北を枕にしており、足元に十師器の皿 3 枚と中央部左側で漆器片を検出した。遺骸は頭骨の一部、下頬、人腿骨、尺骨等が検出された。埋葬の封土は、洪積層の粘土（掘り方の粘土）をそのまま利用しており、耕作土の下層に突出した状況で検出された。

(9) SK07 の出土遺物

#### (10) SK08 遺構

SK08 遺構は、SK06 遺構の上部層遺構と同様に火葬骨の検出があり、しかも外廓遺構でふれたように 4 層の灰層と火葬骨層の互層であった。第 64 図に示すものは第 1 層の火葬骨層の位置と配石の状況と第 2 層の火葬骨層である。第 67 図に示すものは第 3 層の火葬骨層に残る炭化した板状の植物遺体と配石である。第 3 層の床面は断面図にみられるような半截竹管状の凹面であり、明らかに木棺を火葬に付したものと推定される。床面をなす粘土層の厚味は 10~20 cm あり、熱変化がみられた。

#### (11) SK09 遺構 (図第 64 図・67 図)

SK09 遺構は SK08 遺構の粘土床を除去した下部より検出された木棺直葬墓である。SK09 は SK08 遺構より、断面図に示す位置にあり柵目の松材であった。植物遺体上に下で白く表現するものは、細片化した人骨遺体である。前回の外廓遺構図の杯 No. 2 の東部に広がる配石遺構の下部より SK09 は検出されたものである。

さらに木棺直葬墓の下部より SB10 の掘立柱遺構の柱穴が検出されたことにより、土墳墓と掘立柱建物遺構の時期差が求められよう。

#### (12) SK10 遺構 (全測図第 76 図)

SK10 は長径 110 cm、短径 60 cm、深度 20 cm の長方形の土壙状遺構である。出土遺物は検出されなかった。

#### (13) SK11 遺構と SK12 遺構 (全測図第 76 図)

SK11 と 12 遺構は、SB10 の掘立柱建物の柱穴と併列した遺構である。遺構の規模は SK11 では、長径 130 cm、短径最大幅 100 cm。SK12 では直径 90~80 cm のやや梢円形の土壙墓で、この 2 基の土壙墓の中央に SB10 の柱穴が穿たれている。両遺構はともに土師の杯を 2 枚出している。

#### (14) SK13 遺構 (全測図第 76 図)

SK13 遺構は、SD05 の溝状遺構に南接して検出をみた遺構である。遺構の規模は長径 1 m、短径 50 cm の深度 32 cm で帯みのある長方形である。遺構内での遺物はいずれも細片の土師器片や須恵器片である。

#### (15) SK14 遺構 (全測図第 76 図)

SK14 遺構は SD02 遺構の磁北に向かい右手で検出された遺構であり、SB9 遺構の南側で

検出された。遺構の主軸方向は北 35 度西にとる。規模は長径上部で 170 cm、下部で 130 cm、短径は上部で 60 cm、下部 50 cm の舟底形の掘方で、最大深度は中央部にあり深度 35 cm であった。出土遺物は検出されていない。

(16) SK14' 遺構 (全測図第 76 図)

SK14' 遺構は SD02 と SD03 遺構のコーナーで検出された集石遺構である。集石は長径 2 m、短径 1 m の長楕円形に配石されており、図に示すように下部より SB9 遺構の掘立柱建物の柱穴が検出された。人為的な集石であるが、内部からの出土遺物ではなく、集石と混在する形で、須恵器片、土師器片を出土している。破片の多くは坏、高坏片であった。

(17) SK15 遺構 (第 68 図、全測図第 76 図)

SK15 は、SD04 のやや中央部西側で検出された遺構で、SB12 の掘立柱建物遺構の柱穴と重複する遺構でもある。規模は長径 97 cm、短径 85 cm、深度 25 cm の方形に近い遺構である。図にみられるように土師質の土器片を散発的に検出したにすぎない。

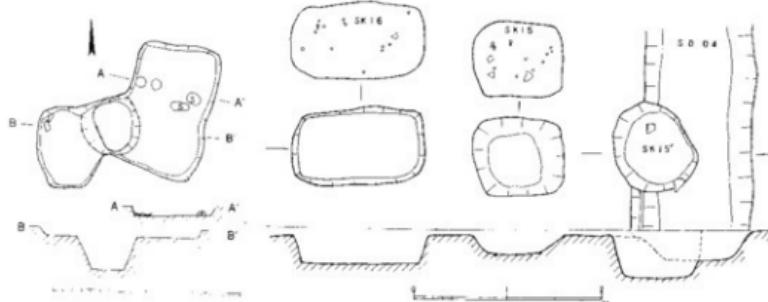
(18) SK15' 遺構 (第 68 図、全測図第 76 図)

SK15' は SK15 の東方に並列して検出された遺構である。遺構の規模は 90~95 cm のわざかに椭円形を呈する掘方である。深度は最も深く 51 cm あり、特に SD04 の溝底部よりさらには 17 cm 深く掘り下げられていた。検出された遺物は直径 8 cm の自然石 1 個であった。

(19) SK16 遺構 (第 68 図、全測図第 76 図)

SK16 は SK15 の西方 50 cm の位置で検出された。遺構の規模は長径 150 cm、短径の最大 85 cm で深度は 38 cm である。遺構の主軸は SK15、SK16 ともに西に向かっている。検出さ

第68図 SK15、SK16 遺構実測図



れた遺物は土師器及び須恵器片である。遺物の包含層は 15・16 共に浅くいずれも地山面から深度 14~5 cm の位置にあり、遺構内への混入土器として処置をした。

(20) SK17 遺構（全測図第 76 図）

SK17 遺構は SD05 遺構の延長線上に、主軸方向を北 60 度東にとる長楕円形の遺構である。長径 160 cm、短径最大 1 m と中型の土壙状遺構である。掘り込みはやや浅く、25 cm を最大に船底形の底部をなす。地山面には、最大 15 cm の自然石が配石されていたが、遺構内は洪積層を掘り下げた素掘である。出土遺物は須恵器と土師器の破片が束石の配石と共に伴ったのみである。

(21) SK18 遺構（全測図第 76 図）

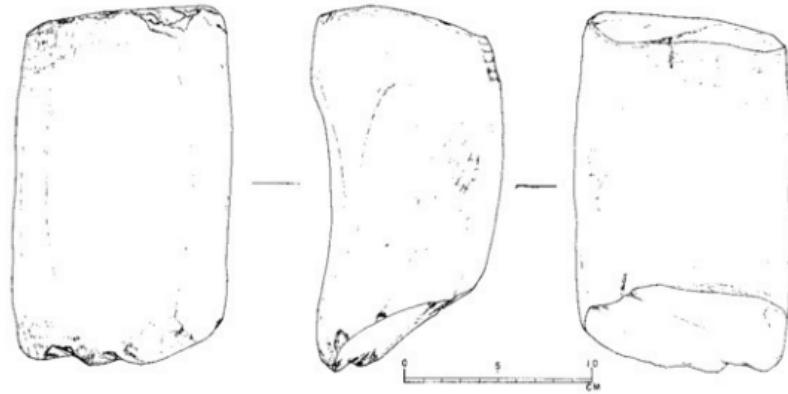
SK18 は、SK16 遺構の北側で検出された遺構である。遺構の主軸方向は、SK16 が東西方向を指向するのに対し、主軸方位は南北を指している。遺構の規模は長径 110 cm、短径 80 cm である。遺構の床面は平坦で地山より 30 cm の掘り込みである。遺構内に充填した埋土は、黄白色の粘土と黒褐色有機物含有土が混入した一層であった。

遺構にともなう出土遺物はなく、また地山面でよくみられた自然石の配石もみられなかつた。

(22) SK19 遺構（全測図第 76 図）

SK19 は主軸方向を磁北にとり、長径 140 cm、上端部の短径 80 cm、地山面の洪積層を 8 cm 堀り込み、下端面の長径 120 cm、短径 70 cm の隅丸長方形である。当遺構には、磁北に頭部位置を取り、その位置に石枕を配置していた。

第69図 SK19 石枕実測図



(23) SK19の遺物 (第69図)

出土遺物は、直径  $11 \times 11.5$  cm の円柱で 16 面に石材を加工した石枕がある。石枕は上端部に最大の長径があり、最大 19.2 cm、下端部は最短径となり 12 cm である。石枕の上端面は凹面に削られ大きく弧をえがき、さらに、肩部の対面する側も大きく凹面に削られて、頭部の安定効果を計っている。石材の加工には、ノミ状の工具が使用された痕が残っている。

石質は現在砥部焼の陶土として活用されているケイアリンである。

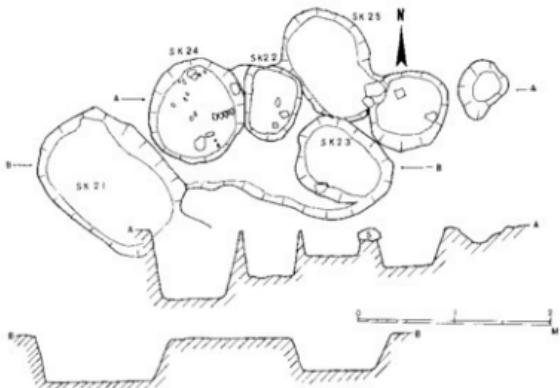
(24) SK20 遺構 (全測図第76図)

SK20 は SK19 遺構の北に近接する円形の土壤状遺構である。遺構は地山の洪積層面で  $90 \times 80$  cm の円形土壤である。遺構は地山面位置では直径 10 cm 内外の自然石が全面に敷きつめられていた。遺構の深度も浅く、しかも直径 50 cm、深度 25 cm の円孔が穿たれており、掘立柱建物遺構の柱穴と類似するが、周辺部に掘立柱建物の柱穴は検出されていない。須恵器や土師器の細片化した遺物が検出された。

(25) SK21 遺構 (全測図第76図)

SK21 遺構は、SK20 の北方で検出された遺構で、遺構の主軸方向は北 50 度西を指す。充填された埋土は黒褐色土の一層であり、遺構は隅丸の長方形である。洪積土の地山面で長径 160 cm、掘り方の下端面では 140 cm であった。短径の上面は 115 cm を最大に、下端面では 83 cm であった。深度は 45 cm である。出土遺物はない。

第70図 SK21—25 遺構実測図



(26) SK22 遺構 (第 70 図、全測図第 76 図)

SK22 遺構は、SK21～25 遺構の中で、最小規模のものであり、地山面での長径 78 cm、下端部は 65 cm であり、短径の上面の最大 60 cm、最小 45 cm とすばまる。主軸方位は北 10 度東を指している。掘方はやや不規則で、長径の西側壁面が直線をなす以外は、各辺ともに内湾する掘方である。掘方の深度は断面図にみられるように 45 cm と安定しており、床面はわずかに中央部が降起する。出土遺物はない。

(27) SK23 遺構 (第 72 図、全測図第 76 図)

SK23 は 22 に接近して検出された遺構で、掘方方は卵形で主軸を北 65 度西にとる。地山面では長径 110 cm、短径 80 cm の楕円形である。床面積では長径 85 cm、短径 55 cm である。底面は断面図にみられるように平底である。出土遺物としては管玉 1 個がある。

(28) SK24 遺構 (第 72 図、全測図第 76 図)

SK24 は、長径 110 cm、短径 100 cm の円形の土壙である。底面では 94×78 cm の平底である。本遺構も他の遺構同様に平底であるが、掘方は最も深く 67 cm も洪積層を掘り下げている。充填した土壙は黄褐色の洪積層をなす粘土層に黒褐色の有機層が混入する单一層序であった。

SK24 にともなう出土遺物はみられなかつたが、図に示すように人頭大の自然石の他にかなりの量を有する自然石の配石があり、明らかに意図的な配石であった。

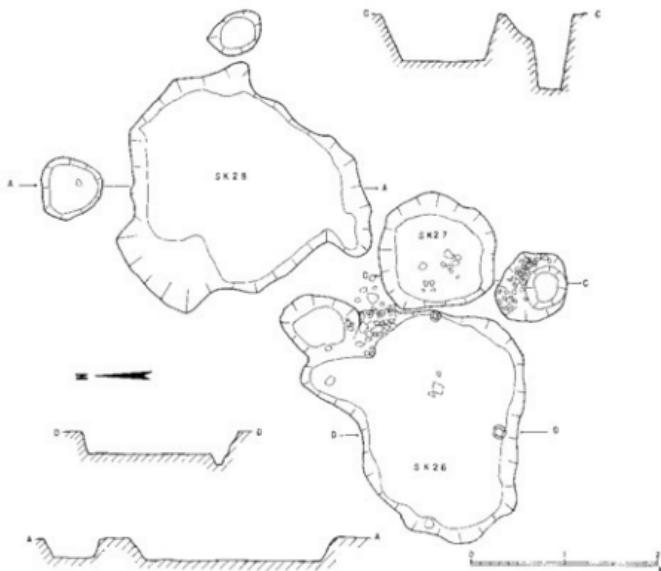
(29) SK25 遺構 (第 72 図、全測図第 76 図)

SK25 は長椭円形の土壙である。長径は上端面では 127 cm、下端面では 110 cm、短径は上端面で 85 cm、下端面で 70 cm、底面は水平な平底である。遺構の主軸方位は北 37 度西を指向する。遺構の掘り込みは最も浅く、洪積層を 25 cm 掘り込んでいる。出土遺物はなく、ただ南面の東角に直径 25 cm、幅 15 cm と 10×9 cm の平たな自然石が 2 個検出された。遺構にともなう標石とみるべきであろう。

(30) SK26 遺構 (第 71 図、全測図第 76 図)

SK26 は本構中最大規模で、長径 250 cm、短径 160 cm の土壙状遺構である。遺構は洪積層の地山面を 25 cm 掘り込んだ平底の床面である。遺構の主軸は東西を指向する。出土遺物はなく、遺構の中心部近くに 10×10 cm の方形の自然石を最大に計 3 個の配石があり、標石とみている。

第71図 SK26～28遺構実測図



(31) SK27遺構 (第71図、全測図第76図)

SK27は、SK26遺構の東方に連なる遺構でやや円形な土壙状遺構である。地山面で123×123cmの隅丸形で、遺構の下端は、90×94cmの平坦な底部である。土壙の掘り込みは50cmと深い。箱築研の掘り方となっている。出土物はなく、図示する配石があり意図的な配石及び標石とみている。

(32) SK28遺構 (第71図、全測図第76図)

SK28遺構は不規則な土壙状遺構で、遺構面積は最大である。遺構の掘り方は浅く25cmが計測されている。遺物はなく、床面は砂岩質の礫岩が集中しG層としての基盤をなしている。

(33) SK29とSK30の遺構 (全測図第76図)

SK29と30は、掘立柱建物の柱穴を思わせる柱穴の土壙状遺構である。SK29は直径60cmで、地山面をやや掘鉢状に掘り凹めた遺構—30cmの最下部より土師質の皿2個が出土した。またSK30は直径40cmの同様の柱穴状の遺構の最下部より土師質の皿2個が出土しており、遺構の深度は29よりわずかに浅い。

#### (34) SK29 と 30 の遺物と遺構の配置

SK29 と 30 の土師質の皿はやや深く 4 個ともに共通して糸切底である。器形も共に皿よりも小型の鉢形を呈するものである。詳細は遺物実測を参照されたい。

前述した SK07 遺構と SK29 と 30 は関係をもつ遺構と推測され、SK07 の埋葬者に対する墓前祭祀遺構として理解される。SK07 の埋葬者の頭部位置が北方に、上墳より僅か 250~300 cm の間の対象位置にあること、さらには埋葬不可能な柱穴状遺構であることから、SK29 と 30 は SK07 遺構に対する棚外遺構と推定される。

### 4 周溝遺構と溝状遺構

SD01~SD05 遺構は、大きく東西方向に貫通する SD01 遺構と SD05 遺構に対して、SD02 と SD03 と SD04 遺構は明らかに長方形の隅丸の周溝が推定される。周溝は SD02 が全長 23.5 m、SD03 は 14 m が計測される隅丸長方形である。長辺の SD02 と SD04 は共に周溝の溝幅が 1.2 m となり、SD03 は 1.4 m とやや幅広くなっている。周溝は磁北を主軸にとり、南面に位置する周溝部は、後世の農業用水路により破壊されているが、各周溝のコーナーが検出されており周溝規模は明確である。

#### (1) 周溝遺構と溝状遺構の時代関係

周溝遺構内及び溝状遺構内での出土遺物から、溝状遺構 SD01 と SD05 が SD02 以後の遺構に先行する遺構であることは明らかである。時期的には竹の下地域で大量の須恵器が検出され、これ等と同時期の遺物が SK01 の東方の溝で検出されたこと、溝内より完形の高杯が検出されたことなどから、AD 5 世紀になろう。

さらに SD01 と SD05 は、古くは一連の溝状遺構として活用されたものと推測されるが、後世の墓域形成期に、中断されたものとみられる。

#### (2) 周溝及び溝状遺構の遺物 (全測図第 76 図)

周溝内の遺物としては、須恵器、土師器をはじめ、青磁碗と白磁や鉄器を出土している。また布目瓦片 2 点の検出を見た。

須恵器は有蓋杯がほとんどで、しかもやや大型の偏平な杯身及び杯蓋である。杯身のたち上がりは短く、大きく内傾するものがすべてであったが、内には立ち上がりがわずかに外方に外泻するものもあった。

土師器は高杯と杯で統一されていたが、須恵器と同様に破碎されており、しかも上師器は細片化が進み計測不可能である。

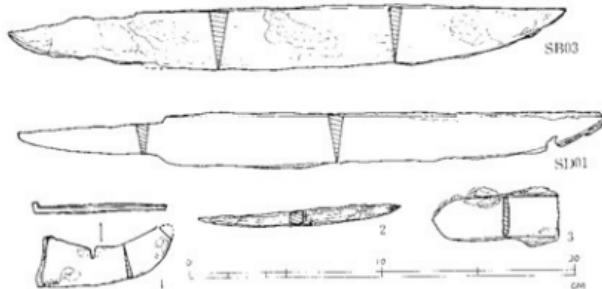
青磁碗は実測図 75 にみられるもので、器形は高台付の碗で、器表面には蓮花の文様がある。時期は南宋中期のものと推定され、鎌倉時代に相当する遺物である。宗蓮華文碗は器高 6.2、口径 16.6、高台径 5.7 cm の完形品である。出土地点は SD03 遺構の中央部、白磁皿は実測図 76 にみられるもので、器形は高台付の皿で、器表面全面に灰釉がかけられている。白磁皿は SD04 遺構の SB04 と切り合う南面位置と、溝状遺構 SD05 遺構の交叉する地点で検出されたものである。時期的には室町中期であろう。遺物は高麗皿で高麗末期の製品であろう。器高 5.6、口径 13.6、高台径 4.5 cm の完形品と 1 部破損品である。

その他に瓦器皿 1 点の完形品がある。口径 15 cm、器高 5 cm で底部は貼付による紐状高台である。器表面には指頭による圧痕文があり、口縁部外面及び内面はナデによる仕上げを施している。口縁内面はヨコナデの後、器底部から胴中央部は平行な竪ナデの暗文がみられる。猪口形磁器は口径 6.6、高台径 3.0、器高 4.1 cm の古伊万里である。

鉄器は SD01 と SD03 の遺構中央部で検出された 2 振の直刀がある。SD01 遺構出土の遺物は、実測図 72 図に示すもので、刀身全長 304 cm で、内中茎全長 7.5 cm である。刀闊が 0.2 と両面に付けられている、刀幅最大 2.5 cm である。刀身の背幅厚は 0.5 cm とやや細身の刀身となっている。

SD03 の鉄器直刀は、刀身全長 29 cm で、内中茎部は 6.5 cm である。刀部の最大幅 3.1 cm、中茎最大幅 2.3 cm で両面に間がある。刀身の背幅最大は 0.9 cm と厚手の造りとなってい。刀身の表面には木質の付着遺体が背面に認められる。出土状況は良好で、保存度もよい。両刀ともに中茎の目釘孔は認められない。

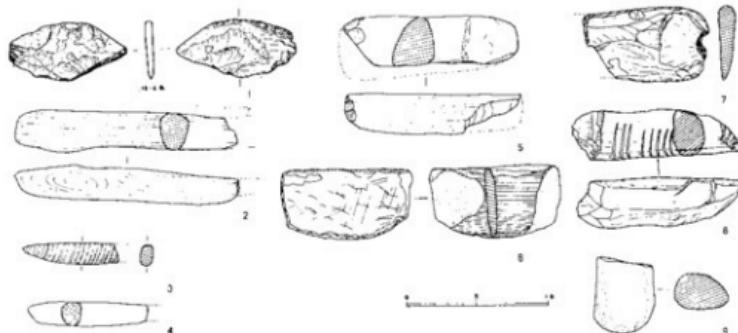
第72図 鉄器実測図



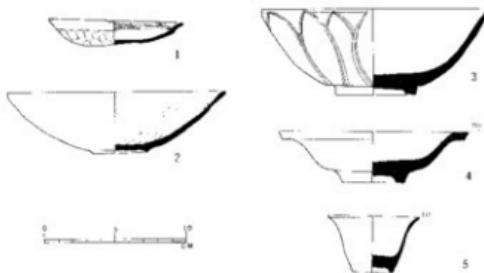
平鍬はSB02の上層部より検出された遺物で、全長8.2cm幅最大3.5cm、厚0.2cm、平様の着裝部(茎)のかえり0.5cmである。刃部は内湾し片刃である。先端部欠損、2は不明の鐵器でSB04より検出されたもので、全長10.6cm、幅0.7cmの方形である。両端は鋳化によるものかは不明であるが尖っており、やや全体的に鍋がみられる。3は欠損遺物か不明であり一端は宝珠状に尖っている。全長6.5cm、幅2.3cm、厚最大0.3cmである。SB04で検出。

#### ハ その他の遺物（石器）

第73図 石器実測図



第74図 青磁及び高麗白磁実測図



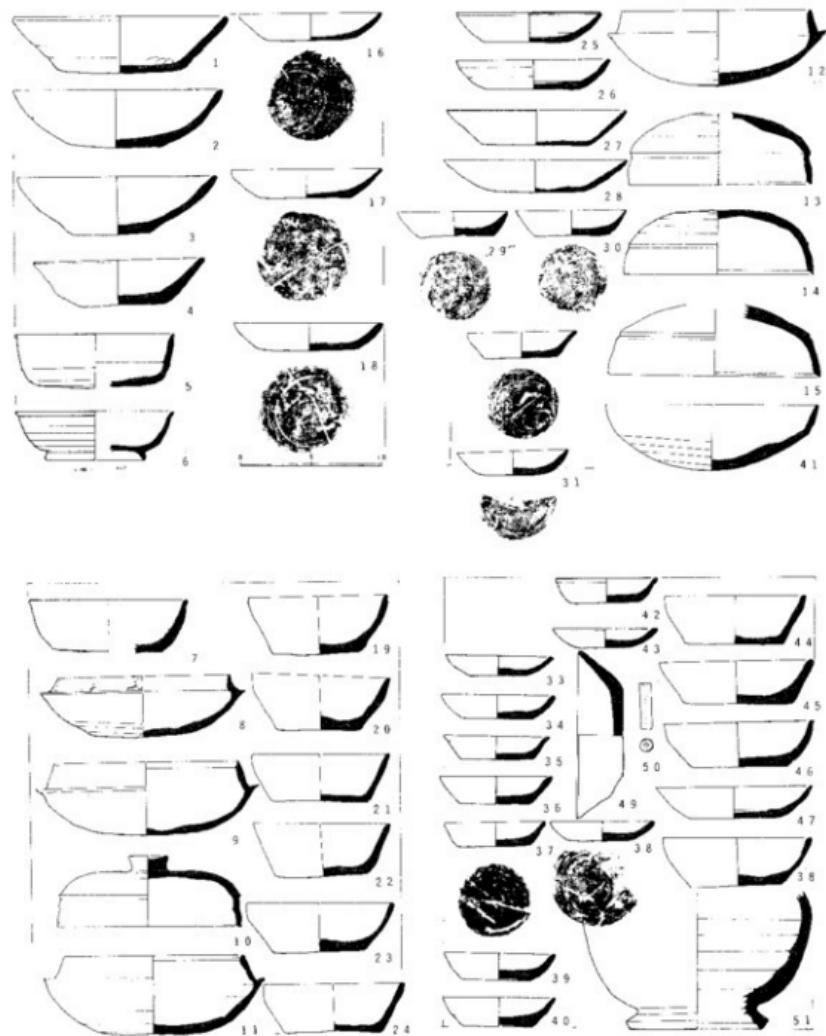
## 筋違A区B区出土の石器

種類	名 称 或 者	法 長 cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
石包丁	1 SP E 溝	長径 3.2 厚	8.3 3.2 0.6	一部欠失しているが、効鍊型の石器が想定される。断面から背面部と刃部をもつ。	両側に剝離がみられ、特に長径端部に小剥離がある。刃部はやや粗いが、刃部構成の剥離がある。	筋違B区第3層、立式岩質。 1
作業石棒	2 テリ ット 3-5	長径 粗径 厚	16.0 3.2 2.0	一部を欠失した棒状の石器である。端部にコブ状の突起部がある。断面はやや三角形。	全面を研磨している。研磨の方向は一定せず、作業過程における、使用による磨耗痕とみられる。	筋違B区第3層、縦泥片岩。 1
火明 錐	3 不明 4	長径 厚	7.0 1.0~1.5	断面を椭円形に研磨し、先端部は錐形にとがる。本部は欠損している。	全面を研磨している。先端部から右巻にラセノ状の凹線がとりまく。	筋違地区第3層、貝岩。 筋違地区第3層、縦泥片岩。 1
右 鋸 錐	5 テリ ット 3-5	長径 粗径 厚	12.5 3.5 3.0~0.5	断面三角状の石器で、先端部と側面を欠損している。先端部の片方には打撃痕があり、いま一方はクサベラ状に研磨している。	全面を研磨している。特に長径な端部は一面は円弧に、いま一方はクサベラ状に刃部作る。	筋違B区、縦泥片岩。 1
石包丁	6 5-1	長径 粗径 厚	9.5 4.9 0.7	長方形で粗径な辺に直線と斜底形に彎曲する面を作る。断面は長方形な板状である。	長径な両端の片方に自然面を残すが、両面は粗い研磨がみられる。背部も一刀から研磨。斜底状の刃部は一方には細かい剝離を、また一方からは研磨をしていている。	筋違A区、水成岩(頁岩)。 1
石包丁	7 3短	長径 短径 厚	8.8 5.2 1.2	長方形で長辺の一部を欠損している。片面は大剝離による平面である。いま一方は長辺にそう剝離がみられる。	断面にみられるように平面な大剝離面を利用した利器で、長辺の端部中央に挿入する小剝離がある。反対な背面に穿孔跡中のくぼみがある。	筋違B区、立式岩質。 1
作業石棒 ?	8 3短	長径 粗径 厚	11.6 3.5 2.3	棒状の石器であるが、長辺の内端部及び側面とともに欠損し細部は不明。	亂物の骨角は全面をよく研磨しており、その研磨面に研磨の方向とは逆に乾燥の凹線の発達が刻まれている。(使用痕)	筋違B区、縦泥片岩。 1
四 右	9 64	長径 粗径 厚	5.3 3.9 2.5	断面は卵状をしめす。長辺な石器の欠損遺物である。	全面がよく磨耗しており、作業石(たたき石)とみられる。	筋違B区、砂岩。 1

第76図 筋造B区構全測図②



第77図 篠達B区周溝内の土器と土塙墓出土の土器実測図



## VII 筋違B地区における小考

筋違A地区とB地区は遺構の上では一つの関連する遺構とみられるが、遺構の集中度合から検討した場合、遺構はB地区に片寄りがみられる。その一つには掘立柱建物遺構であり、二つには土壙墓及び土壙状遺構があり、三には長方形の周溝遺構で代表されよう。

掘立柱建物遺構はSB1～14棟と多く、しかも重複する建物遺構となっている。これら14棟の掘立柱建物遺構はそれぞれに、竪穴式住居遺構と重複するのをはじめ、土壙墓及び土壙状遺構と重層するものもある。内でも竪穴式住居跡遺構と併置される掘立柱建物遺構と、建物遺構そのものの重複する遺構もあり、実に複雑な遺跡である。

いま掘立柱建物遺構をそれぞれの棟方向から分類すれば大きく3区分され5時期に分類される。

1. 南北に棟方向をとる建物 SB1、SB8、SB9、SB7、SB11  
僅かに西にふれる建物 SB3
2. 東西に棟方向をとる建物 SB5、SB10、SB13  
僅かに南にふれる建物 SB4、SB12、僅かに北にふれるもの SB2
3. 東北東に棟方向をとる建物 SB6、SB14

また掘立柱建物遺構の距離的位置を考慮すれば、SB1、SB3、SB8、SB9、SB11の建物は、立地の条件が妥当である。いままた東西方向に棟をもつ建物跡の内、SB5、SB11、SB12、SB13があげられるが、SB5とSB4で重複する遺構を考慮すれば、SB4遺構とSB12遺構は同時期と推察されるが、建物の規模から推察すればSB4遺構とSB10遺構は共通した建物規模である。以上の内規模的な面からみれば、SB2とSB5とSB12遺構の後にSB4、SB10、SB13が建てられたと推測される。だとすれば東西棟の建物において2時期に細分される遺構となる。さらに南北方向に棟方向を取る建物の内規模的な面からみれば、東西棟の建物遺構の場合と同様に、SB1、SB3、SB8の1群とSB7、SB9、SB11の1群に分割される可能性もみられ、ここでも2時期が想定される。残るSB6、SB14遺構は1時期に建立された建物遺構としての可能性が高いことから、筋違A区で検出された掘立柱建物遺構も含めて、建物の構築された時期は少なくとも5時期の建物と推考せざるを得ない。

最後に建物遺構と時期的な関係であるが、掘立柱建物群として集落形態を取るところから、初期における建物としては、南北方向に棟並びをもったと仮定するならば、第1の時期はSB1、SB8、SB11の建物が構築され、次いでSB3、SB7の時期が推定される。第3にはSB6とSB14の時期があり、続いてSB2やSB5、そしてSB12の構築期があり、最後にSB4、SB10、SB13と筋違A区のSB1が構築されたものと推定される。この最後の時期は、国の指定遺跡である米住庵寺跡で検出された掘立柱建物遺構と規模及び、柱穴の掘り方など尺度的にも共通するものがある。

土壙墓及び土壙状遺構については、本文中に記述する処であるが、土壙墓としては大きく3形態に分類される。第一に旧米の風習を踏襲する、いわゆる素掘の直葬墓である。第二は木棺（桶）を内棺とする木棺直葬墓である。第三は火葬墓である。

第一の土壙墓では、木棺を使用したとみられる遺構は検出されていない。いずれも裸葬である可能性が大きく、なかでも副葬品を埋葬するものと埋葬をみないものとの2種に分類される。また土壙の掘り方においては、円形・方形・長方形とに分類される。第二は内棺遺構として木棺も有するが、副葬品は土師皿3枚と漆器片1という貧弱な副葬品であった。第三は火葬墓であるため副葬品については不明であるが、最下部では木質を検出しており、その木質物の上部に漆器片を検出していることから木棺に被葬者を納めたうえで火葬にかけたものと思われる。

周溝と土壙墓の関係として、茶毘行為に対する虞れから、他の地域を汚損させないという配慮からつくられた周溝であると考える。ただ収集した資料の内に前例がなく、推測の域を出ないが、火葬骨を有する周辺部には図第66図で示すごとく須恵器の環状配置がみられ、茶毘にかける以前に、何等かの祭祀行為が考えられる。また長方形の周溝の前方部（北面）は祭祀用の広場として使われていたものとも推察しうる。さらに周溝内で検出された直刀がある。直刀の出土地点は火葬遺構の直北に位置しており、明らかに他地域への汚損を恐れての行為とみて妥当であろう。さらに周溝より出土した宋蓮華文碗をはじめ、高麗皿はいざれも茶毘への墓前祭祀としての副葬品とみるべきであろう。

周溝内より検出された多くの破損遺物の内で、直刀及び宋蓮華文碗と高麗皿はともに完形品である。宋蓮華文が鎌倉中期に、高麗皿が高麗末の室町中期と比定されるところから、前述の火葬墓の時期もおのずと固定されよう。

総じて筋違地区における遺構は、堅穴式住居としての聚落形成がみられた時期から、掘立柱建物聚落群の時期へと移行した。掘立柱建物聚落時期は、細かく5期に細分を試みたが、これらの聚落群が廃絶したのちに、土壙墓としての再活用がなされたものと推測される。土壙墓は、火葬墓が形成された後に營造されたとみるべきであろう。

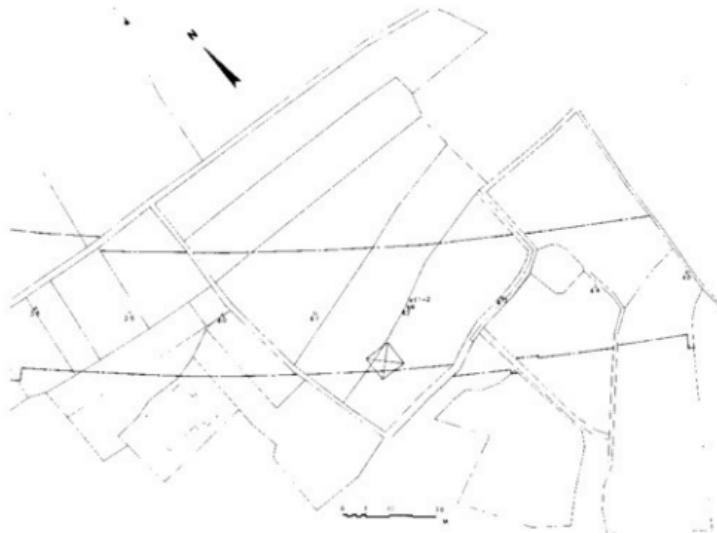
## I 星ノ岡地区の概況と遺構の概況

星ノ岡遺跡は大きく、旗立地区と北下地区に分け、さらに旗立地区を3区分してA・B・C区に、北下地区をA・B区と2区分とした。両地区は共に調査時期が梅雨時期と並行したことと、旗立地区A区は特に低地のため、灌漑用水との関係上調査の中断という事態が生じた。一方北下地区においても、灌漑用水路の確保という、最悪の条件のなかでの発掘調査であった。

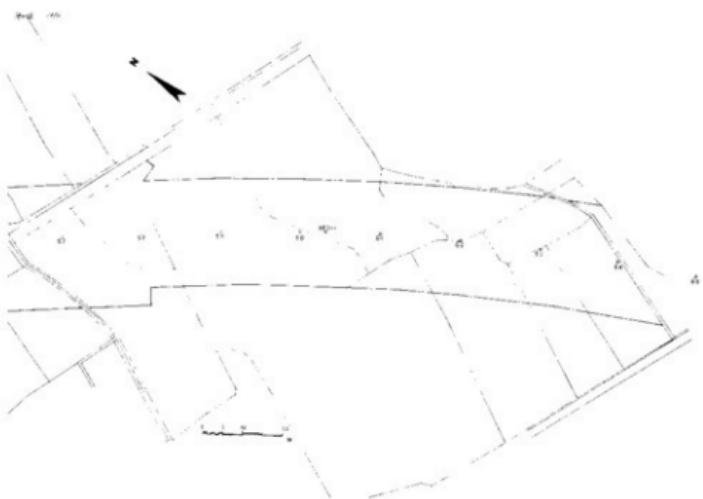
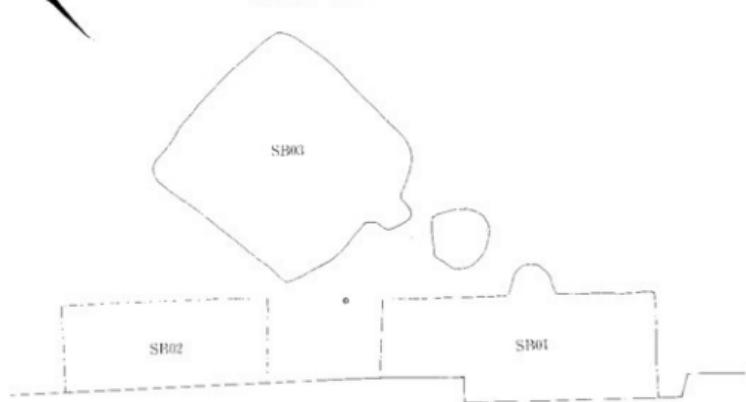
これらの諸条件のため、極度な調査区域の縮小と残土の処理に手を絞った。

旗立地区ではA区（第1図中心杭43）で竪穴式住居跡3基と泉造構及び配石造構が検出されたが、概況で述べたごとく田植の用水のため完掘には至らなかった。またB区（中心42）では竪穴式住居跡5基と溝状造構4条及び掘立柱建物跡3基、及び土壇状造構3基が検出された。C区（中心杭40～41）ではトリブルの竪穴式住居跡の外3基の竪穴式住居跡と、溝状造構がそれぞれに検出された。

第1図 星ノ岡遺跡旗立地区発掘位置図



第2図 旗立A区全測図



## II 星ノ岡旗立A区での遺物出土状況 (未掘の遺構を含む)

A区における遺物の出土は、大きく3個所に集中しており、この出土状況からみて、住居

に伴う遺物である。遺構は梅雨時期の出水と田植の作業、及びその後の排水等の諸条件により、遺構は完全に崩壊した。以上のことにより、遺物の出土状況と遺構面について記述したい。

全測図第2図は主な遺物の出土状況図であり、あらかたの平面プランを検出した状況図である。

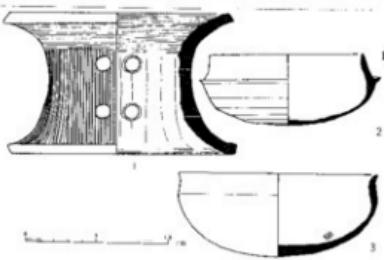
SB03の平面プランは、隅丸の方形プランをもつ竪穴式住居跡で、入口部を北に有した住居が考察される。一方SB01とSB02では方形、若しくは長方形の住居であろう。SB01では西側面に凸出面が検出されており、SB03と同様に入口部と推定している。またSB03の南面に広がる遺物は、どのような遺構に伴うかは未確認であるが、ただこの付近は地山面である洪積層は大きく傾斜しており、この傾斜面上には黒色土層（火山灰土）の堆積がみられ、南面に広がる北下地区とはU字状の窪地と泉を隔てている。それ故にSB03の遺構南面での出土遺物は、その殆どが黒色土層に包含されており、耕作造成時の整理による埋蔵か、若しくは水源池の通路への捨石的遺構遺物とも推測される。

#### （1）旗立A地区の土器

旗立A地区 SB02で検出された遺物 No. 2 は須恵器の有蓋の坏身である。法量は口径 10.9、受部径 12.9、器高 5.1、口縁部高 2 cm でマキアゲ、ミズビキ成形である。口縁部の立ち上がりは僅かに内傾し、口唇端内面はナデによる内傾がみられる。端部は円面である。底部は丸底で回転ヘラ削りが施され、受け部は上外方にのび端面は丸面である。

No. 3 は SB02 で共伴した土師器である。丸底の底部より大きく上外方にのび、体部最大径 14 cm で上方に立ち上がったのち、口唇部でふたたび外反する。口唇端面は円面である。土器の内外面はともに横ナデ整形である。口唇直下にナデによる陵が残る。内壁面に粗痕 2 粒がみられる。法量口径 14.2、器高 6 cm である。No. 1 は SB01 出土の器台形土器である。脚部に 2 段の直径 0.9 cm の円孔を 2 方向に穿っている。脚基部から脚据部にかけては、櫛状工具による荒い縱方向の整形がなされている。脚内壁面にはシボリ目が残され、上部受部の内外面はナデ調整であり、脚据部の着地面にも横ナデ調整がみられる。上部受部径 15.4、下部端部径 15.8、器高 10 cm、脚柱部径 10 cm の小型の器台で焼成は良好で帶赤の黄褐色を呈する。

旗立A地区の土器実測図

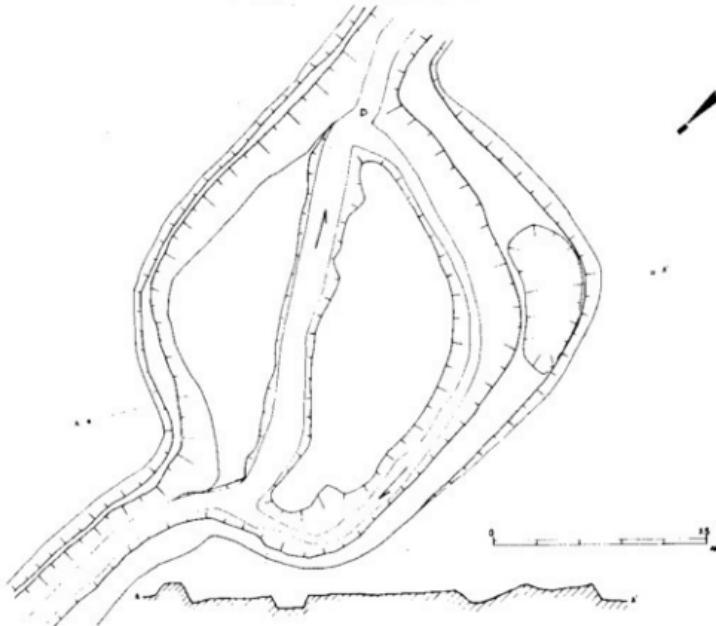


## (2) 沼状遺構(ぬるめ遺構)

星ノ岡遺跡の中央部に1基の泉と1基の沼遺構があった。この地点は北下地区と旗立地区の地溝をなす位置で、現在3基の掘り抜き井戸が設置されており、夏は大いに吸水効果をあげている。沼遺構は泉のすぐ東の位置にあり、冬季は枯れて湿地状を呈する小沼で芹がよく繁茂していた。沼は図(3)に示す状態にあり、沼の中央部を灌漑用水路があり、周辺部が、僅かに高く断面図にみられる状態にあった。周囲の堤防は農道をかねた小道がつけられているが、何れの堤防状の法面にも桟木等の使用はみられなかった。この沼遺構は現に水田として利用されているが、この水田には丘陵よりの底水があり、水温が下がりがちであることから、水田の水口に水溜めを設けて、耕作地の水温を高めるために工夫した設備であると耕作者の説明をうけた。

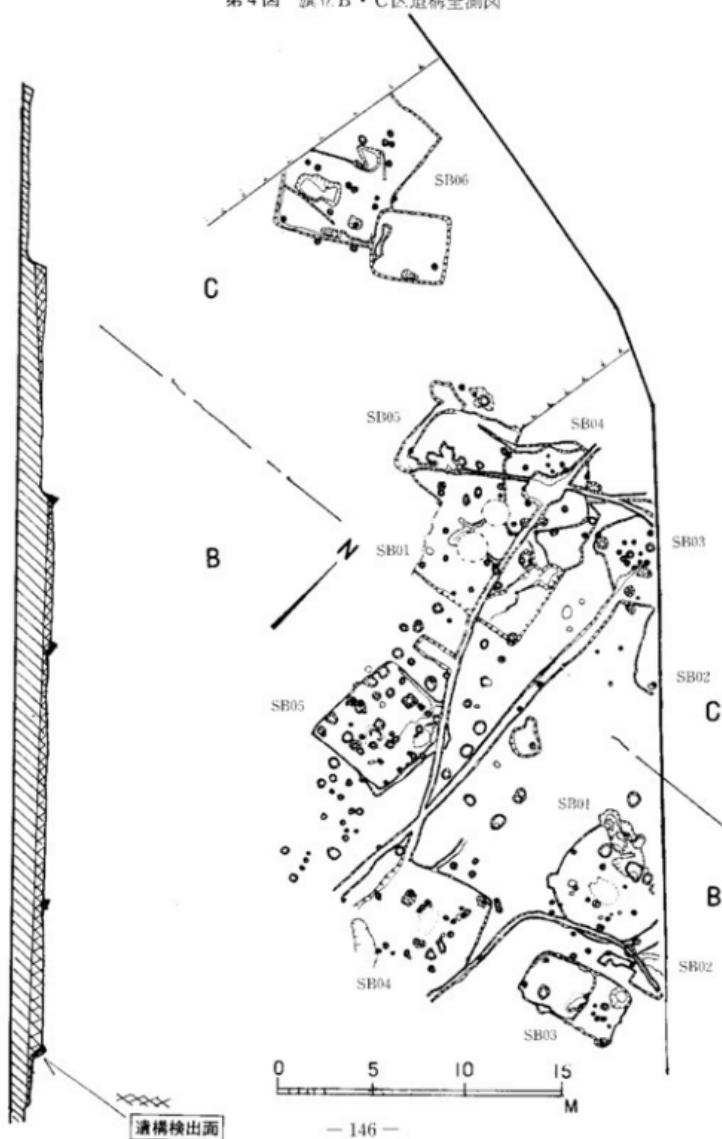
ぬるめ遺構の規模は $5\text{m} \times 4.5\text{m}$ のほぼ方形であり、土堤は20cmのカサ上げをしており、上堤の南面から西法面の裾部に溝がつくられている。この溝は直進する水を反流させる目的によるもので、D地点を塞ぐことにより水は反流して、日照のよい法面を逆流して暖められ、さらに水位は増して平坦部に広がりながら、さらに暖められて水田に注がれるように工夫されている。

第3図　ぬるめ遺構平面断面図



### III 星ノ岡旗立B区での遺構と遺物

第4図 旗立B・C区遺構全測図

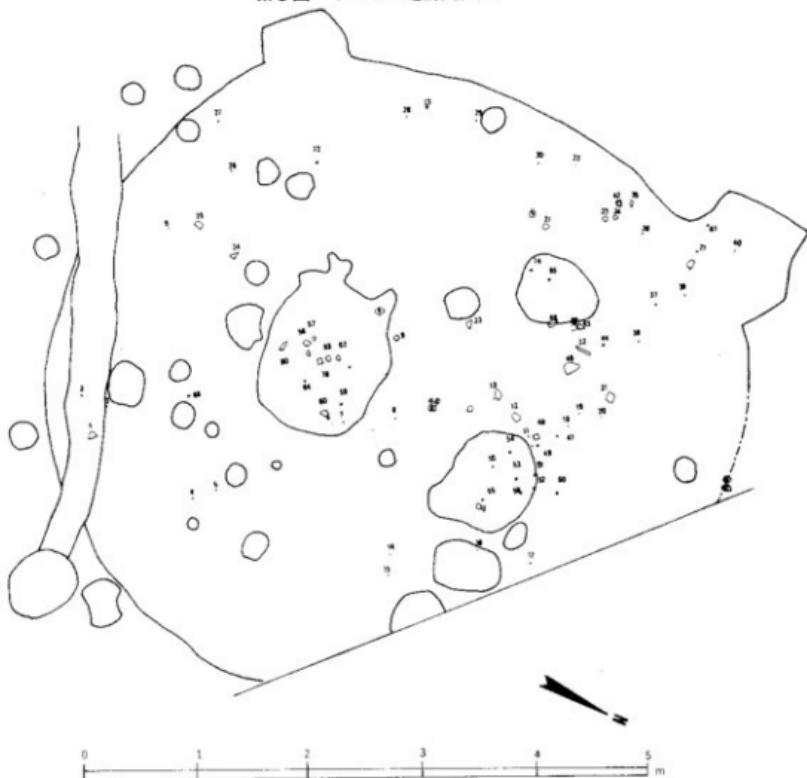


## 1 壺穴式住居跡遺構と遺物

### (1) 1号壺穴式住居跡 SB01 (第5図) 図版(63)

SB01は実測図(6)で示す円形の壺穴式住居である。主柱は4本で190~200cmの方形である。主柱の中央部やや南寄りに長径130cm、短径100cmの楕円形をした炉跡がある。壺穴の規模は直径570~600cmの僅かに楕円形を呈する。入口部は西に約80cm幅の突出部がみられ、それと推定される。出土遺物は図に示すごとく、北壁面側と炉跡に集中して検出された。特に炉跡の灰層中より桃実が検出されている。

第5図 SB01 遺構実測図



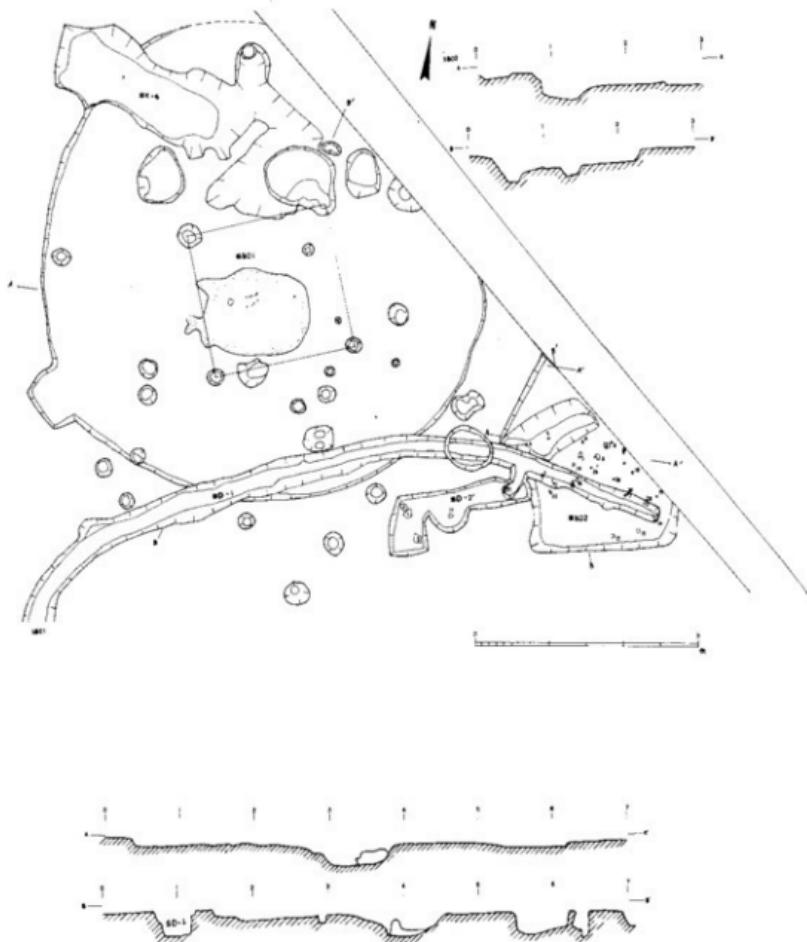
## SB01の出土遺物

〔空白部は破片遺物である〕(単位:cm)

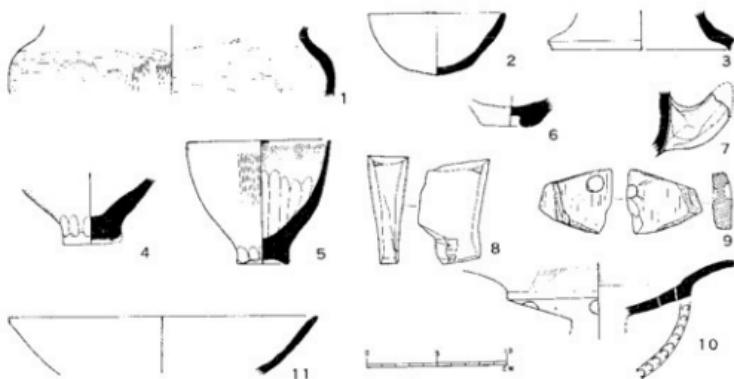
遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深 度	13.5	8.7	8.0	6.5	4	5.5	10.0	8.5	6.0	5.0
遺物の器種	楕円土器								口縁部	
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深 度	-0.5	1.0	0	5.0	5.2	5.5	5.0	1.7	-2.5	-1.3
遺物の器種	石包丁片									
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
深 度	0.5	-1.5	3.5	1.0	1.5	4.0	4.2	1.2	-2.5	-0.5
遺物の器種	馬蹄の环部			把手		コップ状	高脚部			
遺物番号	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
深 度	1.0	2.5	2.8	1.0	3.2	2.2	-0.3	0.3	3.5	0
遺物の器種				把手		肩部	底部			
遺物番号	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
深 度	5.4	7.9	9.4	8.5	11.5	12.4	7.6	7.8	9.9	10.3
遺物の器種										
遺物番号	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
深 度	13.4	20.0	27.5	31.4	32.1	27.9	14.5	21.8	14.7	16.6
遺物の器種										
遺物番号	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
深 度	14.8	28.0	14.4	20.4	13.6	20.8	20.0	28.0	22.0	37.5
遺物の器種										
遺物番号	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
深 度	32.0	14.1	11.4	16.4	2.4	7.0	18.4	13.4	13.8	19.0
遺物の器種										
遺物番号	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
深 度	4.5	13.0	10.2	19.0	15.0	13.0	8.2	11.0	19.7	5.8
遺物の器種	石								砥石	石斧

SD1の造構は、SB01の施肥後にその南端を穿ったものであり、明らかに後続する時期のものである。

第6図 SB01 造構実測図



第7図 SB01遺物実測図



(2) SB01に伴う遺物の様相

検出された遺物は少なく、後世における地下げがみられ、復元可能な土器は皆無に近い内で、図7にみられる2と5は完形品である。本遺構で検出された底部3点の内2点はともに基底部に指頭による押圧痕がある。細部につき観察すればやや両者の指頭押圧痕の位置がずれている。4では基底部を左右よりつまみ、基底部をすぼめる効果がみられるが、これに対して、5では底部の高台部をつまみ出す効果がみられる。6の底部は逆に平底の内部に指頭痕があり、底部外面より穿たれる円孔への押圧効果がみられる。また7にみる把手が出土しており、土鍋か瓶の把手かいずれかであろう。また、高壇形土器も3、10、11と破片が出土している。11の口辺部は土師器の色彩が強い。1の壺形土器は肩張りのある破片であるが、内壁面は入念なヘラ研磨が施されている。石器片も数点検出されているが、8、9にみる石器は使途が明確である。8は金属器を研磨する砥石であり、9は緑泥片岩を利用した未完成品である。さらに本遺構の北壁面にはSK4の土壙状遺構長径2.25m、短径0.8m、深度最大0.4mがあり、また掘立柱建物の柱穴と推測される柱穴遺構5基が穿たれているなど、北壁面での遺構の搅乱は激しい。また南壁面側ではSB02より掘削されたSD1の溝状遺構で切断されているが、SD1遺構は当遺構より時期を異なる遺構である。

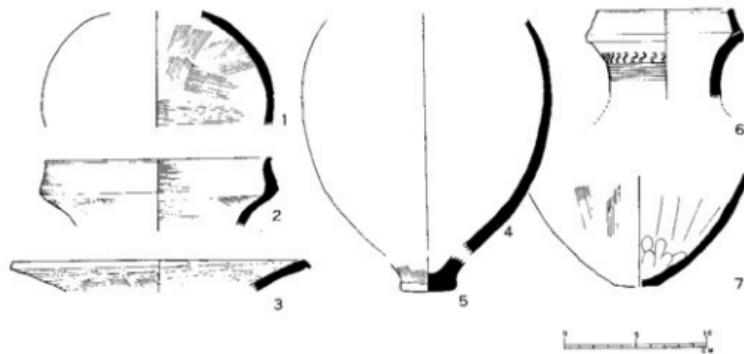
1号窓穴式住居跡 SB01 の出土遺物

種類	番号 出土地点	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
複形土器 片	1	36	頭部径 18.5 体部径 23.2 現器高 5.0	肩部よく大きく内に屈曲して頭部をつくる。	内面へラ研磨。外表面クン状へラ工具による整形後へラ研磨を施す。	焼成良好、胎 土密。	1
小 型 鉢形土器	2	6	口径 9.7 器高 4.5	丸底の底部より内側して立ちあがったのも、上外方向にのび、口唇端は円面。	内外面ともにナデ調整、やや器面に凹凸をもつ。	焼成良好、胎 土密。	1
高杯脚部 片	3	27	脚根部径 12.6 現器高 2.8	脚根部片で脚部高0.7cmより大きく屈曲して、脚根端で着地面をつまみだし直立する凹面である。	外面ともにナデ調整である。	焼成良好、胎 土密。	1
複形土器 底 部 片	4	37	底部径 4.0 器高 5.0	平底の基底部をつまみ、着地面は凹面な底盤をつくる。基底部より上外方向にのびる。	内外面ともにナデ調整、基底外周に沿用文をめぐらす。	焼成良好、胎 土密。	1
コップ型 土 器	5	46	口径 19.2 器高 8.8 底部径 3.6	平底の基底部面をつまみ、着地面は凹面な底盤をつくる。基底部より上外方向にのびたのも、内側で立ちあがる。口唇端面は減厚し円面。	内面は底部よりロ刃部位にかけて指頭ナデあげによる整形、外表面はクシ状へラ工具でタテに整形。口縁部は内外面ともにコロナデ調整。	焼成良好、胎 土密。	1
平底土器 片	6	38	底部径 4.0	平底の底盤片、外部底部中央部に径1cmの円が穿たれた。使用目的は不明。	詳細は不明。	焼成良好、胎 土密。	1
把 手	7	34	長径 4.5 短径 3.0	体部に貼り付けられた把手である。外表面に不定形で不規則なヘラ削りがみられる。端部欠失。	把手の接着は同質の粘土で貼り付け。	焼成良好、胎 土密。	2
砾 石	8	S	長径 7.0	一見方形をなす小型の砾石である。長径な4面は何れも使用されている。一部欠失。		頁岩である。	
	9		厚 1.2~3.0 無径 4.5				
石包丁形 石 器 片	9	12	長径 5.0 無径 4.5 器厚 1.3	台形の欠損遺物であり、未完成品である。	穿たれた円孔にずれがあり、穿孔途中である。背面はすでに研磨されている。	砾岩片岩。	1
高 杯 形 土 器 片	10	12	有段部径 8.0 脚基部径 4.0	扁平な内壁する基部で大きく有段をつくる。有段部で外反するロ線底。杯底部に4方向に円孔を穿つ。有段部下面にC字状の竹管文を施す。	ロ線底内面はコロナデ調整、外表面はクシ状へラ工具による調整。脚部は接合部にハの字のヘラ痕を付す。	焼成良好、胎 土は密、0.1の 粒子を含む。 茶褐色。	1
高 杯 形 土 器 片	11	22	口径 22.0 現器高 4.0	杯形のロ線片で、基部に僅かな肩部がみられる。上外方向にのびてロ唇端面は円面である。	内外面ともにコロナデ調整。	焼成良好、胎 土に若干の粒 子。 帶黃茶褐色。	1

(3) 2号堅穴式住居跡遺構 SB02 (第6図)

SB02はトレンチ(試掘溝)により検出された遺構である。遺構は南法面ではやや方形を呈するが、北法面は多角形の様相がみられる。遺構中央部にSD1の溝状遺構が、当遺構内より施工されSB01の南壁面を穿って西流している。遺構内では柱穴は検出されなかったが、植物の炭化遺物(木炭片)の外に須恵器及び須恵器片をはじめ、多くの土師器片が出土している。

第8図 SB02 土器実測図



SB02の出土遺物

(印白は破片遺物) (単位: cm)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深 度	9.0	8.0	6.5	9.0	11.0	8.5	6.0	1.0	9.2	9.6
遺物器種	芯形	口縁	須恵器 片				須 器 片	須 器 片		
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深 度	11.7	11.0	8.0	14.3	12.6	10.0	11.0	4.7	31.0	30.5
遺物器種				底 部		チ ャ ツ	滑 石			
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
深 度	18.7	20.2	33.0	20.2	18.0	16.0	22.3	23.2	21.5	14.3
遺物器種		須 器 片			須 器 片	口縁部			須 器 片	木炭片

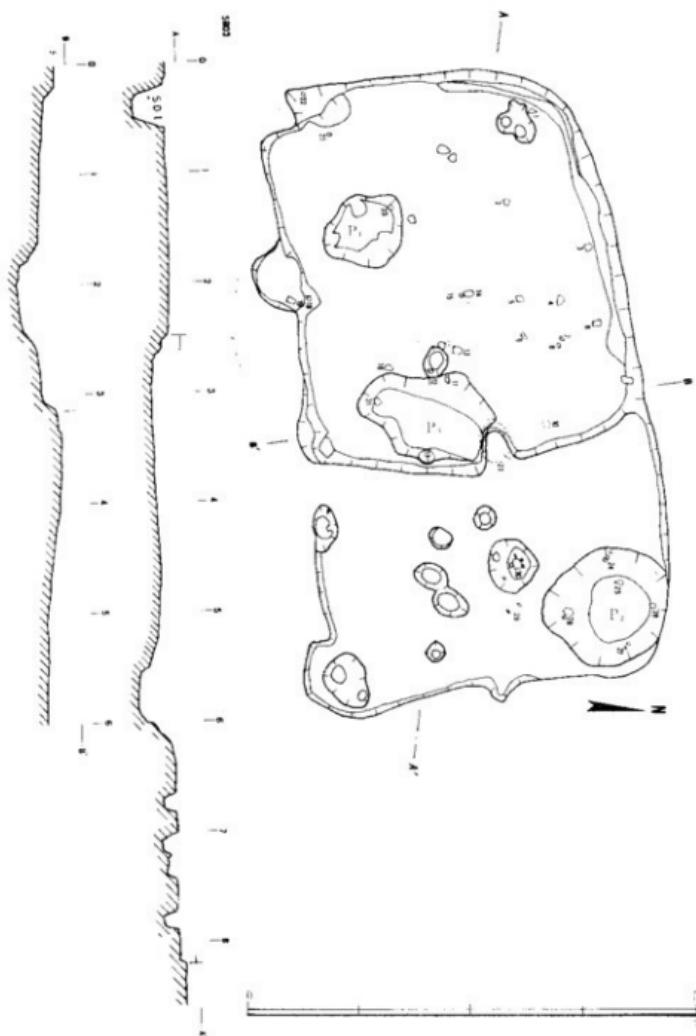
## 2号堅穴式住居跡 SB02 の出土遺物

種類	番号	出上	法 尺cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
変形土器 口縁部	1	1	頭部 体部径 器高	6.5 16.5 8.0	球形の体部が推定される。口縁部と底底を欠失。	輪削手法による。体部内面はクシ状ヘラ工具で整形、外側はナデ調整である。	焼成良好、胎土に0.2以下の粒子。	1
変形土器 口縁部	2	8	口径 頭部径 器高	16.1 12.0 5.0	複合する口縁で、体部を欠失する。頭部で上外方向にのび、屈曲して外反したのち、ふたたび内に黒曲し、内傾する口縁部をつくる。口辺部で僅かに外反して、口両端面を丸くおさめる。	輪削手法による。口縁部内面は、下位ではクシ状ヘラ工具による斜向と横向の整形、外側の下位はタテ方向の整形、口縁部上部は内外面とともにタコナデ調整。	焼成良好、胎土に0.2以下の粒子。	1
変形土器 口縁部	3	2	口径 現器高	11.5 2.0	口縁部の遺物。ラッパ状に上外方向に開く。口唇端面を外傾平面に押さえ、下端部に縫をなす。	内外面はともにヘラ研磨を施す。外表面にヘラ研磨前にクシ状ヘラ工具による整形が施かに残る。	焼成良好、胎土に0.2以下の粒子。	1
変形土器 口縁部	4 5	12 14	体部径 底部 現器高	17.8 4.0 19.5	口縁部を欠損する。平底の基底部より上外方向にのびたのち、大きく内側気味にたちあがり、肩張りの少ない卵形の体部である。	やや剝離がみられる。内外面ともにナデ調整、基底部にクシ状ヘラ工具による整形を残す。	焼成やや軟、胎土に0.2以下の粒子。	1
変形土器 口縁部	6	11	口径 頭部径 現器高	9.6 8.0 6.4	複合する口縁で体部は欠失する。頭部でたちあがり上外方向に外反気味にのび、ふたたび屈曲して内傾する口縁部をつくる。口両端面は円弧。頭部にも多くの沈線をめぐらし、上位にS字の施文。	全面タコナデ調整である。複合の口縁部に接合部がみられ有段をつくる。	焼成やや軟、胎土に0.2以下の粒子。	1
変形土器 底部	7	1	底部 現器高	3.0 7.8	僅かな平底で、その基底部より内側気味に上外方向にのびる。	内部の底部位は指頭による整形、上部はヘラ削りによる成形、外表面はクシ状ヘラ工具による整形である。壁面に輪積みが残る。	焼成やや軟、胎土に0.2以下の粒子。	1

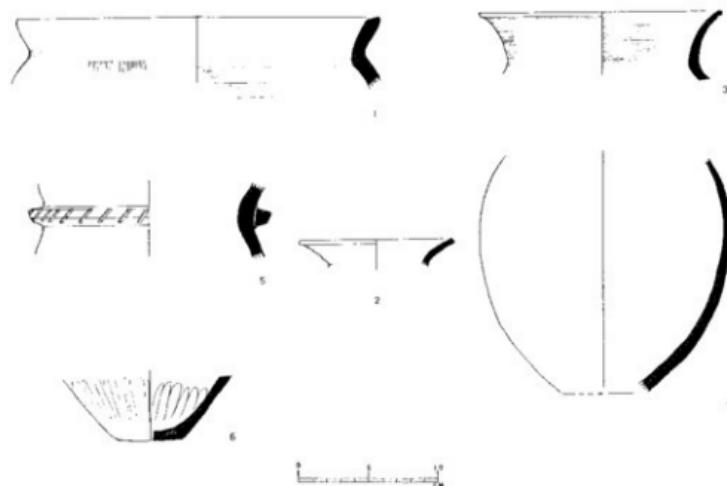
## (4) SB03 遺構 (第9図)

SB03の遺構は、長方形の東西棟の堅穴式住居跡でやや隅丸である。主柱は中央にみられる柱穴P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>がある。主柱は床面の中央部より、僅かに東壁面に片寄りがみられる。主柱の心心間距離150 cmが計測される。堅穴の3隅にはそれぞれ柱穴がみられる。住居への入口部は、南壁面中央部にみられる80 cmの平坦面があてられよう。床面中央部に枕木が検出されているが、その周辺部に遺物は特に多く集中していた。また床面は二間に区画され、一間は350×270 cmの9.45 m<sup>2</sup>と200×270 cmの5.4 m<sup>2</sup>に上段と下段の二間となっている。床面に穿たれた3個の土壤状遺構が検出されているが、検出された遺物ではなく、使途不明の土壤状遺構である。これらの外に中規模の土壤状遺構P<sub>3</sub>では復元可能な土器1個体を出土している。

第9図 SB03造構実測図



第10図 SB 03 上器尖測図



SB 03 の出土遺物出土状況

空白は破片遺物 (単位: cm)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深 度	18.6	13.5	13.7	10.5	12.2	7.0	5.9	11.6	9.5	5.3
遺物の器種	須恵環			口縁部	頸 部	鉄 片				
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深 度	7.2	7.2	11.7	15.0	15.8	8.0	10.2	10.5	11.0	28.5
遺物の器種	口 縁	体 部 片		須 恵 器 片		銅 部	須 恵 器	環 槌 片	口 縁 部	
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
深 度	18.5	12.2	4.6	6.6	27.8	10.2	10.3	9.0	12.2	12.0
遺物の器種		須 恵 片			底 部		須 恵 器	口 縁 部		
遺物番号	31				1	2	3	4	5	
深 度	21.5			ニット 内 の 遺 物	14.0	8.0	11.0	19.0	0.0	
遺物の器種				須 恵 器 片	#	#	#	#		

## 3号堅穴式住居跡 SB03 の出土遺物

種類	番号 図版番号	長さcm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
變形土器 口縁部	1 29	口径 25.7 頸部径 23.7 現器高 4.5	ぐの字は縁で口唇端面は水平な平面でやや内に傾く。	口縁部は内外面ともにナデ調整である。体部内面はヘラ削り整形で、外縁はクシ状ヘラ工具による整形後ナデ調整である。	焼成良好。胎土に0.3以下の粒子。	1
變形土器 口縁部	2 20	口径 11.0 頸部径 7.1 現器高 2.6	頸部より大きく上外方向にのびる口縁で、口唇端面は外に傾斜する平面である。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好。胎土に0.2以下の粒子。	1
變形土器 口縁部	3 5	口径 17.2 頸部径 13.5 現器高 4.5	頸部より大きく外輪しながら上外方向にのびる口縁で、口唇端面は外に平面をなす。口唇端直下に1条の凹線をめぐらす。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好。胎土に0.2以下の粒子。	1
變形土器 全体部	4 12	体部径 17.7 現器高 17.0 底盤推定 5.0	口縁部と底盤を欠失するが、平底の底盤が推定される。小さい平底より内輪しながら体部をつくり、胴長を筋鉢形である。胎土厚は上方に向かい減厚する。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好。胎土に0.2以下の粒子。	1
變形土器 頸部片	5 6	頸部径 15.0 現器高 5.5	頸部に断面台形状の内帶をめぐらし、突唇上端面に1cm間隔に施文あり。	頸部内面に僅かにヘラ削りがみえる。突唇は貼り付けで、施文はクシ状ヘラ工具の刺突文である。他面はナデ調整。	焼成良好。胎土に0.2以下の粒子。	1
變形土器 底盤部	6 25	底盤径 4.8 現器高 4.8	平底の基底部より上外方向にのび、ごく僅かに内輪している。	底部内面は入念な指頭による#ツ方向にナデあげている。外面は0.3cm幅のヘラ研磨による調整である。	焼成良好。胎土に0.2以下の粒子。	1

## (5) SB03 の遺物の様相

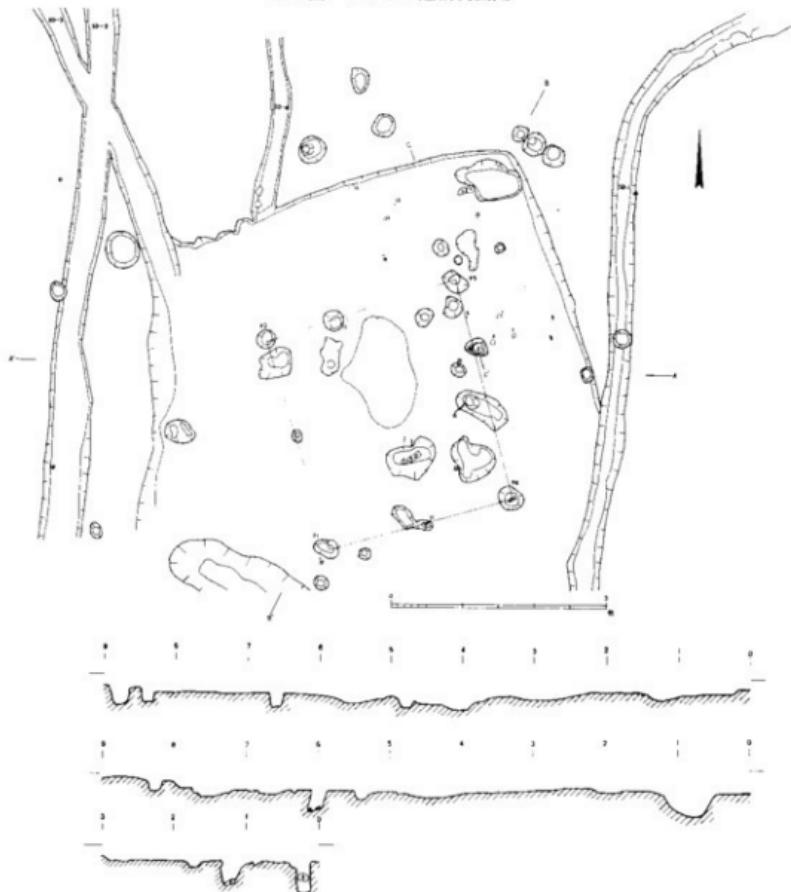
SB03 の遺物出土状況にもみられるように、土師器と須恵器の深度はいずれも同一文化層に包含している。第4図の全測図に示す遺構断面図からも明瞭である。遺跡全面が耕地改良により、遺構上面は削られ遺物はほとんど細片化され、わずかに実測可能なるものは第10図にかかげたものである。須恵器は7点の出土をみながら計測に必要条件みたすものは皆無である。観察する限りでは第22図の10、11に類似する土器である。P<sub>3</sub>出土の土器は第10図1の口縁部を持つ土器で器高28cm、口径30cmの変形土器で底部は欠失しているが丸底と推測される。

(6) 4号竪穴式住居跡 SB04 遺構 (第11図)

SB04は、竪穴の東壁面はSD2により搅乱され、北壁面ではSD3とSD4の溝が住居内に流入している。特に西壁面はSD4の影響が強く、竪穴の壁面は不明である。また南壁面は後の水田による畦と一致しており、耕地の造成により壁面は削平されて不明である。

住居の主柱は4本で、何れも床面よりさらに-40cm前後の掘り込みをみる柱穴をあてた。

第11図 SB04遺構実測図



主柱の心心間距離は、東西方向は 280 cm 等間隔で、南北では 280 cm と 300 cm が計測され、西側列の南北柱列がやや長くなっている。住居の規模は主柱から壁面距離で 150 cm が共通して得られるため、住居の床面積は 6 m<sup>2</sup> 内外の規模と推定される隅丸方形である。住居の主軸方向は北 15 度西を指向している。

炉跡は主柱の中央部をやや北に寄る位置で南北に長軸をとる楕円形である。炉跡の南に 30 cm 離れて楕円形のビットが検出されたが、このビット内より砥石（実測図 12 の 6）が出土した。

#### （7）4号竪穴式住居跡出土遺物の状況

住居内の遺物は、土師器を中心とする遺物である。遺物の出土状況は第 11 図に示す出土状況であるが、特に集中的に出土をみた炉跡の周辺をはじめ、東壁面側がより濃密な出土状況であった。

#### （8）SB04 の遺物

##### イ. 土 器 項

1 は高杯形土器で口径 16.4 cm、杯部高 4 cm の欠損遺物である。外身気味な底部に有段をつくった後内身気味に大きく外反する口縁部をなし、口唇端面は丸くおさめている。器表面は底部及び口縁部共に捺描きによる整形がみられる。器の内壁面は入念なへら研磨で仕上げている。焼成もよく胎土も精選されている。

3 と 4 は小型の壺形土器の体部片である。3 の底部 2.3 cm、器高 4.5 cm で胸部最大径を下がる部分の欠損遺物、4 は底部 2.0 cm、器高 4.7 cm の欠損遺物であるが、胸部最大径は 7.2 cm が計測され 3 よりさらに小型の器と推定される。4 の器表面には斜向の叩き目と横走行の櫛状の施工具によるナデがみられ、器内壁面では指先による指頭ナデ痕がみられる。

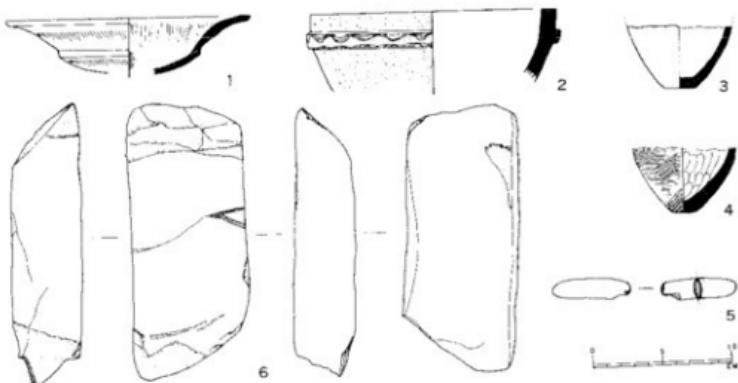
##### ロ. 石 器 項

5 は断面鈎錐形の砂岩で全面はよく磨製されている。先端部が欠除しているため不明であるがキリ状の石器が推定される。現在長 5.5 cm。

2 は石質は滑石である。口径 17.5 cm で口縁部の器厚 1.2 cm を有し、口縁直下 1.4 cm 位直に幅 1 cm の長方形（断面）の凸帯をめぐらし、突帯の上下の稜線部分を指頭間かくに凹面体の刻みが施されている。突帯部より急激にすぼまり丸底の底部をなすものと推定される。現器高 6 cm、推定復元器高は 8 cm 内外とみられる。器表面には媒煙が付着している。石製鍋形器物である。

6 は住居のビット内より出土した砥石である。長径 19.5 cm、短径 4.5 cm、厚味 8 cm と大型の砥石で四面は何れも研磨面としての使用痕がある。石質は粘板岩で俗にいう伊予砥である。

第12図 SB04 遺物実測図



(9) 5号堅穴式住居跡 SB05 の遺構図 13 図版 (64) の下

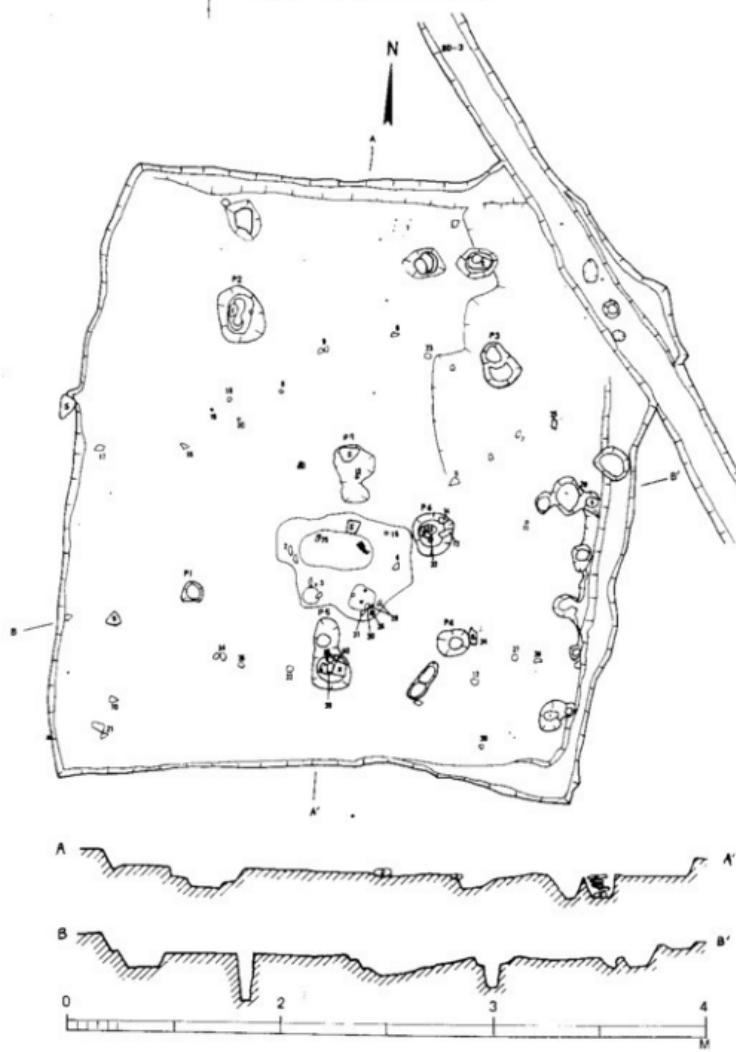
SB05は全測図(4)に示す位置で、SB04と近接した住居跡である。住居の規模は、東西5m南北に5.5mのやや長方形の平面プランである。主柱は4本で弓助屋根が推定されよう。主柱間の心心間距離は、東西列の250cmに対して、南北列は275cmが計測される。北壁面側に溝が穿たれており、旗立地区は全体にC・B・Aへと緩斜面をなす地形である。こ

SB05の遺物出土状況										空白は破片遺物 (単位: cm)		
遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
深 度	3.2	6.6	2.6	4.5	2.8	2.0	2.0	2.0	5.5	6.5		
遺物の器種	环	身	環	身								
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
深 度	6.5	5.5	0.5	5.0	9.0	6.6	4.0	2.5	2.0	6.0		
遺物の器種					盆	盆					鉢	皿
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
深 度	0.0	3.5	6.2	4.0	2.0	7.2	14.4	8.3	26.5	26.0		
遺物の器種			面	石	紙	石包丁	浅	鉢	盤	盤	片	片
遺物番号	31	32	33	34	35	36	37	38				
深 度	7.0	30.0	8.0	15.5	12.5	9.5	9.0	3.4				
遺物の器種		紙	石	碗				盤	3			

の緩斜面による入水を防止した溝であろう。

SB05の東壁面には、50 cm の等間隔の枕穴が検出されており、しかも東壁面の前面に僅か

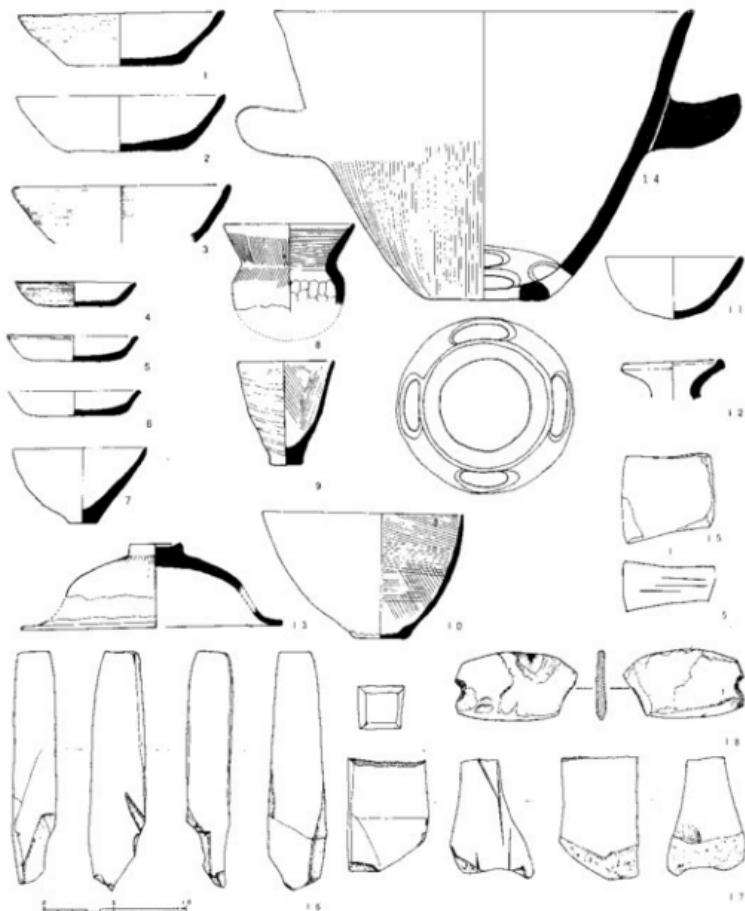
第13図 SB05 連携実測図



な有段が認められる。この状況を庇の切り上げられたことによるものと推定している。等間隔の杭穴は、このための切り上げ枠の支柱とみることができよう。入口部は東面の北角に設置されたものと推定される。

SB05に伴う出土遺物は、土師器を中心とする遺物である。

第14図 SB 05 遺物実測図



出土遺物では、特にピット5内に集中して出土した遺物があり、No.37・39・40は3枚の土師皿を重ねて出上している。その遺物の上部を扁平な石で蓋をした状態で収蔵されていた。またピット6では、ピットそのものが深く掘り込まれており、底部付近には炭化した端部をもつ薪片が數本検出された他に、図版第68図の軽石が検出された。ピット7では不定形の浅い凹みがあり、この凹みの北端部と、炉跡の北法面部に同様な扁平石が検出されている。

#### SB05出土遺物

種類	番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
杯	1 2 の 1	口径 14.5 の 器高 3.7 底 部径 8.0	平底の基底部より上外方向に やや外縁してのびたもの内縫 し、口唇部を丸くおさめる。	内壁面ヨコナデ、外表ロ線部 ヨコナデ調整、底部ヘラ削り 整形。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
杯	2 2 の 3	口径 14.8 の 器高 4.0 底 部径 8.3	平底の基底部より上外方向に のび、ロ唇端面はにぶい縫を なす。	内外面ともにナデ調整、底部 ヘラ削りによる整形、底盤は 基部に向かって肥厚。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
杯	3 3 の 4	口径 15.5 の 器高 4.0 底 部径無定 9.5	平底の底部を欠失する。基部 より上外方向にごく僅に内 縫してのび、ロ唇部は丸くお さめる。	内外面ともにヨコナデ調整で ある。底部ヘラ削り。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
杯	4 37	口径 8.5 器高 1.8 底 部径 5.5	平底の基底部より上外方向に 短くのび、ロ唇端部は丸くお さめる。	内外面ともにヨコナデ調整で ある。底部ヘラ削り。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
杯	5 39	口径 9.3 器高 1.8 底 部径 6.8	平底の基底部より上外方向に 短くのび、ロ唇端部は丸くお さめる。	内外面ともにヨコナデ調整で ある。底部ヘラ削り。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
杯	6 40	口径 9.2 器高 1.8 底 部径 6.5	平底の基底部より上外方向に 短くのび、ロ唇部で鋸かに外 反する。嘴部は半円をなす。	内外面ともにヨコナデ調整で ある。底部ヘラ削り。	焼成良好、胎 土精密。 黄褐色。	1
小型鉢形	7 19	口径 9.5 器高 5.3 底 部径 2.0	小さい平底の底部より上外方 向にのびあがったのロ唇部 で後かに立ち上がり、ロ唇端 面は深い。	手づくね上器で、底部よりロ 線部にかけて頻次減厚する。 内尚入念なヨコナデ、外面は 指頭痕を残す程度のナデ調 整。	焼成良好、胎 土に0.2の粒 子あり。底部 付近に墨斑 あり。	1
小型丸底 壺	8 2	口径 9.4 器高 7.0 底 部径 8.5	丸底の底部欠損。球形の体部 で張出のすばまりは少ない。 ロ繩は頭部で大きく屈曲し、 上外方向にのびる。ロ唇端面 は円面をなす。	体内部に指頭圧痕を残す。 ロ繩部内面はクシ状ヘラ工具 によるヨコ描き、器表面は輻 向にクシ状ヘラ工具によるタ テ整形。	焼成良好、胎 土は密。 橙色。	1
コップ形	9 3	口径 6.8 器高 7.5 底 部 2.4	平底の底部から上外方向に のび、ロ唇端面は丸くおさめる。	底部の折十厚、体部の約4倍 である。内壁面はクシ状ヘラ 工具で調整、外表面は斜行の タタキ目文による整形。	焼成良好、胎 土密。	1
碗 形	10 33	口径 14.3 器高 9.0 底 部 3.7	小さい平底の基底部より大き く内縫して上外方向にのび、 ロ唇部でやや胎厚を減じて丸 くおさめる。	外表面はヨコナデ調整、内壁 面はクシ状ヘラ工具による整 形、基底部に肥厚した突起部 が一隅する。底盤はタキニ による平底整形で、かえりが基 部に見える。	焼成良好、胎 土は精密、キ ミ斑がある。 帶赤褐色。	1

種類	番号	法	直cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	数値
小型丸鉢	11	26 口径 器高	9.8 4.5	丸底より上外方向にのび、口 唇端面を丸くおさめる。	手づくねによる手法で、器壁 外面に凹凸がみられる。内面 はヨコナダ調整。	焼成良好、胎 土精密。	1
亞形土器	12	2 口径 張部径 器高	7.0 3.5 2.5	小型の口張遺物で体部欠失。 短い頸部より喇叭型に開く口 縁部で、口肩部で僅かに直立 し端面は縦をなす。	両面ヨコナダ手法による調整 である。	焼成良好、胎 土精密。	1
蓋形土器	13	15 ツマミ径 口径 推定器高	3.8 18.4 6.0	天井部は中央に凹みのつまみ を有する蓋形土器である。器 形は内輪気泡に大きくト外方 向にのびたのち、垂直に下が り、口縁部で外に屈曲して、 端面は丸くおさめる。	天井部のつまみは貼り付け、 内面はヨコナダ、外面はクシ 日状のヘラ工具で整形の後ナ ダ調整。	焼成良好、胎 土は精密。 茶褐色。	1
瓶形土器	14	20 28 29 口径 器高 底部	29.4 20.5 8.3	器の先位に角形の把手を配する。 底部には中央に6.4の円孔 と周囲に長径4、短径1.0の横 円孔4を配す。体部は基底部 より上外方向にのび、先位に 把手がつく。口縁部の内側は 削られて内傾する。	輪積手法で、把手から基底部 にかけてクシ状ヘラ工具によ る整形、内縮及び口縁部外張 は入念なナダ調整である。把 手は貼付けられている。底部 の円・横円孔は、ヘラ工具に より穿孔。	焼成良好、胎 土は精密、器 厚は1.0と均 一。 褐色。	1
砥石	15 16 17 23 24 32	15長径 16長径 17長径 長径 短径 器厚	6.5 17.0 8.7	水或岩を利用した砥石であ る。3面ともに全面を利用し ている。	15と17には刃先を調整した研 磨候がある。	16~4面の柱 状 17~断面長方 形の扁平 15~断面長方 形の扁平 (船崎伊予祇)	3
石包丁	18	20 長径 短径 器厚	8.5 4.8 0.6	一語を欠損、両面に抉入あり。	刃部は内面より研磨、背面も 研磨して刃面に調整。	綠泥片岩質。	1

#### (10) SB05の遺物の様相

SB05の遺物の内、前述の収蔵穴に収蔵された土師皿と炉跡周辺より検出された1、2、3の杯がある。また同じく炉跡周辺より小型丸底壺やコップ形の土器を検出した。瓶形土器は炉跡の南側面より検出されたもので、把手は貼り付けである。底部に穿られた円孔は直径6.3 cmあり、その周辺の対称位置に4個の楕円孔が長径3.2~4.1 cm、短径0.5~0.6 cmにヘラ状工具で穿孔されしかも穿孔方向は内部からなされている。穿孔の角度からみて内部の効率を高めるための傾斜面は役目をはたしている。また遺構内より検出された石器5点の外、石包丁があり、3点の砥石はいずれも金属器を研磨しているところから、金石併用の生活であったことがうかがえる。ビット6より検出された輕石は、明らかに工作用具の研磨機能を充す遺物であり、木工具等の仕上げに利用されたものといえよう。

## 2 挖立柱建物遺構(SB1～SB6の遺構)の概要

SB1の掘立柱建物のほか、旗立B区における掘立柱建物遺構として完掘されたものをはじめ、未完掘の建物遺構を含めて掘立柱建物遺構と推定されるものに、図(16)にみられるSB2～SB6の遺構がある。これらの遺構は主にB区のSB01の堅穴式住居跡とSB05の堅穴式住居跡との中間位置および、SB05遺構より西方に発展するものが多く、特にSB05の遺構とは重複する遺構が多い。またこれら西方部は、新設道路予定地外に位置すると同時に、すでにこの地域には民家が建てられ、あます狭長の空地もすでに四国電力予定地内で、高圧線の鉄塔建設資材置場としてかなり荒廃地化しており、下層部の遺構遺存状況について懸念される状況にある。

### (1) SB1の遺構 全測図第4図・第15図

SB1はSD2の溝を挟んでの梁間2間、桁行間2間の南北棟の建物で、建物の主軸は東側桁行間の北角柱位置で北3度西にふれている。柱位置における掘方は不統一であるが、やや円形のものや橢円形をなすもので、直径50～80cm以内のものが主である。梁間2間全長328cmに対して桁行間2間全長386cmである。建物に対する遺物等については不明である。

桁行では193cmの等間がえられるが、梁間では150と178cmと僅かに異なるが、左右は等間となっている。だが柱穴の断面からみれば、柱穴6と7にみられる柱の抜取穴は、周囲の掘方より一段と深くなっている。この抜取穴の位置から計測した柱間の心心距離は、5と6では105cm、6と7では225cmとなる。因に西側の柱列では、2と3は150cmと1と2の175cmが得られるが、この柱間の心心距離は大きく異なる。棟柱は位置がずれ、したがって棟そのものにも歪みが生じよう。

### (2) SB2の掘立柱建物跡 第16図

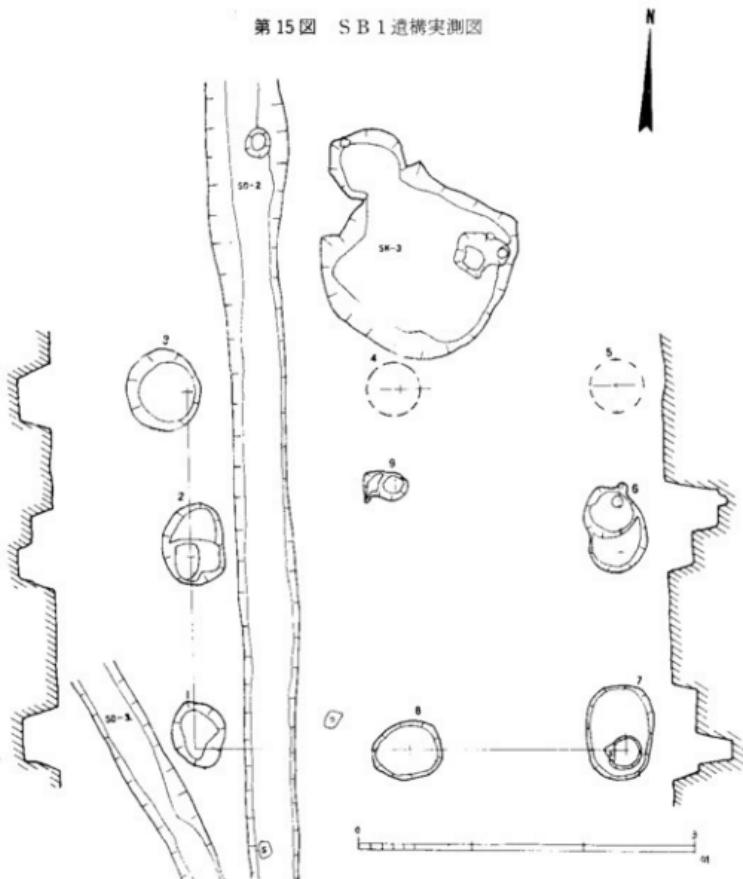
建物の中央部を南に傾斜するSD3が貫流し、四等分位置にSK2の遺構がある。

梁間2間全長302cm、桁行間2間全長452cmの掘立柱建物である。建物の棟方向は東西棟であり、梁間東側の北隅柱で北5度西にふれた主軸方向にある。柱間は桁行間2間であるが、南側桁行間では、共に226cmの等間であり、梁間西隅柱と平柱位置で柱の抜取穴が検出された。北側桁行間では、平柱の位置が、梁間東隅柱より128cmと224cmあり、南側桁行間とは完全に異なる柱位置にある。この桁行間に對して、梁間では、共に156cmの等間としての柱間の心心距離である。さらに東側梁間の棟持柱の抜取穴が検出されている。

(3) SB 3 の掘立柱建物跡 第 16 図

SB 3 は、SB05 の堅穴式住居跡内に、桁行間 1 間を掘立てた重複する造構である。建物は梁間全長 360 cm、桁行間 1 間 2 m を検出した造構でさらに西方向に延長する建物が想定される。柱穴の掘方は梁間に方形を 2 基みる外はやや円形に近い掘方となっている。柱の抜取穴は梁間の北隅柱にみられる外は検出をみていない。梁間は 200 cm と 160 cm の柱間である。

第 15 図 SB 1 造構実測図



第16図 SB 2~6遺構実測図



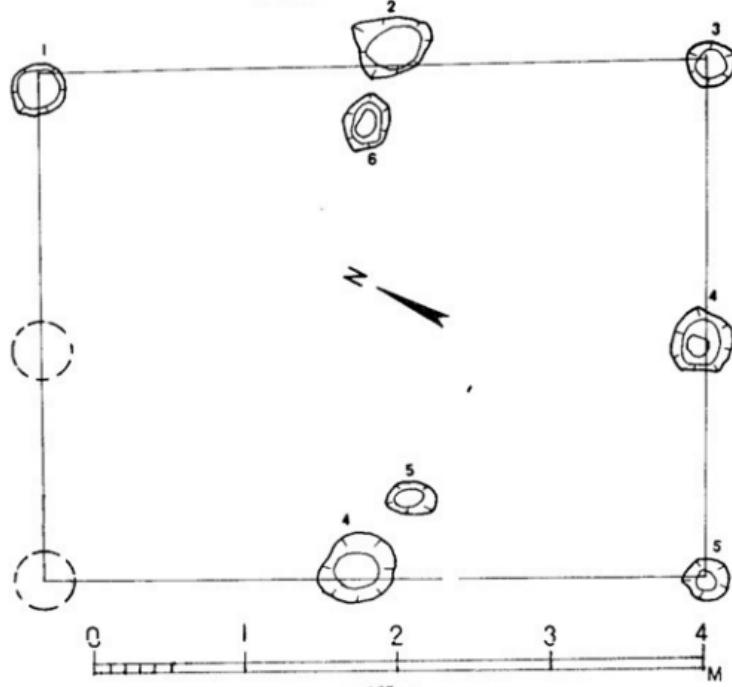
#### (4) SB 4 の掘立柱建物

SB 4 の造構は全長約 5 m の 3 間の建物の一辺が検出されており、北隅柱位置で磁北に対して西に 2.4 度ふれた建物が想定される。柱穴の掘方は円形及び椭円形のもので、南隅柱と第 3 柱穴に柱の抜取穴が検出されている。この位置からして南隅柱より 170 cm, 180 cm, 150 cm が考えられるが、第一間と第二間は共に 175 cm とみることもできよう。

#### (5) SB 5 の掘立柱建物

SB 5 の造構は長辺約 430 cm、短辺 340 cm の南北棟の建物が考えられる。建物の主軸は、北側の東隅柱位置で磁北に対し西に 28 度ふれている。建物の間取は共に 2 間であるが、長辺の桁行間の柱間の心心距離は、東側の柱間は南より 200 cm と 230 cm、西側の柱列は南より、220 cm と 210 cm が算出され(近似値)僅かではあるが、左右が反対の間取り距離となっている。これに対して梁間の心心距離は、南側では、190 cm と 150 cm であり、北側では 210 cm と 130 cm と共に違間距離となっているが、対応する側との間取の数値は共に対応する間

第 17 図 SB 5 造構実測図

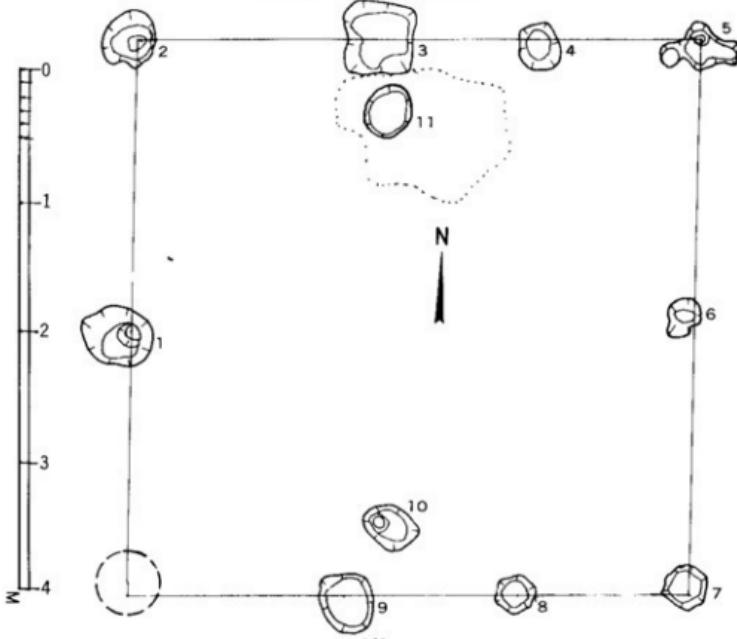


取となっている。ただ平行間の西側の第3柱穴は未確認であり、他の柱間から推定した数値である。

#### (6) SB 6 の掘立柱建物跡

SB 6 の平面規模は1辺 426 cm と 416 cm の方形である。建物の主軸は磁北に対して、僅かに1度ふれる。各辺の柱間はともに2間と割り付けが想定されるが、建物の北側柱列での柱間距離は（心心距離）東隅柱より 122 cm と 304 cm の短間と長間に大きく差がみられ、西側柱列においても、南隅柱（想定位置）で 192 cm と 224 cm を、東側柱では南隅柱から 214 cm, 212 cm が割り分けられ、西側柱列と僅かに 10 cm のずれがみられるが、まず東側柱列では等間とみることができよう。南側柱列では、東隅柱より 260 cm と 166 cm が割り出され北側柱列の柱間距離とは逆の配置となっている。ただ南側柱列の東隅柱との中央位 130 cm に柱穴が検出されており、この柱穴を北側柱列と対比させれば、ほぼ等間の柱間となる。この柱穴を加味した等間は 130 cm, 130 cm, 166 cm となる。またいま北側柱列に SB 3 の梁間の棟持柱柱穴が、重複した柱穴とみるならば、東隅柱穴より 125 cm, 125 cm, 176 cm の柱間が、南柱列とはほぼ等間隔として対応している。以上の検出数値から東西棟の切妻の建物が先ず推考されるほか、4辺がほぼ等辺とされる近似値にあり、四注屋根も同様に推測される。

第18図 SB 6 遺構実測図



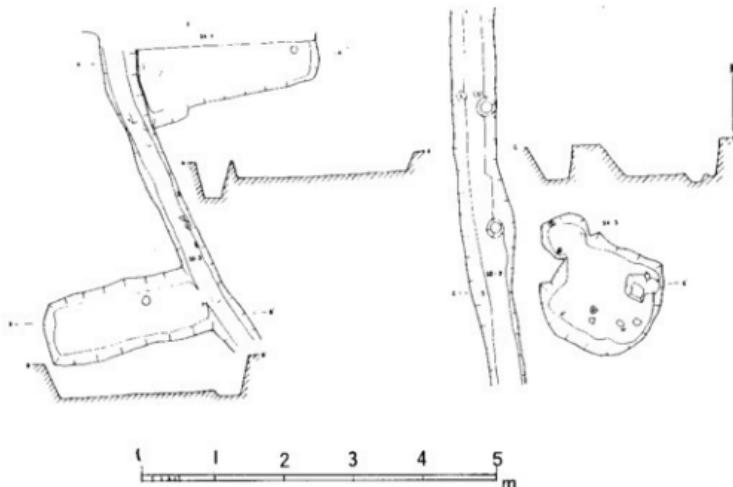
### (7) その他の柱穴

旗立地区での柱穴は、その殆どが、遺構を確認しうる状況にある中で、少數の柱穴については、建物やその他の遺構として機能的な関連は発見するまでには至っていない。

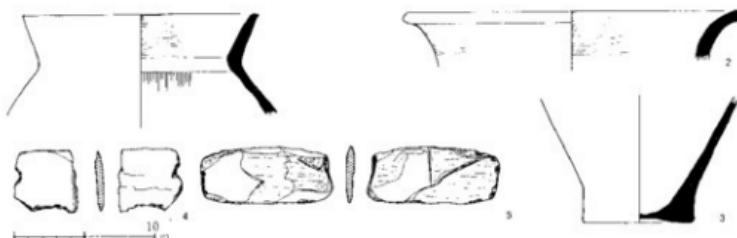
### 3 土壌状遺構

SK-1は溝状遺構 SD-3に直交する形で検出された遺構である。遺構は長辺 260 cm, 短

第19図 SK 1～3 遺構実測図



第20図 SK 遺構にともなう遺物実測図



辺 120 cm で深度は 24 cm の断面図にみられる素掘の掘方である。遺構内部での出土遺物は、土師器片と上部より須恵器片少量を出土している。

SK-2 は SD-3 の遺構に SD-1 と同様に直交するが、位置関係は逆方向にある。遺構は長辺 230 cm、短辺 100 cm の長方形であり、深度は 50 cm である。内部よりの出土遺物は、SD-1 と同様の遺物を出土している。

SK-3 は、SB-2 の掘立柱建物の北方に位置し、円形の掘方で、SK 1~2 の長方形と異なる。

SK 遺物（第 20 図）

性質	基盤 深さ cm	法 深 度 cm	形態の特徴	技 法 の 特 徴	備 考	数
変形土器 口縁部	1 SD 2	口径 16.7 頸部厚 14.5 現器高 8.0	くの字口縁部で口唇端面は水平な平面である。	輪削手法である。体部内壁面は円内があり、メテ方向にクシ状へり工具による整形。口縁部内面及び外表面はナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
変形土器 口縁部	2 SD 1	口径 24.0 現器高 4.0	口辺部で大きく外反し、口唇端面は外方に円錐をなす。	全周ナゲ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
変形土器 底 部	3 SD 2	底面径 7.8 現器高 9.0	平底の底部で中央部は凹む。基底部で直立したのち、上外方向にのびる。	底面内面は円形に入念なナゲ調整が施され、そのために底盤の胎土壁は薄い。基底部は断面を舟形に肥厚した基底部である。	焼成良好、胎土密。	1
石包丁	4 SD 2	長辺 4.5 短辺 4.3 厚味 0.5	片面に大斜面を有する欠損遺物で、短辺の端部中央部に挿入の打痕がある。	長辺の両端は鋭く片面にはチッピングがえらわれる。	直成形	1
石包丁	5 SD 1	長辺 8.2 短辺 4.0 厚味 0.5	長方形の遺物で、両面に大斜面が残る。両側面の長辺面は鋭い。	今前面を鉛直したのち、周辺部に擦かにチッピングがみられる。	研磨片岩	1

## IV 旗立 C 地区における遺構と遺物

旗立 C 地区における遺構は、大きく 2 つに分けられよう。1 つは溝状遺構であり、いま 1 つは竪穴式住居跡である。この地区での竪穴式住居跡は、そのほとんどが重複した遺構が多く調査に時間を費やしたが、包含層の層厚が殆どみられず困難をきわめた。

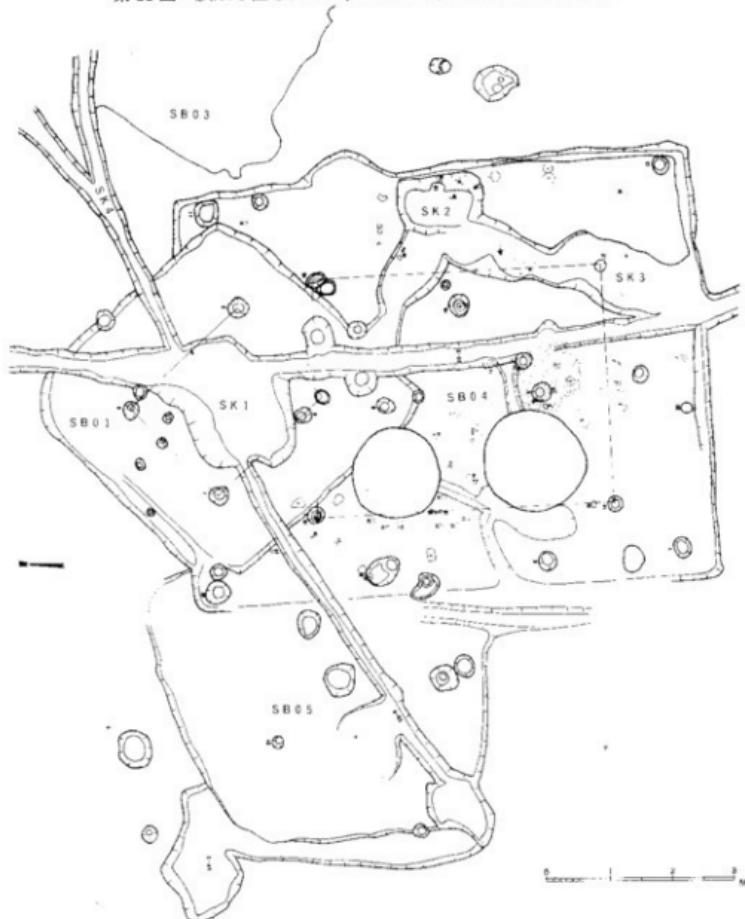
### 1 竪穴式住居跡遺構と遺物

#### (1) 竪穴式住居跡遺構 SB01, 04, 05 第 21 図

図(21)に示す遺構は、C 区中央部付近で検出されたもので、SB01 と SB04 および SB05 である。これらは一重(トリプル)の遺構で、最大規模の住居跡 SB04 は、長辺 8.5 m、短辺

7mのものである。住居の主軸は北10度西を指向している。SB04の西壁面位置が丁度現農道と一致しており、しかも野庭2基が遺構内に設置されている。この肥滴めに通う農道は、中の輪跡が多く壁面は消滅し不明である。だが西壁面での南北両端のコーナーが確認されているため、遺構の側壁位置は推量し得るところである。いま2基の野庭が設置されている周辺部がやや擾乱されており、特に主柱19の位置確認が不能であった。

第21図 旗立C区SB01、SB04、SB05遺構実測図



いま住居の構造を見ると、主柱 No.5 と No.6 の対比する柱穴がある。この主柱に対して、No.14・No.15・No.16・No.17 の柱穴があり、次いで外周壁面に穿たれた、No.7～13 の柱穴で構成された竪穴式住居が推定される。また一つには、主柱 No.5・6・18・19 による四本柱があり、この主柱の各辺の 2 等分線上に、等間隔な柱穴 No.14～17 が穿たれているとも推測される。これら No.14～17 の延長線上に各隅柱の No.7・10・11・13 が穿たれたと推定される。西壁面に穿たれた No.8 と 9 は平柱であるが主柱の 5 と 6 に連結させることもできよう。東壁面では、壁面中央部に土壙状の遺構 (14×0.9 cm) と重複する No.12 があり、隅柱の No.11 と 13 の中間位置 350 cm にある。この両壁面の柱穴位置に対して、南北両壁面での柱穴は、北壁面では SB01 による遺構及び SK2 の遺構により不明であり、南壁面においても、SD2 と 5 による擾乱で不明であり、僅かに No.20 が検出されている。

#### (2) 1号竪穴式住居跡 SB01

SB01 は、SB05 と重複する遺構である。平面一辺 4 m の隅丸方形で主柱は 4 本であり、それぞれの柱間の心心間距離は 200 cm と 220 cm で対比する等間となっている。住居は北 32 度西を指向する。住居の入口部は不明である。いま遺構内に溝状遺構 SD2 と 4 が、SB05 の中央部で交差し、さらにこの交差地点に SK1 の遺構が重複している。

#### (3) 5号竪穴式住居跡 SB05

SB05 は、SB04 と SB01 の西側面に検出された遺構である。SB05 の遺構に伴う柱穴は 21 を検出したが、その他の柱穴は検出されていない。SB05 の地域は畠地として利用されており、地山面の擾乱が激しかったことと、耕作土も浅く、出土した遺物は細片化されたものである。僅かに確認された壁面から 4～4.2 m の隅丸方形の竪穴式住居であろうと推定される遺構である。

#### (4) SB01 の遺物 第 22 図、第 23 図、第 24 図

SB01 における遺物の出土状況は、別表に示すものである。表 1 は、須恵器を中心とする耕作土下層で検出された遺物である。

表 2 は、耕作土排土後の地山面より検出された遺物である。

表 1 と 2 をそれぞれ遺物のレベルを地山面を基準として換算した。この数値が示すように - 値は耕作地内での検出遺物である。+ 値は須恵器、土師器とともに +5 の耕作上の下層部より出土しており、数値の 4 の表示は - 値を示すもので、須恵器の最深度数値は -8 であり、土師器の最深度検出は -14 の数値を示している。

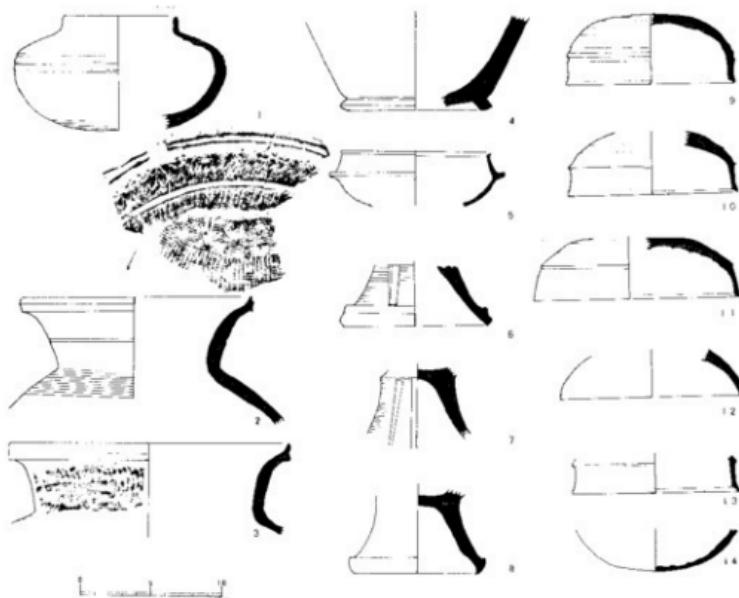
SB 01 の遺物出土状況 地山面 0 cm としての深度 (空白は破片遺物) (表 1)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深 度	4	5	3	2	5	3	3	0	4	2
遺物の器種							須 器 片		須 器 片	
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深 度	1	+ 6	1	+ 1	0	+ 3	+ 1	- 3	+ 2	+ 3
遺物の器種			坏 身	坏 身	高坏脚部	底 部			須 器 片 片 晶	蓋 壺
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
深 度	+ 3	+ 2	+ 5	+ 2	+ 3	+ 3	3	4	3	4
遺物の器種			蓋 壺	須 器 片	須 器 片					高坏脚部
遺物番号	31	32	33	34	35	36	37	38		
深 度	2	1	- 3	8	3	6	1	3		
遺物の器種			底 部	口縁部	口縁部		石斧?			

地山面を 0 cm としての深度 (空白は破片遺物) (表 2)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深 度	12	10	9	9	6	2	6	2	6	8	7
遺物の器種	壺 形 上 器	壺 形 上 器	不 規 部	須 器 片	壺 形 上 器	壺 形 上 器	高 坏	甌 石	器台形		11 縁 部
遺物番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
深 度	7	8	7	1	2	2	- 3	+ 3	+ 5	+ 3	+ 5
遺物の器種	高 坏	小 形 丸底 部	高 坏		高 坏	高 坏	須 器 片			底 部	底 部 と 坏
遺物番号	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
深 度	+ 5	+ 1	+ 2	+ 3	+ 1	+ 2	+ 3	2	10	14	8
遺物の器種	壺 形 上 器	壺 形 上 器	11 縁 部		壺 形	高 坏		石包口	壺 形 上 器	壺 形	高 坏
遺物番号	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
深 度	7	7	5	4	5	8	6	6	10	8	7
遺物の器種	高 坏	甌 石	肩 部	11 縁 部	底 部						壺

第22図 SB01土器尖測図①



(5) 須恵器の様相

5世紀後半の須恵器として、坏蓋の9、10、13がある。10の天井部は丸く、ヘラ削りは少程度であり、口縁部は直立し、口唇端部はわずかに外反しており、口唇端面は内傾する。上部との境に鋸い稜がある。13は10と同様の口縁部の整形となっている。8の高杯は脚端部は丸く作られ、着地端面はやや内傾する。脚部は無透孔でナデ整形である。3の錐形土器は11頭部が外反し、口縁部が上下に引き出され、内壁面はナデ整形である。2も同様であるが口縁端部が上下に引き出された後、両上下端面を入念に調整をほどこし、3方向に突起状の稜を作り出している。口縁部外表は2段に区画され流水文を配している。肩部はタタキ目整形の後カキ目調整をほどこし、内壁面は入念なナデ整形となっている。

6世紀初頭の土器に1の短頸壺がある。1は短頸の直口で口唇端面は丸面である。体部はやや扁平な球形をなし、体部の肩部に3条の凹線を配している。底部にカキ目調整がみられる。5の环身も同時期と推測される。6の高杯脚部も同時期とみなしている。7は1、5、6の時期よりやや後に出現する土器と推測されるが、底部片でみる限りであり断定しかねる。

1号堅穴式住居跡 SB01 出上の須恵器

種類	番号 出上	法寸 cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
壺 頭 壺	1	口径 器高 8.0 8.0	肩部は扁平で直立する。口縁部は端部を丸くおさめる。体部最大径に3条の凹線あり。	マキアゲ、ミズビキによる成形、底部にカキ目調整あり、肩部の内面に指頭ナデ痕あり。	焼成良好、堅硬、胎土密、火以上欠損。緑青色。	1
壺	2 32 36	口径 16.1 頸部径 11.5	口縁部は直立したのも外反し、端部で断面が凸状を呈する。1条の沈線に2つの溝文帯を有し、入念な流文を配する。肩部は少しやかにすぼむ。	マキアゲ、ミズビキによる成形、肩部にカキ目あり、内面ナデ調整。	焼成良好、堅硬、胎土密。緑青色。	1
壺	3 34	口径 19.8 頸部径 16.4	口縁部は直立したのも外反し、端部で大きく曲折したのも、口唇部は立ち上がり丸くおさめる。端面に凹面を有する。	マキアゲ、ミズビキによる成形、肩部外縁ナデ、頸部にクシ目調整の後横ナデ。	焼成良好、堅硬、胎土密。緑青色。	1
甕 底 部	4 32	底径 10.8	平底の底部に高台をもつ。高台断面は方形でハの字。着地面をへた切り。	内外面共にナデ陶板。	焼成良好、胎土に白色砂粒を含む。青灰色。	1
杯 身	5 13	口径 10.7 観器高 4.0 口縁部高 1.6	たちあがりは内傾したのも外反し、端部に内傾する面を有する。受部は厚くや上外方向にのみ端部は丸く、底部も比較的丸い。	マキアゲ、ミズビキによる成形、たちあがりはオリコミ、外底面回転ヘラ削り後に施す。内底面回転ナデ調整、ロタリ回転。	焼成良好、胎土に白色砂粒を含む。青灰色。	1
高杯脚部	6 30	基部径 6.0 脚部高 4.5 脚部底径 10.2	扇状の脚部に、根部直上に断面三角形の凸帯あり。脚端部はへた切りにより、半皮をなす。3方向に長方形の透孔あり。	マキアゲ、ミズビキによる成形、脚部表面にカキ目がみられる。	焼成良好、堅硬、胎土密。緑青色。	1
高杯脚部	8 不明	基部径 5.7 脚部高 5.5 脚部底径 8.7	脚部の広がりの少ない器物で、脚端部は段をなし、無透孔の脚部である。	マキアゲ、ミズビキによる成形。内外面共にナデ調整である。	焼成良好、堅硬、胎土密。青灰色。	1
蓋 壺	9 不明	口径 12.1 器高 5.0 口縁部高 1.6	天井部はやや扁平で、口縁前面に内傾する。底部と口縁基部に2条の凹線により後せなす。	マキアゲ、ミズビキによる成形、内面と口縁部内外面ナデ仕上げ、天井部へた切り。	焼成良好、堅硬、胎土密。	1
蓋 壺	10 不明	口径 12.0 器高 4.5 口縁部高 2.0	天井部は肥厚している。薄厚しながら内傾し綾をなす。口縁部は外付気灰にたちあがり、口縁端は外方に屈曲し、内傾した凹面をなす。	マキアゲ、ミズビキによる成形、天井部回転ヘラ削り、%内面ナデ仕上げ、ロタリ右回転。	焼成良好、堅硬、胎土密。	1
蓋 壺	11 20	口径 14.5 器高 4.5 口縁部高 2.1	扁平な天井部をなし、にぶい綾をつくる。口縁部は内付気灰に外傾し、端面は内傾し凹面をつくる。	マキアゲ、ミズビキによる成形、天井部上面を大きく回転ヘラ削りしたのも3段のへた削りをする。%内面にマキアゲ痕を残す。口縁部は内外面ともにナデ。	焼成良好、堅硬、胎土密。	1

種類	番号 回転上	法量cm	形態の特徴	技術的特徴	備考	数量
蓋杯	12 23	口径 13.0	内輪し口縁端で僅かに直立した口縁部を有しない。胎土厚は口縁に向かって薄くなる。	マキアゲ、ミズビキによる成形、天井部欠失、内面回転ナデ仕上げ。	焼成良好、胎土密で粒子をもたない。	1
蓋杯	13 14	口径 11.8 口縁部高 2.2	棱をなし、口縁部は直立し端部で僅かに外に屈曲し、端面は大きく内傾して凹面をなす。	両面をナデ仕上げ。	焼成良好、胎土密で粒子をもたない。	1
丸底の底無片 蓋杯？	14 16		丸底で底部器厚は薄い。	マキアゲ換を底部内面に施す。外表はナデ仕上げである。	焼成良好、胎土密で粒子をもたない。	1

#### (6) SB01 の土師器の様相

本遺構での遺物の多くは土師器であり、全体的に見て小型の土器が大多数をしめ、中でも壺形土器及び壺形土器では小型が特に目立つ、一方形態的にも壺形土器と壺形土器の区別が困難なうえにほとんどの遺物が破片であるため全体的形態の理解が難しく口縁部の形態から両器の示標とした。

壺形土器として 2、3、5～8、10～15 をあげたい。体部の成形に輪積手法を明瞭に残す 2 と 13 がある。内壁面に残る輪積痕を指頭ナデ整形を施す 14 と 15 があり、口縁部の整形では頸部より外上方向に立ち上がる 11 に対して、頸部より外上方向に内彎気味に立ち上がるものに 3、6、15、外彎気味に立ち上がるもの 5、8、12、頸部より外上方向に立ち上がったのち、反転して内傾するもの 10 がある。

壺形土器としては 4、9 がある。4 では輪積手法の整形痕を指頭によるナデ整形で、体部内壁面を仕上げている。9 は横ナデ整形により仕上げられている。口縁部は 4 のくの字口縁に対して、9 は頸部で大きく折れわずかに内傾する口縁で、口唇端面は共に円面である。

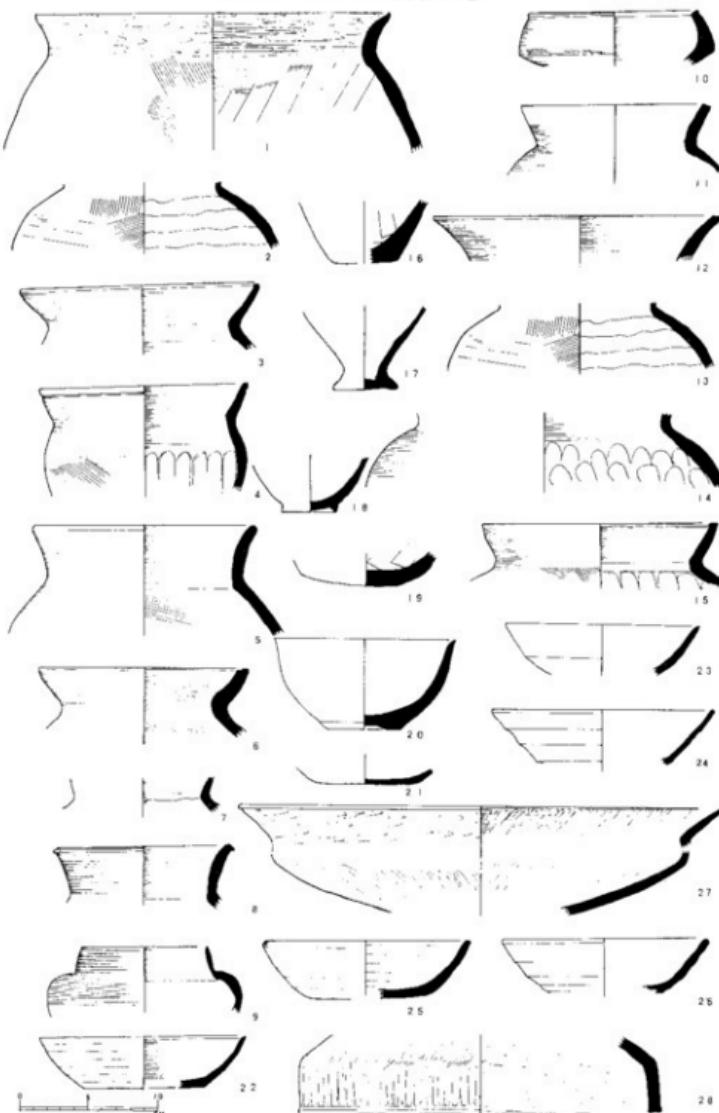
壺形土器としては、1 の土器があり、体部の内面は箒状工具による左回転による整形が施されており、表面の整形は左回転による櫛状工具による施工である。口縁部は内外面共に箒工具による研磨仕上げとなっている。

碗形土器としては 20 があり、底部は平底の底部を削り出した高台である。18 は口縁部を欠損しており詳細は不明であるが、基底部から体部にかけては 20 同様の整形である。高台は 20 と異なり貼付け高台となっている。

壺形土器には 21、22、24、25、26、53 がある。共通するものには、いずれも外表面は回転によるナデ整形によるにぶい稜線を残す点にある。ただナデによる整形が 24 と 26 と 52 では幅広になっている。また 25 では内外共に回転ナデ痕をとどめる点にある。52 では底部は糸切底である。

高壺形土器には 23、30～51 があり、壺部における口縁部の形態で大きく 2 形式に分類され

第23図 SB01土器実測図②



## 1号竪穴式住居跡 SB01 出土の土師器

種類	基準 高さ cm	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
壺形土器	1 31	口径 25.7 頸部径 23.6	体部の張りは少ない。頸部は広く、口縁部は外反気味に上外方向にのび、口唇部の内面は削られて、頸部は後をなす。	輪積手法による。体部内面へラ削りの整形、体部外面はクシ状ヘラ工具による整形、口縁部内外ともにヘラ研磨。	焼成良好。胎土に0.3以下 の粒子をもつ。	1
壺形土器	2 5	頸部径 11.5 現器高 5.0	体部の張りが大きく、頸部で口縁部が直立する。	輪積手法で、体部内面にヨコナダ指頭痕がある。体部外面はヘラ削りの後クシ状ヘラ工具による調整。	焼成良好。胎土に0.3以下 の粒子をもつ。	1
壺形土器	3 2	口径 17.2 頸部径 14.0	くの字口縁で、口縁部は僅かに内縮し、口唇端面は円く、内側に棱をもつ。	頸部に接合痕が残り、頸部内面をヘラ削りしている。口縁部は内外面ともにヨコナダ調整。	焼成良好。胎土に0.3以下 の粒子をもつ。	1
壺形土器	4 44	口径 15.0 頸部径 13.2 器高 8.0	体部の張りは少ない。口縁部は上外方向に直進する口縁で、口唇部は僅かに内傾する平面、口唇外面に凹窓1条がめぐる。	体部内面にタキニ指頭によるナダ上げ整形、外面はクシ状ヘラ工具による整形、口縁部は内外面ヨコナダ調整。	焼成良好。胎土に粒子をみない。	1
壺形土器	5 6	口径 16.3 頸部径 14.3 器高 8.0	肩部よりすぼまり、頸部で直立したのち僅かに外反する口縁部で、口唇端面は丸い。	体部内面はタシ状ヘラ工具による斜向の整形、他はヨコナダ調整による。	焼成良好。	1
壺形土器	6 27 と 25	口径 15.2 頸部径 12.0	頸部より大きくな外反気味に上外方向にのび、口唇端面は水平な面をなし、内側に有段をもつ。	全面ヨコナダ調整である。	焼成良好。	1
壺形土器	7 4	頸部径 9.8	類似のみの破片である。口縁部はくの字口縁が推測される。	頸部内面にヘラ削りの整形あり。	焼成良好。	1
壺形土器	8 23	口径 12.2 頸部径 10.5	直立した口縁部で僅かに口部で外反し、口唇端面は外傾する平面で、外端部は棱をなす。	全面ヨコナダ調整である。	焼成良好。	1
壺形土器	9 18	口径 9.0 頸部径 10.0	大きく肩部で内縮し、口縁部は内傾する。端面は鋭い。	全面ヨコナダ調整、口縁部はオリコミである。	焼成良好。粒子をもたない。 赤褐色。	1
壺形土器	10 3	口径 12.3 複合部径 14.2	複合口縁部で、口部は内傾し、口唇端面は内傾する平面で外方に棱をなす。	全面ヨコナダ調整、口縁部外面にタシ状ヘラ工具の整形痕が残る。	焼成良好。	1
壺形土器	11 11	口径 13.9 頸部径 11.7	くの字口縁で、口唇端面は僅かに外傾する平面。	全面ヨコナダ調整、体部の器厚はうすい。	焼成良好。	1
壺形土器	12 25	口径 21.0 器高 4.0	朝顔状に開く口縁部で、口唇端面は水平な平面をなす。	全面ヨコナダ調整である。内面は指頭ナダによる。	焼成良好。	1
壺形土器	13 5	頸部径 11.5 体部径 19.0	クシ状工具とヘラ工具による整形で局部はなで形である。	輪積技術による整形で内底面は指頭押圧のみ。	焼成良好。	1

種類	番号	法量cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	数量	
変形土器	14	1	頸部径 18.2 体部径 25.8	体部より頸部への破片である。	輪横手法がみえる。体部内壁面に指調痕が無数、外曲及び頸部はナゲ調整である。	焼成良好。 1	
変形土器	15	38	口徑 17.0 頸部径 15.1	くの字口縁で、僅かに口辺部で内彎する。端面は水平な平面で中央部に凹みをもつ。	輪横手法で、体部内面は指頭ナゲによる整形、外向はクシ状ヘラ工具による整形、頸部にヘラ削りがある。他はヨコナゲ調整。	焼成良好。 1	
底 部	16	不明	底部径 5.0 現器高 4.5	平底の基底部より上外方向にのびる。	内面はヘラ削りによる整形、外面ナゲ調整。	焼成良好。 1	
底 部	17	1	底部径 の 4	平底の基底部で内側に屈曲したのち上外方向にのびる。	輪横手法による。全面ナゲ調整である。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1	
底 部	18	19	底部径 の 1	丸底に高台をもつ、卵形の体部が想定される。	丸底と高台とが水平な関係にある貼付け高台である。全面ナゲ調整。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1	
底 部	19	4	底 部 径	7.0	基底部の不明確な平底の底部である。	底部にヘラ削り痕がある。胎土は厚い。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1
碗形土器	20	5	口徑 13.2 底部径 5.5 器高 6.5	基底部で肥厚した後内弯気味にたちあがり、口唇部は外反して窓い。	全面ナゲ調整、底部外面にヘラ削りあり。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1	
底 部	21	22	底部径	7.5	薄い胎土で平底の基底部より上外方向にのびる。	全面ナゲ調整。	1
杯形土器	22	4	口徑 の 1 底部径 8.5 器高 3.8	平底の基底部より内弯気味に上外方向にのび、口唇端面は内彎する。	外表面に回転ナゲによるにぶい棱をもつ。内面は回転によるヨコナゲ調整。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1	
高 筒 形 七 隣 ?	23	不明	口徑 現器高	14.2 3.6	平底の底部欠損、内弯気味に上外方向にのび、口唇端面は内彎する。	内外面とも回転ナゲ調整。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1
杯形土器	24	24	口徑 底部径 器高	16.0 10.0 4.0	平底の底部を欠損、基底部より上外方向にのび、口唇端面は丸くおさめる。	全面回転ヨコナゲ調整であるが、外表面に3段のにぶい棱をもつ。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1
杯形土器	25	12	口徑 底部径 器高	15.0 9.0 4.0	平底の基底部より僅かに内弯 気味に上外方向にのび、口唇端面は丸い。	全体的に肥厚で、全向は回転によるナゲ調整で、内外ににぶい棱を数段もつ。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1
杯形土器	26	13	口徑 底部径 器高	15.0 9.0 4.0	平底を欠失する。基底部より上外方向にのび、口唇端面は丸い。	内面は回転ナゲ、外面上には回転ナゲによるにぶい棱を4段もつ。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1
器 台 形 上 器	27	9	口徑 有段深	35.0 30.0	环縁は円形の底部より内弯気味に上外方向にのび、中位でたちあがり、ふたたび外反して口縁部をなす。口唇端面は凹面である。	口縁部内部はクシ状ヘラ工具で成形後ヨコ方向のヘラ研磨を内外面に施す。体部は内外面タテ方向のヘラ研磨。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。 1

種類	名 字 (固型) 所上	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
脚部	28	36	脚裾部径26.2 器高 5.5	大きく開いた脚裾部で屈曲して下方向に直立し、脚裾端面を水平な平面で外側に傾をなす。	内向はヘラ研磨ヨコナデ、外表面はタテ方向のヘラ研磨を施す。	焼成は良好、胎土に粒子をもたない。	1
高环形 上器 环部	30	1	口径 17.0 器高 5.4 脚基部 3.7	平底の基底部より内弯気味に上外方向にのみ有段をなす。 ロ口部で僅かに外反し、ロ唇端面は水平な平面をなす。	环内底部はラン状ヘラ工具による整形、他面はナデ調整である。脚部は貼り付けである。粘土円板押入。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	31	2	口径 19.0 器高 7.0 脚基部 3.3	基底部より内弯気味に上外方向にのみ。 ロ口唇端面は外方へ開曲し端面は円面である。	基部に僅かに有段をもつ。全面ヨコナデ調整、脚部貼り付け。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	32	7	口径 15.5 器高 6.5 脚基部 3.5	基底部に有段をもち、基部で内弯したのも上外方向にのみ、ロ口部は減厚し後をなす。 円柱の脚部は基部で欠少。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	33	32	口径 7.0 器高 4.8 脚基部 3.2	内弯する环部にハの字型の脚部をもつ。	环部の基底面に指圧痕を残す。脚部にしづり目とラン状ヘラ工具の整形、他面はナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	34	1	口径 16.2 器高 8.2 脚基部 3.3	基底部に有段をつくる。ロ口部は上外方向にのみ、ロ口唇端面で外方向に外折し、端面は垂直な平面をなす。脚部はト外方向に外反気味にのびる。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	35	3	口径 15.5 器高 2.8	基底部より上外方向に直線状にのび、ロ口唇端面は鋭い。	内面タシ状ヘラ工具の整形の後ヨコナデ調整、外向も同様である。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	36	16	口径 15.0 器高 4.3 脚基部 3.5	平底の基底部より上外方向に直線状にのび、ロ口唇部は内傾して鋭い。	全面ナデ調整である。脚基部貼り付け部の底がのこる。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	37	45	口径 15.5 器高 7.5 脚基部 3.5	平底の基底部に僅かな有段をつくり、上外方向に内弯気味にのびロ口部で僅かに外反する。 ロ口唇端面は丸い。	全面ナデ調整である。脚基部に崩壊状の接合面をもつ。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 环部	38	45	口径 18.2 器高 4.7	ロ口部のみの欠損遺物。有段部より上外方向に直線的にのみ、ロ口唇端が僅かに外折する。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器 脚部	39	12	脚基部 3.8 脚裾部 13.4	脚部で环部を失失する。基部より下外方向に直線状に開き、脚裾部で外方に延折し、端面は鋭い。	脚内面はヘラ削り、外面はナデ調整、脚裾部は肥厚し、端部に向かって減厚する。脚裾部高0.4。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器	40	33	口径 18.4 器高 11.0 脚裾部 10.0	僅かに平底の底部より内弯して上外方向にのみロ口部で外折する。脚は基部より大きく下外方向にのみ、脚裾部で外折している。	全面ナデ調整である。脚裾部は水平に外折する。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 土器	41	4	口径 17.2 器高 6.0	40同様の环身であるが、ロ口部の外折が弱い。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1

種類	番号 回転半径	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
高杯形 上器部 脚部	42	不明	基部径 6.3 器高 4.5 脚裾部径15.0	低い脚部で、脚基部より大きくラッパ状に下外方向に開き、脚裾部端上端に棱をなす平面。	外表面にクシ状ヘラ工具の整形、他面はヨコナデ整形である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	43	70	基部径 3.7 器高 7.0 脚裾部径11.3	脚基部より下外方向に僅かに開き、脚裾部で大きく外方に屈折している。	脚柱部へラ削り、脚裾部にヨコにヘラ削りあり、他面はナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	44	34	器高 4.0 脚裾部径10.2	脚基部より下外方向にひらいた後、脚裾部で大きく外方に屈折する端面に凹段をもつ。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	45	14	器高 5.3 脚裾部径 8.7	脚基部より僅かに下外方向にのびたもの、脚裾部で水平に外方に屈折する。端部は円面。	全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	46	28	基部径 3.5 現器高 10.0	底部は丸足である。脚部は基部より下外方向にのび、脚裾部はゆるやかに外方に屈曲する。	全面ナデ調整で器表面に凹凸がある。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	47	32	基部径 3.5 現器高 7.0	脚基部より下外方向にのび、脚裾部で水平に外方に屈曲する。	全面ナデ調整である。脚基部に円形の粘土をつめている。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 上器部 脚部	48	33	基部径 3.3 現器高 6.5	脚基部より下外方向にのび、脚裾部で水平に外方に屈曲する。	全面ナデ調整である。脚基部に円形の粘土をつめている。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	49	不明	基部径 3.0 現器高 6.3	脚基部より下外方向にのび、脚裾部で水平に外方に屈曲する。	全面ナデ調整である。脚基部に円形の粘土をつめている。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	50	23	基部径 3.2 現器高 5.5	脚基部より下外方向にのび、脚裾部で外方に屈曲する。脚裾部外面に凹線を1条めぐらす。	脚内面ナデ調整、脚裾部にヘラ削りあり、外表面はヘラ研磨である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器部 脚部	51	17	現器高 2.7 脚裾部径10.5	脚裾部端で、脚裾部の屈曲はゆるやかである。	脚裾部内面はヘラ研磨で、他面はナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
杯	52	24	口径 15.5 器高 3.8	底部径9.2 cm の平底基底部より内輪気味に上外方向にのび、口唇端面は円面。	全面回転ナデ調整である。底面は回転糸切り底である。	焼成やや歟、胎土は密である。 黄褐色。	1
杯	53	14	口径 13.2 現器高 4.0	基底部より内輪気味に上外方向にのび、口唇端面は外に緩く平面である。	内面ナデ調整、外表面には回転ナデによる4段のにぶい段をつくる。	焼成やや歟、胎土は密である。	1
杯	54	22	口径 9.0 現器高 1.5	平底6.5 cm の基部より上外方向に屈曲し、口縁部の端面は円面、歪みがある。	全面ナデ調整で、底部に回転糸切りはない。	焼成良好、胎土密。	1
変形土器底 部	55	21	底部径 4.5	底部端でやや肥厚な底部である。	内面ナデ、外表面にタシ状ヘラ工具による整形あり。	焼成良好、胎土は密である。	1

種類	番号 出目	法 厘cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
壺形土器 底 部	56	40	底部径 2.0 僅かな平底より内傾して上外 方向へのびる。	全面ナデ調整。	焼成良好、胎 土は密である。	1
小 型 丸 瓦 坩	57	13	壺形 体部径 3.5 8.0 扁平な体部から僅かに内傾し て頸部をつくる。口縁部は極 端に短い。	全面ナデ調整。	焼成良好、胎 土は密である。	1
石 包 丁	1	30	長径 厚味 5.2 0.5 半截された石包丁である。長 方形で刃部が弧をなす。	両面を研磨している。刃部は 片刃である。	砂泥片岩。	1
砥 石	2	35	長径 短径 9.5 4.5~3.5 断面台形の砥石である。	2面に研磨面がみられる。2 面ともに刃部を調整した研磨 痕を残す。	砂岩。	1
砥 石	3	8	長径 器厚 11.0 1.0 扁平な長方形の砥石である。	2面に研磨面が残る。	砂岩。	1

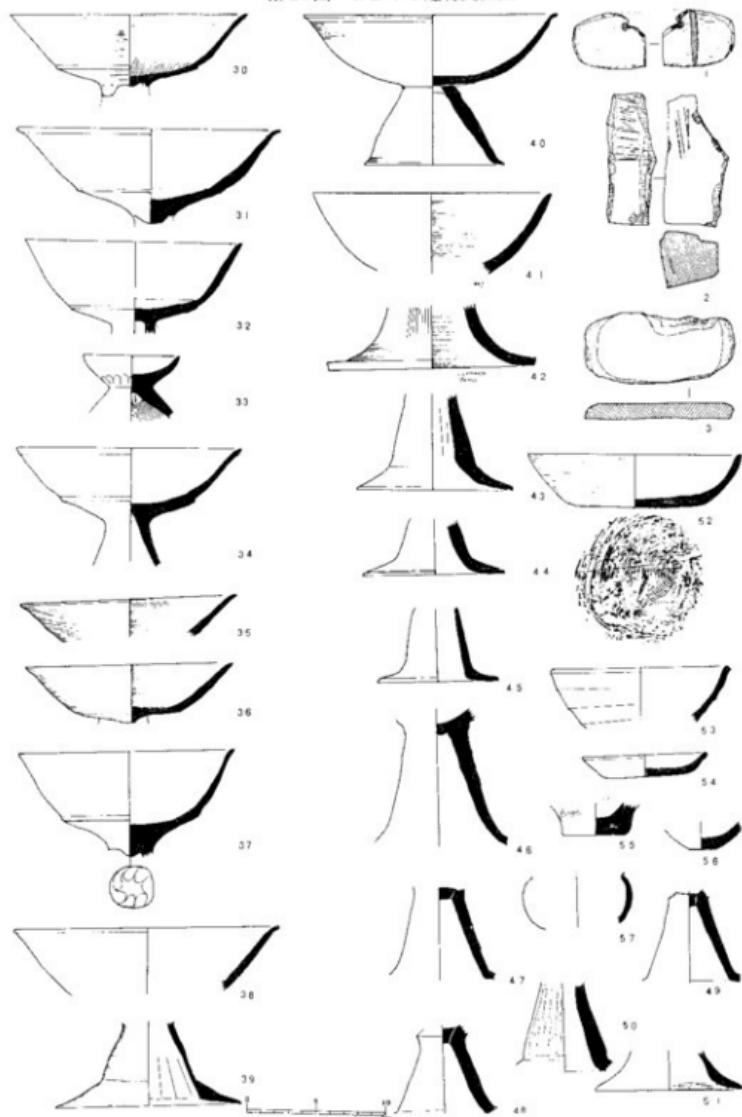
る。口辺部が口唇端部で外反するものと、外反しないものがある。また脚部も大きく脚裾部の形態から2形式に分類され、脚裾高が0.3~0.5cmになるものと0.3cm未満の脚裾高を有するものとなる。さらに脚柱部でも2形式に分類され、円柱をなす脚と柱形による中空の脚部とに分類されるが、坏底部と脚基部の中空部に凹板粘土を押入するものが47、48、49にみられ、接合脚部となっているものには、26、27、30~32、40に明瞭にみられる。中でも37では図示するごとく巴形の接合工夫（技法）がみえるものがある。

#### (7) SB02 遺構の上器の様相

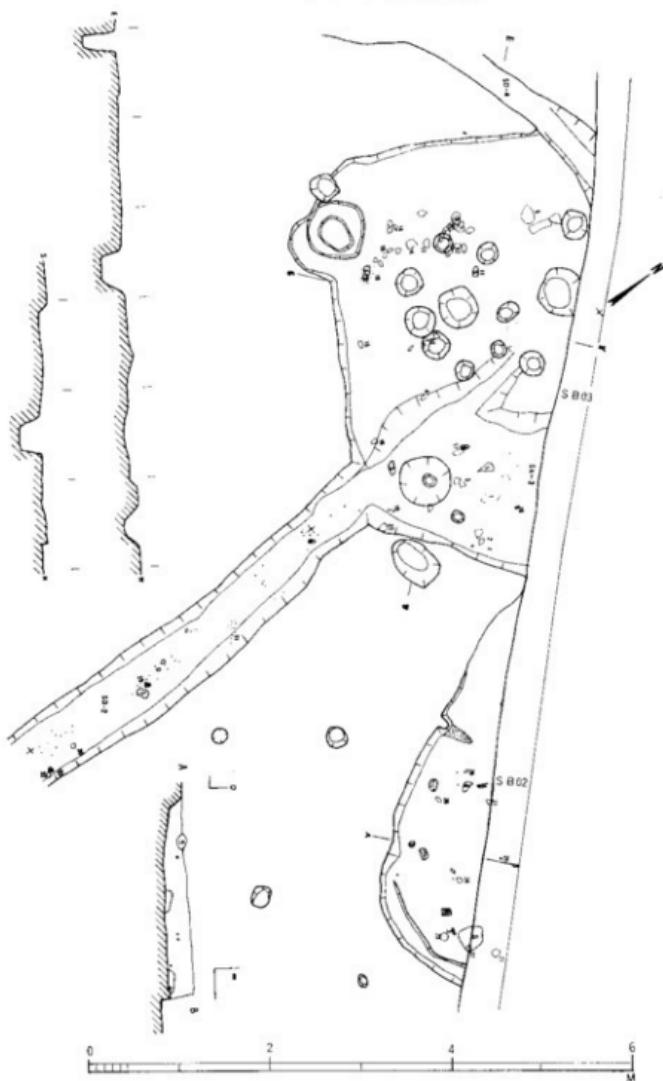
SB02の遺構検出範囲が、狭くごく限られた遺構内での遺物であり、これから全体を推察することに問題が残る。が検出された遺物は調査範囲の割には豊富な資料といえよう。

1の器台形土器は小型ではあるが焼成も良く、日常の什器として十分に機能をはたすことから推察される。2は口縁部にわずかに歪みがみられるが、器表面には叩き痕があり焼成も良い。3は壺形土器の蓋である。表面は入念なヘラ状工具による整形がみられ、横部に僅かな有段をもつ。内面は櫛状工具による壁面調整がなされ焼成も良好。4は壺形土器が壺形土器の口頭部であるが、肩部や口縁部にすらなく壺形土器とみる。いま4の蓋として3をあてると壺の口径17.5cm、蓋の幅部径は14.9cmで符合する器物といえる。5は高杯形土器の坏部片である。坏部の稜は垂直に近く鋭い稜をなし、有段部より大きく外反して口縁部を作る。口唇端面はわずかにつまみ下げた円面で、口唇上端面には稜を作る器形及び焼成もよい。6は浅鉢形の土器で、内壁面は入念な撫調整である。表面も同様な調整が施されているが、叩き痕が残され壁面の一部に凹凸がみられる。いまSB02の上器を通観して5世紀中葉か、もしくは5世紀中葉前に位置付けたい。いま5の遺物を壺形土器の口縁部とするならば、5の遺物はさらに古く、また4の口唇端面は整形後に、口縁部調整が転倒位によりなされた水平面であり、また内側面がわずかに走る稜線であることとも符合する。

第24図 SB01遺物実測図



第25図 SB02, SB03遺構実測図



(8) 2号堅穴式住居跡 SB02 第25図

SB02は、トレンチ調査により検出された遺構である。遺構の大半は道路用敷地外にあり、遺構の全貌は不明である。検出された遺構では一辺4mの隅丸による堅穴式住居が推定される。堅穴は地山面でさらに27cm掘り込まれている。住居の床面には、植物の炭化遺物が検出され、火災による住居の廃絶が行われたものと思われる。床面の南壁面には周溝が一部検出されており、その前面に径25cmの扁平な作業石がおかれていた。住居の柱穴は検出できなかった。

(9) 3号堅穴式住居跡 SB03 第25図

SB03もSB02と同様に、道路用敷地外に遺構の一部を残すものであり、遺構の全容は不明である。堅穴式住居の規模は、SB02と同様一辺4m強の隅丸方形であろう。住居の主軸は北30度西を指向している。入口部は不明であるが、遺構の北側壁面にSD4と、住居の南隅にはSD2の溝が交差している。また住居の南壁面とやや平行する上傾状遺構SK3があり、SB03の壁面位置を犯している。住居に伴う柱穴を確認していないが、床面には円形に群集する柱穴が検出されている。

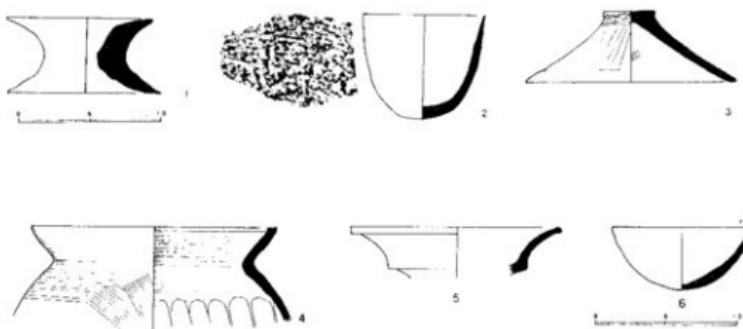
SB02・03での検出された遺物は、表に示すように大きく2分される出土状況にある。床面での出土土器に須恵器を明らかに伴っており、土師器との共存的な生活が営まれていたことがある。

遺物の項で述べるごとく、SBに伴う遺物と、SDに伴う遺物では、また時期を異にするもので、明らかに溝状遺構は、堅穴式住居の廃絶後に開溝されたものといえよう。

SB 02 と SB 03 の遺物出土状況 地面 0 cm としての深度 (空白は破片) (単位: cm)

遺物番号	SB ○ -	1	2	3	4	5	6	7	8
		11.5	13	10	2	13	11	7	6
遺物の器種		壺形土器				小型鉢形土器			
遺物番号	9	10	11	12	13	14	15	16	17
深度	5	6	1	1	3	4	3	3	6
遺物の器種		高壺形土器				壺形土器			コップ状土器
遺物番号	18	19	20	SB ○ -	21	22	23	24	25
深度	9	7	7		9	1	10	13.5	12
遺物の器種	石 繖	器台形土器			壺形土器	壺形土器		頃恵器	
遺物番号	26	27	28	SD 2	29	30	31	32	
深度	10	9	9		9	7.5	8.5	10.5	
遺物の器種	砥 石	小型丸底壺	小型丸底壺		頃恵器	頃恵器	頃恵器	頃恵器	

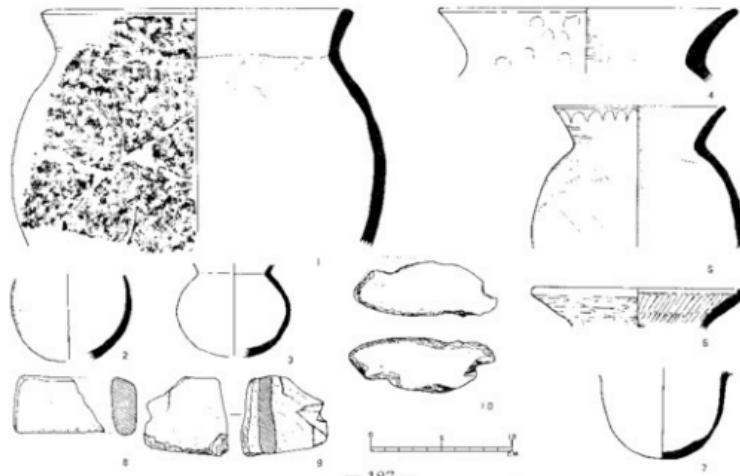
第26図 SB 02 土器実測図



## SB02の遺物

種類 図版上	番号 出上	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考		数名
					外表面	内側面	
器台形 上器	1	19 口徑 5.8 脚部 径11.0 器高 5.1	ツブミ状に広がる器台である。中央部は空洞で器形は大きくくの字に形成されている。	外表面はくの字に成形され、内側面には受削としてのヘラ削りがあり、脚部はただ外方に開く。外側はナデ調整である。	焼成良好。胎土密。		1
コップ状 下器	2	17 口徑 7.4	やや平底を想定されるコップ状の器物で底部より僅かに内側して上外方向にのび口唇端面は内側面が狹まり鋭い。	全面ナデ成形(調整)であるが、口辺部内面にヘラ削りがみられる。	焼成良好。胎土密。		1
蓋形土器	3	15 天井部 8.8 脚部 径14.9 器高 5.0	天井部より、上外方向に大きくハの字形に開く脚部を調整。	内面に若干クシ状ヘラ工具形。外表面はヘラ研磨による盛形がみられる。水平で台状をなす天井部にウチ模とヘラ研磨がある。	焼成良好。胎土密。		
蓋形土器 口様部	4	2 口徑 17.5 脚部 14.3 肩部 20.0 現脚高 7.5	口頭部で、口縁部はくの字口縁である。口唇端面は水平な面をなし、内側に棱をなす。	輪削手法で、胎土不均一である。口縁部は内外面ともにナデ調整である。胎面内面部に指頭によるナデ整形と、体部にクシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好。胎土密である。		1
壺形 土器環部	5	11 口徑 15.0 有段部 径10.0 現脚高 3.5	壺の右後部より、大きく外反する口縁部で口部で僅かに下方に屈折して縦をなす。端面は外側に傾斜する半円。	全面ナデ調整である。	焼成良好。胎土密である。		1
小型 鉢形土器	6	5 口徑 9.8 高さ 4.6	丸底の底部より内側しながら上外方向にのび、口唇端面を丸くおさめる。	全面ナデ調整である。	焼成良好。胎土密である。		1

第27図 SB03遺物実測図



#### (10) SB03 の遺物の様相

検出された遺物は少量で、しかも甕形土器、壺形土器口縁部、小型丸底形埴、小型鉢形土器と砥石及び破損した石器がある。1と5の土器には少量の煤煙が付着している。5の口縁部には半円の連続する半周弧文が施文されている。内壁面も入念な刷毛状工具による横ナデ整形が施されている。2と3は小型の丸底埴であるが、2の器物は内彎した球形の体部からなり、胎土の最大厚は底部にある。口縁部はなく無頸である。3は球形の体部に、口縁部を有するが、口縁部は欠失している。7は鉢形土器としたが、口縁部の様子も不明で明確ではない。10は石包丁とみているが、欠損遺物で明確ではないが、片面にチョピングが施され刃部をなすところから石包丁とした。

## SB03の遺物

種類	番号	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
變形土器	1	21	口径 22.5 頸部径 20.0 体部径 26.5 現器高 16.5	器形は丸底の底部が推定される。体部は球形に近く口縁部は浅いくの字口縁で底部でやや肥厚し、口唇端面は円面である。	輪削手法で、体部内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形痕(調整)。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好。胎土に0.3以内の粒子を含む。	1
小型丸底壺	2	28	2 体部径8.4 現器高6.0	丸底の底部より内凹気味に上外方向にのび、体部中位で内屈し球形をなす。	内面ナデ調整、外面ヘラ削り(回転)。	焼成良好。胎土帶。	1
小型丸底壺	3	24	頸部径5.0 3.体部径8.0 現器高6.5	丸底の底部に球形の体部、口縁部はくの字口縁?	内外面ナデ調整。	焼成良好。胎土密。	1
変形土器 口縁部	4	23	口径 21.2 頸部径 17.0 現器高 5.0	頸部より外反氣味に上外方向にのびる。口唇部に向かい胎土は減厚し、口唇端面は円面。	内面はヨコナデ調整で、外表面は指圧痕を多数残す程度のヨコナデ調整。		1
変形土器	5	3	口径 12.4 頸部径 9.4 体部径 15.0 現器高 10.0	体部中位より口縁部の遺物。体部より内をえがいてすぼまり頸部をつくる。口縁部はくの字口縁で頸部よりやや外反氣味にのび、口唇端面は円面。	輪削手法で体部内外面ともにヘラ削り整形である。口縁内面もヘラ削りしたのもヨコナデ調整。口縁部外側の口唇部に指跡による逆止押文がある。頸部内面にヘラ切りあり。	焼成良好。胎土密。	1
変形土器 口縁部	6	不明	口径 15.0 頸部径 9.5 現器高 3.0	頸部で僅かに上外方向にのび、大きく外反し、口唇部を円くおきえて、口唇内側に腰をなす。	内面のヘラ研磨はタテ方向に、外面ではヨコ方向に行う。		1
小型鉢形土器	7	27	頸部径 9.0 器高 6.5	丸底で器形は断面U字形である。	内外面ともよくヨコナデ調整されている。	焼成良好。胎土密。	1
砥石	8 9	長径6.3 8.短径4.0 長径6.0 9.短径5.5	長径面は全面使用され、断面でU字形に磨滅。 断面長方形で2面のみ使用している。	欠損遺物。 欠損遺物。	器厚1.7.砂岩。 器厚1.2.砂岩。	1 1	
石包丁?	10	不明	長径 10.3 短径 4.0 器厚 0.7	長辺の両端面は弧を描き、1面にはホーリングがみられる。また包丁は1面同様の手筋がみられる。	欠損遺物。	碌泥片岩。	1

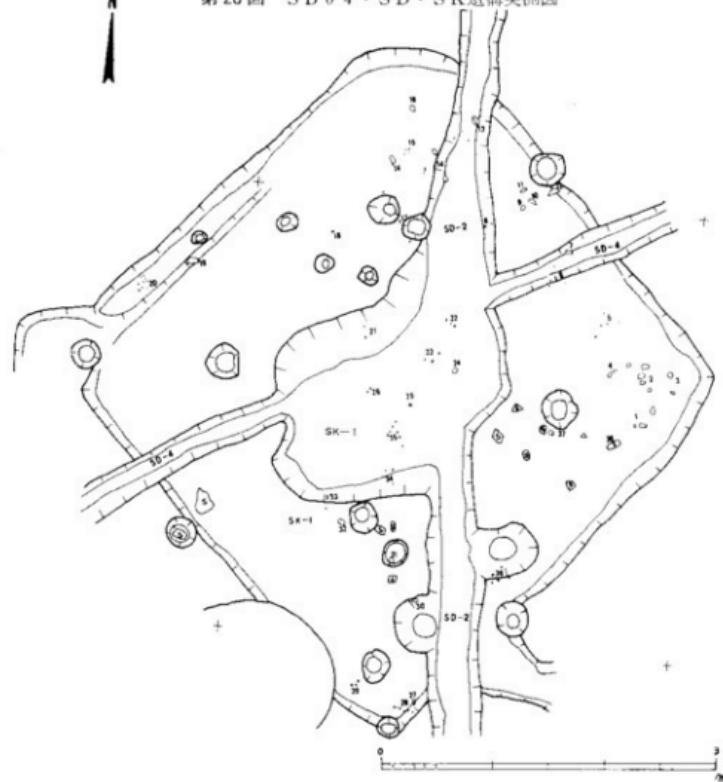
### (11) SB04 造構と SD, SK 造構の様相

SB04 の竪穴式住居跡は、一辺  $4.6 \times 4.5$  m で隅丸な角を 1 隅にもつ方形プランである。住居の主柱は 4 本である。それぞれの柱間の心心間距離は 2 m と 2.3 m の等間隔である。住居の主軸方位は、方形の各隅が東西、南北の位置にあり、北 45 度東を指す。

住居造構の中央部を溝状造構 (SD-2) が北から南に走り、SD-4 は東から西に流れる溝が住居造構の中心位置で交差する。

SD 造構は SD-4 造構が、SD-2 造構により切られている。しかも SD-4 と SD-2 の交差する位置に長径 2 m、短径 1.1 m の長方形の土壙状造構 (SK-1) がある。SK-1 の底部は SD-2 の深度と共通しており、SB04 の床面より -20 cm である。

第 28 図 SB04・SD・SK 造構実測図



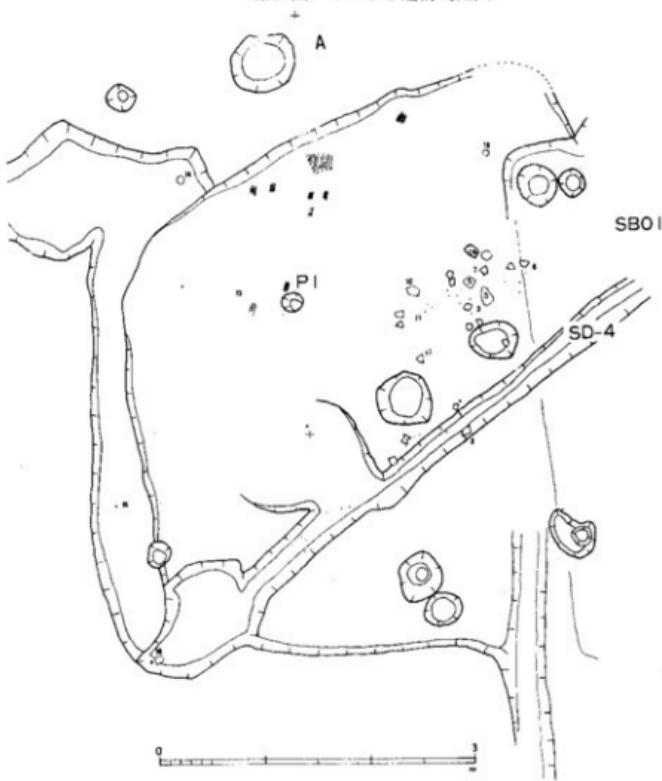
### (12) SB04 の遺物と SK 遺構の遺物出土状況

出土遺物は細片化した遺物が多く、特に SD と SK 遺構の搅乱により細片化が進行している。SB 遺構に属する遺物として、遺構実測図(28)の遺物 No. 22~26 と No. 34・35 は、SK-1 の遺物として取り扱い、SB 遺構から割愛した。SB 遺構で特に安定した遺物としては、1~18 の遺物を中心にし、No. 27~32 は SB01 との関連性の強い遺物として取り扱った。

### (13) SB05 遺構と SD-4 遺構

SB05 遺構は、後世の開発により遺構面の削平化が強く、遺物はもとより、遺構面の検出も

第29図 SB05 遺構実測図

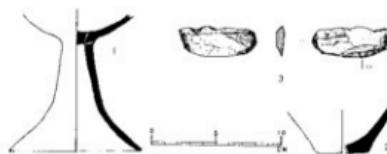


不確実である。SB05 の壁面として確定に検出できたものは、北側壁面と柱穴 P<sub>1</sub> である。すなわち SB05 遺構は、SB04 遺構により切断され東側壁面は不明であり、さらに SB01 により、東側壁面は切り合っている。一辺 4.5 m の隅丸方形と推定される。

SD—4 遺構が、東方より貫通して終わる。SD 遺構も浅く西側壁付近では、SB05 の床面とほぼ同じ深度となる。

SB05 の北側壁面と、付近の床面より検出された炭化遺物があり、また SB01 との切り合う東側壁面側での出土遺物を、SB05 遺構に関連する遺物とした。住居の主軸は北 0 度西である。

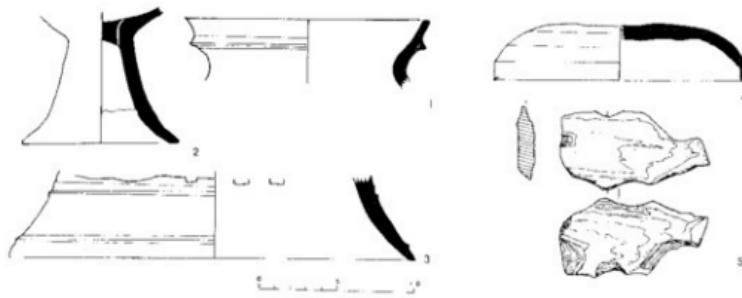
第30図 SB05 遺物実測図



SB05 遺構の遺物

種類	番号 図版 出下	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
高杯形 土器	1	基部径 2.5 現器高 10.5 脚底部径 10.2	杯部は丸底で、体部は内腹弧 朱に上外方向にのびる。脚部 は、脚基部より下外方向にの び、脚根部で大きく外方向に 開く。脚根高 2.5 と高い。	全面ナデ調整である。脚部は 貼り付け、杯底部には粘土板 をつめている。	焼成良好。胎 土に粒子を含 まず。	1
底部	2	底部径 3.8 現器高 3.0	平底の基底部より上外方向に のびる。	全面ナデ調整である。	焼成良好。胎 土に粒子を含 まず。	1
石器	3	長径 6.2 短径 2.3 厚味 0.6	長方形で長辺の一方にノミ形 の刃部をもつ。	両面大削難面をもつ。類似向 に小削難がされている。	焼成良好。胎 土に粒子を含 まず。	1

第31図 SD 遺物実測図



## SD 遺物

種類	番号	法身cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量	
圓形土器 口縁部	1	34	口径 15.8 頸部高 12.7 器高 4.0	口縁部で屈曲したのも、内縫気味にのび、口唇端面は水平な平面である。口辺部に断面で三角形の突帯を貼り付ける。	マキアゲ、ミズビキ成形、内外面ともに回転ナデ調整。	焼成良好。胎上密。 青灰色	1
上器 高环脚部	2	ビット	基部径 4.3 器高 8.5 脚部直径 0.2	脚基部より下外方向にのびたあと、脚部で大きく外反する。	脚基部に粘土板の詰めが見られる。脚根部に胎土の継目がある。内面ナデ調整。	焼成やや歎。 胎上密。 赤褐色	1
須恵器 脚部片	3	23	脚部片 25.4 見基高 5.5	脚部片で下外方向に内縫気味に開く。外側に二条の内帯をつくる。破損部に方形の透孔が推測される。	マキアゲ、ミズビキ成形。内外面ともに回転ナデ調整。	焼成良好。胎上密。 青灰色	1
須恵器 蓋環(蓋)	4	35	口径 16.0 器高 3.5 口縁部高 1.0	口縁部は下方向に直立し、僅かに端面で内傾する。天井部は扁平である。	マキアゲ、ミズビキ成形で、天井部外面は%以上回転ヘタ削り、他面は回転ナデ調整である。(天井部中央部マキアゲ)	焼成良好。胎上密。 青白色	1
石器	5	不規	長径 9.5 短径 4.8 厚味 1.0	不変形で数ヶ所に打撃痕がある。用途その他は不明である。		碌泥片岩。無石器?	1

## SB06 の遺構

SB06 遺構は三重に切り合ったトリプル遺構である。SB06-1 遺構は、一辺 740 cm の壁面距離は確認されるが、他の一辺は地山面の掘り下げにより、遺構は内力部で削除されて不明である。06-1 遺構は掘り込みは少なく、殆ど地山整地程度であり、平地式の住居跡と推測される。遺構は方形プランで四注式の家屋が考えられる。柱穴の心心間距離は 300~330 cm が計測される。

SB06-2 遺構は、長径 6 m、短径 470 cm の長方形の規模で、主軸方向は北 45 度東にとる。竪穴の南壁面と西壁面には周溝がめぐっている。床面にて検出されたビットの内で、本遺構の主柱の柱穴として理解されるものはえがたく、何れも不規則であり、僅かに P<sub>4</sub> と P<sub>5</sub> をあって、P<sub>6</sub> を含めることができるが疑問である。南壁面に近接する柱穴 2 孔がある。35 図にみられるように床面の掘り込みもあり、柱穴間の距離 2 m は入口部分とも推定される。

SB06-3 遺構は、SB06-2 を掘り込む形での床面規模である。床面規模は長径 440 cm、短径 400 cm と僅かに異なる方形限丸のもので、床面は地山を 20 cm 剥ぎ込むものである。遺構の主軸方向は SB06-2 と共に通する方位を取る。床面では 1 柱穴を検出する以外は柱穴はみられない。南壁面中央部にやや凹み深くなる場所が入口部と想定される。柱穴を必要としない覆屋による貯蔵小屋とも推考される。

#### (14) SB06 遺構の遺物出土状況

SB06 の第 35 図出土状況図にみられる出土状況であるが、なかでも F<sub>1</sub> 及び F<sub>2</sub> に集中的な遺物の出土をみた。何れの土器も時期的には余り隔たりのない時期と推定される。

SB06 の遺物として一括取り扱い SB06-1 と SB06-2 として分類すべきものであろうが、遺物採集時に混乱したことに対する原因するものである。特に SB06-3 の遺物は少量であり、しかも計測にたる遺物がなく割愛をした。

#### (15) SB06 の遺物の様相

SB06 の遺構にともなう土器の内、それぞれの特徴を特に示すものを取りあげた。内でも壺形土器、甕形土器、壠形土器、小型丸底壺、手づくね土器、坏形土器、高坏形土器、器台形土器、瓶形土器、片口形土器等が検出された他に石器がある。これらの遺物について若干の考察をすれば

壺形土器では口縁部の遺物が多く、口縁部のみでは壺形上器と甕形上器の判別は困難ではある。14、23、28、29 にみられる口頸部の様相は、松山平野の弥生後期後半から終末にかけての遺物に共通する土器である。29 は口唇端面が肥厚する肥厚口縁で、口唇端面を外方に垂直平面を作り、その平面に 2 条～4 条範囲で施文される。ただ 1 条かまたは疑似凹線や帯状の疑似凹線の場合は口唇端面向かい肥厚をしない場合が多く、14 の口縁部の様相を保つものが多い。28 は複合口縁の口辺部で、この口辺部に流水文や、波状文、連弧文、袈裟禪文、浮文を付す場合もあるが、終末期に向かい施文は簡易な凹線文に縮約される。13 では口唇端部直下に指頭痕があり、口唇部のつまみ出し調整がみられ、9 では口唇端部をつまみ出し、端面は疑似凹線が残され、11、38 では端部につまみ出しがわずかに残るが、3 や 26 のくの字口縁にはみられない。

甕形土器にもこの種の口縁部の変化がみられ、9 の口唇端面に心もち凹面を感じさせる。

甕形土器 7 はくの字口縁で肩張りの少ない土器で、24 の土器と類似する。口縁部は内彎しているが、口唇端面は水平であり転倒させての調整がみられ、このことは甕形土器の 25 や 1 と 14 などにもみられる技法である。27 は小型の甕形土器と思われる。

小型丸底壺は 35 をはじめ 6 の口縁部がある。小型の割には 6、35 共に胎土は厚味があり、器形の調整には櫛状工具による整形が施されている。21、22 は手づくねの土器で、21 には外面に指頭痕がみられるが、口縁部は内外面ともに横ナデ調整である。

高坏形土器は 41～49 の遺物がある。坏口縁部は有段部より口辺部における遺物が多く、有段部より外上方向に減厚しながら立ちあがり、口唇部で外折するものや、わずかに外湾するものとがある。外上方向に立ちあがって口唇端面が鋭角で稜をさすものと、円面をなすものとがある。脚部では 41、47、52 にみられる脚基部より下外方向にのび、脚底部でわずかに外

## SB06 遺構の遺物 1

種類	番号 回数[山]	法 量cm	形 態の特徴	技 法の特徴	備 考	数量
壺形土器 口 縁	1	口径 16.0 底部高 3.0	頸部状に開く口縁で、口唇部 に向かい、胎土厚を減じる。口 唇端面は平面をなす。	内面は窓いクン状痕。外表は タテにハケ目整形の後ヨコナ デ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 縁	2	口径 17.2 頸部径 13.5	頸部より頸頭状に外反する口 縁部で端面に向かい、胎土は 減厚し、端面は平面をなす。	内外面ヨコナデ調整である が、外面に粗いクシ目状のヘ ラ工具による整形痕あり。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 縁	3	口径 14.2 底部径 11.5	頸部より外側する内ぞりのあ る口縁で口唇部へ向かって胎 土は減厚する。	口縁部内外面ヨコナデ調整。 体部はタシ状ヘラ工具の整 形。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 縁	4	口径 14.2 頸部径 7.6	頸部より撇斗状に開く口縁部 で、口唇部で幕かに外反する。 口唇端面を円くおさめる。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
鉢形土器 ?	5	口径 15.0 頸部径 13.0	体部14 cmで環形の器形が推 定される。口縁部はくの字口 縁で、端面は外に傾斜する平 面。	体部はクシ状ヘラ工具による 整形。口縁部は内外面ヨコナ デ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 縁	6	口径 10.7 頸部径 8.4	肉厚な胎土で、口唇部に向か い減厚する。口唇端面は水平 な平面をなす。	内面はヨコナデ調整で、外面 はタシ状ヘラ工具でタテに整 形。口唇部外面直下に凹縫が めぐる。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	7	口径 18.2 頸部径 17.0	脇張りの少ない体部で僅かに すぼまり、くの字に屈曲する 口縁部で、口唇端面は外に傾 斜する平面。	体部にタシ状ヘラ工具整形。 口唇部はヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
浅鉢形 土器片	8	口径 24.2	口縁部片で、口縁内部に縦を つくる。口唇端面は外向に傾 斜する面をなす。	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	9	口径 20.5 頸部径 15.5	頸部でくの字に屈曲する口縁 部で、外傾する端面中央部に 腹凹縫をめぐらす。	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	10	有段部径16.7	頸部よりラバ状に開いた後 屈曲して立ちあがり縁をな す。	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	11	口径 17.0 頸部径 13.4	くの字口縁で、口唇端面で僅 かに外方に屈曲する。	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	12	口径 13.6 頸部径 9.4	頸部より上外方向に内側気味 にのび口唇端面は外傾する平 面	内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 頭	13	口径 18.4 頸部径 14.5	頸部より、上外方向にのび僅 かに内側する。外方に垂直な 面をなす。	内面はヨコナデ調整。外表は ヘラ研磨で口唇部に指印痕が みられる。	焼成良好。胎 土密。	1
壺形土器 口 縁	14	口径 17.5 頸部径 7.0	口唇部で僅かに肥厚し、外方 に垂直な面をなし、中央部は 大きく凹面をつくる。	内外面ともナデ調整。	焼成良好。胎 土密。	1

SB06 遺構の遺物2

種類	基部 直径 （mm）	法 量（mm）	形態の特徴	技術の特徴	備考	数量
底 部	15	底部径 5.0	平底の基底部より上外方向にのびる。	底面から基底部にかけて粗いタシ状へラ工具による彫形。他はヨコナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
底 部	16	底部径 6.5	高台状の底部をつくり、基底部は直立する。体部は上外方向にのびる。	内面ナナゲ、外面タシ状へラ工具による整形。基底部に3条の凹線をめぐらす。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形土器脚部	17	基部径 2.5 脚幅部 10.2	脚基部よりリバッパ状に下外方向にのび端面は円面	内外面ともにナナゲ調整	焼成良好、胎土密。	1
体部片	18	体部径 10.0	器台の体部（柱）片で、擬四線を数条めぐらす。	内外面ともにナナゲ調整	焼成良好、胎土密。	1
底 部	19	底部径 6.0	平底の基底部内へ1cmに断面三角形の高台をもち、基底部より上外方向にのびる。	内外面ともにナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
底 部	20 21	21の口径 4.2 丸底	丸底の基底部より僅かに外反してのびる。	20は内外面に指頭押正模。21は内外面に指頭押正模。	焼成良好、胎土密。	2
底 部	22	丸底 4.5	4.5cmの突出する底部で基底部に有段をなす。	底部に指頭ナナゲ痕。他部はヨコナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
壺形土器頭部	23	頸部径 7.0	肩部より頸部の遺物で、頸部に断面三角形の突堤をめぐらす。	体部内面は指頭ナナゲあげ、外面はヘラ研磨。	焼成良好、胎土密。	1
壺形土器口縁	24	口径 21.0 頸部径 17.2	胴張りの少ない器形で、頸部で大きく屈曲したのち、口縁部中位で内壁し、口唇端面は水平な面をなす。	口縁部内外面はヨコナナゲ調整。体部にタシ状へラ工具整形度が残る。頭部内面はヘラ削り。	焼成良好、胎土密。	1
壺形土器口縁	25	口径 19.0 頸部径 15.2	僅かに直立する頸部より、上外方向にのびる。口唇端面は鋭い。口縁部中央部は肥厚する。	内外面ヨコナナゲ調整で、口唇端面に指頭痕をもつ。頸部内面はヘラ削り。	焼成良好、胎土密。	1
壺形土器口縁	26	口径 16.0 頸部径 13.2	くの字は縁で、口唇端面は円面である。	内外面ヨコナナゲ調整、頸部内面はヘラ削り。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底壺	27	口径 14.6 頸部径 11.7	胴張りの少ない丸底が推定される。僅かにくびれる頸部より上外方向にのび、口唇端面は円面である。	内外面ヨコナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底壺	28	口径 20.0 有段部径 21.6	口縁部で僅かに内彎する。口唇端面は平面をなしバラベットに5条の凹線をめぐらす。	外面ヘラ研磨、内面ナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底壺	29	口径 15.5 頸部径 8.0	頸部で水平に屈折する口縁部で肥厚する。端面外方にバラベットをつくり、3条の凹線をめぐらす。	内面はナナゲ調整で、外面はヘラ研磨。	焼成良好、胎土密。	1
小型丸底壺	30	口径 24.0	口縁部片で、リバッパ状に開く。口唇端面は円面である。	内外面ヨコナナゲ調整。	焼成良好、胎土密。	1

## SB06 造構の遺物 3

種類	番号 回収出土	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
小型 丸底壺	31	体部径 28.2	体部片である。	内面クシ状ヘラ工具による成形とヘラ削り成形。外面はクシ状工具による整形。		
小 豆 丸底壺	32	体部径 35.0	体部片である。	内面ナデ、外面クシ状工具による整形。		
小型 丸底壺	33	口径 12.0 推定器高 6.4	丸底の底部より内壁気珠に上外方向にのび、口唇端面へ向かって減厚する。	内外面ともにヨコナデ調整。		
口縁部片	34 40	口径 6.4 現器高 4.0	上外方向に直線状にのび、内面部で減厚している。口唇端面は円面である。	内壁ヨコナデ調整。外面ヘラ研磨。	焼成良好。胎土に0.5の粒子を含む。	1
小型 丸底壺	35	口径 6.8 頸部 5.4 体部径 9.0 器高 8.6	丸底の底部より上外方向にのびたのも、大きくすぼまり肩部が張る。頸部で大きく屈曲してくの字口縁をつくる。口唇端面は円面。	体部内面から口縁部にかけてヨコナデ調整。外筒はクシ状ヘラ工具による整形痕を残す。粗糲なナデ。		1
变形土器 体 部	36 37	体部 15.9 現器高 8.5 36 37	丸底の底部が内壁気珠に上外方向にのび、体部中央に内張する球形体部が推定される。胎土厚は共に底部で肥厚。	内外壁面は共にクシ状ヘラ工具で整形。 No.36の器表に媒焼が付着。	焼成良好。胎土は密で粒子0.2以下。	2
变形土器 口 縁 部	38	口径 18.5 頸部 11.2 現器高 8.0	肩張りのある肩部より、僅かに上外方向に立ちあがる頸部で、口縁部は大きく屈曲する。口唇部は円くおさえ内に捲をなす。	口縁部の外面は入念なナデ調整。体部内壁面は入念なタタキ方向のヘラ研磨で、頸部付近は指頭痕を残す。体部外面はクシ状ヘラ工具による整形痕を残す程度のナデ調整である。	焼成良好。胎土密。粒子なし。赤褐色。	1
变形土器 体 部	39	頸部 8.3 体部 14.5 現器高 7.5	体頸部の破片。球形の体部が推定される。	輪積手法による。両面ともにナデ調整である。	焼成良好。胎土密。	1
高杯形 土 器 口 縁 部	40	口径 24.2 現器高 5.0	内輪して上外方向にのびたのも、口縁部周で大きく屈曲する。口唇端面は円面。	口唇部から内面はヘラ研磨を施す以外は入念なヨコナデ調整である。	焼成良好。胎土密。	1
高杯脚部	41	基部径 2.0 脚底部 7.6	脚基部より大きく下外方向に開き、脚底部で屈折して水平な着地面をなす。脚根端面は僅かに平面。	全面ナデ調整による。	焼成良好。胎土密。	1
变形土器 口 縁 部	42	口径 18.0 有段部径 14.0 現器高 4.5	頸部で大きく上外方向に外彎したのも、屈曲して上外方向にのび、口縁端面は両面よりすぼまり深い。屈曲部に有段あり。	口縁部はヨコナデ調整。有段位に指頭痕を残す。頸部は入念なヘラ研磨である。	焼成良好。胎土密。	1
高杯形 土 器 杯 部	43	口径 19.4 有段部径 11.5 現器高 6.0	有段部より上外方向に僅かに屈曲してのび、口唇端面は円面。	全面ナデ調整。	焼成良好。胎土密。	1

## SB06 造機の遺物 4

種類	番号 （発見場所）	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数算
高杯形土器部	44 45	44口径 13.0 45口径 18.0 有段部 9.7 器高 6.0	44は上外方向に直線状にのび、口唇端面は円面。45は有段部より上外方向に直線状にのびたのち、口辺部で外折して溝面は円面である。	両器片ともに内外面ヨコナデ調整。	焼成良好。胎土密。	2
高杯形土器部	46	口径 16.0 基部径 3.5 器高 5.0	脚部を欠損。平底の底面より基部に僅かな有段をつくり、上外方向に内側気味にのび、口辺部に溝に屈曲し、口唇端面は鋭い。脚部に接合痕あり。	全面ナデ調整である。	焼成良好。胎土密。	1
高杯形土器脚部	47	脚基部径 4.0 脚根部 12.0 現器高 9.5	环部は尖底状の底部より上外方向にのび有段をなす。脚部は基部より下外方に大きく開き、脚根部で屈曲する。	环底部に断面三角形の粘土の詰めがみられ、平底となる。环外面はタシ状ヘラ工具による整形。脚部内面はナデ調整、外面はヘラ工具による研磨。环部と脚部に接合痕あり。	焼成良好。胎土密。	1
高杯形土器	48	口径 13.5 脚基部 4.5 脚根部 10.5 器高 13.2	环部は、丸底に近い基底部より内側気味に上外方向にのびがあり、口唇端面は円面である。脚部は、脚基部を基底部と共有した脚基部である。脚根部で大きく屈曲し、脚根部は平面。	全面をヨコナデ調整。	焼成良好。胎土密。	1
瓶形土器	49	体部径 23.0 把手部径 34.2 現器高 10.5	瓶の体部遺物で胎土厚は薄く、やや垂直である。	内面はヘラ削り整形、外面に平行叩き目整形が残る。ナデ調整。把手は体部に孔を穿ち押入式である。	焼成良好。胎土密。 赤褐色。	1
楕形土器	50	口径 22.0 体部径 20.0 把手部径 29.0 底部径 10.0 器高 19.5	平底の基底部より、胎上を減厚しながら内側気味に立ちあがり、口辺部で僅かに外反する。口唇端面は円面、底部には6個の孔が穿たれている。把手は角形。	内外面ともにヨコナデ調整。底部の孔にはヘラ切りがみられる。把手の底に爆煙が付着している。把手は貼付けてある。	焼成良好。胎土密。 赤褐色。	1
楕形土器	51	口径 27.0 体部径 23.0 把手部径 33.0 底脚径 11.5 器高 17.8	50と同様であるが、径が薄かに大きい。	50と同様である。把手に整形の指圧痕を残している。	焼成良好。胎土密。 黒褐色。	1
高杯脚部	52	脚基部径 3.2 脚根部 8.2 現器高 6.5	脚基部より下外方向にのびたのち脚根部で屈曲して僅かにのび、端面は円面をなす。	内面ナデ調整。外表面はタテ方向のヘラ研磨である。脚根部に屈曲時の指圧痕が残る。	焼成良好。	1
高杯脚部	53	脚基部径 3.0 脚根部 1.0 脚根部径 10.0 現器高 7.5	脚基部より下外方向にのび脚根部で大きく屈曲する。着地部で胎厚がすぼまり鋭い。	内外面ナデ調整である。脚基部に詰めの粘土がある。	焼成良好。	1
高杯の基部片	54	脚基部径 3.0	环底部片で、中央に詰めの粘土あり。	全面ナデ調整。		1

## SB06 遺構の遺物 5

種類	番号 試験番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
高 环 基 底 部	55	現有径 14.5	環底窓片で、中央部に穿孔がある。有段下部に 3 条の沈線。	内外面ナデ調整である。		1
底 部 片	56	円状部 5.5 口徑 23.5	No.56は环底部片で扁平な底盤である。	内面ナデ調整（底部内面にマキアゲ痕あり）。		1
鉢形土器	57	体部径 23.6	片方に口をもつ土器である。	入念なナデ調整で、体部中央位置に煤煙付着。	焼成良好。0.3 以下の胎土に粒子。	1
石 器 1	58	現長径 5.5 厚味 0.5	全面を研磨した平底半で先端部欠失。	扁平な片面に抉入がある。	砂岩。	1
石 破	59	長径 9.0 厚味 3.0	二面を研磨面に使用している。	扁平な一面には 2 段の研磨面がみられ、研磨面は凹をもつ。	砂岩質。	1
石包丁?	60	長径 11.5 短径 5.0	長径一面内中央部に棱をもつ。両面ともに剥離面をもつ。	使用痕はみられない。	頁岩質。	1
石 器 2	61	長径 9.0 短径 3.1	長楕円形で、しかも扁平な石器。	扁平な石材の周辺部は磨削である。	綠泥片岩。	1
作業石 1	62	長径 9.5	共に球形の石材を使用。No.43 では 1 面がやや肥大し、2ヶ所に使用痕が残る。	全面よく研磨している。	砂岩。	2
	63	長径 8.0				
作業石 2	64	長径 7.4 短径 4.0	不整形の石材であるが、5 面に使用痕がある。	使用痕が何れも凹面な U 字形をなすところから木質部の柄を加工したものと推定される。	軽石。	1

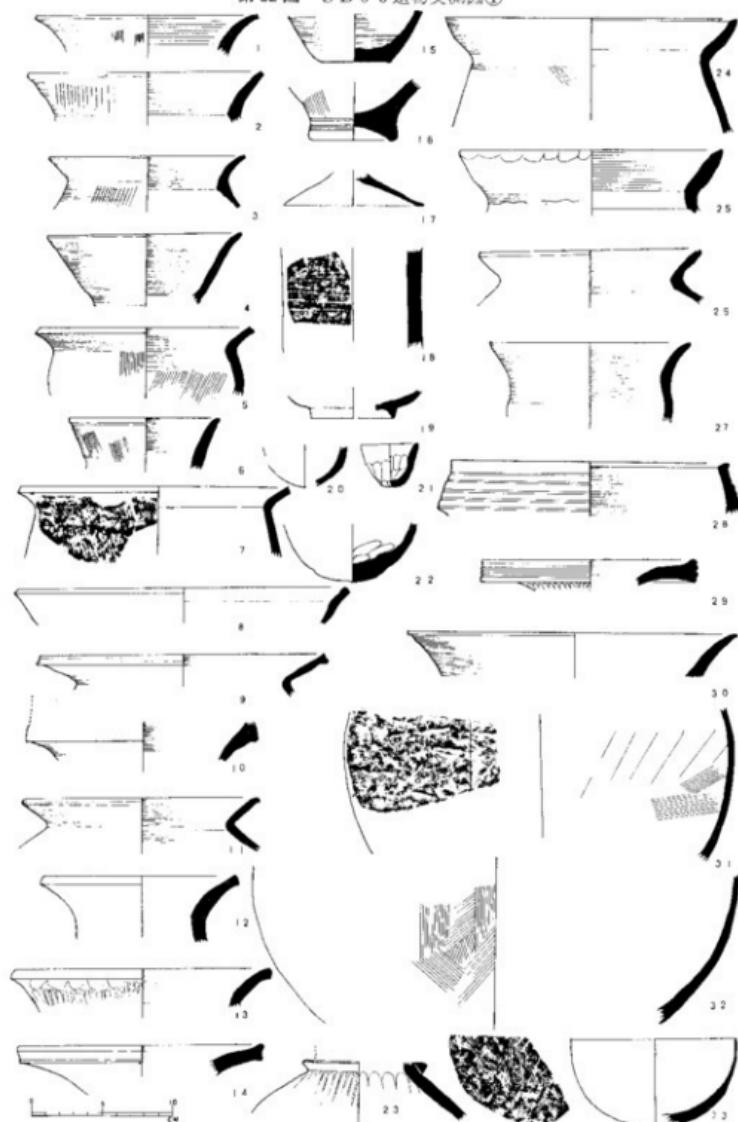
折して脚端面は稜をなす。48, 53 では脚端部は円面で、脚部高がみられる外折となっている。

瓶形土器は 49~51 の 3 個体が検出された。瓶形土器の把手は 50, 51 では貼り付けによる把手であり、49 は嵌め込みによる把手となっている。SB06 にて検出された瓶の底部は図示するような、中央部に円孔を穿った後、円孔の周囲に 5 個楕円形の孔を穿っており、旗立 B 区の SB05 で検出された瓶形土器とことなっている。

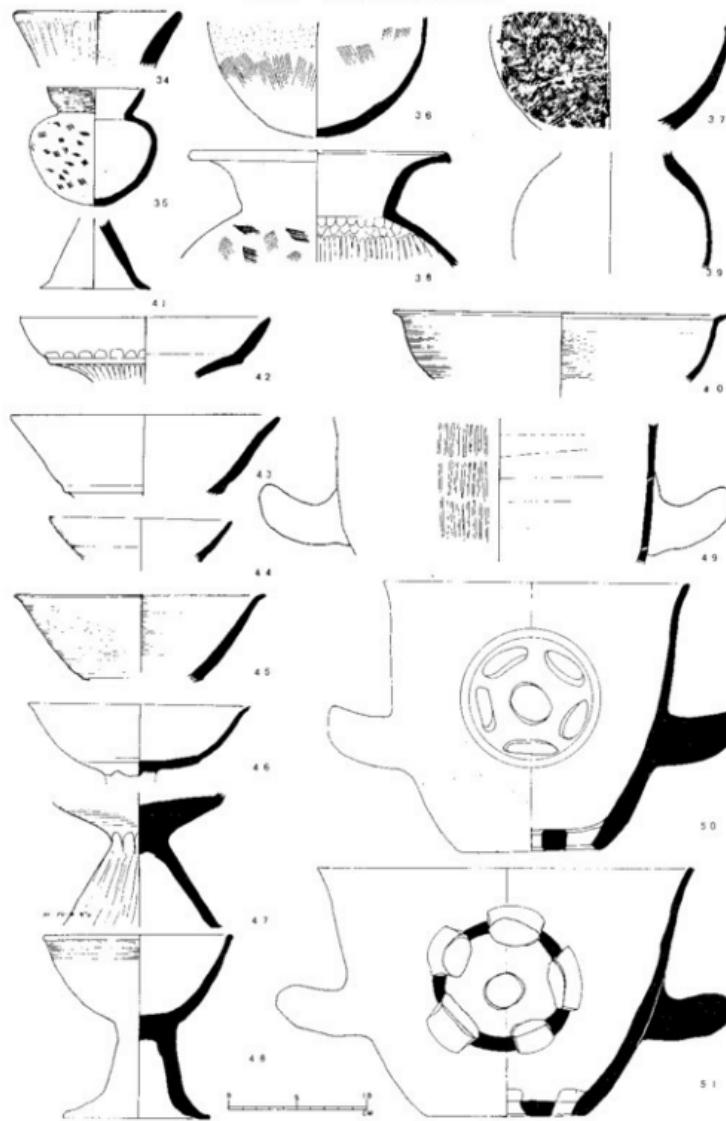
鉢形土器 57 は鉢の口縁部に、図に示す突出部があり、片口形土器とみられるものである底盤は欠損して不明であるが、丸底部が推測される。土器表面の中央部より下方部に煤煙が付着していることから煮沸用に使用された土器であろう。

石器は 6 点検出されている。作業石や砥石があるが中でも SB05 の遺物と同様に、軽石を作業石にした 64 の遺物がある。60 は石包丁の未完成品であろう。

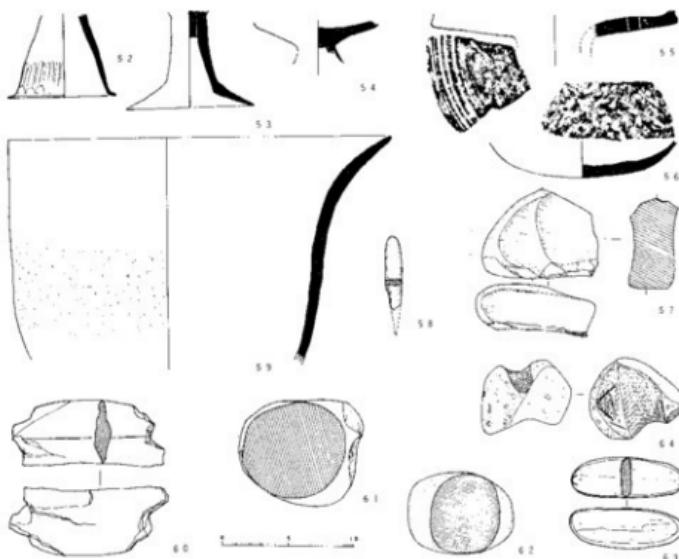
第32図 SB06遺物実測図①



第33図 SB 0 6 遺物実測図②



第34図 SB06 遺物実測図③

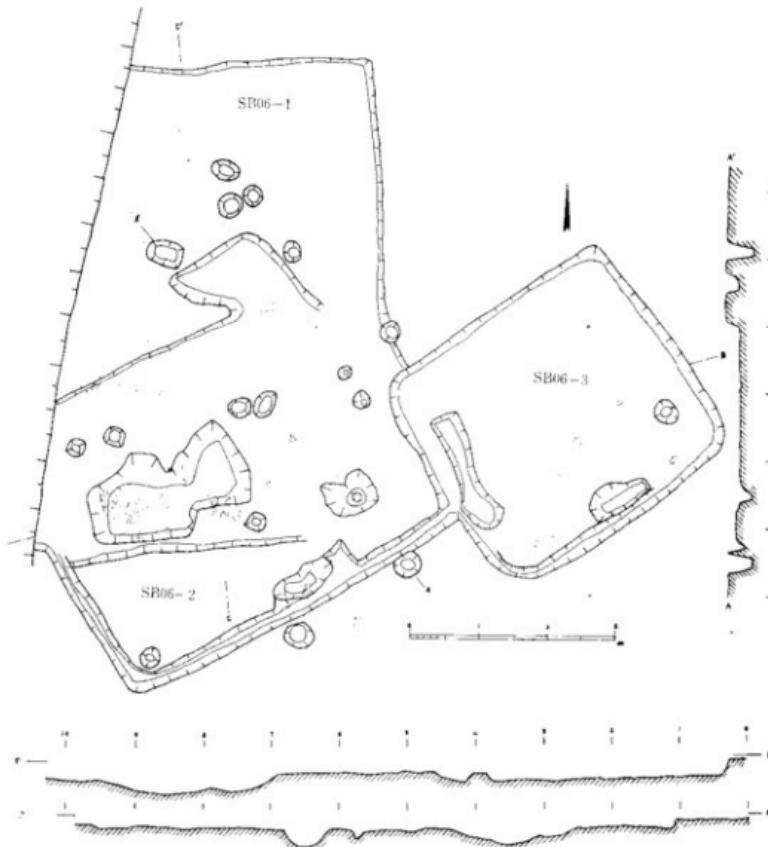


## V 旗立地区における小考

まずA区においては、竪穴式住居を3基検出したが、3基共に梅雨期と田植期とが重複して、調査途中で放棄せざるを得ない状況となり、その上に耕作機械の出入通路として使用されたこともあり、遺構そのものの破損が大きく、結果的には調査不能となり放棄した遺構である。だがSB01は方形の住居であり、しかも入口部に造り出し部をもつものであった。住居の主軸方向は北15度西にとり、床面は地山面を平坦に削平し調整して利用していた。SB02及びSB03はともに、水田の法面に接しており、遺構の1辺を僅かに確認するにとどまったが、住居跡の平面形態は共に方形プランと推察された。

A区での3基は何れも方形プランによる住居跡であり、しかもSB01では器台形土器とナイフ形の石器(磨製)を検出しており、SB02では土師器と共に須恵器の有蓋壺を出土している。SB03では須恵器は現時点では検出できなかったが、出土する土師器はまったくSB02の遺物と形態を共にするものであった。住居跡3基は共に時期を同じくする遺構であると推察される。住居跡の南方(直線距離)5m地点に1基と、SB01の南方2m付近に1基の泉があり、内1基(SB01南方2m)は発掘外区であり、現在も僅かに湧水がある。調査対

第35図 SB06遺構実測図



象地内の1基は湧水もなく、本文中に記述するごとく、洪積層の粘土を基盤とするぬるめ遺構として早くより活用していたものと推測されるが、検出された文化的な遺物もなく、確実な時代的把握はできなかった。だが図に示すように、機能的には水田の水温を高めるためのぬるめ遺構であろう。因に当遺構よりの灌漑水域は南面に広がる水田地帯であり、1日の内半日は日陰になる水田地帯への灌漑地域でもあり、当遺構の機能としてのぬるめの意義は大きい。

B区の遺構は、竪穴式住居跡5基（内1基は無柱穴遺構）と掘立柱建物遺構6棟と上塙状

遺構 3 基に溝状遺構 4 条であり、さらには、A 区と B 区の境界線付近に広がる掌大的集石遺構であった。

この地区で特に注意を引いたものに 5 つの遺構特色がある。その 1 つは SB02 の遺構である。本文に記述するごとく、遺構内に柱穴ではなく覆屋根を有する遺構であろう。その 2 は SB02 における炉跡よりの桃の種子を出土したことである。その 3 は、SB04 と SB05 の住居跡の炉跡周辺部の出土遺物の様相についてである。その 4 は掘立柱建物遺構の集中度合であり、その 5 は 4 条の溝状遺構の機能的な役割であろう。

小考では特に 5 つの遺構特色の内、3 ~ 5 について記述することとした。いま SB04 にて出土した砥石は図版においても示すごとく、明らかにビット状の遺構内にて出土したものであり、ビットは床面は傾斜しており、最下部は円形の小ビットとなり完掘後翌朝には湧水があり、砥石による器物研磨には最良の条件にあることが判明した。また SB05 遺構では、炉跡の付近に SB04 同様に小ビットが穿たれており、その 1 つは浅くやや広口であった。このビットには数枚の皿及び杯形土器（什器）が埋納されていた。明らかに使用当時は、上部を木蓋で被覆していたものと推察される。いま 1 つのビットは什器埋納のビット位置とは対角線上の位置に、上部は小径で、中部以下がややフラスコ状にふくらむ小ビットがあり、深度も深く、しかも完掘の翌朝には SB04 のビット同様に湧水がビット中部位置にあったことである。因にビット内の埋土は、中部位置は通常のビット同様の黒褐色土であったが、中部上層部では炭化面を有する植物遺体（削木、径 2 × 2、全長 10 cm が最大）の外に炭が多量に出土した。炭は下部に至るにつれ細片化されしかも少量化し、ついには灰褐色の粘性土となり、最下部は砂疊層に至る。ビットの深度は床面より移植ゴテと腕の長さであった。（同ビット内で軽石の出土があった。）

以上 2 つのビットの機能面での役割は明白である。1 つのビットは食器収蔵庫としての機能をもち、いま 1 つは残り火の薪の消火をはたす機能を有していたとみられる。当地では以上の機能的なビットを配置する炉跡は 1 例にすぎない。

掘立柱建物遺構は当地区では特に集中した片寄りがみられ、竪穴式住居跡 SB05 周辺に集中している（図版第 16 図）これらの内 SB2 と 6 とは棟方向及び建物の間隔からみて同一時期に建立していた建物と推察される。SB5 は明らかに棟方向が異なり、しかも SB2 と 6 と重複する遺構であるが、建物の柱間等から推察して SB2 と 6 にやや先行する時期と推察される。

また SB3 と 4 においても掘立柱建物は重複しており、時期的に差があるものと推測され、しかも時期的には SB3 が、SB4 に先行する掘立柱建物と思われる。これら掘立柱建物の時期的な推移を求める時、SB5 掘立柱遺構が最も古く（早く）ついで SB2 と SB6 の掘立柱建物遺構の併立時期があり、統いて SB3 の掘立柱建物遺構へ発展し、最後に SB4 の掘立柱建物遺構へと移行したものと推定される。いま SB01 と SB05 の竪穴式住居跡の中位に建立す

る掘立柱建物遺構 SB 1 は、SB 4 と同時期かやや先行する時期と推考する。

最後に溝遺構はB区の竪穴式住居跡 SB01～SB05 の施設後に開溝された可能性が大きい。その根拠はそれぞれの遺構を断ち切る形で貫流しているか、SB04 の状態では家屋に導水をする形にあることからも推察されよう。

では溝遺構と掘立柱建物遺構との関係はといえば、SB 5 の時期には SD 3 の溝が活用され SB 2 と SB 6 の時期に SD 1 や SD 2 、SD 3 が活用されていたのではなく地形的に類推されるが、SB 3 、4 や SB 1 の時期には施設され、遺構西方 10～14 m 地点に移行したものと旗立地区全測図や、発掘予定地の X 印位置の発掘調査において把握した溝遺構へと発展解消した可能性がみられる。溝遺構それ自体の築溝年代は SD 3 が最も古く、以下の 3 条は相前後するか、同時期と推定される。内でも須恵器片を出土した SB 2 と 3 では明らかに、SD 3 の遺物が先行する時期の須恵器を包含していたことは実明である。

C 区で検出された遺構は、竪穴式住居跡 7 基と覆屋状の遺構 1 基、土壙状遺構 1 基、溝遺構 3 条であった。竪穴式住居跡の内 SB01 と SB04 及び SB05 は共に遺構を切り合うトリプルな遺構の構築が考えられ、さらに SB04 遺構の中央部には SK 1 の土壙状遺構が切り込まれている。また SB06, 07 遺構の外に覆屋状の遺構が連結して構築されている。構築の壁面位置から推察すれば SB06 に連結する遺構と推定される。いずれにしろ、C 区における竪穴式住居跡は、いずれも時期的な大差を有する遺物は少なく、住居の平面規模による変化は著しく相違するところから、SB04 は SB03, 05 の発達した改造家屋と考えられ、また SB06, 07, 08 遺構では SB07 遺構が発展的に改造され SB06 となり、SB08 は SB06 に付随する複屋的收藏遺構と考えられる。

また溝遺構においては、3 条は何れも北から南面方向に貫流する溝遺構であり、それぞれに竪穴式住居遺構を縦断する形をとり、北端部は東方に流路を変更していることからも、明らかに B 地区同様竪穴式住居施設後に溝遺構の構築がなされたものと推察される。

## VI 星ノ岡遺跡北下 A 区の概況

北下 A 区は大きく北方向に斜面をなす地形である。発掘面積は 7 × 11 m 範囲である。検出された遺構は竪穴式住居 (SB01～SB04) 4 棟と掘立柱建物 (SB1) 1 棟と上壙状遺構 (SK) 3 基である。

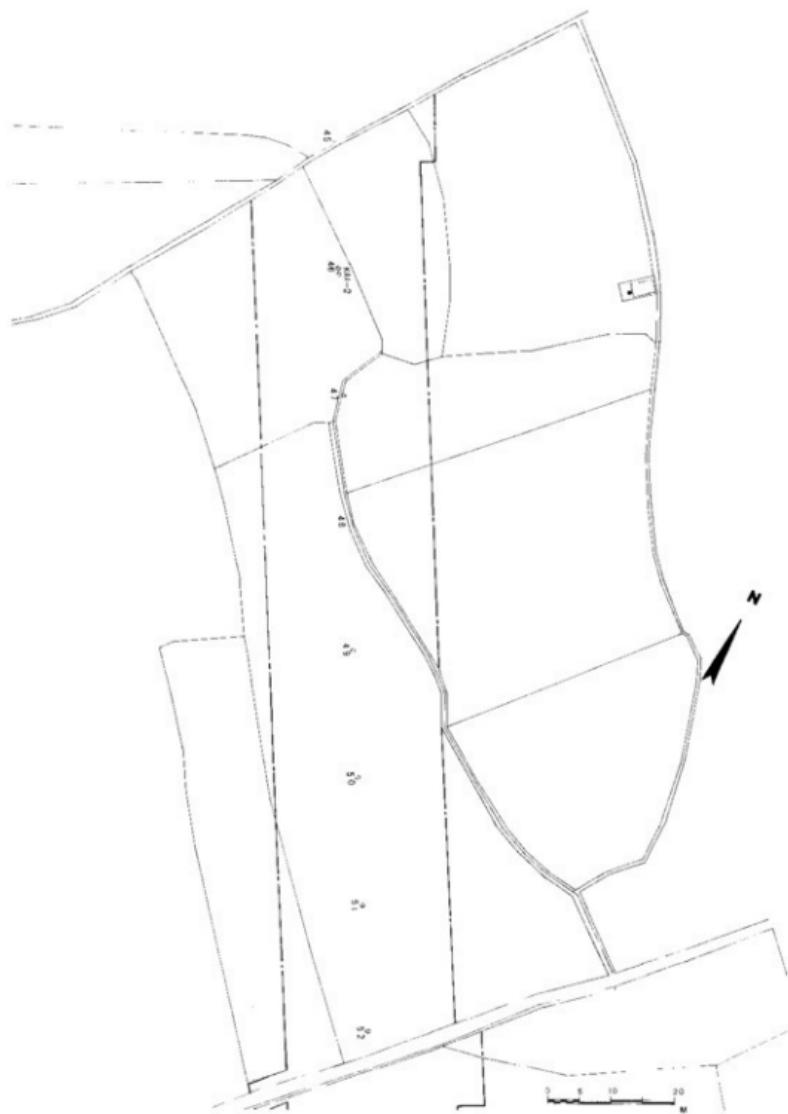
A 区の地層は 3 層からなっている。第 1 層は耕作土の A 層 27 cm の層厚、第 2 層は鉄分の多い茶褐色土の苦土層 5 ～ 7 cm 層厚で、北に下がるに従い層は肥厚していた。第 3 層は黄褐色の洪積層の地山で、粘土層が 1 m 層厚を有する地域である。

遺構は苦土層の下部にて検出された。この苦土層内に弥生式土器の細片を含み、若干南面に含有量が多く、北面では減少する傾向にあった。

さらにA地区の内の土壤状遺構やSB03の遺構面では特に耕作土が深まり45cmとなり  
昔土層も15~20cmと厚くなる。

特に当地区はB区との比高も高く畠田化の最も遅れて実施された地区である。北面する旗  
立地区とは、旗立A区に地溝がみられ、この地溝にはかつては数基の湧水源があった。現在  
は2基の泉と井戸が2基あり、星の岡及び天山地区への灌漑用水源として活動している。B  
区は星の岡独立丘陵の北面にあり、かつては日掛の地域であった。B区は駆前にすでに水田  
化され、またA区の西面に隣接する地域も地高は低く、B区よりも早く開発をみた地域で、  
この地に導水される用水のぬるめ遺構として第3図がある。A区は背の部分にあたりB区は  
その鞍部にあたる。

第36図 星ノ岡遺跡北下地区発掘位図



北下地区A区の遺構と遺物の状況

第37図 北下A区遺構全測図

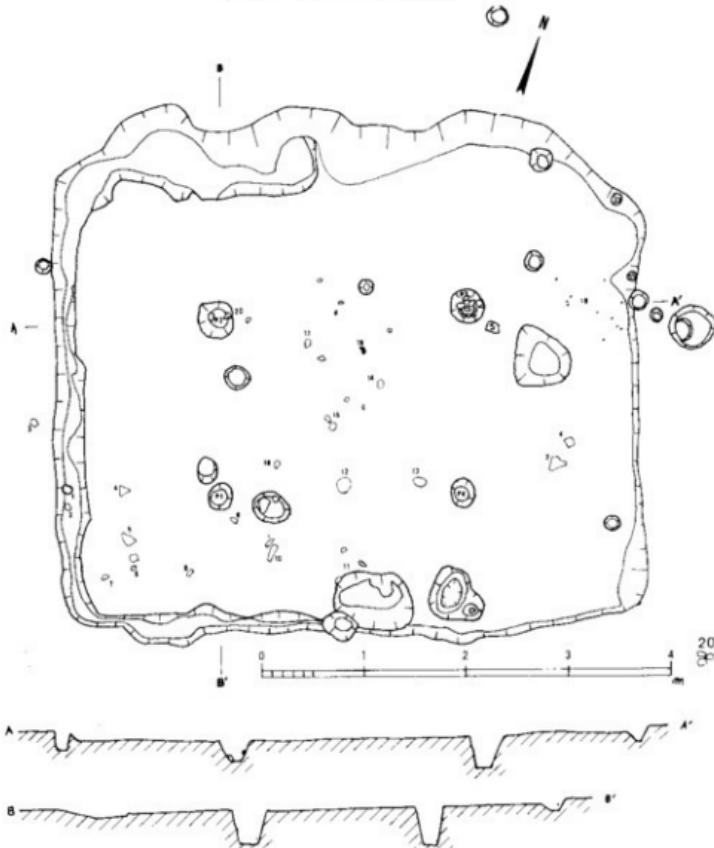


## 1 積穴式住居跡遺構と遺物

### (1) 1号聚穴式住居跡 SB01の遺構図(38) 国版第75図

SB01の遺構は、4本の主柱よりなる積穴式住居跡である。住居の平面プランは一辺5mと5.2mのやや方形の隅丸である。住居の主軸は磁北に対して東に70度ふれている。床面では方形の隅丸であるが、主柱の心心間距離は長方形の配置がみられ、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>間とP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は180cm間隔である。これに対してP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>では250cm、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>では240cmとやや狭まりがみられた。住居の南壁面の中央部から、西壁面を回り北壁面中央部には壁面に接した周溝

第38図 SB01 遺構実測図



が検出された。床面はやや北に傾斜し造りだされている。東壁面中央部と南壁面中央部に、1ないし2の土壇状造構が検出されたが、内部からの遺物はみられなかった。

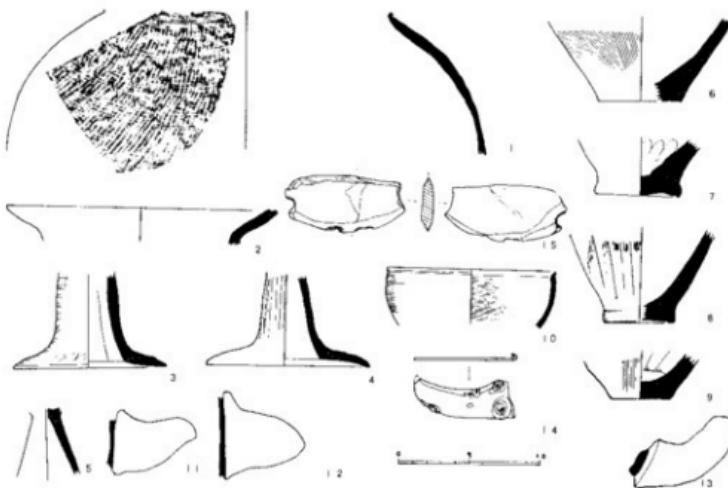
屋内での出土遺物は主に日常什器に使用されたとみられる上部器片を中心とするものであるが、住居の東南隅で検出されたNo.20は須恵器の盤であった。

さらに住居跡内での炉跡と推定される焼土や炭化遺物は検出することができなかった。SB01への入口は北面からが想定される。入口部の推定は、周構の排水だめが北壁面の中央部にみられることに帰一する。

S B 0 1 の出土遺物出土状況 地山面 0 レベル (空白は細片遺物) (単位: cm)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7
深度	16.5	13.5	17.5	18.5	17.5	17.5	17.0
遺物の器種	須恵器片	把手	底部		須恵器片		坏脚部
遺物番号	8	9	10	11	12	13	14
深度	17.5	19.5	18.5	15.5	18.5	10.5	13.5
遺物の器種		石包丁	坏脚部	底部	復元可能な 坏	坏の脚部	把手
遺物番号	15	16	17	18	19	20	21
深度	13.5	14.5	19.5	22.2	24.5	0.4	0.3
遺物の器種				鍌	三手千子 アラシ器	須恵器 盤	須恵器片

第39図 S B 0 1 遺物実測図

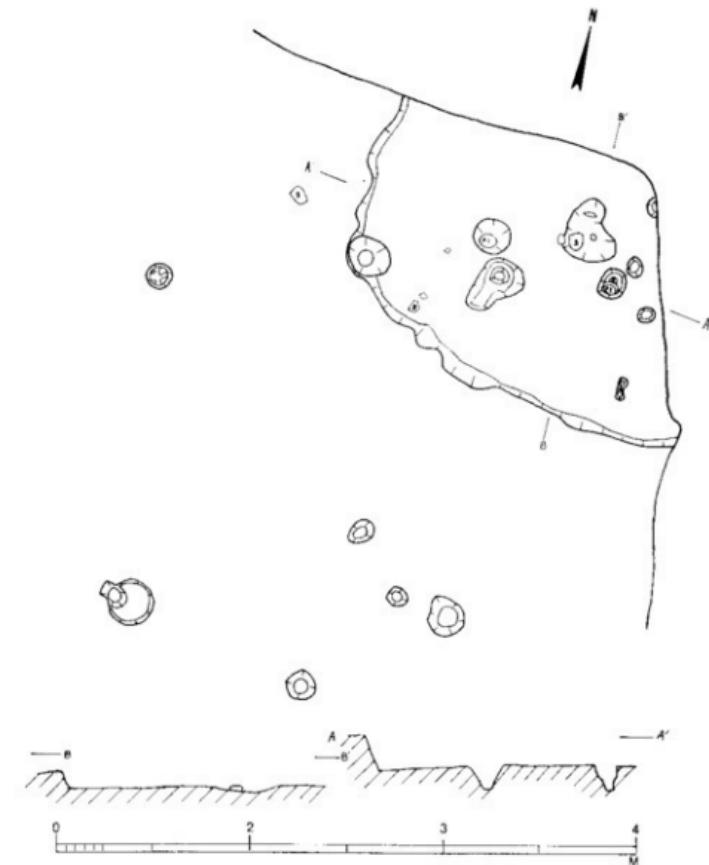


(2) 2号堅穴式住居跡 SB02 図版第76図

SB02はSB01の北方約4mの位置で検出された。SB02は遺構の一部でありその規模は明確ではないが、主柱とみられるP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>からして4mの隅丸方形か、4m×5m前後の隅丸長方形の堅穴式住居跡と類推される。B~B'断面での凹みは施けており炉跡と推定される遺構である。遺構内で検出された遺物は土師器片2点が床面より出土している。

SB01とSB02との地山面に数個の柱穴が検出されているが、どのような遺構に発展する

第40図 SB02 遺構実測図



ものか不明である。

#### (3) SB01 の遺物 遺物実測図 第 39 図

SB01 の遺物は数量的には少なく、さらに完形品としては、石器と鉄器の 2 点であった。両器はともに床面にはり付く状況で出土した。鉄器については、検出時は鉄片として取り扱わっていたもので、後の遺物整理で判明した遺物である。SB02 の屋内より、粗製の石包丁と鉄製の平鎌を出土しており、特に注意すべき遺物である。

その他の遺物は土器であるが、実測図 1 の土器は須恵器の壺である。他の須恵器はいずれも深度も浅く後口に転入した遺物として、SB01 に共伴する遺物としては割愛したが、No. 1 のみは深度 16.5 cm と割合に深く、異質であるが共伴することのできる遺物として取り上げたい。前述の鉄器と符合する時期とみられるからである。

#### (4) 壴穴式住居跡 (SB03)

SB03 遺構は発掘区の南法面に遺構の一部を検出したが、柱穴その他精査は不可能な遺構で詳細は不明だが掘方からみて方形もしくは長方形の竪穴式住居が推定される。東壁は磁北と一致する。

#### (5) 竪穴式住居跡 (SB04)

SB04 遺構は、土壙状遺構 SK 2 ~ 4 と重複し、さらに SB 1 の掘立柱建物遺構とも重複した遺構である。遺構の規模は一边 5 m の方形で磁北に対して西 40 度の主軸をなす。主柱は 4 本で内 1 本は SK-2 のため削除されている。主柱の心心間は 250 × 230 cm の位置にあり僅かに長方形をなす。遺構の中心部にある SK-4 の位置に炉址が推定されるが、SK-4 の遺構と SB 1 の柱穴のために詳細は不明である。

#### (6) 土壙状遺構

土壙状遺構 SK-1 は長径 1.5 m、短径 1 m、深さ 15 cm。SK-2 は長径 3 m、短径最大 2.1 m、深さ 10 cm の梢円形の U 字状の掘り込みである。SK-3 は方形で各辺 1 m であるが、一边にはり出し部があり 1.5 m にいたる。掘り込みは舟底形に掘削され、西壁面は垂直な掘り方となっている。SK-4 は SB04 の炉址と SB 1 の柱穴との重複した遺構であり円形をなす。掘方の法量は 1.7 m のやや不規則な多角形をなす円形である。

## 北下A区 SB01 の遺物

種類	國名(出土 No.番号)	高 度cm	形 態の特徴	技 法の特徴	備 考	表記
須恵器 (上腹部)	1 4 5	脚部径 20.3 体部厚 34.0 現器高 9.7	胴張りのなだらかな、球形の腹部が側定される。器厚はやや均整がとれ優美である。	脚部から胴部にかけて、平行叩きしめ文があり、横に走行するカキ目がある。内面は完全に叩き目を残している。	胎土は精選され、焼成も良好である。 青褐色。	1
須恵器 口縁部	2 表探	口徑 19.3 頸部径 14.0 現器高 2.3	垂直にのびた頸部より大きく外反して口縁部を作る。口唇面には有段の凹線がある。	頸部上部で急に外反する。口縁部中央に僅かに外方へのふくらみがある。器表面は内外ともにナデ調整である。	胎土は精選され、焼成も良好である。 英褐色。	1
高杯形 土器 脚部	3 16	脚部径 4.5 器高 0.7 脚底部径 11.0 脚底部厚 0.5	脚部中央部にわずかにふくらみがある。脚下部で外方に曲折する脚底部で、端面は丸く納めている。	脚柱の内面にしばり目がみられる。脚底部はハラ切り盤形がみられる。器表面は全面ナデ調整であるが、脚底部に指圧痕がみられる。	胎土は精選され密である。	1
高杯形 土器 脚部	4 13	脚部径 3.0 器高 6.5 脚端部径 11.5 脚底部高 0.5	脚部下方向に開きながら下がり、脚底部で大きく曲折する。脚底部レンズ状に内側する。	脚柱は竪方向のヘラ研磨が施されている。脚底部はナデ盤形である。脚内部は形抜きである。	胎土は精選されて密である。	1
高杯形 土器 脚部	5 7	杯底部 2.0 現器高 5.0	杯底部より下方向に大きく開く。	内外面ともにナデ整形。	胎土は精選されて密である。	1
変形土器 底部	6 2	底深径 5.8 底部厚 1.3 現器高 6.8	平底の基底部より上外方向にのびる。	肥厚な底部より漸厚しながら体部へと発展する。器表面に擦拂による整形。	胎土に若干の粒子を含む。	1
変形土器 底部	7 11	底深径 6.0 底部厚 1.4 現器高 4.2	高台状の底部で基底部僅かに直立する。底部内部凹凸がある。	高台は肥厚な平底底部のつまみ出しである。底部内向は指頭による整形圧痕を残す。指ナデ上を荒く擦整形。	肥厚な底部で粒子を含む。 焼成良。	1
変形土器 底部	8 11	底深径 5.0 底部厚 1.2 現器高 7.0	平底の底中央部が僅かに凹面する。本底部より上外方向に均衡な胎土でのびる。	底部は僅かなつまみ出し高台である。内部は入念なナデ整形で、表面は離力向上より下部へのヘラ状工具で形成。	胎土に若干の粒子を含む。 焼成良。 茶褐色。	1
変形土器 底部	9 3	底部径 5.0 底部厚 1.2 現器高 4.5	平底の底部で基底部より上外方向にのびる。	内面をヘラ工具で成形。器表面は樹状工具で成形。	胎土に若干粒子をもつ。 英褐色、焼成良好。	1
変形土器 口縁部	10 第2章 12 14	口徑 12.0 体部径 12.0 現器高 4.0 器厚 0.3	内彌する体部が上部で僅かにすぼまり、外方に短く曲折して口縁部をつくる。口縁部内面は斜面をなす。	均衡な器厚で尚手である。器底は内外面ともに横ナデ整形である。	胎土は精選され密である。 茶褐色、焼成良好。	1
瓶形土器 把手	11 12 14	長径 5.5 短径 4.5 接合部 0.3	三角むすび状の把手で瓶体部へ嵌め込み式の把手。	粘土塊を握りしめによる整形である。	茶褐色、焼成やや軟。	2
瓶形土器 把手	13 2	長径 8.0 短径 2.6 接合部 0.6	円柱状に指圧整形である。把手は瓶体部へ嵌め込み式である。	粘土塊を握りしめによる整形である。	茶褐色、焼成やや軟。	1

種類	図版番号	法身cm	形態の特徴	技術的特徴	備考	類似
鉄器 半鋸	14 18	長径 短径 厚	器幅は先端に向かい細まり、刃部に向かい内付する。	内彎する刃部は片刃である。接合部は中塗ではなく、曲折して中塗としている。	鍛鉄である。	1
石器 石包丁	15 9	長径 短径 厚	片面は剝離面をなす。片面には2棱3面による剝離面がある。	長刃の両端間に小斜面でもって抉入させている。	石質は綠泥片岩系である。	1

第41図 SB02 遺物実測図



#### (7) SB01の遺物の様相

第39図の1は須恵器で、SB01遺構の西壁の附溝内より検出された遺物である。頭部から体部にかけて叩き目が縦方向にみえ、叩きしめの後で頭部から体部にかけてカキ目調整があり、内壁面の叩き目は入念に撫でにより消されている。またSB01遺構の東南隅の前方約90cm位置の地山面にて検出されたコップ状の土器（盃）がある。遺物は福音寺竹の下にて検出された（第21図の8）に類似するもので、体部に2条の稜を作り出し上段の稜と下段の稜に把手が一方に貼り付けられている。把手は第21図の7に見るような断面長方形ではなく、当遺物の把手は断面は円形を呈している。

壺形土器としては、平底の底部片4個体が検出された6～9はそれぞれに異なる土器の整形痕が認められた。6は器表面は斜行する櫛目整形で、内面は入念なナデ調整が施され、7では底部の基底部をつまみ出して高台状の底部を作る一方、内壁面の底部付近は指頭による粗雑なナデ上げがみられ、その凹凸調整を櫛状工具で整形している。8は、内壁面は入念な横ナデ整形であるが、外表面はヘラ状工具による縦状の整形がみられ、つまみ出された高台状基底部は入念なる横ナデ調整が施されている。9は外表面は縦条に櫛状工具による整形が施されているが、内表面は箇状工具による基底部位置よりの整形となっている。

高環形土器は脚部のみの出土であり、詳細を知るすべもないが、3にみられる脚柱部の横ナデ整形に対して、4の脚部はヘラ状工具による縦方向の整形である。脚部整形の過程では共に棒形を使用した形跡は認められない。両器物は共に脚柱部を優美に整形するという共通した概念が認められるが、脚裾部における形態はやや異なる形態が認められる。4は脚裾部で大きく曲折し上方端面にレンズ状の凸状を呈し、内面にはこれに呼応して凹レンズ状の脚幅がみられる。これに対して3は脚裾部で大きく外曲折した後凸レンズ状の上方端面は、

脚裾端面をヘラ状工具による端面切断により、ほとんどその凹状レンズ状の脚裾高を認めさせない。

甄形土器の把手は破数の3個を検出しているが、本器片は確認できなかった。把手の内11には明らかに貼り付け把手であると確認されるが、13の遺物は嵌め込み手法による把手である。

石器遺物として15の石包丁がある。石包丁としては未完成品としての様相を呈するが、本遺物は完形品と認められる。長方形の両端面には粗雑な抉入がみられ、工具の片面は大剥離面であり、今一面には長径の周辺部に少剥離があり、しかも刃部は入念な研磨が認められるもので石包丁としての機能は十分に効果があり、しかも製作工程の簡略化は当然である。

鉄器に14の平鎌がある。平鎌の規模的な条件も種々論争されている遺物であるが、この遺物の他に福音寺筋邊B区出土の遺物と、松山市東石井小学校校庭内での遺構に共伴した小型の平鎌があり、かつての松前町出作祭祀遺跡の出土遺物と合わせ今後の調査の指標としたい。

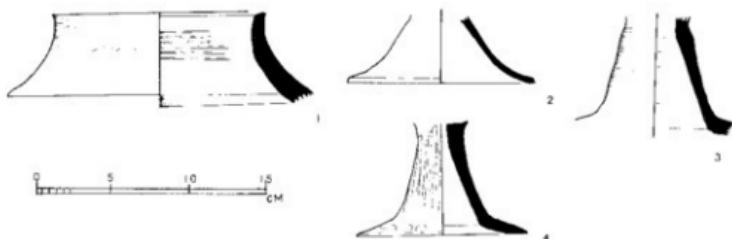
#### (8) SB02の遺物の様相

SB02の遺物についてはわずかに3点の遺物しかなく、様相を論述する限りでないが、ただ3点とはい、1の口縁部の曲折は古墳時代初頭にみられる上器の一般的な土器の口縁部の形態を求めることが可能な土器口縁部である。2、3は底部であるが、3は壺形底部と推察されるもので、内外表面はクシ状工具による整形であるが、内壁面での整形は入念で縦状に櫛状工具による整形の後に横方向に入念なる櫛状工具による整形痕が認められる。2は尖底の土器でしかも小型の上器底部といえる。これらに一連する小型の土器は製塙に關係を有する上器とも推察されるものである。

## (9) 3号堅穴式住居跡 SB03 図(43) 図版第76図

SB03はSB01の南面3mの位置にて検出された。SB03は道路予定地の境界線上に一部を露出し、大半の遺構は予定地外にある。そのため検出された遺構は、堅穴式住居の一隅のみであり、方形か長方形の住居跡かは不明である。北壁面中央部に長径1m、短径50cmの炉跡が検出されている。炉跡周辺部での土器の出土も多い。

第42図 SB03 遺物実測図



SB03の遺物

種類	番号	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
壺形土器 口縁部	1 13 14	口径 14.0 有段部径20.0 現器高 6.0	複合口縁の口部で、口縁の有段部より大きく内傾したのち、上に立ちあがり、口縁上端部は心持ち凸面をなし内傾する。	輪渦手法で、口縁部は複合する。その複合口縁である内面は輪状工具による模描き、器表はナデ調整である。接合部に擦目。	焼成良好。粗粒土を僅かに含む。ヘラ描き文がある。	1
高杯形 土器 脚部	2 2	脚底部径 3.8 脚下部径12.2 脚高 5.2	朝腹状に杯底部より下方に大きく開き、脚底部端面をへら切りしている。	両面を入念にナデ仕上げを施す。	胎土精選し、粒子なし。焼成良好。赤褐色。	1
高杯形 上器 脚部	3 6	脚上部径 4.3 脚根部 8.0 現器高 7.7	杯底部より下外方向にのびたのち、脚根部で大きく曲折する。	杯底部との接合部を指頭でナデ付けしている。着地部はみられないが大きく曲折する。外面はナデ調整されている。	胎土精選し、粒子なし。焼成良好。赤褐色。	1
高杯形 土器 脚部	4 7	杯底部 3.6 脚下部径11.0 脚根部高0.75	杯底部より下外方向にのびたのち、脚根部で大きく曲折するが、着地部は水平である。	脚根表面の着地面をへら切りしている。脚表面はヘラ研磨され、脚根端上面に指頭痕が残る。	胎土は精選されている。焼成もよくやや茶褐色。	1

#### (10) SB03 の遺物の様相

遺構の検出が一部分であり全体を理解することは不可能である。検出された遺物は、複合口縁の口辺部片と 3 器の高杯形土器の脚部である。

1 は漏斗状に開く口縁部に接合した朝顔形に開く口辺部であろう。当地では釜の口 1 ~ 5 遺跡をはじめ、津田鳥越 1・2 遺跡、安城寺三光遺跡、祝谷四遺跡や中村遺跡、来住遺跡、朝美町遺跡等々から出土する造物と共に通する壺形土器の口縁部である。

2 ~ 4 は高杯の脚部であるが、3 脚部はともに異なった成形過程をたどる脚部である。2 は脚基部より朝顔形（ラッパ状）に開き、脚中央部にわずかにふくらみを保ち、裾部端面は鎧切りによる傾斜平面を作り、内外面共に撫調整で仕上げる。3 は、2 と異なる。まず杯部との接合のために指頭による撫付け痕が脚基部に明瞭に残る。また脚裾部で曲折し脚裾高は 0.5 cm 以下と推測される。内外面共に撫調整であるが、内面にはにぶい稜を認める。4 は杯部の剥離が明瞭で、接合時の接着部のみ鎧痕がみられない。脚裾高は 0.75 cm と高く、接地面は鎧工による整形がなされている。脚裾端上面に残る指頭痕からして、大きく内弯した脚裾部であったと推測され、鎧切り以前の脚裾高は 1 cm を越える数値が求められる。以上土器からみて 4 世紀末ころか 5 世紀初頭の遺物としたい。

#### (11) 4 号堅穴式住居跡 SB04 図 (43) 図版 (77)

SB04 は SB01 の東方 5.5 m 位置で検出された遺構で、SB03 とは僅かに 2 m の距離にある。遺構の規模は一辺 5 m の隅丸方形の堅穴式住居跡である。住居は主柱 4 本の与助屋根によるものと推定されるが、後の土壇状遺構により主柱の内 1 つは不明である。さらに堅穴遺構内に、後続の高床式建物の柱穴が穿たれており、遺構はトリプル状態にある。

主柱の心地間距離は東西の 230 cm と南北 250 cm が求められよう。住居の主軸方向は北側の西柱位置で北 35 度東を指向している。床面では南壁面に僅かに周溝を検出しているが、その外西及び東側、また北側の壁面には周溝は検出していない。炉跡は西側の主柱中央部に直径 120 cm、短径 100 cm の長方形に掘り込みが検出され、しかも炭化と焼土化が激しい。特に周辺部の住居跡にて検出された炉跡遺構に比べて深く長大である。

第43図 SB 03, SB 04 遺構実測図



## 2 挖立柱建物遺構と土壤状遺構

### (1) 1号掘立柱建物遺構 SB1 図(44)

SB04と重複して検出されたSB1遺構は、聚間2間の全長4m(2+2)と桁行間は、現2間の全長3m(1.5+1.5)の等間が検出された。実測図に示す破線位置に、少なくとも南側の聚間2間が求められよう。柱位置の掘り方は大きくしかも不揃いである。また何れの柱穴にも黒色土が充填され、粘土によるつき固め等はみられなかった。柱穴P<sub>11</sub>とP<sub>12</sub>からみて

柱穴番号	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P11	P12	P13	P14	P15
柱穴の深度	65	78	97.2	77.7	93.7	78.0	103.7	53.4	65.2	66.2	64.6	65.1

高床式建物が考えられる。さらに各柱穴の深度を耕作地表面の数値から求めると上表の後元数値が示すごとくP<sub>2</sub>～P<sub>8</sub>の柱穴深度の不揃いが目立つ。中でもP<sub>8</sub>は別と見てP<sub>4</sub>とP<sub>6</sub>の角柱は深く、その他の棟持柱や平柱は浅く柱穴が穿たれている。高床式建物棟への入口部は、P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>の柱穴が切妻入口として推定されるが、聚間の柱位置からの距離は3.5mが算出され、建物棟への入口としては長すぎ一考される位置といえよう。いま一つ桁行西側に検出されたP<sub>15</sub>は平屋入口として考えられる。平柱位置からの距離は1.7m内外とみられ最も妥当な数値といえるが(P<sub>16</sub>は未調査区で推定位置)、やや勾配は強く47度前後となる。

### (2) 土壌状遺構とその他

土壌状遺構はA区で2基とB区で3基あり、溝状遺構はB区で2条が確認され、その他に土壌墓1基がある。さらに近世の耕地改良工事としての暗渠排水工事の遺構が検出された。

### (3) 土壌状遺構 SK1・2(図45・46)

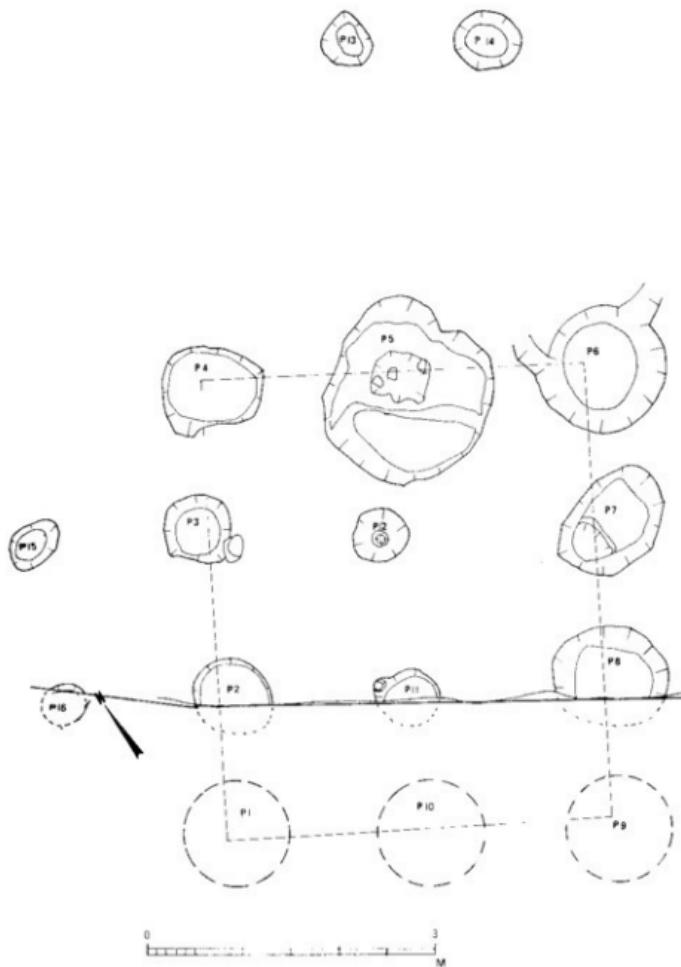
SK1はSB04の西で検出された遺構である。土壌内には黒色土の外に下部層序に灰層がみられたが、土器その他の遺物は検出されていない。土壌状遺構の規模は、長径230cmで幅が広がる瓢箪状の土壌である。深度は底部に向かって順次浅くなっている。

SK2はSB04の遺構と重複しており、SK1よりさらに瓢箪状をなす遺構である。図(46)に示すビットは、SB1の角柱と重複している。遺構は素掘りの土壌状遺構で、土壌内での遺物は検出されなかった。

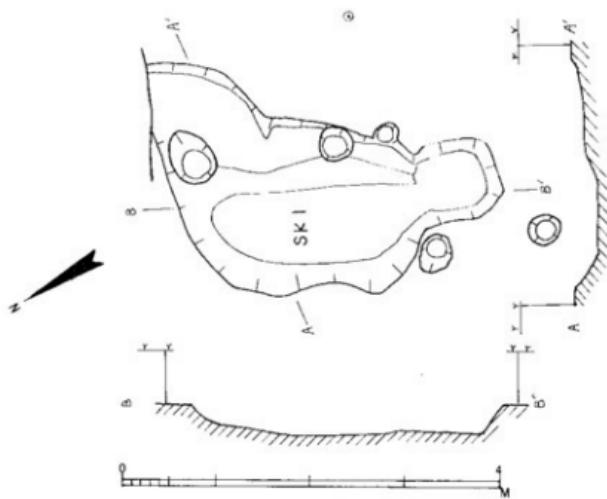
## SK 2 の出土遺物

種類	登録番号	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
鉢形土器片?	1 3層	口径 24.0 器高 10.0	直立する部は僅かに外反して口唇部をつくる。口唇端面は内に傾斜する。	内面はヨコ方向にヘラ削り調整を、外表面の口近部はヨコナダ調整で下部はタテ方向のヘラ削り調整である。	焼成良好。胎土は滑である。	1
高杯形土器脚部	2 表採	脚基部径 4.5 現器高 7.8	脚基部の天井部は水平で、しかも肥厚である。脚基部より下外方向に外反しながらびる。	内外面ともにナダ調整である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
底部	3 トレシナ内	底部径 5.3 現器高 6.5	平底の基底部より上外方向にのびている。	輪削手法で体部内面はタシ状ヘラ工具による調整をおこない、器表面はタテ方向及び斜方向に同じ工具による整形がみられる。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	4 17	底部径 5.0 現器高 7.0	平底の基底部より上外方向に僅かに内側気味にのびている。	内面はヘラ削り整形、表面はタシ状ヘラ工具で整形。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	5 24 の2	底部径 5.2 現器高 8.0	平底の基底部より上外方向に減厚しながらびる。	内面はヘラ研磨を施し、表面はヘラ削りによる整形である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	6	底部径 6.5 器厚 2.5	平底の底部である。	平底の底部にさらに底部に粘土を貼り付けている。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	7 2層	底部径 4.0 現器高 3.5	高台状の底部で肥厚な底部より上外方向にのびる。高台状の底部表面に4条の凹線をめぐらす。	底部の端面をつまみ出し高台状の底盤をつくる。底盤内外面をナダ調整している。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	8 3層	底部径 4.3 現器高 2.5	平底の基底部より直線状に上外方向にのびる。平底の基底部をつまみ高台状をなす。	肥厚な底盤で、内面はナダ調整、外表面の基底部には指圧痕が残る。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	9 11	底部径 5.5 現器高 2.0	平底の底部で基底部をつまみ高台状をなす。	高台状の尖端部を水平にヘラ削りしている。		1
变形土器底部	10 21	底部径 4.0 現器高 2.0	平底の基底部より上外方向にのびる。	全面ナダ調整である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	11 2層	底部径 1.5 現器高 2.5	僅かな平底の基底部より内側気味に上外方向にのびる。	全面ナダ調整である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
变形土器底部	12 3層	底部径 4.0 現器高 2.5	肥厚な平底の底部より、上外方向にのびる。	全面ナダ調整である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1
カマド片	13	口径 8.0 現器高	直立する脚を水平に外方に屈曲させて口縁部をつくる。口縁部は脚部にそって下がり耳状の突起部をつくり出していいる。	内面はタシ状ヘラ工具で整形、外表面はナダ調整である。	焼成良好。胎土に粒子を含む。	1

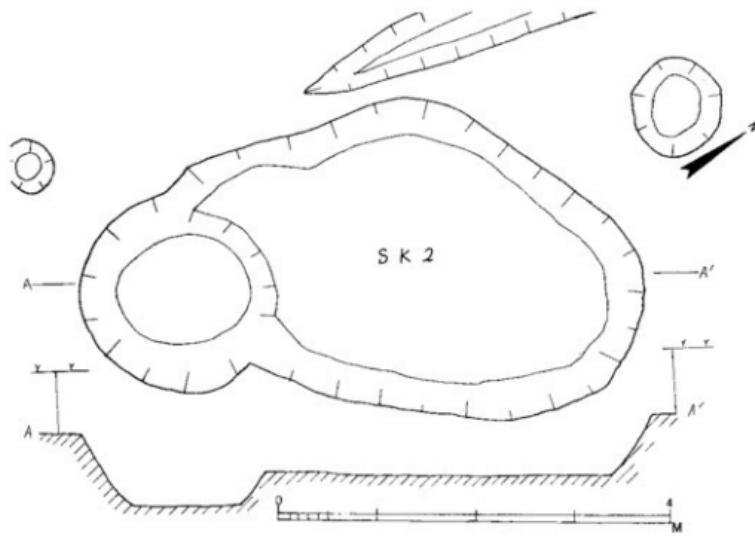
第44図 S B 1 造構実測図



第45図 SK 1 造構実測図



第46図 SK 2 造構実測図



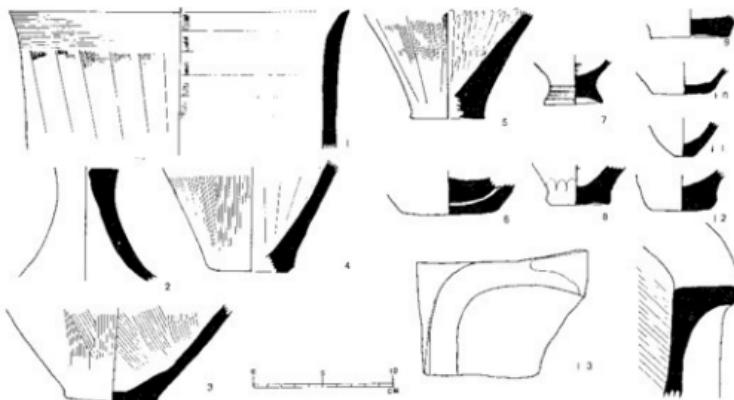
#### (4) 挖立柱建物遺構 (SB1) の小考

SB1の建物遺構は北下A区の全測図37図に示すものであり、遺構は発掘区の南法面にて検出されたものである。遺構の一部は未発掘地で不明であるが仮にP<sub>1</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>9</sub>をそれぞれの柱穴位置として推定した結果、梁間2間、桁行間3間の南北棟の高床式建物が推測される。建物は磁北に対して東へ45度を取る主軸をなしている。

柱間の間隔は梁間2間の全長4m、桁行間3間の全長5.1mが算出される。このことは梁間の柱間での心心間は2mの等間であり、桁行間3間は1.7mの柱間は等間が推定される。

のことから柱穴P<sub>5</sub>とP<sub>10</sub>は棟持柱が想定され、P<sub>12</sub>とP<sub>11</sub>は共に高床を支える東柱の位置となろう。P<sub>15</sub>とP<sub>16</sub>を高床の梯子位置での柱穴と見れば桁行の平柱と共に対応し、柱間との距離は1.7m前後となる。P<sub>13</sub>とP<sub>14</sub>の柱穴を切妻入口の梯子位置とすれば、梁行間との距離は3.5mの長梯子となる。

第47図 SK2土器実測図



## VII 北下A区における小考

北下地区は星ノ岡の独立丘陵の北側の山麓地帯に広がる緩斜面を利用した集落遺構である。星ノ岡丘陵の南側は小野川が西流している。北斜面の丘陵端部には、数個の泉が湧き、旗立地区は南面に緩斜面をなしており、両地域間には鳥足状の水流が西流して小川を形成し、やがて川付川に注ぐ。

調査はA、B、C区と3区画に分割して実施したが、主な遺構はA区とB区に集中しており、C区は近年まで繰り返し、熟田化を目ざし暗渠排水遺構が布設されており、かつての遺構は検出されなかった。また検出された遺物もことごとく細片化しており計測不可能であった。

A区では、堅穴式住居跡4基と掘立柱建物遺構1棟を検出し、その外に土壙状遺構3基が検出されている。堅穴式住居跡の内SB02とSB03は完掘されず、遺構の一部を確認したにすぎない。またSB01の遺構においても、A区の大部分が戦後に地下げ工事を施し、かつての畠地より水田へと地目変更を行っており、このため地山を掘り込んでの住居の壁面は削平されて、僅かに5~3cmの床面を残すのみであった。以上の状態での調査のため遺構自体は残欠部の調査に終始したが、出土遺物の内床面より検出した小型の平鎌をはじめ土器（高杯、壺、壺形土器片）と、屋外の地山面より須恵器の盤（破損品）を検出した。

特に小型の平鎌については、その後発掘調査を実施した伊予市の出作遺跡（農業祭祀遺跡）にて出土した平鎌と類似する遺物として高く評価されよう。さらに同様器種の遺物は、松山市越智町（石井東小学校遺跡）の住居跡でも検出されている遺物である。さらに右井東小学校遺跡では、小型の鋤先も共伴しており、今後の大いなる研究課題とされよう。

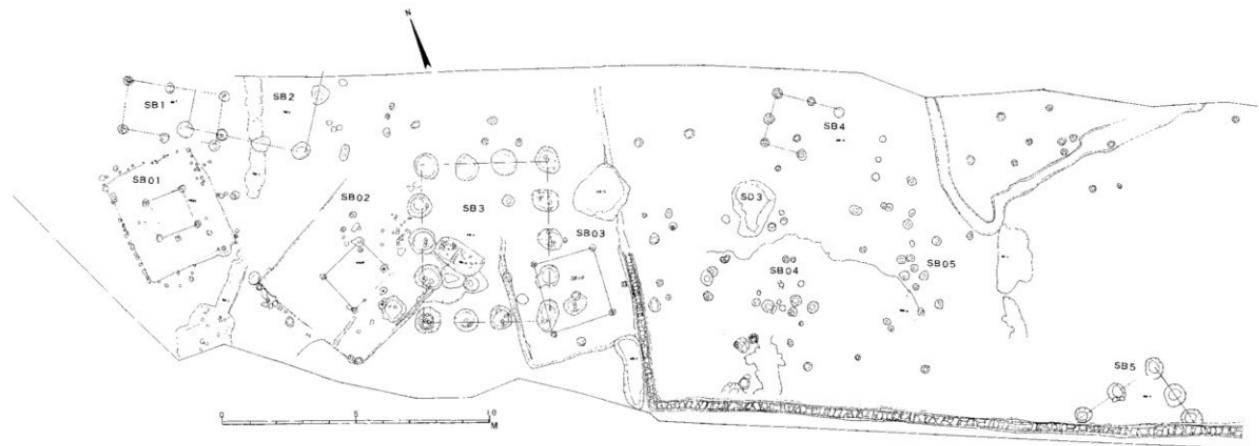
A区における今一つの特記事項に値するものに、掘立柱建物遺構がある。遺構は完掘されてはいないが、調査（ボーリング調査）により、破線で示す位置に柱穴遺構が想定された。建物の規模は、梁間、桁行間はともに2間の方形である。建物の柱穴にみられる掘り込みも深く束柱も検出されたことにより、高床式建物と推定される。しかも西面に穿たれた2個の柱穴は本文中に記述するごとく高床式建物への階段と推測している。本遺構と同様の入口部と推定される位置に2個の柱穴を有するものが、北久米遺跡の常堰B地区にも検出されており類似する遺構として興味がもたれる。

### VIII. 北下B区の概況（発掘位置図1図、2図）

北下B区は、道路予定地中心杭No.49~52の間を指し、北下地区発掘位置図に示す範囲である。全般的な地形としては、南面に星ノ岡独立丘陵があり、その北山麓地帯で、全般的に南高北低で、しかも予定地の北方10m位置には、かつては湧水地帯として衆知の地域がある。現在は1基のポンプアップの灌漑用井戸がある。古くは湧水が多く、しかも日陰地帯として、農業用地としては遅れた地域と推測される。しかも湧水位が高く水田地帯としては、大変な努力を必要とした地域と、発掘の結果で立証することができた。地味はありながら、比較的に水温と湧水による地下水位の上位は、稻作には不適で、しかも根ころびを生じる致命的な農耕土の障害があったと推測される。これに対応してか、当地域で検出された暗渠排水遺構をはじめ、ぬるめ遺構には特に注目したい。

ぬるめ遺構は道路予定地図53~55地区（北下C区）で検出された遺構である。

第48図 北下B1X遺構全測図

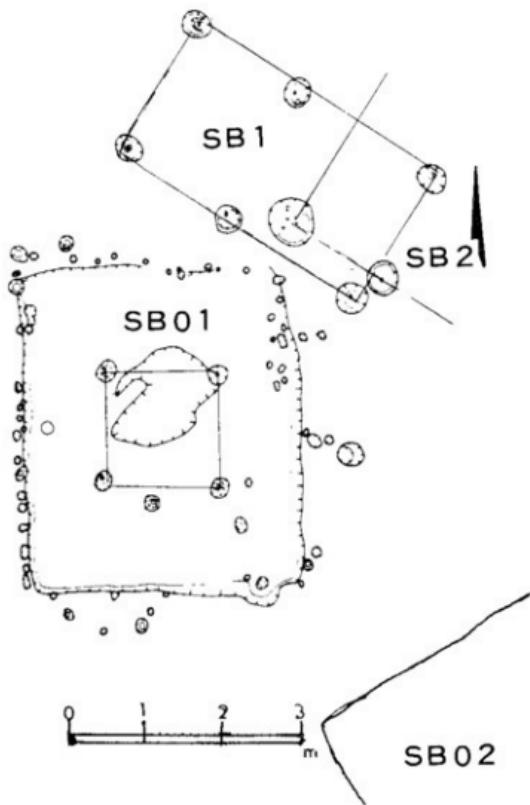


遺構各名称においては、A地区に隣接地域であるため、一連番号を付して呼称する。

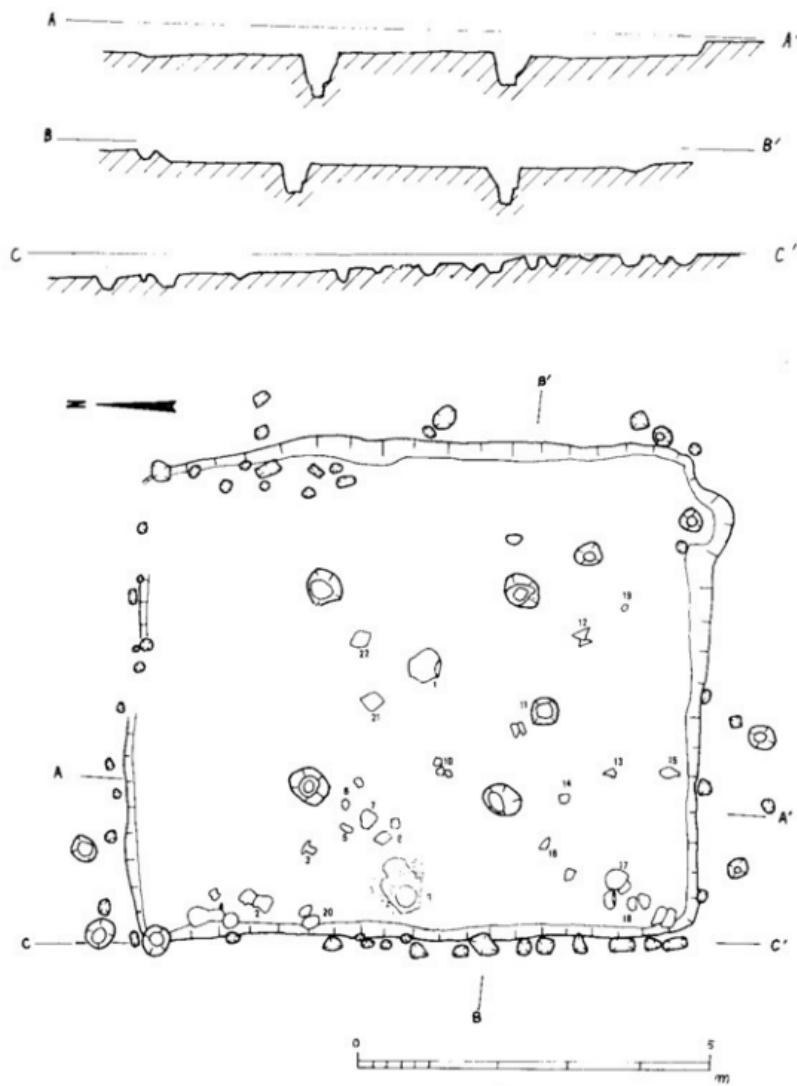
#### 北下B区で検出された遺構と遺物出土状況

北下B区における遺構は、堅穴式住居跡4基と掘立柱建物3棟の外に土壙状遺構及び土塙墓1基を検出した。その外に耕地の排水を求めた暗渠排水施設が検出されたが、この施設についてはごく最近のものであるとの古考の話である。対象地域は国道11号松山東道路予定地の中心杭No.48~50の間である。

第49図 SB01、SB1遺構実測図



第50図 SB01 造構実測図と遺物出土状況図



## 1 堪穴式住居跡遺構と掘立柱建物遺構

### (1) 1号堪穴式住居 図(49)

1号堪穴式住居SB01は、1号掘立柱建物SB1と接近しており、図(49)に示すものである。住居の平面プランは、南北4.1m、東西3.5mの14.35m<sup>2</sup>である。主柱は4本で柱間の心心間距離は1.5mであるが、A~A'断面位置での柱間のみ1.4mと10cmの手狭となっている。平面規模が南北方向に長軸なため、主柱と壁面距離は、南北壁面間は1.2mを保ち、東西の壁面では1mの間隔となっている。炉跡は主体間の中央位置に破線で示す場所と西壁面の中央部とに検出されたが、図(50)で示すごとく遺物の出土状況では、西壁面の中央部をはじめ両脇に集中しており、とくに中央部での焼成をうけた粘土塊と併出した壺形土器No.9と瓶形土器とはセットをなすものである。このことから推察して西壁面の中央位置にカマドが造られていたものとみられる。住居への入口部は不明であるが、床面が北に僅かに傾斜しており、しかも3方の壁面から推察して北面の東隅に設けたものと推察される。特にSB01においては西壁面と北壁面にみられる杭穴状の小穴が検出されている。内でも断面図C~C'に示す西壁面での小穴は、長尾(タルキ)を切り上げたとみられる切上筋による支柱列とみるべきであろう。

SB01の出土遺物		地表面を0として							(単位:cm)	
遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8		
深度	12.7	14.0	12.0	21.0	4.5	8.0	5.2	6.5		
遺物の器種	壺	壺	壺脚	片	口縁	口縁	その他	壺脚	片	
遺物番号	9	10	11	12	13	14	15	16		
深度	0	16.0	16.0	8.5	6.0	12.7	8.2	10.0		
遺物の器種	壺	片	口縁	壺	壺脚	瓶把手	壺	胴部		
遺物番号	17	18	19	20	21	22	23			
深度	15.5	0	14.7	11.5	12.5	20.0	22.0			
遺物の器種	壺	壺	片	壺	土器と石	砥石	壺			

掘立柱建物SB1は、SB01と接近しており主軸方向は45度西にふれた東西棟の建物である。建物の平面プランは、梁間1間1.85m、桁行間2間3.5mである。桁行間の心心間距離は2mと1.5mの等間となっている。

## 北下 BSB01 の遺物

種類	回収番号	法	星cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	表章	
変形土器	1	9	口径 頸部径 体部径 器高	19.5 15.5 27.2 25.0	球形の体部にくの字口縁をなす。口縁部は近く3段に屈曲し、2条のにぎい縫をなす。口唇端面は水平な平面、内側に僅かに稜をなす。底部を強に欠く、体部中位にスヌ付着。	輪積手法で、胎底堅面に凹凸がある。内部面の上部にクシ状ヘラ工具による整形で外表面も同様である。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整である。頸部に縫合縫を残す。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。茶褐色、表面黒褐色。	1
変形土器	2	18上 1	頸部径 器高 体部径	12.5 16.0 19.5	球形の体部のみで、口縁部を欠損している。体部中位にスヌが付着している。	輪積手法で胎部内壁面に斜向する指頭ナデ痕が残り、堅面に凹凸がある。外表面はクシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1
培形土器	3	17	口径 頸部径 体部径 器高	10.2 7.6 15.5 15.2	球形の体部に上外方向にのびる口縁がつく。口縁部上端部で僅かに屈曲し端面は円面である。	輪積手法で、底部は肥厚する。全面ナデ調整である。	焼成良好、胎土に粒子を含まず。	1
窓形上器 口縁	4	11	口径 頸部径 規器高	19.2 9.2 4.5	くの字口縁で、口縁部中央部にふくらみをもち、口唇端面は水平で中央部に凹みがある。	全面ナデ調整である。		1
窓形土器 口縁	5	東港	口径 頸部径 規器高	17.0 13.0 5.5	くの字口縁で僅かに外方にふくらみ、口唇端の内側に有段をつくる。	口縁部は内外面とともにナデ調整。頸部内面にヘラ削りがあり、体部外周は同心円状にクシ状ヘラ工具による整形。		1
碗形土器	6	21	口径 頸部径 体部径 器高	9.8 9.5 10.0 5.7	丸底の底部より内窓気味に上外方向にのびたのちたわあがり体部をつくり、僅かにすぼまり頸部をつくり、近く外反する口縁である。口唇端面は円面である。	全底ナデ調整である。		1
高杯形 土器 (器台形)	7	12	口径 脚基部 脚根部 脚根部径	9.0 2.9 0.7 11.0	凹面する円板を脚部で支えた器物で窓形土器。脚部は基部より下外方向にのび、脚根部で大きくなり外方に屈折して、脚根端面は円面。	受部はナデ調整。脚部内面は8角形にヘラ切り整形を施し、脚根部を3段にヨコ方向にヘラ切り、外表面はナデ調整。	焼成良好、胎土密。赤褐色。	1
高杯形 土器 (器台形)	8	3	脚基部 脚根部 脚根部径	2.7 0.6 10.7	凹面の端部を欠損する。脚部は下外方向にのび、脚根部で大きくなり屈折して、脚根部は大きくなり、端面は円面である。	受部及び脚部外表面はナデ調整である。脚部内面上部は12角形のヘラ切り整形、脚根部はヨコ方向にヘラ切りを3段に施す。	焼成良好、胎土密。赤褐色。	1
高杯形 土器	9	12	口径 有段部径 脚基部 現器高	16.0 9.7 3.6 5.0	窓部の基底部で有段をなしたのち僅かに内窓気味に上外方向にのび口唇端面はするどい。口縁部外面に2条の凹線をめぐらす。	窓部外表面は人念なヨコナデ調整である。窓底部に脚部の接合指圧痕が付着する。	焼成良好、胎土密。	1

## (2) SB01 の出土遺物の様相

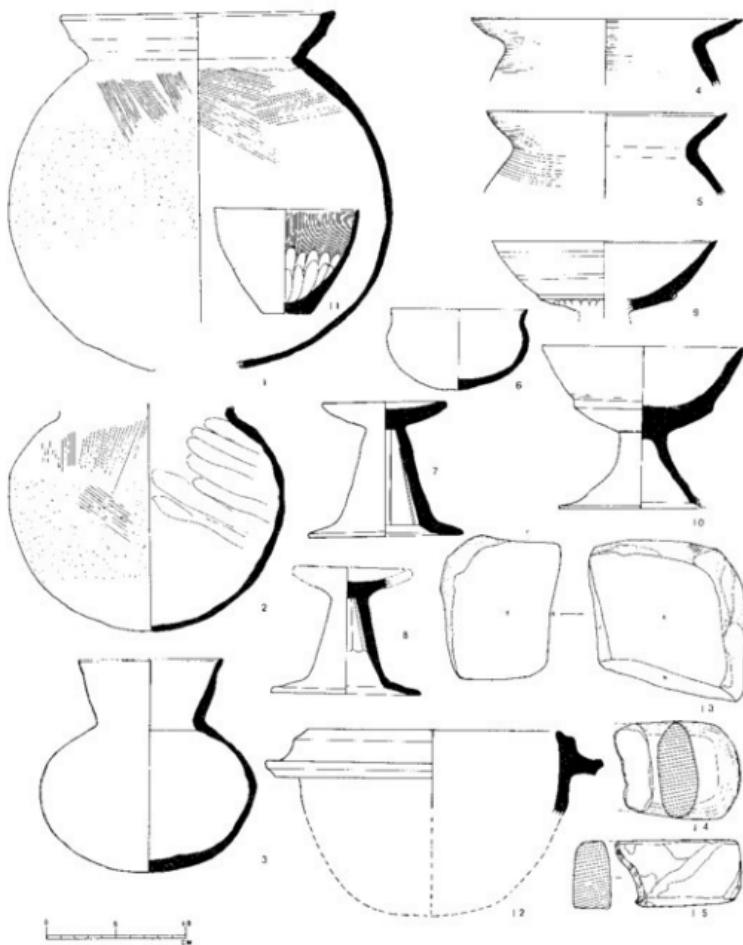
SB01 の遺物については、まだまだ整理の段階にあり、復原は努力次第で増加する遺物の収

種類	登録No	出土地号	法寸cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
高杯形土器	10	20	口径 9.5 有段部径 9.8 脚基部径 3.4 脚底部高 0.4 脚底部径 10.7	器高11.5cmの完成品である。杯前は肥厚な杯底面より内弯し有段部より上外方向にのびる。脚部は脚基部より下外方向にラッパ状に開き、脚底部で屈曲せず端面は円面である。	全面ナデ調整である。杯内面にナデによる僅かな縫が2条めぐる。脚底面にヘラ削りあり、脚基部にタシ状ヘラ工具痕が残る。	焼成良好、胎土密。	1
鉢形土器	11	7	口径 10.2 器高 7.7 底部径 3.4	平底の基底部より減厚しながら上外方向にのびたもの内弯しは縫部をつくる。口唇端面は円面である。	内面の体部中位までは入念な指頭によるナデあげ整形を、ロツ部まではタシ状ヘラ工具でタタニ成形。外側はナデ調整である。	焼成良好、胎土密。 基底部に黒斑あり。	1
盆形土器	12	10	口径 17.6 把手部径 24.0 体部径 19.0 現高 5.5	口縁部片である。内弯する体部に外にのみ縫部で僅かに上方に向かい端面は平面である。突帯をめぐらし、突帯下方に縫をなす。ロツ部端面は僅かに内傾し、上端面をL字に削る。	全面ナデ調整である。突帯は貼り付けである。	焼成良好、胎土密。	1
砾石	13	22	長径 11.0 短径 10.5	方形の砾石で3面を研磨面として使用している。		砂岩。	1
作業石	14		長径 8.5 短径 7.0 器厚 2.7	半折した遺物で、棒状の作業石(タタキ石)で尖端部に打撃痕が残る。	全面粗糲な磨製である。	練泥片岩質。	1
砥石	15		長径 8.8 短径 4.7 器厚 2.7	長方形の砥石で4面を研磨面として使用している。矢損遺物で半折されている?		真岩。	1

集がなされているが、現段階における様相にのみとどめておきたい。

壺形土器と往々認識していた器体類形を完全に破られた遺構に共存する遺物といえよう。第51図に示す1と2の土器は明らかに壺形土器として理解していた土器形式であるが、土器表面に付着した媒膜からして、明らかに甕形土器にはかならない。2は口縁部を欠損しているため口縁部の形態は不明であるが、体部の様子からみれば壺形土器である。内壁部は左回転をさせながらの、指頭によるナデ整形であり、器形そのものは輪積手法による整形であったと類推される。器表面はタシ状工具による縱方向及び斜行方向の整形である。1は口縁部中央部に縫を有する2段口縁である。口縁部の口唇端面は水平な端面を作り出しており、明らかに転倒による口唇端面の調整及び器形の整形が推察される。いま口唇部の調整のために転倒させた後に体部整形をなしたとみれば、タシ状工具からみて、正位置でみる左回転による整形工程を参考するより、転倒した後の工具使用過程は右回転を作業回転方向と見る事がより順当といえよう。また4、5の口縁部は甕形土器口縁部とみるべきであろうが、いずれも口縫部の破片のため断定しかねる。4、5はいざれも口唇端面に疑似凹線がみられ、5では頸部内壁面に明らかに窓切り面が認められ、4にもわずかに認められる。

第51図 SB 0.1 遺物実測図



壇形土器 3 は完形品であり、この期の土器として十分に理解しておきたい。7~10 は高杯形土器であるが、7 と 8 は脚部は高杯形土器の形態をもつものであり、脚部内壁面は 8~9 両体の箒状工具による箒切りがみられる。だが 7 と 8 では、一般的な高杯の有段部（稜線）より上部がなく、一見して器台としての口辺部の割愛が理解できる。

上釜形土器片に10がある。口縁直下に一周する貼り付けによく凸帯がめぐらされている。突帯は断面台形の上端部をつまみ出し、つまみ出した突起部を入念に範切りと撫調整による整形をほどこしている。突帯から下部は媒煙が付着しており、明らかにカマドによる媒煙の付着を認める。14は石器であるが、全体的な観察では石斧的な使用ではなく、粉末を作るための磨耗痕による作業石と理解される。

### (3) 2号堅穴住居跡 SB02 図(52) 図版(84)

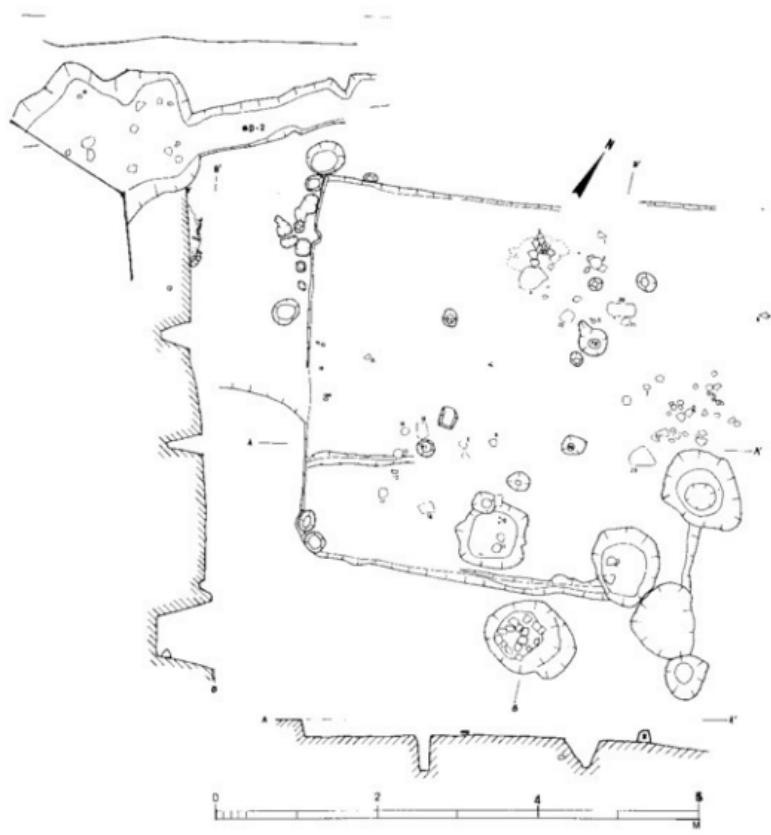
SB02は主柱4本の方形の床面プランをとる住居跡である。床面は大きく南壁面から北方向に傾斜しており、断面図に示すごとく北隅の壁面を確認することはできなかった。4主柱の心心間距離もやや異なり、P<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>は165cm・P<sub>2</sub>～P<sub>3</sub>は185cm・P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>は135cm・P<sub>4</sub>～P<sub>1</sub>では185cmとなっている。柱穴の掘り込みは床面より計測して、P<sub>1</sub>は56cm・P<sub>2</sub>は49cm・P<sub>3</sub>は33.5cm・P<sub>4</sub>は32.5cmである。住居は北壁面で30度東にふれており、主柱より壁面への距離は150cmがそれぞれ計測される。

北壁面の中央部、主柱P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>との中间位置に焼土の広がりがみられ、さらに什器としての土器が集中していた。主柱P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の周辺においてはNo.19とNo.20～22の砥石が検出された。東壁面の中央位置には小石が集中しており、地山面に踏み込まれていることから入口部と判断することができよう。主柱P<sub>4</sub>と東壁面との中间位置には、長径30cmの平坦面を上にした自然石があり、屋内での作業石とみることができよう。

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8
深 度	32	32.2	20.2	上 23.0 下 31.0	30	22	23.8	22.5
遺物の器種	片	高 环	口 縁 部	縁	致 片	側 部	コップ状 土 器	碗
遺物番号	9	10	11	12	13	14	15	16
深 度	15.5	8.3	29.3	11	10	15.5	20	20.5
遺物の器種	増	土 器 片	塊	須恵器片	碗	楕	片	环 脚
遺物番号	17	18	19	20	21	22	23	
深 度	上面 4.0	上面 8.0	上面 3.0	上面 25.5	上面 27.8	上面 22.0	上面 13.5	
遺物の器種	石	石	石	砾 石	砾 石	石	作 業 石	

いまた住居の西隅(乾位)の壁面上に、浅い杭穴が検出された。住居の壁面を一部切り上げた小窓が設備されていたものとも推考される。屋内のカマドの位置は、主柱P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の中间位置で検出された、土器(甕)の周辺にみられる焼土の広がりをあてることができよう。

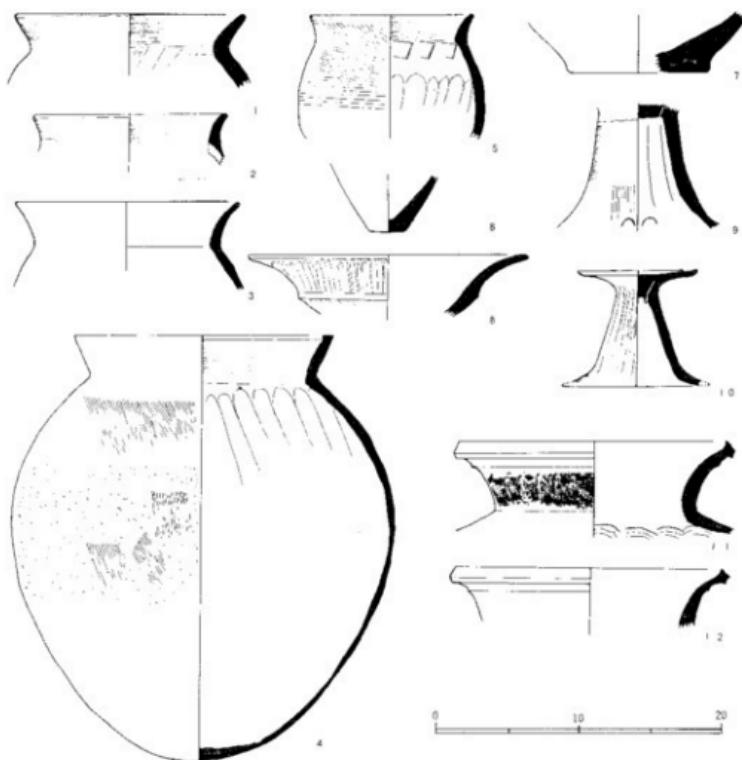
第52図 SB02 連構実測図



## SB02の遺物

種類	回収番号	山下番号	重量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数量
菱形土器 口縁	SB02 1	小判	口径 16.5 頸部径 14.0	くの字形口縁部で口唇端面は円凸である。	体部内面はヘラ削り整形、口縁部内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
菱形土器 口縁	2	1	口径 13.8 頸部 12.8	頸部より僅かに外反し、口唇端面は円面である。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
菱形土器 口縁	3	17	口径 16.0 頸部径 13.4	頸部より上外方向にのび、僅かに外反して、口唇端面は平面である。	内外共にナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
菱形土器	4	4	口径 18.4 頸部径 16.2 体部径 27.2 器高 30.3	丸底の底面より内脣気味にのび、体部5位で内傾してすぼまり頭部をつくる。口縁部はくの字口縁で、口唇端面は水平な平面をなす。口唇端面の内側に棱をなす。	体部内面は指頭ナデ調整。器外表はタシ状ヘラ工具による整形。口縁部はヨコナデ調整である。 器体部にススが付着する。	焼成良好、胎土密。	1
菱形土器 口縁	5	2	口径 11.8 頸部径 10.8 体部径 13.3	体部先位に膨張りが最大で、口縁部はくの字口縁で、端面は円面である。底部欠。	体部先以下は指頭ナデあげ調整。頭部にヘラ削り、器外表はタシ状ヘラ工具整形、口縁部はヨコナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
底部	6	集層	底部 2.6	平底の基底部より、上外方向にのびる。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
底部	7	不明	底部 10.0	平底の基底部より、内脣気味に上外方向にのびる。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 上器部	8	1	口径 20.0 有段部 13.0 現器高 4.5	上外方向にのび有段をつくったもの大きく外反して、口唇部では水平にのびて端面は円面。	内面はナデ調整。外表面はヘラ研磨調整。	焼成良好、胎土密。	1
高环形 上器部	9	2	脚基部 5.7 現器高 9.0	脚基部より下外方向にのびる。脚根部に2つの円孔がある。	内面にしほり目が残る。脚根部はタシ状ヘラ工具整形。基部上部はヨコナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
器台形 土器	10	16	脚基部 3.0 器高 13.2 脚根部径 10.5 口径 8.5	脚基部で水平に屈曲して端部で僅かにたちあがる。脚基部下外方向にのび、脚根部で大きく屈曲して、脚根端面は円面が考えられる。脚根部高0.7cm。	脚基部に円板状のノマ粘土により、器台の平底をつくる。脚根部外表面はヘラ研磨、内面はナデ調整である。		1
菱形土器 口縁	11	3	口径 19.0 頸部径 14.4 現器高 6.5	頸部より上外方向に外反してのび、口唇端面はおさえて断面を角形稜をなす。口辺部に2段の棱をつくる。	口縁部内外面は凹版ヨコナデ調整後、外表面の腰部直下に流文を施す。体部内面に同心円文あり。	焼成良好、胎土密。	1
菱形土器 口縁	12	12	口径 13.8 現器高 4.5	頸部より上外方向にのび、口辺部で大きく外反する。口唇端面はおさえて、上下に接をなし端面上にも稜をなす。	マキアグ、ミスピキ整形で、器内外面ともにヨコナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1

第53図 SB02 土器実測図



(4) 3号堅穴式住居跡 SB03 図(54) 図版(86)

SB03は推定470cmの隅丸方形の平面プランが考えられる住居である。上柱は4本でそれぞれの心心間の距離は、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>で260cm・P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>で230cm・P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>で250cm・P<sub>4</sub>とP<sub>1</sub>では230cmが計測された。このことにより主柱の心心間距離では長方形をなすが、床面プランは方形である。このことはとりもなおさず、東西側における主柱と壁面間の距離を130cmとしたことにより、南北の壁面間の距離100cmに対して60cmの長間となる。

## SB6の遺物

種類	國版 No	出土 番号	注 量cm	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考	目録 番
変形土器 頸 部	1	3	頸部径 10.3	ゆるやかなすぼまりを取り、頸部で僅かに直立する。頸部に断面長方形の突帯と、突帯上端面に格子目の施文がある。肩部に大きく張を描く痕文あり。	輪削手法で胎土厚はやや一定する。内壁面に凹凸が多い。外表面はタシ状ヘラ工具で整形。突帯の施文は同工具による。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
変形土器 頸 頭	2	24	頸部径 10.1 肩部径 18.6	肩部の張りがある十器片で、頸部で欠損する。	輪削手法で内壁面に凹凸がある。指頭ナデ上げによる整形。外表は入念なヘラ研磨を施す。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
変形土器 頸 頭	3	18	頸部径 13.0	頸部片で、頸部でくの字に屈曲する。頭部に所面台形の凸帯がめぐる。突帯上端面に格子目の施文がある。	肉厚な器厚で体部の内外面は粗いタシ状ヘラ工具で整形。口縁部内面はヨコ方向にヘラ研磨がなされ、外表はヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
変形土器 底 瓶	4	15	底部径 5.5 器高 9.5	平底の基底部より上外方向にのびながら、胎土厚を減少させている。	内部タシ状ヘラ工具による整形、入念である。外表はナデ調整。	焼成やや軟、粒子を多量に含む。	1
変形土器 底 瓶	5	2	底径 6.0 器高 6.4	平底の基底部より上外方向にのびながら、胎土厚を減少させている。	内部タシ状ヘラ工具による整形、入念である。外表はナデ調整。	焼成良好、粒子を多量に含む。	1
輪形土器	6	33	口径 12.5 器高 7.5 底径 3.5	小径の基底部に高台あり、器形は平底の底部より内側しながら上外方向にのび、口唇端面は円面。	体部は内外面ヨコナデ調整。高台部にタテにタシ状ヘラ工具整形を残す。高台内面は指頭によるナデ整形が2段に残る。	焼成良好、胎土柔。茶褐色。	1
高 壁 形 上 器 杯 部 片	17	28	口径 20.0 有段部径 15.5 器高 5.0	有段をなしたのち、大きく上外方向に開き、口唇部で僅かに屈曲する。頂面に外に垂直な平面。	内面はヨコにタシ状ヘラ工具整形を残す。ヨコナデ調整。外表はタテにタシ状ヘラ工具による整形痕を残したヨコナデ調整。	焼成良好、胎土柔。	1
高 壁 形 上 器 杯 部 片	18	29	口径 28.0 有段部径 18.0 器高 3.5	有段面を内外にもつ。口唇部は上外方向にのび、口部で外反し、口唇端面は円面。	内面ヨコナデ調整。外表はヘラ研磨による。内部の有段面と、口唇端面にタシ状ヘラ工具整形痕。	焼成良好、胎土柔。	1
小 型 丸 头 器	7	9	口径 10.0 頸部径 9.0	体部からのがすぼまりの少ない頸部に僅かに外傾するロマン部。	内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土柔。	1
底 部 片	8	27	底径 5.0 器高 8.0	平底の底部より、外唇気味に上外方向にのびる。	内面タシ状ヘラ工具整形。外表はタシ状ヘラ工具整形のうちヘラ研磨。	焼成良好、胎土に粒子を多量に含む。	1
底 部 片	9	2	底径 5.2 器高 3.0	平底の基底部をつまみ、高台状をなす。 肥厚な平底より上外方向にのびる。	外表にタシ状ヘラ工具整形。内面ナデ調整。 外表ヘラ研磨。内面タシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子を多量に含む。 焼成良好、胎土柔。	2

種類	図版 No	出 番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備 考	数 量
底 部 片	11	8	底部径 4.5	肥厚な平底で、大きく内窓する体態。	外表面はクシ状へラ工具整形。内面ナダ。内面ナダ調整。	焼成良好、胎土は密。	
底 部 片	12	6	底部径 3.5				
底 部 片	13	1	底部径 2.5	僅かな平底より内窓して上外方向にのびる。	内面クシ状へラ工具による整形。同外ナダ調整。	焼成良好、胎土は密。	
底 部 片	14	11	底部径 2.7	僅かに高台をなす平底より内窓して上外方向へのびる。	内面ナダ、外表面クシ状へラ工具による。	焼成良好、胎土は密。	
底 部 片	15	27	底部径 4.0	肥厚な平底より上外方向に肥厚しながらのびる。	内外面ともにクシ状へラ工具による整形。	焼成良好、胎土は密。	
底 部 片	16	6	底部径 4.3	平底が僅かに凸面をなす。	底部に指頭痕がみられる。	焼成良好、胎土は密。	
砥 石	19	26	長径 17.0 知徑 4.5 (中央位)	4面を利用している。	金属を研磨した砥石で、2面に擦痕がある。	俗称伊予砥。	1
変形土器 口 頸 部	20	11	口径 20.0 有段部径 22.3 文様帶 4.3 現器高 5.8	複合口縁の接合部に僅かに押圧による凹面を器表にみせる。口唇端面は不平で僅かに内にかえりがみられる。口辺部外表面に擦引き波状沈線が上下端部よりえがかれている。	口縁部はいわゆる複合口縁で、内側する口縁部は貼り付けてある。壺の朝瓶形に外反した口縁端部に今一つ壺状の口縁部を接合し、内部は入念に横ナダされている。	胎土は稍選されているが、0.1程度の粒が多い。 赤褐色を器表面で呈する。	1
変形土器 口 頸 部	21	6	口径 12.8 頸部径 10.5 現器高 4.5	肩部で余り奢らずすばり頸部をつくる。頸部での立ち上がりは極めて短く、大きく外折し、上方向にのびる口縁である。	全面横ナダ成形である。輪摺手法の痕が筋割に残り肥厚する。口辺部も外表面に僅かにふくらみがある。口唇端面は斜向し、僅かに下方向に弧がる。	胎土は稍選されている。 茶褐色。	1
変形土器 底 部	22	5	底部径 10.0 現器高 7.5 底部厚 1.8	肥厚する底部より、内窓気味に上外方向にたちあがるため、ずんぐりとした安定感がある。	平底の底部で底部より内窓気味に上外方向にのびている。内面は指頭によるナダ整形で、外表面はヘラ研磨が竪方向に行われている。	胎土に砂混を含む。 茶褐色、内面黒色。	1
変形土器 完 形 品	23		口径 10.7 頸部径 7.0 頸部高 11.5 器高 21.5	小規模な平底に蓋盤状の体部、長頸の頸部が接合されている。長頸の中央部にややふくらみがみられ、口縁部は僅かに外反する。	平底の底部は貼り付けによる底部である。器厚は全体に一定せず輪摺の接合部分で肥厚している。内面体面には指頭による横ナダが残り、内部肩端では、頸部に向かい放射状にナダがみられる。		

東側壁面は後世における暗渠排水遺構により、住居の壁面は破壊されているが、各主柱間の心心距離から破線の位置を東側面においていた壁面が想定される。

床面は、全体的に南より北に向かっての傾斜がみられ、西側壁面には排水溝がみられた。家屋への入口部は確認できなかったが、北斜面にみられる小石の踏み込みがあり、これの位置を入口部と想定することもできよう。炉跡は中央部に穿たれた 65 cm と 90 cm の楕円形の炉があり、主柱 P<sub>1</sub> と P<sub>4</sub> の側にやや片寄りがみられる。什器類は主に炉跡位置より南側に集中して検出された。また植物の炭化遺体を主柱 P<sub>1</sub> の西と、P<sub>3</sub> の東位置で検出しており、住居が火災により廃絶したものと推定される。

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7
深度	13.5	12.5	16.5	15.5	15.5	14.5	16.5
遺物の器種	底部	底部	頭部片	胴部 (波状文)	片	底部	
遺物番号	8	9	10	11	12	13	14
深度	16.5	18.5	19.5	16.5	25.5	27.5	27.5
遺物の器種		小型丸底皿		底部	波状文あり	胴部	胴部
遺物番号	15	16	17	18	19	20	21
深度	33.5	33.5	21.5	17.5	8.5	15.5	15.5
遺物の器種	底部	胴部	胴部	胴部			
遺物番号	22	23	24	25	26	27	28
深度	12.5	17.5	18.5	15.5	20.5	31.5	19.5
遺物の器種			胴部片		砾石	底部	高坏
遺物番号	29	30	31	32	33	34	
深度	22.5	42.5	18.5	22.5	28.5	28.5	
遺物の器種	高坏				碗形土器		

### (5) SB03の遺物

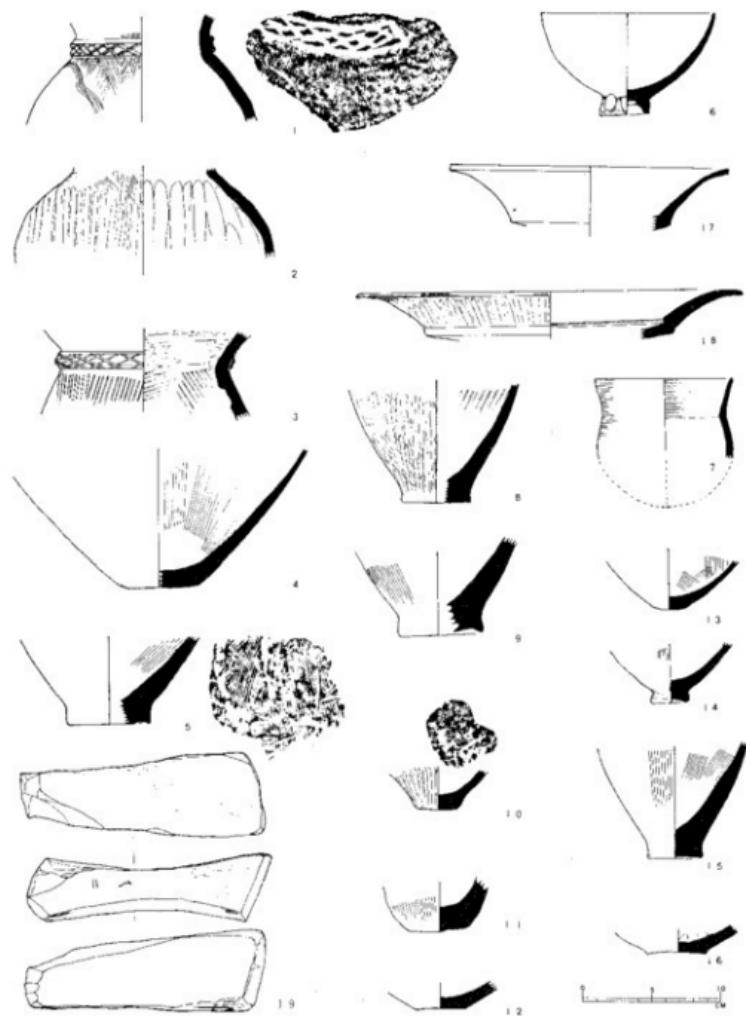
#### 4. 5号住居跡 (図57) 図版(87)

4. 5号住居跡は、何れも竪穴式住居跡とみるべき掘り込みもなく、壁面の立ち上がりを確認することはできなかった。だが、グリッド1と11にみられる遺物の出土状況をはじめ、グリッド2で検出された焼上があり、またグリッド2と12においても同様である。特にグ

第54図 SB 03 造構実測図



第55図 SB 0 3 遺物実測図①



リッドで検出された焼土は断面図 B-B' に示すもので、明らかにカマドの存在が指摘される。ただ、調査日程からグリッド調査で完了したことにより、完全な遺構検出ができず残念であった。断面図より見た限りでは、竪穴式住居とみるよりは、平地式住居とみるべきであろう。

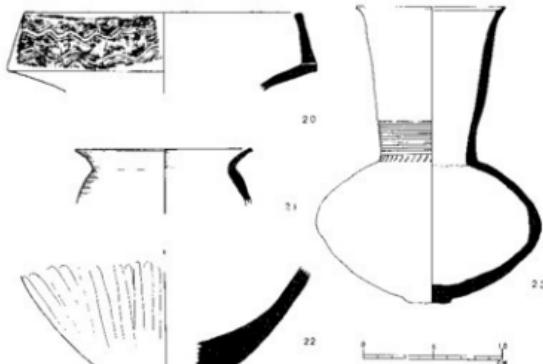
4-5号住居跡遺物出土状況

第4ピット89.0cm

(単位: cm)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深度	3.0	5.0	41.0	37.7	27.5	6.5	16.0	10.5	10.0	10.5
遺物の器種	長頸壺	环脚	鉄		底 部	口縁部		底 部		
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18		
深度	10.5	19.0	12.5	6.0	20.0	29.0	26.0	42.0		
遺物の器種	口縁部			口縁部						
遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深度	6.0	6.0	7.0	33.0	18.0	14.7	17.7	19.5	12.0	12.0
遺物の器種		底 部	底 部			底 部			底 部	
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深度	26.7	22.0	13.5	11.5	18.0	16.0	7.0	10.0	15.5	10.0
遺物の器種	底 部					頸唇片			口縁部	
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28		
深度	8.5	14.0	11.0	10.0	10.3	11.0	17.0	25.3		
遺物の器種	底 部	底 部と口縁部	底 部	底 部	口縁部			壺(1個体)		

第56図 SB 0.3 遺物実測図②



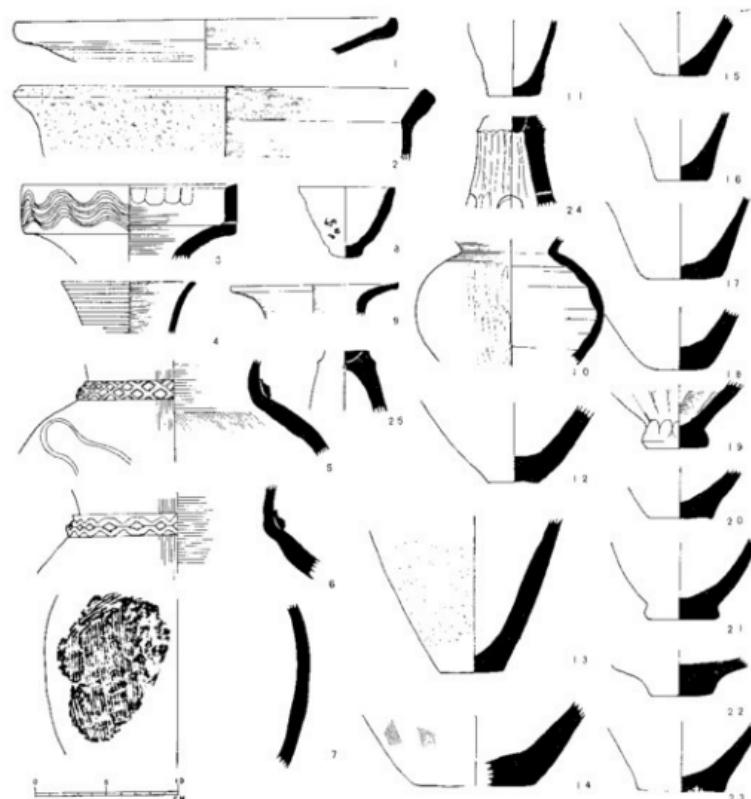
## 北下BSB①4・5号の遺物

種類	出子 No	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
空形土器 口縁部片	1	17	口径 27.0 現器高 3.5  頸部で大きく開かれ、口縁部で水平になる。 水平の後口縁端部をつまみ上げ、直立させ端を丸く納めている。	口縁部がやや肥厚する。全面横ナダ調整する。	粗粒子を含む。焼成良好。茶褐色。	1
空形土器 口縁部片	2	5	口径 28.5 頸部径 26.5 現器高 5  頸部でのすぼまりがなく、口縁部を外方向に曲折させた口縁部である。口縁端面は外方向に傾斜面をつくる平面である。	口縁部は折り返しを施し肥厚する。内面は入念なナダ調整である。器表面に擦痕が付着している。	焼成は良好である。 内面部暗茶褐色、外面部黒色。	1
空形土器 口 縁 部	3	20	口径 15.0 頸部径 8.0 現器高 5.5  漏斗状に開く口縁部に複合の直立する口辺部がつく。口辺部に柳描きの波状文がある。	輪削手法による成形である。 口縁部の接合面に柳描き沈線がある。口唇溝面はヘラによる研磨がみられ、凹面はナダ調整である。	焼成は良好であり、胎土も精選されている。 帶赤茶褐色である。	1
空形土器 口 縁 部	4	不規	口径 9.4 頸部径 6.5 現器高 3.5  漏斗状の口縁で、口唇上端面は中央部に僅かに凹みあり。	やや薄手の土器であり、内面は横ナダ調整で外表面は櫛による横走行の並行沈線がある。	焼成良好。胎土精選。 黃茶褐色。	1
空形土器 体 頭 部	5	不規	頸部径 12.0 体部径 22.0 現器高 7.0  胴張りの大きい空形土器の頸部で頭部に断面長方形の凸唇がある。内面上面に斜格子目文があり、胴部にヘラ描きの文様あり。	輪削手法による。体部上腹部に接合模がある。頸部で僅かに直立している。内外面共に柳描きによる調整がみられる。	胎土に粗粒子を含む。 焼成良好で茶褐色。	1
空形土器 頸 部 片	6	3	頸部径 13.5 現器高 5.5  胴張りのある空形土器の頸部片である。断面長方形の凸唇には斜格子目文がある。	輪削手法による体部上腹部に接合模がある。頸部で僅かに直立している。内外面共に柳描きによる調整がみられる。	胎土に粗粒子を含む。 焼成良好で茶褐色。	1
空形土器 体 部 片	7	9	体部径 18.5 現器高 12.0  筋縫形の体部片である。	輪削手法による器厚が明確に残る。外側は柳状工具による調整がみられる。	胎土に粗粒子を含む。 焼成良好。	1
窓口形 土 器 完 形	8	24	口径 7.0 器高 5.0 底部径 2.2  左右がややいびつである。手ごねの土器である。やや肉厚。	手づくね手法による小型の土器で指頭による指圧文が残る。内面はよくナダ調整されている。	胎土に粗粒子を含む。 焼成良好。	1
空形土器 口 縁 部	9	23	口径 12.0 頸部径 7.2 高さ 2  直立する頸部からラッパ状に折れ曲がり水平に近い開きをみせる。口縁端面は垂直な平面をつくる。	全面横ナダ調整がみられる。	焼成良好。	1
丸底空形 土 器 残 体 部	10	28	頸部径 6.8 体部径 13.2 現器高 9.5  球形の胴部に口縁部を直付けの形である。	巻上げ手法で、特に器内壁面は明瞭である。胴部はヘラ研磨による調整に対して、頸部ではナダ調整である。	焼成良好。胎土は精選されている。	1

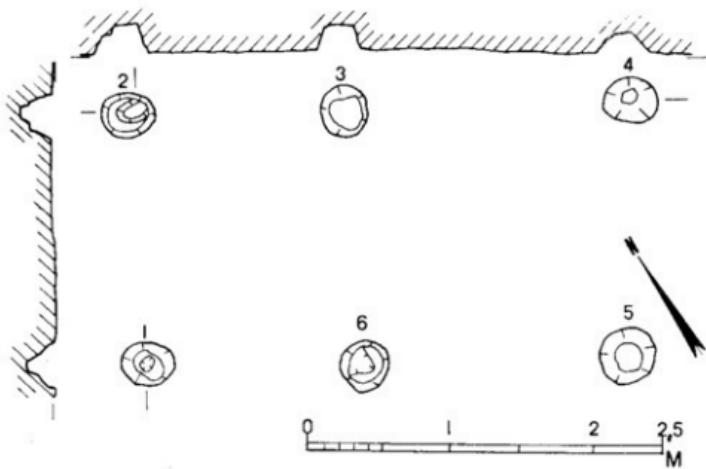
種類	図版 No.	山下 番号	法 量cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	数
深鉢形土器 上部底部	11	22	底部径 器高 体部径	4.7 5.5 6.5	平底で基底部より僅かに外方に向かってのびる。上部が破損しているが、コップ状の土器の可能性が強い。	手づくね手法の土器である。底面は水平につき整えている。内部はナダ調整されているが、器表面には指圧痕が残る。	焼成良好、胎土に塵かに粒子を含む。 1
壺形土器 底部	12	21	底部径 底部厚 器高	3.8 1.8 5.5	小規模な底部から上外方向にのびる。体部の器厚は肥厚である。	輪積手法で肥厚な土器である。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	13	3	底部径 底部厚 器高 体部径	4.4 1.2 11 13.5	水平な平底で直線状に上外方向にのびている。	輪積手法で肥厚な土器である。器表面に凝縮が付着している。内部ナダ調整。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	14	2	底部径 底部厚 現器高	8.5 2.4 5.0	肥厚な平底から上外方向にのびる。	輪積手法で底部の内面が僅かに凸レンズ状に肥厚する。表面に刷毛日調整がある。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	15	11	底部径 現器高 器厚	4.0 4.5 0.7	平底の底部から上外方向にのびている。基底部が肥厚している。	輪積手法で全面ナダ整形である。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	16	22	底部径 現器高 器厚	3.7 4.4 1.0	13と同様の土器である。	13同様の土器で、内外面は共にナダ調整である。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	17	6	底部径 現器高 器厚	5.5 5 0.9	平底で16と同様であるが、やや大型である。	輪積手法で底部の胎土減厚がはげしい。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	18	25	底部径 現器高 器厚	4.0 4.5 1.7	平底で上外方向に僅かに内傾している。	輪積手法である。全体的に肥厚な土器である。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	19	13	底部径 現器高 底部器厚	4.5 4.5 1.5	平底の底部を基底部でつまみ出している。体部は大きく基底部より上外方向にのびている。	底部に指圧痕があり、表面は縱方向に刷毛日調整が、内部は放射状に櫛搔きの調整がある。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	20	23	底部径 現器高 底部器厚	4.5 4 1.1	平底の底部周辺が僅かに直立した底部片である。	輪積手法であろう。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	21	14	底部径 現器高 底部器厚	5.0 5.5 1.5	19の上器と同様に基底部がつまみだされている。体部は基底部より内窓気味に上外方向にのびている。	輪積手法である。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	22	5	底部径 底部厚	4.5 2.3	平底部分のみ肥厚し、体部への立ちあがりは内面では平面に近い。球形に近い体形が推定される。	ナダ調整がみられる。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1
壺形土器 底部	23	17	底部径 底部器厚 現器高	5.0 1.0 5.0	15と同様である。やや15より大型土器。	15と同様。	焼成は良好、胎土に粒子あり。 1

種類	実物 No.	出土 番号	灰 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数値
高環形 上器部	24		环部径 4.8	环部より下外方向にのびてい る。4方向に円孔が穿たれて いる。	环部の底面に押入する脚部で 円柱の脚部に円盤が被覆され ている。内部にしづらみ、外 表面はヘタによる研磨がなさ れている。	胎上は肥厚で しかも粒子は 少ない。無成 はよい。	2
	25		環器高 5.5				
			円孔 1.7				

第57図 SB04、SB05土器実測図



第58図 SB 1 造構尖測図

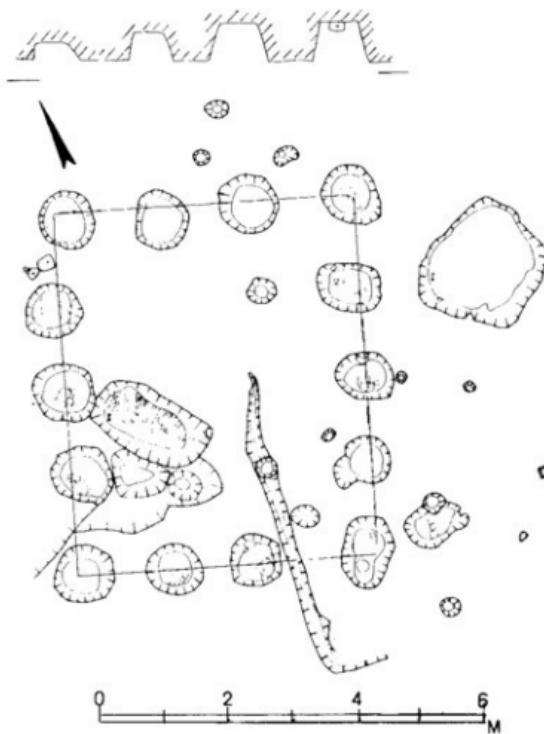


(6) 3号掘立柱建物 SB 3 (図 59) 図版 (84)

SB 3 は梁間 3 間、桁行間 4 間の建物である。建物の棟方向は北側梁間の西隅柱位置で東に 20 度ふれている。柱位置での掘り方は 80~100 cm の円形な掘り方をとるもののがほとんどである。掘り方内での柱の抜取穴を検出することはできなかったが、掘り方内に検出された跡は明らかに、柱を安定させるための詰め石として利用されたものがある。そのほか 5 つの柱穴では礎石が検出されている。梁間の柱間の心心間距離は、何れも 150 cm の等間となっている。これに対して、桁行間における柱間の距離は、南梁間の隅柱より 2 間は 150 cm の等間となり、残る 2 間は 130 cm 等間となっている。建物の平面プランは、梁間 450 cm、桁行間 560 cm の床面積 252 m<sup>2</sup> の南北棟の掘立柱建物であり、SB 4 が高床式建物としての東柱 P<sub>15</sub>~P<sub>17</sub> が検出されている。また一方梁間の北側面の柱列に平行する P<sub>18</sub> と P<sub>19</sub> は、建物への階段（梯子）とみられ、また桁行間の西側面の南隅第 1 間に P<sub>20</sub>・P<sub>21</sub> が検出されている。この 1 対の小柱穴を建物への入口部と推定すれば高床式建物であり、しかも入口部を二ヶ所に設けていることから、高床式倉庫とみるより、高床式住居として理解すべきであろう。梯子の柱穴間距離は、P<sub>18</sub> と P<sub>19</sub> では 120 cm であり、P<sub>20</sub> と P<sub>21</sub> では 50 cm と狭間となる。いま P<sub>20</sub> と P<sub>22</sub> をあてれば 130 cm が得られ、やや北側面の施設と等しくなる。さて梯子の位置が北側面では柱位置より 80 cm 間隔であるに対して、西側面では 150 cm の間隔がある。この柱穴を建物への階段とすれば、北側面は勾配が急となり、西側面では緩い勾配となる。このことは

また建物の屋根造りによる工夫ともみられ切妻に対する階段の短縮がしいられたとも推考されよう。

第59図 SB 3 造構実測図



(7) 5号掘立柱建物 SB 5 全測図 (48)

SB 5 はグリッド 3 と 4 で検出された掘立柱建物棟の一部である。建物の規模は不明であるが、北側面の東隅柱位置で西に 11 度ぶれる建物が考えられる。いま SB 4 の梁間の心心間距離と同様な数値は、SB 5 にみられる計測値では北側面での柱間の心心間距離に 150 cm 等間が計測される。これに対して東側面での計測値は 120 cm 等間が算出される。この数値から、また同地区での他の堅穴式住居及び掘立柱建物棟からして、南北に棟をとる建物が考えられる。

(8) 溝状遺構 SD 2 (第52図)

竪穴式住居 SB05 と SB06 の中間位置に SD 2 の遺構が検出された。SD 2 は北に傾斜しており、北流する流れが推定される。南部には不規則な凹みがある。SB05 や SB06 の住居が活動している時期は、清水が SD 2 を流れた湧水源であったろうと推察される。いいかえれば SB05 や SB06 の水源地として活用されたかつての遺構であろう。

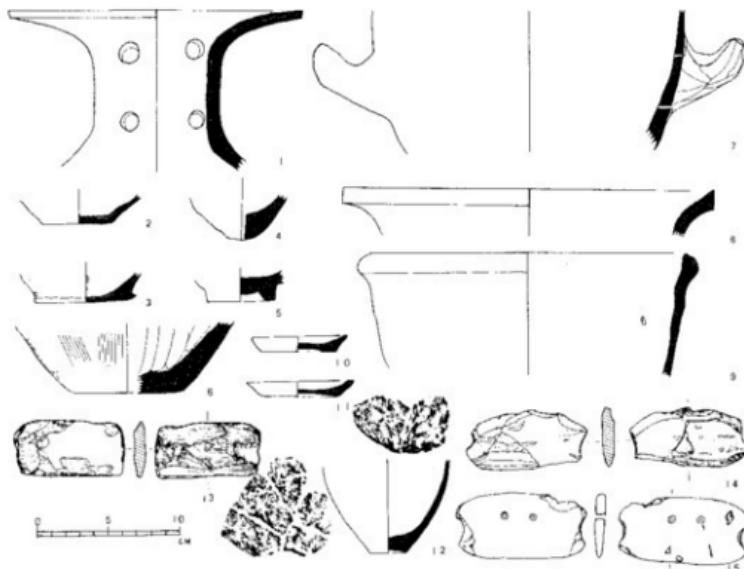
(9) 溝状遺構 SD 3 全測図 (48)

SD 3 は測量基準点 No. 6 付近で検出された遺構である。東から西に流れたのち、地向差を求めて大きく曲折して北へ流路をとっている遺構である。かつては SD 2 と同様に曲折地点付近に、南面の山麓地点より湧水が流入していたものと推定される。

(10) 北下B区におけるグリッド内で検出された遺物

北下B区でのトレンチ調査及びグリッド内で検出された遺物には、弥生式土器片をはじめ土師器の器物片が多量に検出されたが、遺物の中で、計測可能な主だった器物について実測を行った。石器においては検出された遺物をすべて記録にとどめた。

第60図 グリッド内検出土器、石器実測図



## 北下B区グリッドの遺物

種類	区番	法 令cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数
器台形土器	1 上 部	G19 12.3	口径 20.5 底盤径 8.0 器高 11.5 外反する脚部があるものと推定される。受部は大きく外反し端部は垂直な平面を外方につくる。	内外面共にナデ仕上げである。円柱には4箇の円孔が上下2段に穿たれている。	粗粒子を含む。黄褐色。焼成良好。	1
杯形土器	2 底 部	G13 2	底盤径 5.0 現器高 2.0 半径で基底部より上外方向にのびる薄手の土器である。	内部ナデによる凹凸がある。糸切はない。	焼成良好、胎土は密である。	1
杯形土器	3 底 部	G19 2	底盤径 6.5 現器高 2.5 平底の底部にやや歪みがある。平底に整形のつきこぶがある。	内外面ナデ調整である。	焼成良好、胎土は密である。	1
瓶形土器	4 底 部	不規 則	円孔径 0.6 底盤厚 1.8 尖底に円孔が穿たれている。	底部周辺に叩きしめ痕がある。	焼成良好、胎土は密である。	1
皿形土器	5 磁 器	G24 1	底盤径 5.0 高台高 1.0 台形の高台がつく。釉がかかる。	磁器底部片。	焼成良好、胎土は密である。	1
壺形土器	6 底 部	不規 則	底盤径 8.0 器厚 1.5 現器高 5.0 平底の底盤より上外方向にのびる。肥厚な土器である。	輪削手法で内部に指頭によるナデ仕上げがみられる。器表は櫛描き整形の後削毛調整である。	焼成良好であるが胎土に0.4以下のお子を含む。	1
瓶形土器	7 体 部	不規 則	体部上部 22 下部 18 把手部径 30.5 把手付きの瓶形土器の体部片である。	両面が入念なナデ仕上げとなっている。把手は体部に押入されている。把手は面取りを粗く行う。	抹土作業中に耕作土内より検出。	1
壺形土器	8 口 縁 部	不規 則	口径径 26.3 頸部厚 21.2 頸部で大きく外反し、口唇端面は垂直な平面を外方向にもつ。	両面が入念なナデ仕上げである。胎土厚は均一である。	胎土は精選されている。茶褐色、焼成良好。	1
壺形土器	9 口 縁 部	G25 6	口径 22.2 体部下部径 20 器厚 0.5 口縁部は厚してある。口唇端面に稜をもつて口縁直下に体部のよどみがある。器表面に模様付着。内側に初層あり。	輪削手法である。叩きしめの後ナデ調整を行なう。口縁は折返し口縁である。	焼成良好、胎土密。	1
土器	10 上 部	G24 4	口径 6.7 底盤径 5.4 器高 1.0 小型の皿(山皿)で底部が僅かに窪入する。	糸切はみられない。	胎土密、焼成良好。	1
土器	11 下 部	G24 4	口径 7.7 底盤径 5.5 器高 1.0 小型の皿(山皿)で底部が僅かに窪入する。	糸切はみられない。	胎土密、焼成良好。	1
壺形土器	12 全体	不規 則	底盤径 2.5 現器高 6.8 体部厚 0.3 は薄手である。	手づくね上器で壁面(内)に指頭痕を残す。器面は入念に削毛調整されている。	胎土密、焼成良好。	1
石器	13 石包丁	K-F トレ ンチ	長径 7.5 短径 4.9 厚さ 0.8 打製の石包丁である。	長方形の石包丁で、短辺に小刻離がほどこされている。刃部にも小刻離をみる。	変成石。	1

種類	基盤	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	表記
石器 石包丁	14 トシ ンチ	長径 幅 厚	8.2 4.0 0.8	粗い剥離面を持つ。茎錐形である。	打製で片刃の短辺部に抉入がある。	変成岩。 J
石器 石包丁	15 K-B トシ ンチ	長径 幅 厚	9.2 4.7 0.7	2側の円孔がある。両辺部に抉入がある。	磨製の石包丁で背部は凸状に磨製されている。	縞泥片岩。 1

#### (11) グリット内出土の遺物の様相

1 の器台形土器と同形の器物は、旗立 A 区の SB03 遺構で完成品が検出されている。7 の瓶形土器にみられる把手は嵌め込み手法を取っており、これまた旗立 C 区 SB06 遺構で伴出をみた遺物と共通する技法である。9 は口縁の作りや体部の様相から鼎形土器であり、底部は平底が推定される。この種の土器は来住庵寺跡遺構で 3 個体一括して出土をみている。グリット内で 3 個の石包丁を検出しているが、前述の堅穴式住居にともなう時期の遺物であるか否かは即断できかねるが、旗立 B 区 SB05 遺構で共伴していることもあり、13 や 14 はその可能性が強い遺物といえよう。

## IX 北下 B 区における小考

B 地区にて検出された遺構は、堅穴式住居跡 3 基、掘立柱建物 5 基、溝状遺構 3 条と土壌状遺構に暗渠排水遺構である。

本地区における特記すべき遺構として、SB05 遺構 (A 区より連続 No) 及び同遺構に並列する掘立柱建物遺構である。

SB05 遺構における特異性は、本文中すでに触れた類似点があげられるが、特に本遺構については、北側壁面と西側壁面 (地山面) に穿たれた小規模な支柱穴である。柱穴は壁面と並行して穿たれており、柱穴の直径は不揃いであり、しかも小規模ではあるが、壁面に並行する小ビットという立場から、側面に壁を有する平地式住居跡と推定し、小規模なビット列は家屋の軒を切り上げるために生じた小ビット列とみた。すなわち軒の切り上げによる切上桁の支柱痕と推定したのである。西壁面中央部には跡跡が検出されており、しかも瓶形土器が検出されている。以上の切上桁により通気と採光の増加もみたことは当然であり、その上に室内の空間の利用度も増加したものといえよう。本遺構と類似する遺構に、松山市桑原町の桑原高井遺構の堅穴式住居跡 SB03 遺構がある。

さらに SB05 遺構の北面に接近して構築された掘立柱建物遺構がある。掘立柱建物遺構は梁間 1 間 (全長約 1.8 m)、桁行間 2 間 (全長約 3.5 m) の掘立柱遺構としては最小単位の規模であろうと推測される。いま梁間が 1.8 m であることから見れば、松山市朝美町 2 丁目の宮前川河川敷地下 2.5 m から出土した鼠返しや木のくり盆と共に出土した板材がある。この板材の厚味をもって、高床式の床材に利用した材とすれば、梁間 1 間の床板材には、中央部

に支柱をかららずしも必要としなかったであろう。朝美町における板材を基準にすれば、北下での本遺構は高床式建物と見られる。また近接する SB05 遺構と平行する時期に併置されていた高床式倉庫を見るべきであろう。

高床式倉庫は SB5 として全測図に示すところの建て替えが行われており、しかも掘立柱の位置は、SB05 よりさらに離されている。間隔が取られた理由として第一に掘立柱建物の規模が拡大され、当然のこととして軒先の重複を避けての柱穴位置の移行と推測される。

いま一つ SB01 の住居跡より、僅か 1.5 m に構築された SB02 遺構がある。遺構は方形の床面を平坦に調整した後、4 本の主柱が穿たれているが、この遺構における特記事項としては、西壁面の角に 1 個と中央部に 1 個の計 3 個の柱穴（深度 15~20 cm）が検出された。東壁面は後世の排水工事のため壊乱され不明である。この壁面上に穿たれた柱穴が、四注造りの通鳥尾（とうしちょうび）としての柱穴である可能性もある。いま SB01 遺構では軒先を切り上げ、室内の採光及び空間の増加を計った構造に対して、IL 来の堅穴式住居形態を踏襲している点では、まさに対照的な遺構といえよう。

両者の遺構での出土遺物では、さしたる時間的な格差はみられず、ともに同時期か稍前後する僅かな差を有する時期であろう。ただ SB03 遺構出土の遺物中に滑石製の釜形の什器片が検出されている。この種の器物は長崎にて多量に検出されており、今後の課題とされよう。

掘立柱建物遺構 SB3 は、SB02、3 遺構の内に掘立柱の柱穴を穿っている。この遺構の切り合い関係から、SB02、3 遺構の廃絶後に SB3 遺構の構築がなされたものと推定される。掘立柱建物遺構の柱間の心心問距離は、SB2 の心心問距離と全く同尺であった。ただ建物の平面規模は SB2 の 2 倍を有する床面積となっている。建物の規模及び掘り方をはじめ、礎石等の配置からみて、SB2 に後続する建物遺構として SB1 や SB3~5 が建造されたと推察される。

# I 北久米遺跡 常堰A区における遺構と遺物

## 1 地区と調査の条件

A地区は国道バイパス11号線松山東道路の予定線(図1)の中心杭No.54~56地点を呼称したものである。該当地区は農道及び灌漑用水路に挟まれ、しかも水利の関係上中心杭56の南は水稲の苗床として利用されていた。この用水路と農道、そして苗床という最悪な条件のため予定地内の調査はごく限られた調査にとどめざるを得なかった。

## 2 検出された遺構と遺物

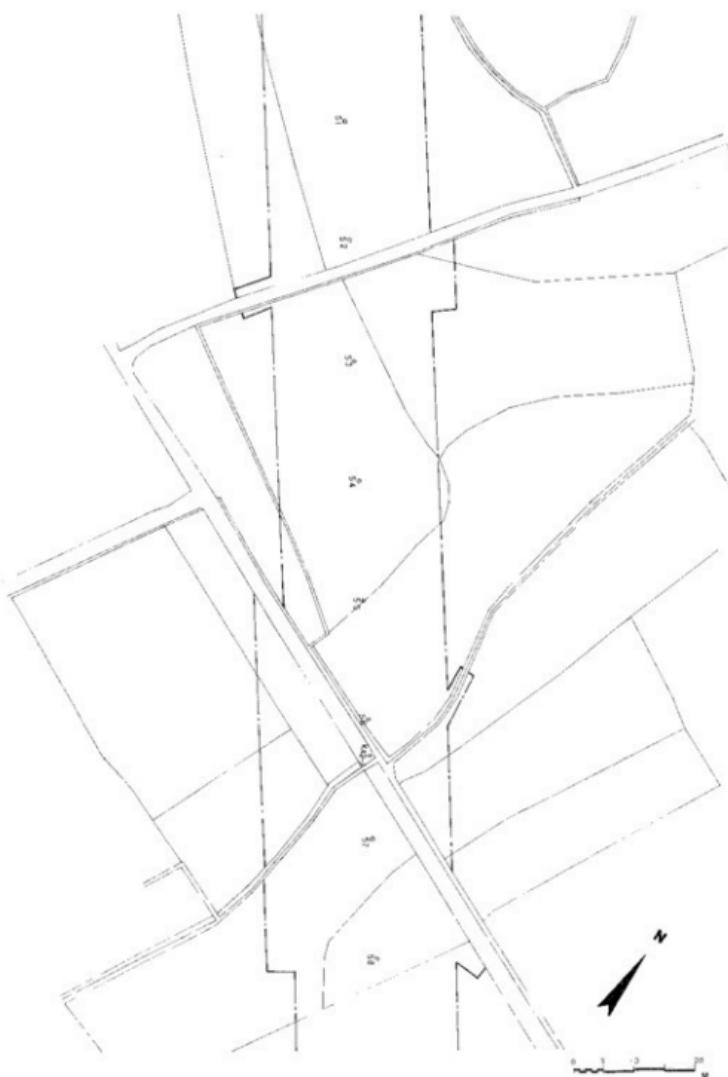
### (1) 溝状遺構と水田

溝状遺構(SD)はSD1~SD9の遺構が検出された。SDの流れは矢印の方向にあったものとみられる。大きく流れを取るSDは、SD4とSD6そしてSD9である。細部にわたって考察しよう。SD1とSD2の合流地点には、掌大の自然石が圓に示す状態にあり、この小石に混じり鉄片や須恵器片もみられた。小石の充填状況から、用水路の調整に利用されたものといえよう。SD3は比高からしてSD5に流入したものといえるが、SD4は明らかに西流する溝とみられるが、SD5は僅かに北が低く北流することも可能である。SD6は最も安定した溝で、明らかに西流したものである。SD9はSD6を受けて流れる溝であるが、溝底の比高からみれば、西流もまた東流も可能な水路とみることができる。

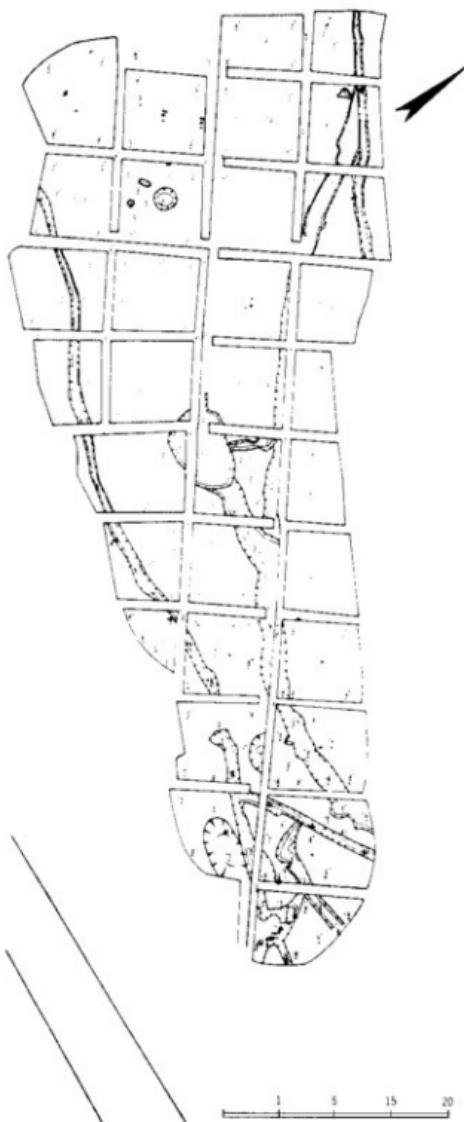
これらのSDを図中に示すA・B・C地点への灌漑用水路と推定している。すなわちA・B・Cは水田遺構であろう。A面での平面に対して、B平面との間に僅かな隆起があり水田の畔面と判断した。またB平面とC平面にも同様の隆起がみられた。

A平坦面とF平坦面との間に約4mの幅をもつ高まりがあり、A平坦面との比高は18cmある。(この島所より須恵器片が多数出土している)SD7はこの畦道を穿って掘られ、しかも長径3m、短径2mの掘り込み溝があり、掘り込みの最下部での比高は175.6cmと溝より10cm弱低い。SD7の西端はA平坦面にて消滅している。SD7にみられる掘り込み部の北法面中央部に、SD8の小溝が南端部159.5cm、北端部160cmと北へ流路を取りSD6に再び合流している。C平坦面ではSD4が消滅していることから、C平坦面への用水路としてSD4が符合する。B平坦面への水口が不明であるが、比高から推してAから受水したことが充分

第1図 北久米遺跡常堀A区発掘位置図（水田遺構）



第2図 常盤A区溝状遺構図



第3図 水田造構全測図



に考えられる。その他にF・D平坦面が検出されているが、細部にわたっての調査ができずいま一つ確証は得難い。

当地区の地形はすぐ南面に巣ノ岡独立丘陵がせまり、全体的に北に緩傾斜する。南面する農道の南は丘陵部である。

各平坦面の規模は、Aが $7 \times 5$ m、Bは $5 \times 5$ mでCも同規模が推測され、これらA・B・Cの平坦面を水田遺構と判断している。

水田遺構としての根拠は、A・B面で検出された水田雜草「コナギ」の種子が多量に検出された(10 gの土壤より140~160)ことにもよる。いま一つはSD 7の掘り込みは“ぬるめ”の効果をねらった遺構と推定される遺構でもある。

## (2) 遺 物

遺物は非常に少なく、道路予定地の中心杭No. 54の西に、幅4 mの洪積層の地形が残る場所と、東隅の地点にSDの溝遺構の内に自然石を配石する場所から、細片化された土器、磁器の遺物が検出された。中心杭No. 54での畦状遺構の遺物は土師器片であり、1の地点の土器片からは壺形の土器が指定され、2の出土遺物も同様遺物の外に上部の坏片も検出されている。中心杭No. 55の東隅の地点では、SD 3とSD 4への水口的な位置に、掌大の自然石があり、それより東への位置は図に示すように砂利状の砂と小石を溝遺構内に充填しており、これに混入しての土師器片と磁器片及び瓦器片も混入していた。何れもよく磨耗しており、しかも細分化していることから推察して、何れか他の地所から搬入した土砂と推測されるものである。さらにSD 5とSD 6の間の畦状遺構でも土師器片の検出をみている。

## II 北久米遺跡常塙B区における遺構と遺物

### 1 常塙B区の地形と古墳

星ノ岡遺跡及び北久米遺跡と、独立丘陵星ノ岡丘陵の北面する山麓一帯は、なだらかな斜面をなし、福音寺遺跡筋途（すじかい）地区の微高地地帯との境は鞍部となり、各所に湧水がみられたが、この両者の東方地域に広がる台地状の地形をなす所が北久米遺跡である。

北久米遺跡は広範囲の地域で、東方の久米タカノコ遺跡と1km位置で接する。当地は北久米遺跡の西端部に位置している。北方は久米山田池遺跡と約1kmで接し、南は割越川（前川）の前川遺跡及び来住高畠遺跡と約300mで接する。

当遺跡の大半はすでに住宅地域として古くより集落が形成されており、市道久米桑原線と農免道路間は特に過密な地域となっている。とはいってもまだ調査対象と目される水田及び畑地もあり今後の調査に希望が託される。内でも現存する桜塚（一名双子塚ともいう）はかつては前方後円墳があり（出土遺物に金冠の出土をみている）、この古墳を中心とする地域が北久米遺跡と呼称され、当調査地とは指呼の内に近接している。またこの古墳の東方150mにも東山神社があり、かつては前方後円墳として雄姿していた。更に前述の星ノ岡丘陵は弥生時代から前方後円墳を中心とする古墳時代遺跡を、さらには南北朝期の古戦場としても知られる所である。

とはいっても当発掘地は、長く畑作地帯として活用された地域であり、水田地帯としての熟田化は昭和20年以後の農地改良事業によるとされている。

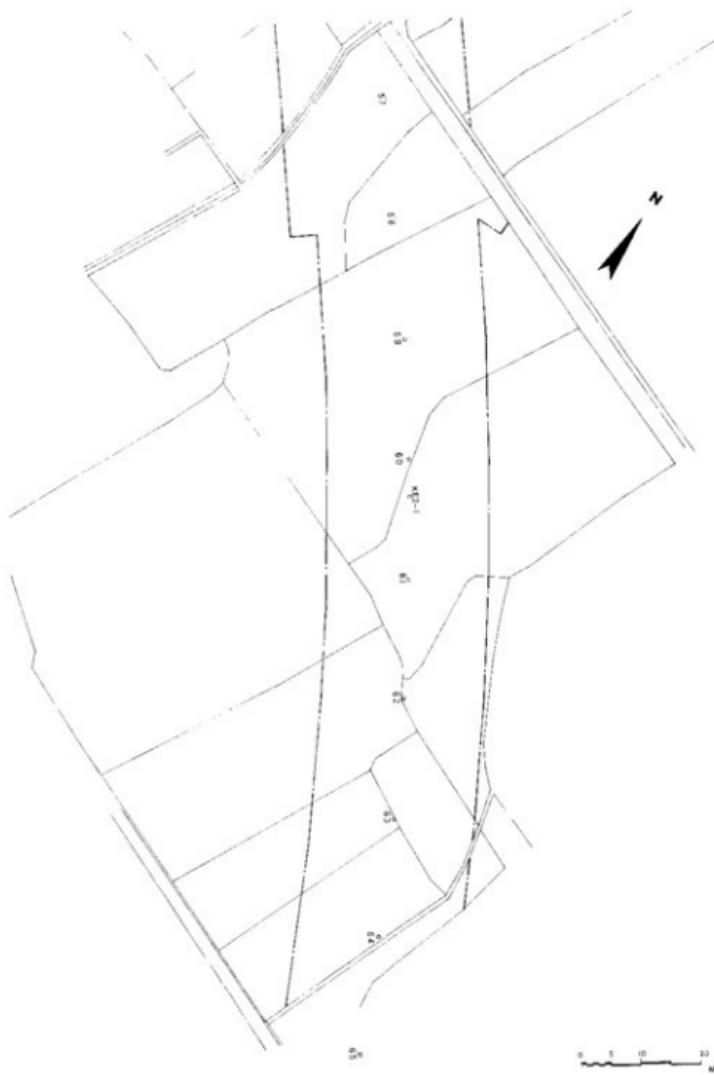
### 2 検出された遺構

#### （1）1号堅穴式住居址の遺物出土状況

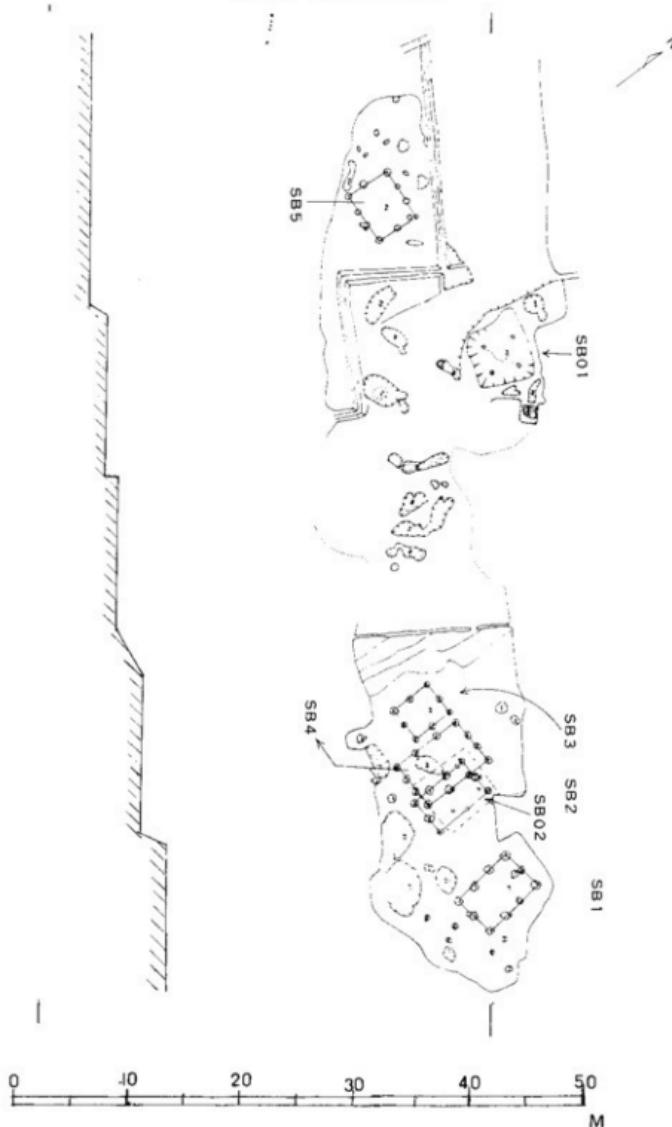
1号堅穴式住居址内の主な遺物の出土は、遺構周辺の地山面でのレベル-154cmに対して住居の床面での平均レベル位置は、東壁面で-173cmと西壁面では-174cmである。ただ主柱P<sub>2</sub>周辺は（図に示す凹地）-185cmと-10cmのなだらかな凹面がみられた。

とりわけ土器類としての土器は、図に縁線で示すごとく東壁面に集中して出土をみた。これらおもだった遺物についての表示をすれば254ページの表のごとくである。

第4図 常壌B区発掘位置図



第5図 常堀B区全洞図



遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
出土レベル	160	160	156.5	166.5	166.3	162.5	167.0	166.5	167.5	168.3
器種	底部	須恵器片と底部		須恵器片	底部	环	壺形土器	口縁部	口縁部	壺形土器
遺物番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
出土レベル	162.5	166.4	159.0	174.0	178.3	178.3	160.7	176.7	174.7	162.0
器種	F e 刷毛部	F e 壺形土器チャーハンと各部			底部	F e		底部	底部	口縁部
遺物番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
出土レベル	上165.2 底176.2	172.0	172.0	173.0	171.5	171.5	175.0	176.0	175.0	174.7
器種	壺	土師壺	土師の把手	环の刷毛部	壺形土器	壺形土器底部		底部片	高环形土器	破
遺物番号	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
出土レベル	175.0	169.0	166.5	167.0	165.6	174.0	170.0	172.0	175.2	
器種	环	口縁部	壺	F e	环		須恵器片	环把手	环	

### 3 壇穴式住居跡遺構

壇穴式住居跡は2基検出されたが、内1基は後の掘立柱建物による構築のために、基盤面の削平がなされており、壇穴式住居2号の壁面が僅かに検出されたに過ぎない。壇穴式住居1号跡は全測図(5)に示す位置にあり、2号住居とは35mの間隔を保つ西方に構築されていた。

#### (1) 1号壇穴式住居跡遺構(SB01)(第6図)

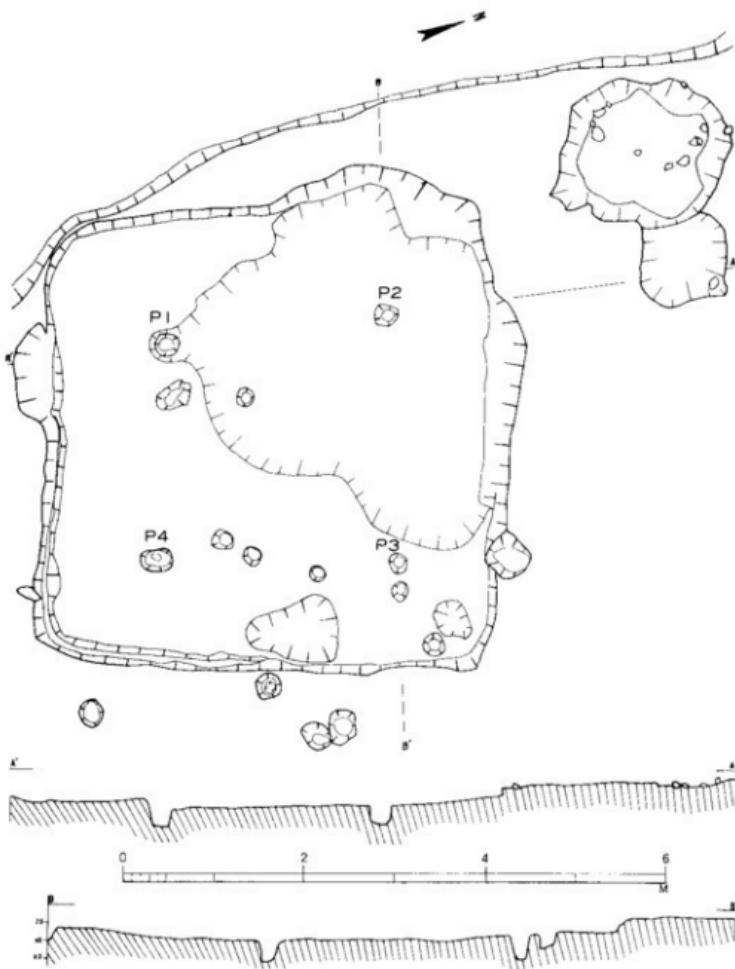
1号の住居規模は、床面は方形の隅丸で一辺5.2mである。住居は主柱4本柱による互助屋根造りと推定される。主柱の柱間距離は何れも一定せず、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>では2.4m、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>では2.5m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>では2.75m、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>では2.6mとなっている。住居の主軸方位は東に20度ふれた南面の西隅に入口をもつ壇穴式住居跡であろう。

1号住居の西側は耕地の畦があり、住居の入口付近は畦の補強のための杭木が数本検出されており、いわゆる後世の耕地整理及び畦畔の補修による擾乱が認められた。

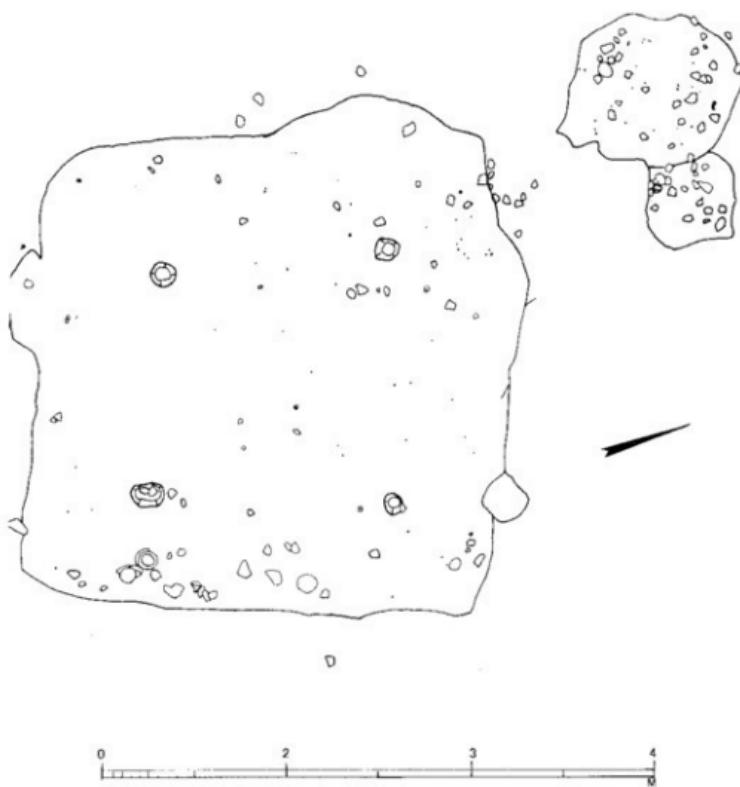
主柱と壁面との位置は、西壁面と南壁面では1.2mの間隔が保たれ、北壁面ではP<sub>2</sub>の主柱側では1.1m、P<sub>3</sub>の主柱側では1mと僅かに差がみられ、東側は1mである。

遺物の出土状況は、大きく2分する形で出土をみている。主柱P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、主柱P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の中央位置で区分すれば、西側では僅かにP<sub>1</sub>の主柱の西壁面で土師器の壺形土器を1点検出した以外では、3点の鉄片を検出したのみである。これに対して東壁面側では集中的な土師器の出土をみており、特にP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の主柱と側壁面での出土状況は第7図に示すものである。

第6図 SB01遺構実測図



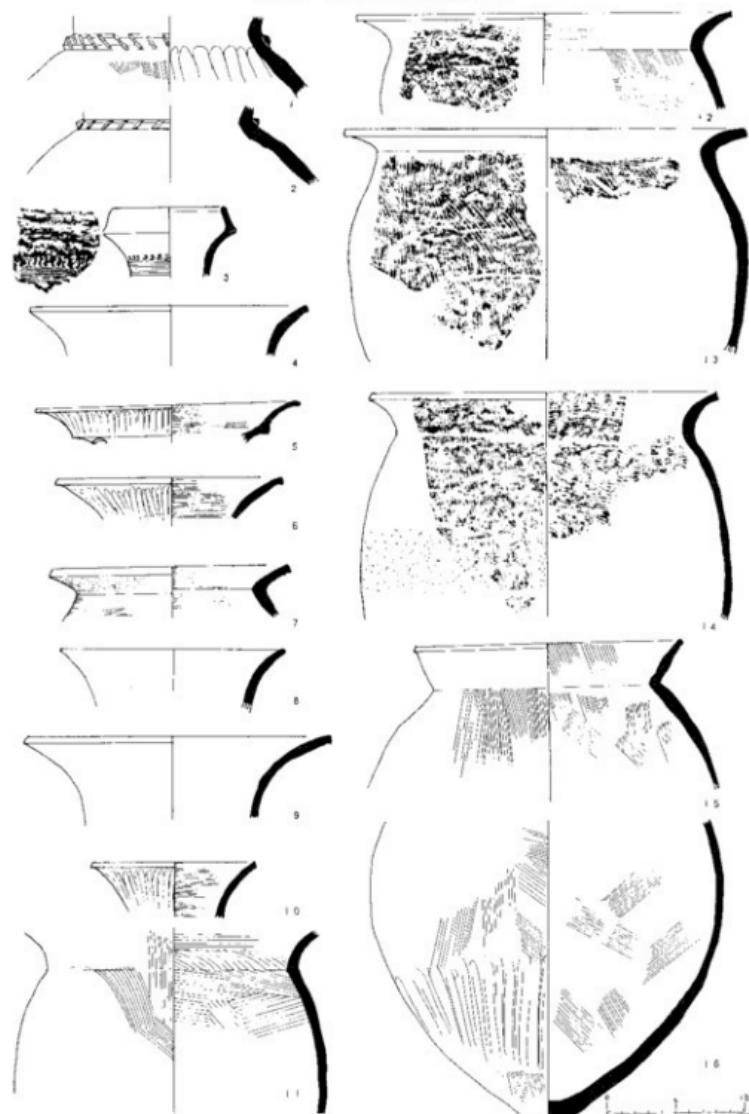
第7図 SB01 遺物出土状況図



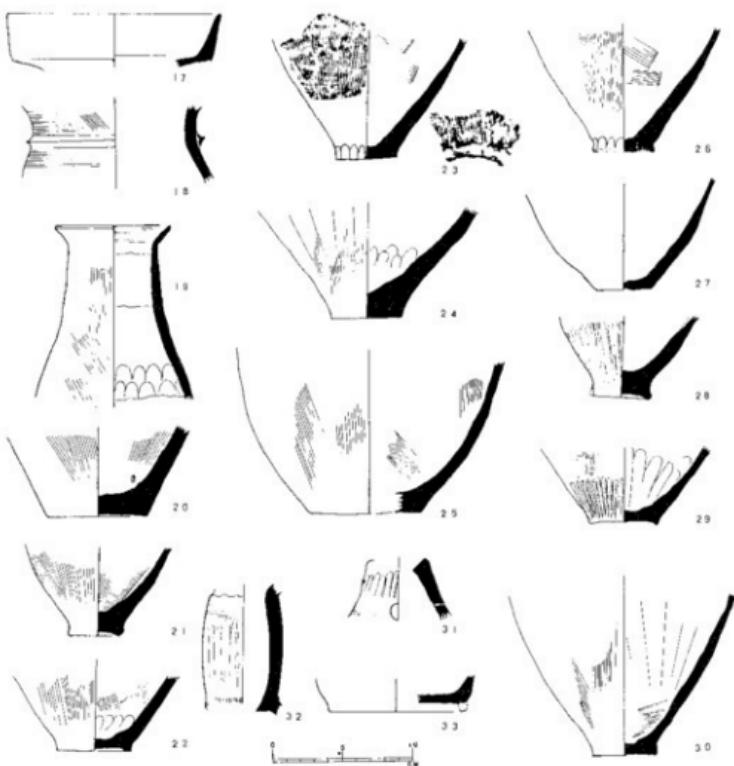
(2) SB01 の遺物の様相

SB01 に伴う壺形土器の口縁部として 3、4、6~10、17~19 があり、壺形土器の底部と推定される 20~30 の上器底部がある。1 と 2、18 は頸部片のため口縁部の様相は不明である。頸部にめぐらされた凸帯は、いずれも断面三角形の貼り付けによるものである。18 は断面三角突帯をめぐらすのみであるが、1 と 2 は突帯の上端面に櫛状工具による押圧施文があり、施文方向は異なり、この方向から施文への手順が類推され、1 は右手による施文とすれば壺は左に向転させての手順が考えられ、2 はその向転方向を逆に取る手順となろう。3 と 17 の口縁部はともに複合口縁であり、3 では口辺部の輪積が明瞭である。17 では口辺部に内部か

第8図 SB01遺物実測図①

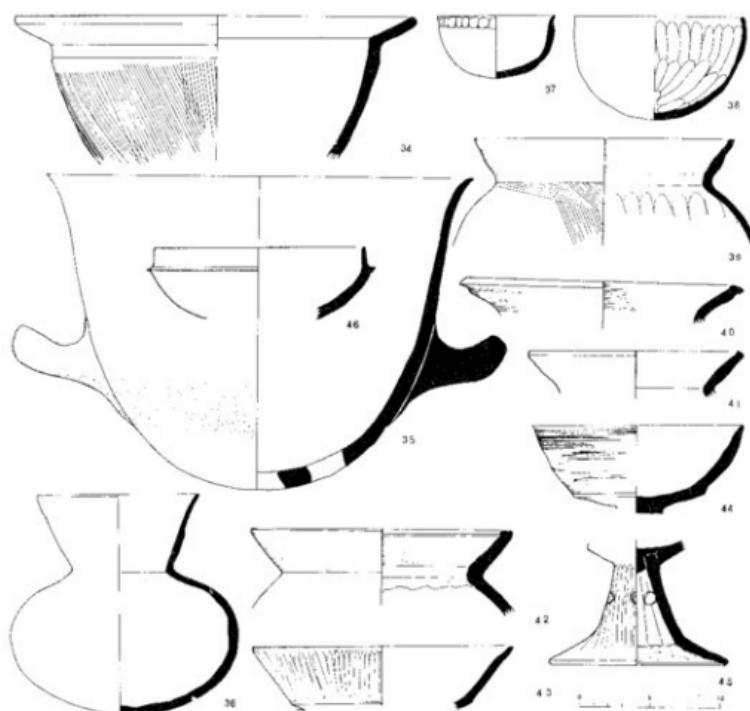


第9図 SB01 遺物実測図②



らの撫付けがみられることから3と同様の口辺部であろう。3の頸部には10条の沈線が施され、その上端部にS字状の連続する施文がある。19は口頭部の様相では、長頭の壺が推察される。頸部内面に輪積痕が明瞭に残されている。体部は欠失しているが、体部との接合位置に指頭圧痕が残されている。壺形土器の表面の整形は櫛状工具によるものが多いが、6、9、29にみられる籠による研磨整形もみられる。底部では平底のものが多く、平底の基底部をつまみ下げる高台状の底部とするもの21、22、28、29などがある。変形土器11~16がある。いざれもくの字口縁の土器である。体部には媒煙が付着している。口径と体部最大径の比が、14と15は体部径が大で、12と13では僅かに口径が大か等しくなっている。16、39、42の縁部はとともに口唇端は水平な平面であり、口唇部内面に僅かに稜をなすものと、口縁部の中

第10図 SB01遺物実測図③



位に僅かにふくらみがみられる。40、41の口縁部にも中央部にふくらみがある。口唇端面は両器ともへら切り整形により、口唇端面は僅かに外傾する。高杯形土器片として5、31、32、44、45の遺物がある。5は杯部で鋸い稜をもつ。稜直下に円孔痕がみられかつては、2～4の円孔を穿った杯部が想定される。45は脚部であるが、脚柱部に4個の円孔が穿たれている。脚部内面には12方向に篦切の整形がみられ、脚裾部は大きく開き脚底高1.5cmと高くなっている。杯部は中空の脚基部に嵌み込む形で整形されている。31の脚部も45同様の脚基部と杯底部の着底成形が推測される。37、38は杯形土器であるが、38の口径と器高比から碗形土器としたい。37は口唇部を指頭調整し口唇部を僅かに外反させている。38の内面は入念な指頭撫摸がみえる。34は鉢形土器でその口縁部は体部最大径から外反する。内面はナデ整形である。外表面は目の荒い櫛状工具による整形である。35は瓶形土器で、把手は貼り付けで、把手位置は中位置より僅かに下にある。底部には5個の円孔が穿たれている。46は須恵器でSB01に近接するSK遺構で検出された遺物である。

## SB01の出土遺物

種類	回収 No.	出土 番号	法 量cm	形態の特徴	技術の特徴	備考	類型
壺形土器	1	7	頸部径 15.0	頸部片。頸部に断面三角形の突帯をもつ。	内壁面は指頭ナデ上げ、外表タシ状工具による整形。突帯上面にタシ状ヘラ工具による押圧痕。	焼成良好、胎土に粒子を含む。	1
壺形土器	2	25	頸部径 13.0	頸部片。頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。	輪轍手法で接合痕が残る。頸部内壁にヘラ削り面が残る。両面ナデ調整。突帯上面をタシ状ヘラ工具で押圧痕。	焼成良好、胎土に粒子あり。	1
壺形土器	3	?	口径 8.2 複合部径 9.5 頸部径 5.8	頸部より直にのび上がったもの。上外方向に開き、再び直面して内傾する。口唇端面は円面である。	頸部に癹凹線と凹窪端部にS字状施文あり。口縁部は輪轍で接合部に棱をなす。内外面ヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に粒子を含む。 黄土色。	1
壺形土器	4	21	口径 20.0 頸部径 15.0	口縁部片。端面は平面をなす。	内外面共にヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に粒子を含む。 黄褐色。	1
高床形 上器	5	29	口径 19.2 稜部径 14.2	口縁部片。稜部より再び外反する。稜部直下に円孔がある。	内面タシ状工具の整形後ヨコナデ調整。外面はヘラ研磨。	焼成良好、胎土密。 茶褐色。	1
壺形土器	6	20	口径 16.5 頸部径 9.8	朝顔状に開く口縁部片では唇端面は外方に面をなす。	内面ヨコナデ調整。外側へタリ研磨で端面へラ削り。	焼成良好、胎土密。	1
壺形土器	7	32	口径 17.0 頸部径 13.5	くの字の口縁部片で、口唇端面は外方に面をなす。	内外面共にヨコナデ調整。口唇端面はヘラ研磨。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	8	7	口径 16.2 口徑下部 11.2	ワッパ状に開く口縁部で、口唇端面は円面をなす。	内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	9	8	口径 22.0 頸部径 12.5	口縁部片で、頸部で直立して立ち上がった後、口縁部で大きく開く。口唇端面は外傾し平面をなす。	内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	10	26	口径 11.7 頸部径 6.8	ワッパ状に開く口縁部片では唇端面は外傾し平面をなす。	内面はヨコナデ調整。外面はヘラ研磨による。口唇部はヘラ研磨。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	11	1095	頸部径 17.0 体部径 22.5	側頸部片。張りの少ない体部で頸部のすぼまりは少なく、器厚はやや一定。	輪轍手法で、内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	12	12	口径 27.2 頸部径 22.5	頸部より屈曲した後、大きく外反する口縁部で口唇端面は平面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内外面ともタシ状ヘラ工具による成形。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	13	1120	口径 29.0 頸部径 24.5 体部径 28.7 器高 16.5	側部の張りの少ない、弱いすぼまりの後、頸部で大きく屈曲し、水平に近い口縁部をつくる。端面は平面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内外面タシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1

種類	版No	胎土番号	法 番	法 番	形 塗 の 特 徴	接 法 の 特 徴	備 考	重量
壺形土器	14	9	口径 頸部径 体部径 器高	25.0 21.5 27.0 17.0	頸部の張りの少ない肩部でのすぼまりも弱い、頸部より内側した口縁部をつくる。端面は平面である。	口縁部及び体部内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形である。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	15	12	口径 頸部径 体部径 器高	19.3 16.4 25.5 11.5	球形に近い体部で、口縁部はぐの字口縁である。口縁部内外面にふくらみあり。	輪積手法痕を残す。口縁部外側コロナデ調整。他面はタシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
壺形土器	16	9	体部径 規器高 底面部径	25.5 21.5 4.0	小径な平底の基底部より上外方向にのびたものち大きく内側する体部をつくる。	体部基底部及び、下部はヘラ削痕、他は粗いタシ状ヘラ工具による整形で凹凸（指圧）が内面に残る。	焼成良好、胎土に粒子若干。	1
口縁部片	17	0	口径 現器高	15.0 3.5	頸部より水平に近い外反をした後、直立する口縁部で口縁端面は円面。	内外面ともにコロナデ調整。	焼成やや歎、胎土密。	1
頸部片	18	30	頸部径	11.5	頸部片で、頸部に断面三角形の突角がめぐる。	内面はナゲ調整、外表面はタシ状ヘラ工具による整形の後コロナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1
口頸部片	19	9	口径 頸部径 器高	8.0 6.2 13.0	肩部の張りの少ない体部より内側気味にたちあがり、腹部中央位で底面したのち、大きく里向し短い口縁部をつくる。	輪積手法による。体部内面に指圧痕、外表面と口縁部はタシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土密。	1
底 部 片	20	28	底部径 現器高	7.0 6.5	僅かに凸面をなす。平底の基底部より上外方向に直線的にのびる。	内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形。器内面にセミ痕あり。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	21	2	底部径 現器高	3.7 6.5	凸面をなす底部で、着地面は外に平面をなす。基底部より内側気味に上外方向にのびる。	内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	22	1	底部径 現器高	5.0 5.5	高台状の平底で、基底部より上外方向にのびる。	底部内面に指頭ナゲ痕あり。その他の内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	23	26	底部径 現器高	4.3 9.5	平底の基底部より上外方向にのびる。基底部に指頭痕あり。	内外面ともにタシ状ヘラ工具による整形。整形方向は異なる。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	24	13	底部径 現器高	5.0 8.0	平底の基底部より上外方向にのびる。	輪積手法で基底部内面に指頭痕あり。外表面はヘラ削り整形である。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	25	502	推定底部径 現器高	8.0 11.0	平底の基底部より内側気味に上外方向にのびる。	輪積手法で内外面ともにタシ状ヘラ工具整形。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	26	26	底部径 現器高	4.5 9.0	平底の底部より上外方向に減厚しながらのび内部にタシ状工具による成形と外表面はタシ状整形。	平底基底部につまみだしの指圧痕がある。輪積手法でタシ状整形。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1
底 部 片	27	19	底部径 現器高	4.0 7.5	平底の基底部より、上外方向にのびる。	内外面ともにナゲ調整。輪積手法。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。	1

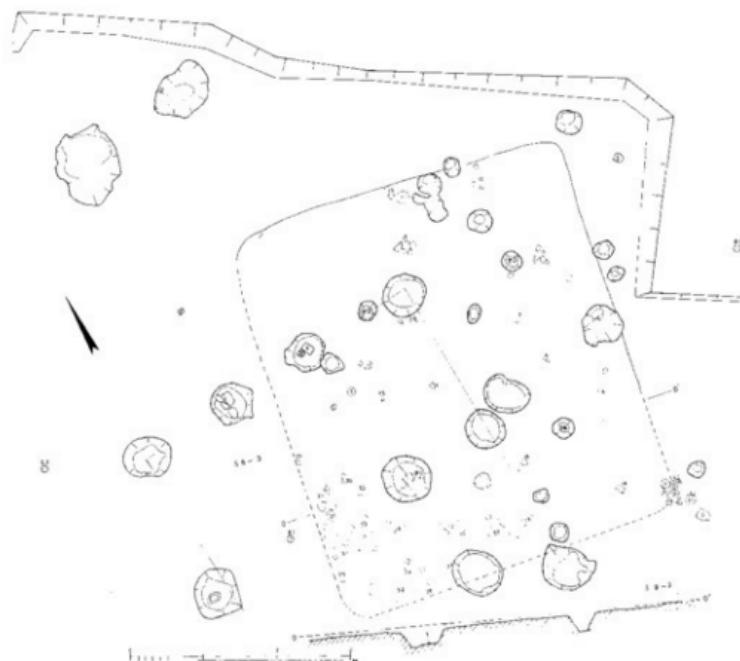
種類	認証No	出土番号	重量(g)	形態の特徴	技術の特徴	備考	数量
底部片	29	15	底部径 現器高	5.0 5.5	平底の基底部より上外方向に内彎気味にのびる。	内面指頭ナデ、外表面タシ状ヘラ工具の整形のあとヘラ研磨。	1
底部片	28	18	底部径 現器高	4.2 6.0	高台をなす底部より内彎気味に上外方向にのびる。	内面に剥離あり。外面はヘラ研磨。	焼成良好、胎土に0.3の粒子多量。
底部片	30	1502	底部径 現器高	4.5 12.5	平底の基底部より上外方向にのびる。	輪転子法で底部内面タシ状ヘラ工具整形。体部ヘラ削り。外表面タシ状ヘラ工具整形。	焼成良好、胎土に0.5以下の粒子多量。
脚部片と柱部	31 32	23 ?	32柱径 現器高	5.8 9.0	Na32とエンタシス形の柱で、Na31は脚基部よりハの字形に開き、2方向に円孔あり。	内着ともに外表面ヘラ研磨でココナデ調整もみられる。	焼成良好、胎土に0.5以下の粒子多量。
高台直形土器片	33	表接	底面径	9.7	平底の基底部に高台を貼り付けている。	内外面ナデ調整。	焼成良好、胎土密。
鉢形土器	34	1	口径 頸部径 器高	28.5 23.5 10.4	底部欠損、平底と推定する。内彎気味に上外方向にのび、頸部で直立したのち大きく外方向に屈曲する。口唇端面は円凹である。	内壁面と口唇部はナデ調整である。体部外面はタシ状ヘラ工具で調整。	焼成良好、胎土に0.3以下の粒子を含む。茶褐色。
瓶形土器	35	2	口径 把手部径 器高	30.0 39.7 22.4	丸底の底部より内彎しながら上外方向にのび、口辺部で外反する。口唇端面はするどい。器厚は底部より順次減厚されている。底部に5個の円孔を穿つ。	内外面ともにナデ調整である。把手は貼り付けである。把手位置より下位にスヌが付着する。	焼成良好、胎土密。
壺形土器	36	2	口径 頸部径 体部径 器高	11.3 7.0 16.0 15.8	丸底の底部より大きめに内彎して、やや扁平な球形の体部をつくる。口縁部は上外方向に直線状にのび、口唇端面は水平面である。	体部内面は指頭によるココナデ調整である。側面はナデ調整である。	焼成良好、胎土密。
碗形土器	37	30	口径 器高	8.4 4.5	丸底の底部より内彎気味に上外方向にのびたのち、やや垂直にたらあがる。口縁部で僅かに外反して、口唇端面は平面である。	全面ナデ調整であるが、口唇部外表面に指頭正痕が1周する。	焼成良好、胎土密。
碗形土器	38	33	口径 器高	12.0 7.4	丸底の底部より内彎気味に上外方向にのびたのち、口縁部はわずかに内彎する。口唇端面は円面である。	口縁部をのぞき、内面は底部より指頭ナデアゲによる整形である。外表面はナデ調整である。	焼成良好、胎土密。
壺形土器 口縁部	39	3	口径 頸部径 現器高	18.5 15.5 7.5	球形の体部が想定されるが、口縁部はくの字口縁で、口縁部の中央部にふくらみがある。口唇端面は水平な平面で内にぶい棱をなす。	体部内面指頭ナデアゲ整形。外表面はタシ状ヘラ工具による整形。口縁部は内外面とともにナデ調整で頸部内面はヘラ削りである。	焼成良好、胎土密。

種類	図版 No.	出土 番号	法 量cm	形 態の特徴	技 法の特徴	備 考	数量
変形土器 口縁部	40	3	口径 20.4 頸部径 14.5 現器高 3.5	頸部で僅かに直立したのち大きく外反して上外方向にのび、口唇部をオサエて外傾する平面をなし、両端に稜をつくる。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
変形土器 口縁部	41	3	口径 15.5 頸部径 11.2 現器高 3.5	頸部より上外方向にのび、口唇部は僅かに円頭で、内に稜をもつ。口縁部中央部が内外面にふくらみがある。	内外面ともにナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
変形土器 口縁部	42	23	口径 18.6 頸部径 14.3 現器高 5.5	くの字口縁で、口唇端面を水平な平面をつくり出し、口唇部内側に稜をつくる。	頸部に接合痕をのこす。頸部内裏面をヘラ切り。口縁部内外面ともにヨコナデ調整。	焼成良好、胎土密。 茶褐色。	1
高杯形 土器 口縁部	43	29	口径 18.5 有段部径 13.0 現器高 4.5	僅かな有段をなしたのち、上外方向にのびあがり、口辺部で僅かに外側に屈曲する。口唇端面は円頭。	内部と口唇端面は入念なヨコナデ調整。外表は有段直上にヨコナデがみられるが、タテ方向は入念なヘラ研磨である。	焼成良好、胎土密。 茶褐色。	1
無蓋高杯 環部	44	11	口径 15.6 有段部径 9.5 脚基部径 3.5 現器高 6.5	扁平な丸底より有段をなしたのち、内窓気味に上外方向にのび、口辺部ですぼまり、口唇端面は鈍い稜をなす。脚部は欠損する。	内外面ともにヨコナデ調整である。	焼成良好、胎土密。	1
高杯形 土器 脚部	45	25	脚基部径 3.5 脚裾高 1.5 脚部部径 12.8 器高 9.0	杯部欠久。脚基部と底部の接合面を残す。脚部は基部より下外方向にのび、脚部で大きく屈曲したのち、脚裾端面を凹くおさめる。中方向に円孔を穿つ。	脚内面はヘラ削り、脚根部はヘラ研磨、脚外部もヘラ研磨である。脚基部に粘土円板の押入がみられる。	焼成良好、胎土密。	1
蓋杯 (身)	46	6	口径 15.1 1.5 器高 5.2 受部径 16.4	たちあがりはごくわずかに内傾してのび、口唇端面は円面。受部は水平にのび続い。底部は欠損しているが、半底が扁平な丸底が推定される。	マキアゲ、ミズビキ整形。底部外面より内が回転ヘラ削り、他面は回転ナデ調整。	焼成良好、胎土密。	1

2号堅穴式住居址内の遺物出土状況(図11)

遺物番号	1	2	3	4	5	6	7	8
レベル(cm)	163.2	158.3	165.5	163.0	168.0	164.2	158.0	161.5
遺物の器種		須恵底部			Fe	土師口縁		
遺物番号	9	10	11	12	13	14	15	16
レベル(cm)	166.0	160.5	164.0	164.0	155.5	167.8	170.0	164.0
遺物の器種	七師坏	土師口縁	土師高坏	坏口縁		土師口縁	七師碗	
遺物番号	17	18	19	20	21	22	23	24
レベル(cm)	168.7	170.0	169.0	169.5	171.0	168.5	168.0	166.0
遺物の器種		土師口縁		土師口縁	土師碗			土師腹部

第11図 SB02遺構実測図



2号竪穴式住居跡実測図(第11図)に図示したごとく、遺物はほとんど主柱より壁面側に集中しており、特に主柱P<sub>1</sub>の角からP<sub>4</sub>にかけての壁面にあるものと、主柱P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の北壁面とに集中する。これらの出土状況は、地山面とはほとんど変わらないレベルで出土しており、断面図に示す層厚序であった。出土遺物とレベルについて表示すれば前ページ表のごとくである。

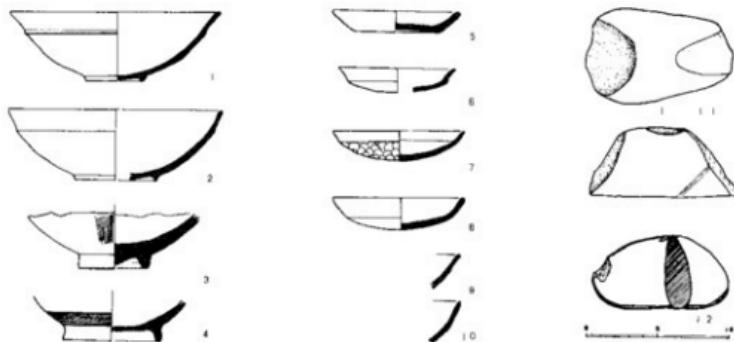
### (3) 2号竪穴式住居跡遺構

2号竪穴式住居跡は、前述の1号竪穴式住居跡の項で述べた如く僅かに北壁面と、東壁面での肩が検出されたことと、土器遺物の出土状況から破線で示す、長方形の隅丸竪穴式住居を推定した。

主柱は4本でP<sub>1</sub>の主柱は、掘立柱建物3号の柱穴により消滅している。P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の柱間間距離2.1mとP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>の柱間間距離2.4mは、掘立柱建物の2号柱穴P<sub>4</sub>と一致する。(黒点位置はそれを示す) 竪穴式住居の主軸は、北で東に10度をなす南北に長軸をもつ住居である。入口部が不明であるが、出土遺物からみて、東側面の南隅か南側面の東隅がもっとも優勢である。

遺物は主柱P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の中央位置より西側壁面とP<sub>1</sub>位置の西壁面及び、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の中央部の北壁面及びP<sub>3</sub>の東壁面の間で検出されているが、特にP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の中央位置の北壁面に集中した遺物があり床面に赤変した焼成が見られることからカマド位置と推定している。上器以外の遺物に鉄片の出土がありP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の主柱の中央位置であった。

第12図 S B 0 2 遺物実測図①



SB02の遺物①

種類	固形 No	出土 番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	数	
瓦器碗	1	5	口径 器高 底部径	15.0 4.8 3.0	高台位置より内壁気味に外向 に立ち上がり、口唇端直下に 棱縁をもつ。	ミズビキによる成形。高台は 助り付け高台で、ソウメン状 のものを貼付けてある。内部 底面にやや平行な暗文、体部 に放射状の暗文を施す。	焼成は軟弱で ある。胎土は 精選。 器表灰色、内 面黒色。	1
瓦器皿	2	8	口径 器高 底部径	15.3 5.0 6.0	底部より内壁しながら外向に 立ち上がり、口唇面でナデによる 凹面をなす。口唇端面は 丸くおさめる。	ミズビキによる成形。丸底の 底部と貼付け高台が断面で各 頂点をなす位置にある。内部 底面に放射状の交叉した暗文を 施す。	焼成は軟弱で ある。胎土は 精選。 器表灰色、内 面黒色。	1
高麗碗	3	1	底部	5.0	高台をもつ底盤で基底部より 上外方向にのびる。	高台は削り出しである。基底部 にハケ目調整がある。胎が かかる。	焼成良好、胎 土密。 系褐色で光沢 あり。	2
土師皿	5	4	口径 器高 底部径	9.0 1.5 6.0	平底がやや内向に突出してい る。口唇端面は円面。	底部へ切り。体節入念なヨ コナデ調整。	焼成良好、胎 土密。 帶赤茶褐色。	1
瓦器皿	6	8	口径 器高 底部径	8.3 1.7 3.0	僅かに平底をなし、基底部よ り上外方向にのび、口縁部で 立ちあがり外反する。口唇部 は円面。	口縁部リコリミ手法がみられ る。全面ヨコナデ調整。内面 に暗文あり。	焼成やや軟 胎土密。 胎土内白色、 表面黒灰色。	1
瓦器皿	7	4	口径 器高 底部径	9.3 2.2 丸底	丸底であるが僅かに安定する 平面をもつ。体部に僅かな稜 をなす。口唇端面は円面。	口縁部と内面は人念なヨコナ デ調整で内部にヘラによる暗 文あり。基底部より底部にかけ て指頭圧痕が残る。	焼成良好、胎 土密。 胎土内白色、 表面黒灰色。	1
瓦器皿	8	6	口径 器高 底部径	9.4 2.4 丸底	丸底の中央部がやや尖る。 上外方向にのびたのち、口縁 部で僅かに立ちあがり、かす かに稜をもつ。	全面ナデ調整。 No.7～8はNo.1～2と同技法 による瓦器。	焼成良好、胎 土密。 胎土内白色、 内面黒色、表 面黒灰色。	1
石器	11	9	長径	10.5	自然理を利用しておおり、二面 ないし一面に打模がある。	12の遺物は周囲の棱面を研磨 している。	砂岩。	2
	12	10	短径	9.5 5.0 5.0				

## (4) SB02の遺物瓦器の様相

SB02に伴う遺物は、その他の造構の遺物と異なり、遺物は瓦器を中心とするもので瓦器の碗2個、瓦器皿5個体を検出している。1と2の器形は底部から口縁部にかけて丸味もって続き、口縁部の横撫が目立ち、1では僅かに口縁部が外反気味である。暗文は外面にはまったく施されていない。皿6は2段ナデで口縁部が外反するが、7～10は2段ナデであるが口縁部はほとんど外反しない。内底部に螺旋状の暗文が施されている。7の皿底部には指頭圧痕が残り、他の皿底部と異なる。本市における瓦器の出土例は、古照遺跡、福音寺遺跡、追後姫塚遺跡にその出土例がある程度で、瓦器編年をなし得る資料に乏しい。いま高槻市上牧遺跡の報告書による編年に従えばIII期の1か2の時期が順当であり、13世紀中葉の時期になる。

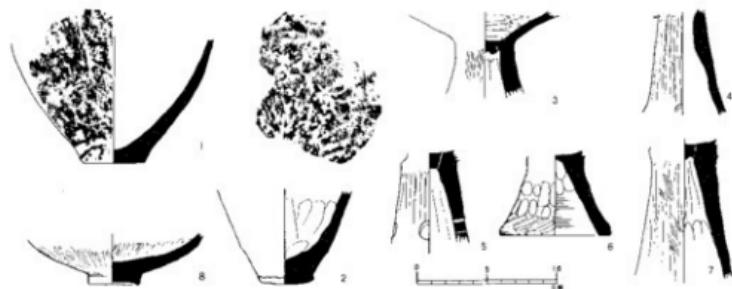
SB02 の遺物②

種類	回収No	出土番号	法 量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	部類	
壺形土器	1	12	底部径 現器高	4.4 9.0	平底の基底部より内壁気味に上外方向にのびる。	輪積手法。底部内面へラ削り、体部内面及び外表面はクシ状ヘラ工具の成形による。外表面はタシ状ヘラ工具成形後ナデ調整。	胎土に0.3以下の砂混入、焼成良好。	1
壺形土器	2	7	底部径 現器高	3.7 6.8	平底の基底部より内壁気味に上外方向にのびる。	平底の基底部周辺に調整によるかえりがみられる。底部内面から体部にかけて指頭によるナデ成形。外表面はナデ調整。	焼成良好、胎土密。茶褐色	1
高坏形 土器片	3	14	脚基部 現器高	4.3 6.0	坏部の底部と脚基部は共有しており、基底部より外反気味に上外方向にのびる。脚部は基部より下外方向に開く。	坏部内面はヘラ研磨、坏部及び脚部外表面はクシ状ヘラ工具による成形。脚部内面はヘラ削り成形。脚部中央部は円板粘土の貼り付けである。	焼成良好、胎土密。茶褐色。	1
高坏形 土器 脚部	4	15	脚基部 現器高	3.2 7.5	脚基部より下外方向にのびる。円孔が1対穿たれる。	脚部内面に指頭ナデ調整による凹凸あり。外表面はヘラ研磨である。	焼成良好、胎土密。茶褐色。	1
高坏形 土器 脚部	5	13	脚基部 現器高	4.0 7.0	脚基部より下外方向にのびる。円孔が4方向に穿たれる。	脚内面にしぼり目がある。外表面はヘラ研磨。脚基部外端部に切痕部の接着面が残る。基部内部粘土板を詰めている。	焼成良好、胎土密。茶褐色。	1
高坏形 土器 脚部	6	22	脚基部 脚部 現器高	4.0 8.0 5.6	脚基部より下外方向にのびる。脚端部は水平な平面。	脚部基部内面に指頭痕、中央以外はヨコナゲ。外表面、脚部に叩き目、中央部はヘラ削り成形。	胎土に粒子0.3を多量に含む。焼成良好。	1
高坏形 土器 脚部	7	1	脚基部 現器高	4.5 10.0	脚基部より下外方向にのびる。	脚部内面はシボリ目と指頭ナデ成形。外表面は斜方向のクシ状ヘラ工具成形後ヘラ研磨。脚基部中央部に円板状の粘土を詰める。	胎土密で焼成良好。	1
底 部	8	もれ もれ	底部径 現器高	3.7 3.5	底部はやや上げ底である。基底部より大きく外折したのち僅かずつ上方にたちあがる。	外表面ともに入念なヘラ研磨を施している。	胎土密で焼成良好。一部に黒焦があり。	1

## (5) 第13図の遺物の様相

第13図の上器は、第12図に示す土器とは、完全に時期的な相違を見る遺物である。第12図の遺物をベースとする遺構に混入した土器と理解すべきであろう。1~8の土器の焼成はよい、全体的に胎土厚のある一群の器物である。高坏の脚基部には、坏部底部に詰められた粘土板がみられる。2の底部には叩き整形による粘土のかえりがみられ、内部は粗雑な指頭ナデ整形である。

第13図 SB 0 2 遺物実測図②

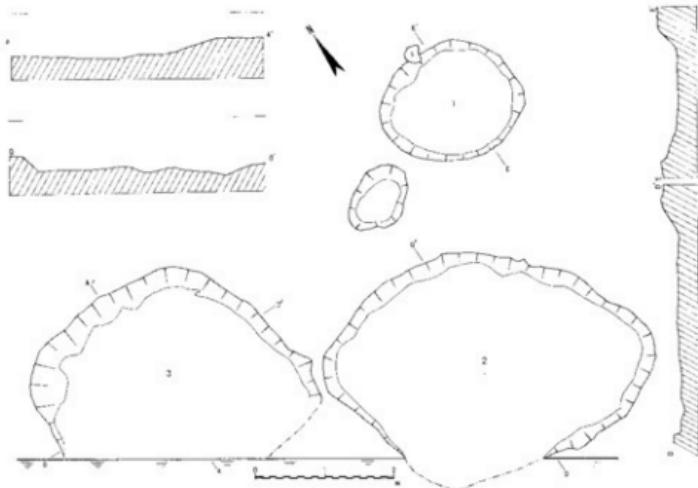


(6) 上塙状遺構の遺構と遺物 (第14図)

遺構は浅い円形の土壇で1つは直径  $150 \times 190$  cm と  $100$  cm の円形である。1つは内部に掌大の自然石と須恵器の口縁部と十師器片が中央部より出土し、南壁面位置でNo. 6の須恵器の杯を出土した。いま1つからは須恵器の杯No. 1とその下部より、土師器の口縁部No. 2 中央部位置から十師器の口縁部(復元可能)を出土した。

これらの遺構及び遺物の出土状況からみて土塙墓とみることができよう。

第14図 SK 1 ~ 3 遺構実測図



土 壌 状 態 遺 構	遺物番号	1	2	3	4	5	6
出土レベル		155.7	161.2	159.0	158.0	162.0	157.5
器種	須恵坏	土師片	土師口縁	土師口縁	土師器片	須恵坏	

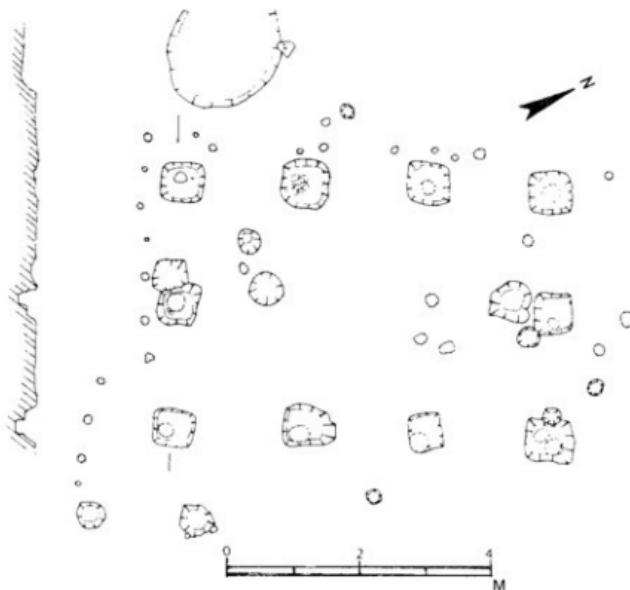
#### 4 挖立柱建物遺構

常寧地区（B区）において検出された掘立柱建物遺構は4棟と、C区で検出された1棟が完掘されたが、この外に一部の柱穴を検出したものを含めれば、さらに数棟の建物が追加されよう。いまこれらの建物(SB)をそれぞれ検出された順にSB1～SB5としてとり扱う。

##### （1）SB1の遺構 実測図（第15図）

SB1は、建物の主軸を北側の梁間隅柱で東30度を取る南北棟の建物である。建物の規模は、梁間2間、桁行間3間の高床式建物である。梁間2間はいずれも1間の柱間を195cmとする等間である。これに対して桁行間は共に中央の1間を190cmとし、他の左右の間は梁間

第15図 SB1遺構実測図

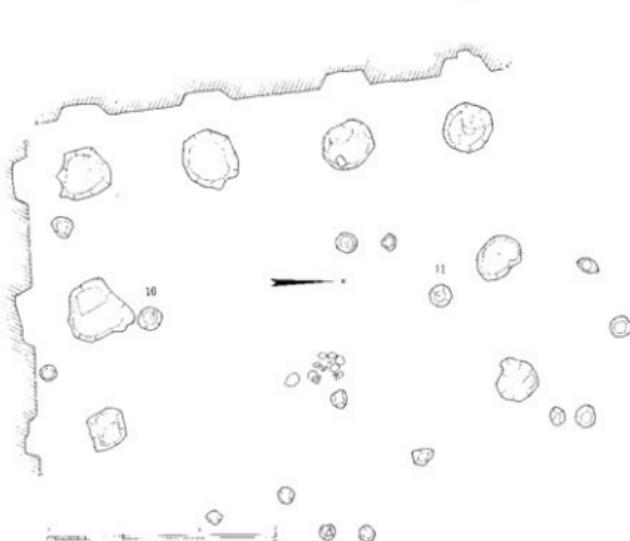


と同様に 195 cm を取る。このことから梁間の全長 390 cm、桁行間全長 580 cm となり、全面積は  $22.62 \text{ m}^2$  がえられる。

柱穴は何れも 50~70 cm の方形の掘り方をもち、この掘り方の中央位置乃至は、それぞれの掘り方内に柱位置がみられる。この柱位置は断面図に示すごとく、柱の抜取穴として明確に掘り込みが残り、何れも地山の砂礫層に達している。掘り方の深さは一定しており 20~30 cm あり、柱の抜取穴は 5~15 cm がみられた。ただ 1 つ桁行間の平柱の柱穴に礎石をもつものがみられたのと、梁間の北側で東隅の角柱の抜取穴が 2 つ検出されたが角柱の位置は外側に穿たれた抜取穴である。また南側の梁間にみられる掘り方の重複がみられるが柱位置はみられなかった。これらの柱間からみて南北に棟をなす切妻の建物棟であり、梁間の第 2 の柱は棟持柱であろう。

建物内の 2 つの柱穴が検出されていることと、桁行間の中央位置にみられる柱穴と、北側の東隅にみられる柱穴があり、前者は床下の東柱であり、後者の 3 つの柱穴は梯子の位置を示すものと推定される。梯子位置が 2 か所以上に見られることから、高床式の住居とみるとがきよう。またやや不規則ではあるが、西側の桁行側と南側の梁間にみられる浅い枕穴は、襠れ縁を支える支柱列と推測される。

第16図 S B 2 造構実測図

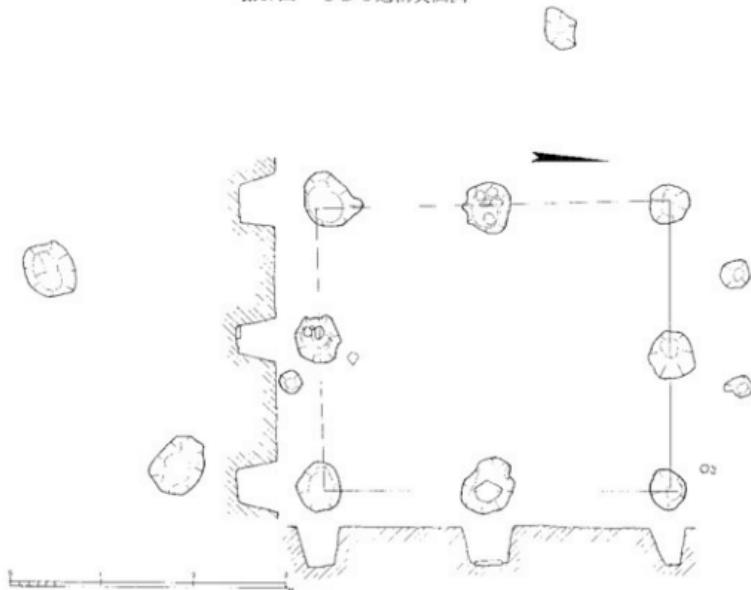


(2) SB 2 の造構 実測図 (第16図)

SB 2 号建物は、前述の堅穴式 2 号住居跡と重複している。建物の規模は、梁間 2 間桁行間 3 間で SB 1 の建物と同間である。建物の主軸は北側の西角の柱位置で西に 5 度ふれを取る南北棟の建物である。柱間の心心間距離は何れも 175 cm の等間となっているが、ただ東側の桁行間では、中央位に素掘りの柱穴をもつ 2 間となり、西側の桁行間にみられる掘り方と柱間に違いがみられる。

柱穴の掘り方は直径 50~80 cm の不規則な円形の掘り方となっているが、南側面の梁間での東角柱での掘方は 45×50 cm の方形な柱穴となっている。柱の抜取穴は 6 か所に見られることから、両梁間の抜取穴に合わせて柱位置を符合した場合、西側の桁行間を基線として、北側の梁間は北へ 5 度ふれ、南側の梁間では北へ 1.5 度ふれた柱位置が考えられる。この結果が桁行間に見られた西側桁行の 5.25 m 対する、東側桁行の 5.5 m と 25 cm の差がみられる。東側の桁間は 2 間で 3 m と 2.5 m 広く、特に 3 m の最大間取りの前方 1.8 m 位置に幅 0.5 m の 2 つの柱穴が建物に向かって傾斜して穿たれている。この柱穴を建物への階段と推定すれば傾斜角を 30 度にすれば、1 m の床高が得られる。いまビット 10 と 11 を高床の東柱

第17図 SB 3 造構実測図

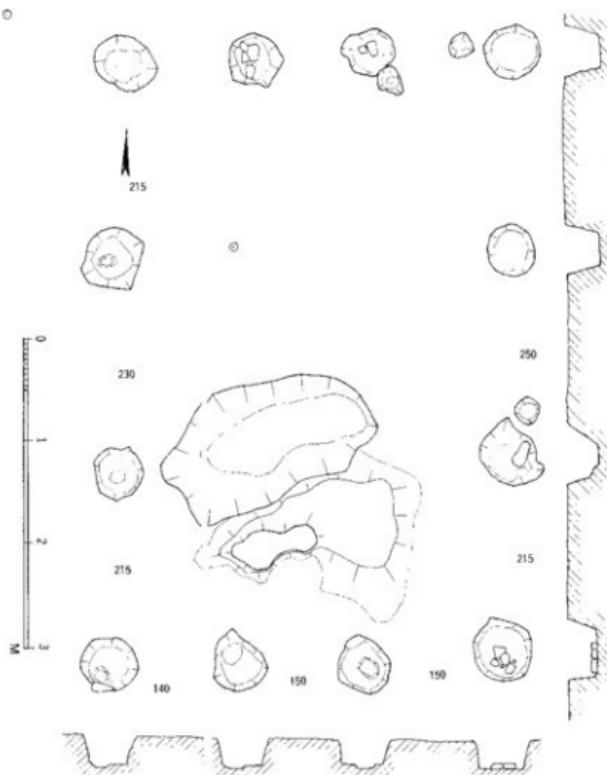


を考えることもできるが、P<sub>11</sub>は前述の竪穴式住居跡と重複する柱穴である。だが 10 と 11 はよく対応しており高床の束柱とみたい。

### (3) SB 3 の遺構 実測図 (第17図)

SB 3 の主軸方位は磁北を取る梁間 2 間、桁行間 2 間の据立柱建物である。梁間の柱間間距離は共に 310 cm が求められるが、北側の梁間では共に柱間間距離は 155 cm の等間が得られる。これに対して南側の梁間は、中央の平柱の抜取穴からみれば、150 cm と 160 cm と僅かに柱位置が異なっている。桁行全長 380 cm が共にみられ、しかも両側の柱間間距離は 190 cm 等間となっている。いま桁行と梁間全長からみて、長辺をなす側を桁行とみたが、柱穴の

第18図 SB 4 遺構実測図

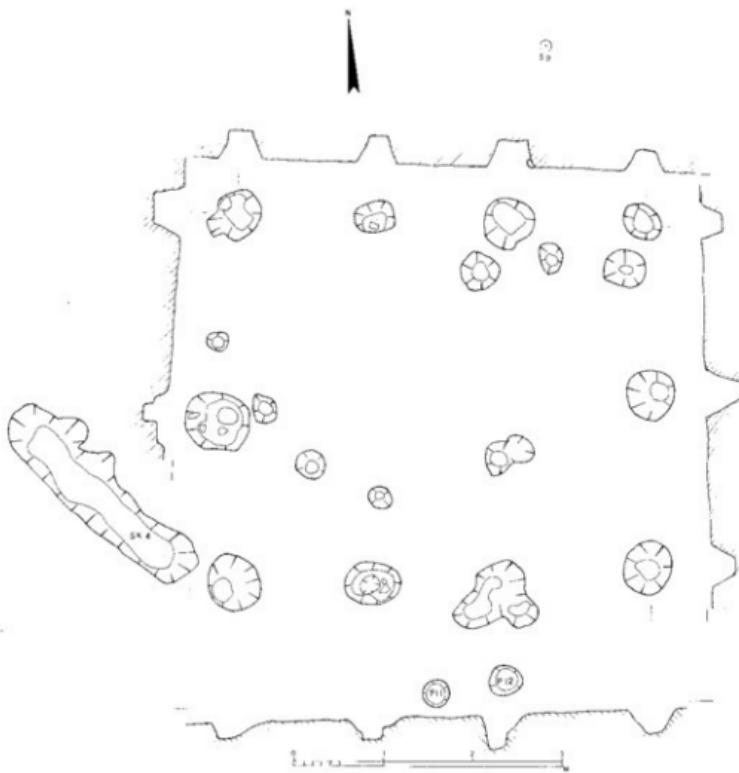


掘り方と柱位置の礎石をもつ柱穴からみれば、逆に 190 cm 等間の側が梁間とみられる東西棟の建物の可能性が強い。いいかえれば礎石を配する柱穴が棟持柱の位置として考えられることと、さらに北側の建物外に穿たれた 2 つの柱穴は梯子の位置を示すとみるからである。この  $P_9$  と  $P_{10}$  を梯子（階段）とみると高床式倉庫が考えられ、古照の高床式建物の入口と符合する平屋入口が考えられる。

#### （4）SB 4 の遺構 実測図（第18図）

SB 4 は主軸方位を磁北に取る梁間 3 間の全長 440 cm、桁行全長 660 cm の 3 間である。全体的に南側梁間を基線にして 2 度東にふれる建物である。柱間の心心間距離は、礎石や抜取

第19図 SB 5 遺構実測図



穴からして、梁間では何れも東隅の第1柱からは150cm、第2柱から150cm、第3柱から140cmの等間となっている。桁行間では南隅の第1柱から215cm、第2柱から230cm、第3柱から215cmと対応する等間となっている。建物の棟方向は南北の棟が推定され、しかも屋根は入母屋造りが想定される平床式の建物である。建物内の床面でやや掘り凹められた場所があり、この凹みより瓦器や磁器の遺物と須恵器の破片等が出土している。

#### (5) SB 5 の造構 実測図 (第19図)

SB 5 造構は、棟方向を東西に取る建物造構である。建物の主軸方位は北6度東に僅かにふれている。建物の規模は梁間2間で全長400cm、桁行間3間の全長475cmである。建物の床面積は約19m<sup>2</sup>が求められる。柱穴の掘方は直径40~80cmとやや不同一で、しかも掘り方は割合に粗雑である。特に乾位での掘り方は完全に当初の掘り方位置と異なり、素掘の追加がみられる。また柱間の心心間距離も梁間での東側2間を除き不揃いである。

ちなみに桁行間の南側と北側での様相は、東角柱第1柱から第2柱間は180cmに対し150cm、第2柱と第3柱間は135cm対150cm、第3柱と第4柱間は160cm対175cmとなっている。梁間では、西側での柱間間距離は190cmと210cmとやや不等間である。

また階段として想定されるP<sub>11</sub>とP<sub>12</sub>の小柱穴がある。この小柱穴を入口部の階段とすれば、高床式建物としての構築が考えられるが、高床式建物とすれば、床下の束柱と推定される柱穴の各位置が、かなり不規則であり、P<sub>11</sub>とP<sub>12</sub>を梯子の柱穴とみるには困難ではある。

今ここにSB 5 の建物造構の周辺部において、数多くの柱穴群が検出されている。これらの柱穴群にそれぞれ建物造構としての考察をこころみよう。

#### 中心杭No. 59付近の掘立柱建物遺構 実測図 (第20図)

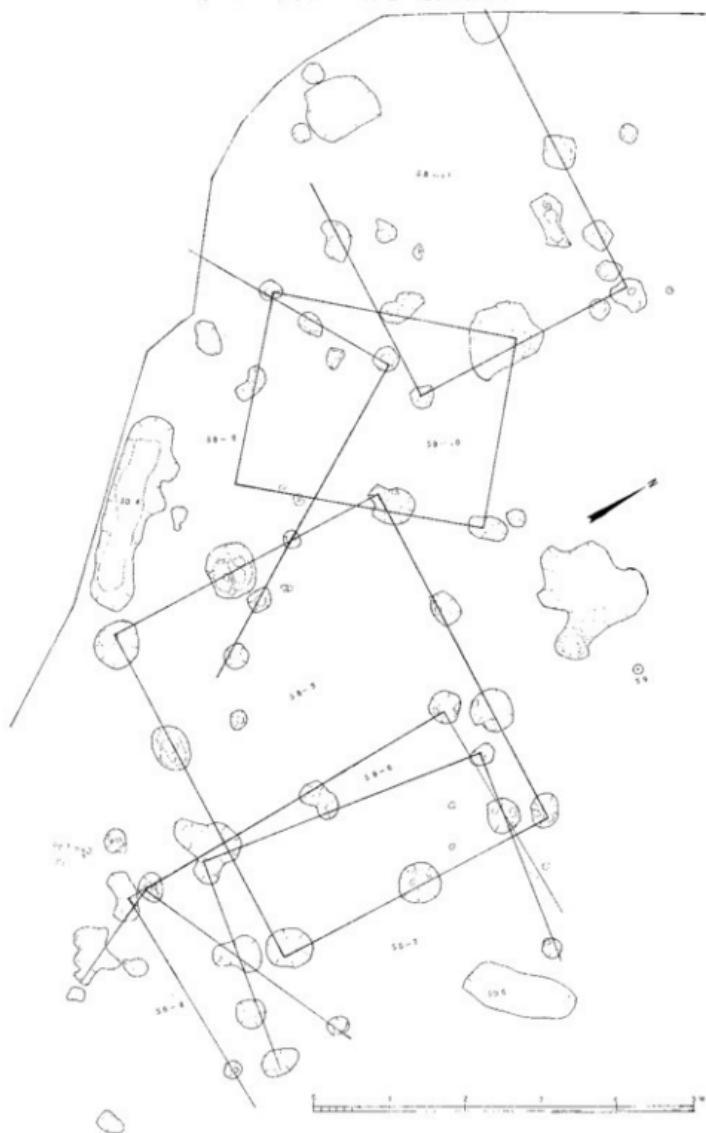
#### (6) P<sub>12</sub>を主柱とする掘立柱建物 (SB 8) の造構

図に示すように、P<sub>12</sub>を角柱とするSB-8造構が、柱穴の全容は不明ではあるが推定される。桁行間である柱穴の心心間距離は、140cmと170cmが計測される。また梁間と推定される側では、角柱P<sub>12</sub>より1間120cm前後が得られる。建物造構とすれば東西棟の建物で、建物の主軸方位は北25度西にある。

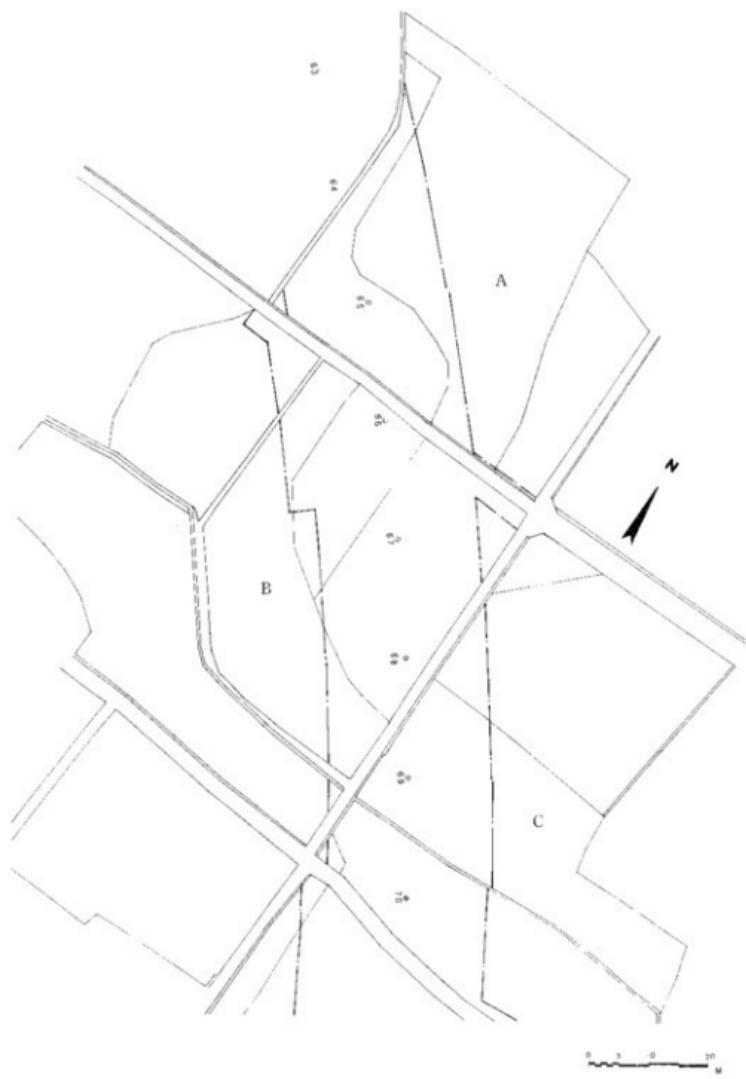
#### (7) 掘立柱建物 (SB 6・7) の造構

SB-6・7建物造構もSB-8造構同様に、各柱列の心心距離は異なり、また相対する柱位置もすべて不等間である。ただ柱穴は何れも確実に掘り込まれており安定はしている。

第20図 中心杭No59付近の造構実測図



第21図 北久米遺跡乃万の裏地区発掘位置図



#### (8) 挖立柱建物 (SB9・10) の遺構

SB9とSB10は共にSB5の西側梁間周辺部で検出された柱穴群より推定される建物遺構群である。前述の建物遺構と同様に各柱列の心心間距離は異なり、また欠陥する柱穴もあり不確実な建物推定である。

#### (9) 挖立柱建物 (SB11) の遺構

SB11の建物遺構は、中心杭No.58に南接して検出された挖立柱建物遺構である。遺構は、東側梁間面と、桁行間2間を検出する遺構である。建物の主軸方位は長軸をEに取る東西棟の建物である。東側梁間面での測定では全長310cmで等間の柱間間距離となっている。

桁行面での柱間間の心心距離は、北側面では200cmの等間であるが、南側面では230cmとなっている。いま南側面での第3柱穴が検出されておらず不明であるが、SB-11遺構は挖立柱建物遺構である。

### III 乃万の裏地区における遺構と遺物

乃万の裏地区（No.66～70の中心杭）の範囲内で検出された遺構と遺物である。

遺構は堅穴式住居1基と掘立柱建物跡と推定される柱穴を検出しているが、完全に1棟の柱穴を検出できたものではなく、何れも掘立柱建物の一部を検出したにとどまった。この他に上墻状の遺構数基を検出はしているものの、後世に数度の土地改良が実施されており、特に水田耕作地としての熟成化によって、上層部の削平がひどく僅かな遺構を遺存しているにすぎない。このため遺構内の遺物もまた少量であり、しかも土器は細かく碎かれ実測不可能な状態のものが多い。

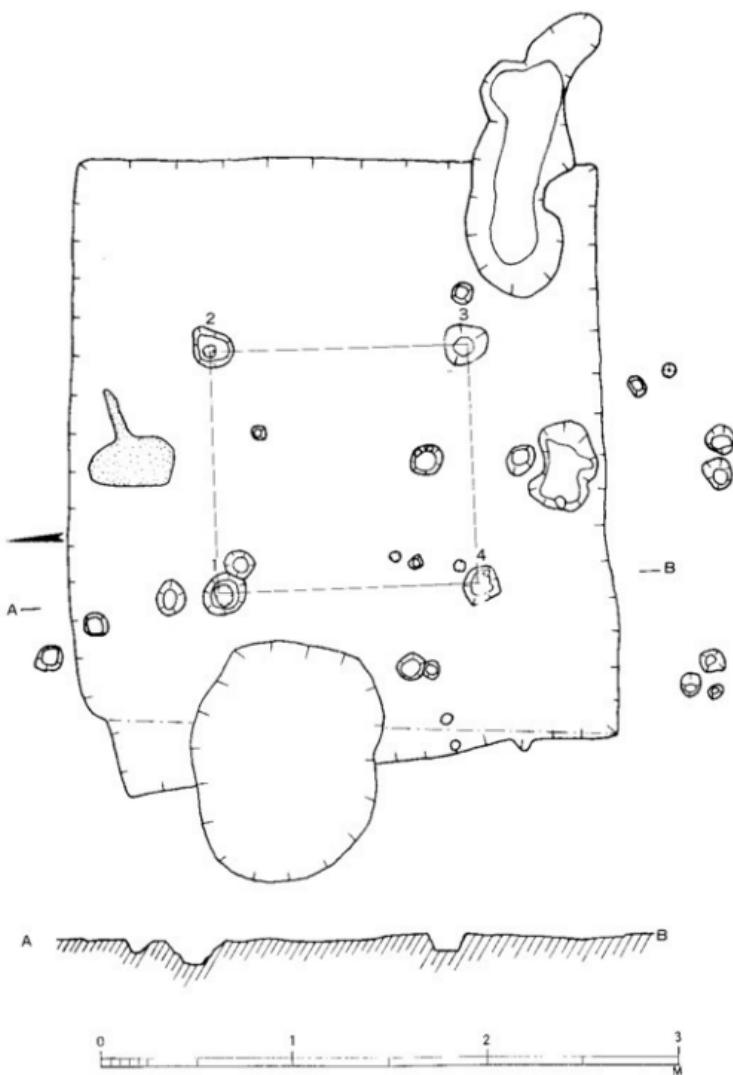
#### 1 堅穴式住居址と遺物

##### (1) 堅穴式住居遺構 （第22図）

住居の平面プランは、東西の一辺6m、南北の一辺5.4mで東西に主軸をとる堅穴式住居である。主柱は4本で、東西間の柱間間距離は2.5m、南北での柱間間距離は2.65mである。

住居の平面プランでは、明らかに東西方向において40cmの長径となっている。この壁面の径に対して、柱間間距離では逆に南北方向の柱穴位置が何れも15cmと僅かに長い柱間の距離となっている。とはいっても床面と主柱との僅かな差は見られるが、柱位置と床面の方形か

第22図 乃万の裏地区 S B 0 1 遺構実測図



らして四注式（寄棟）の屋根が構築されたものと推定される。

また床面は平坦な東壁面に僅かな傾斜をもつ造りとなっており、北側の壁面中央位置に（正しくは柱間の中央位置）床面より 3~4 cm 赤色の粘土と灰及び木炭の細片が多量に集中して検出されカマド位置と推定された。西壁面と東壁面の南隅に、床面より 5~10 cm の土壤状の凹みが検出された。東壁面では土壤内部に拳大の櫻が充填されていた。土壤の底部と床面との差は 7 cm の掘り込みであり、床面での傾斜は西壁面位置に対して、東壁面位置で 11 cm 低くなっている。ちなみに北側壁面と南側壁面との差はほとんど見られないが、南側壁面にはやや低い床面があった。

西側壁面の土壤は、住居の床面より 7 cm の掘り方となっておりしかも無遺物層であり、堅穴式住居より後の掘り込みである。西側壁面は地山と床面との差はほとんどみられず、僅かに汚染された色調を呈するものであり、床面実測の正しい位置は北側壁面のアールが示す位置から一点鎖線を引く位置と断定される。

## （2） 窃穴式住居にともなう遺物（第23図）

本遺構より出土した遺物は、前述したごとく、そのほとんどが細分化されており、計測はおろか復元されるものとしては少なく 1 個であった。

1 は鉢形土器で口径 16 cm、器高 15 cm の壺形土器である。底部は丸底で大きく外彌して立ち上がり、肩部で胸部の最大径 16.4 cm と肩張りを取ったのち、内傾していくの字状の口縁部をつくりだしている。胎土はよく精製されている。色調は二次焼成をうけて赤く、器壁の剥離がはげしい。

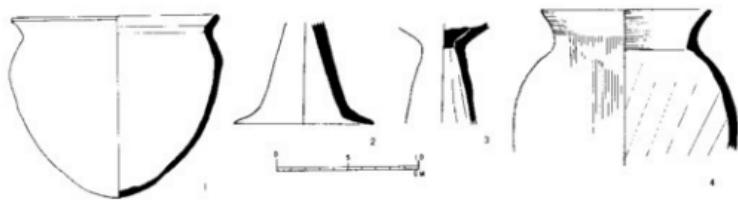
出土位置は焼土を検出した竈位置からである。その外に主柱の柱穴 No.1 より、上器片 1 個が柱穴の底部から出土している。

4 は壺形土器で口径 12 cm、体部径 16 cm、頸部 10 cm、口縁部高 3 cm、器高推定高 15 cm 前後の土器で、内壁面はヘラ切整形で表面は縱方向に櫛状工具で整形しているが、口縁部は内外面ともに横ナデ調整である。表面にわずかに媒裡が付着している。2 と 3 は高杯形土器の脚部破損遺物である。2 は脚部径 10 cm、脚高 0.3 cm、脚基部 3 cm、現器高 7 cm の遺物である。脚柱部は柱形による成形で、表面と脚部はカデ整形となっている。3 は脚基部径 3 cm で中空の脚部は脚部への開きの少ない脚部であろう。脚部が欠損していて詳細は不明である。脚内壁面はヘラ切りが認められ、脚基部中央には粘土板が詰められている。

### (3) 床面の排水と入り

住居の主柱位置は、床面位置からみて、東側壁で2m、西側壁で1mと倍の側壁面距離をもつ柱位置にあり、從って入口も西に片寄った取り付けとなっている。東西の南側壁面での傾斜が大きくなりされることから、明らかに排水を意図した東側壁面での暗渠排水であり、しかも家屋外に導く状態にあることに特に注意したい。

第23図 S B 0 1 遺物実測図



## 2 掘立柱建物遺構と遺物

### (1) 掘立柱建物遺構



掘立柱建物は乃万地区B区で柱穴を数基検出したが、何れも1棟としての完掘をみるには至らなかった。B区の西端に現在南北に流れる灌漑用水路に沿って、旧の灌漑用水道遺構が6m離れた位置に現在と同様な南北に流れる溝状遺構が検出された。この両用水路の間から掘立柱建物遺構の柱穴が検出されており、後世の水路工事と耕地改良による遺構破壊があったものと推定される。水路の流れは何れも北より南へ流路を取るものであった。

当地区内での遺構および遺物は少なく、また後世における熟田化のための地下工事が見られ、地山面の削平がはげしく徒労に終わった発掘区である。だが唯1点の完形の土師器の甕形土器が単独に、しかも田の畦の部分より出土をみた。このことにより現時点の畦の位置がかつての遺構面であったことを物語る遺物といえよう。

### (2) 甕形土器 (第23図No.5)

器高17cm、口径10.2cmの土器で、胴部の最大径は器高の $\frac{1}{2}$ 以下にあり、一見壺形土器

とも思われる器形でやや口径より胴張りが大きくなっている。底部には成形後に貼り付けられた高台付きの底部となっている。頸部や口縁部でのしづりや外輪の貧弱なつくりとなっていいる。

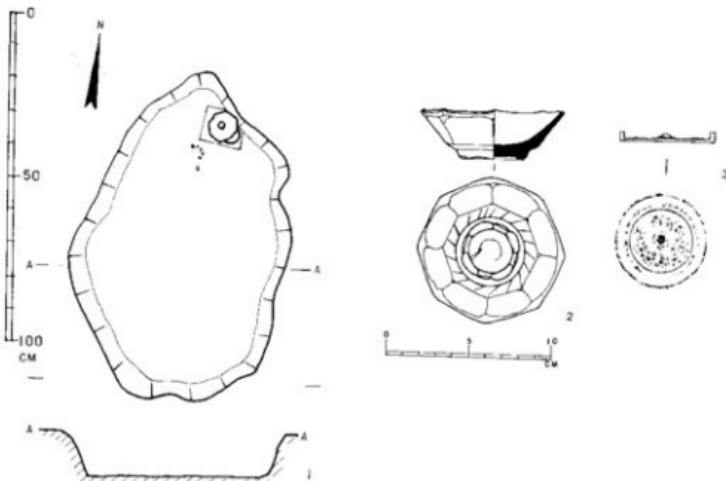
胎土はよく精製されており、焼成も良好である。色調は黄土色である。

### 3 土壇墓遺構

#### (1) 土壇墓遺構

SK 遺構は主軸方位を磁北に取る長径 98 cm、短径 65 cm の楕円形の掘り方である。遺構は耕作土 30 cm を排除した、地山層（洪積粘土層）を 25.2 cm 掘り込む浅い掘り方となつてゐる。歯牙 6 本を検出しており、北枕とする頭部位置が推定される。人骨の他部分の遺体は検出されず、すでに還元されていた。副葬品が掘り方の法面に白磁とその下部に、青銅の和鏡と共に木箱に納めて埋葬したと推定される。植物遺体（杉材の柵目）の板土より出土している。

第24図 SK 遺構と出土遺物実測図



## (2) 上墳墓(SK)の遺物出土状況

SK 1より出土した遺物は2点あり、遺物は銅鏡と白磁の杯である。出土状況は鏡の上部に相重ねられた状態でしかも底部に植物遺体の腐蝕した遺物が認められた点から、遺物は共に容器の内に納められて副葬されたと推測される。また埋葬位置は図に示す位置にあり被葬者が頭部位置を北に取ったものとすれば、副葬品は左手位置に置かれたことになる。

## (3) 土墳墓(SK)の遺物 実測図(第24図)

### イ 銅 鏡

銅鏡は白磁の下部より出土し、鏡面を下にして副葬されていた。鏡径5.4cmの半縁である。背面の中央部には紐があり、紐孔内に僅かに絹糸の残欠がみられた。文様帶は2つに区画されており、内区文様は5弁の花弁をモチーフした文様の反転文が施文されている。外区文様帶には、同規模の花弁1弁を列点文様に配置した梅花鏡である。

### ロ 白 磁

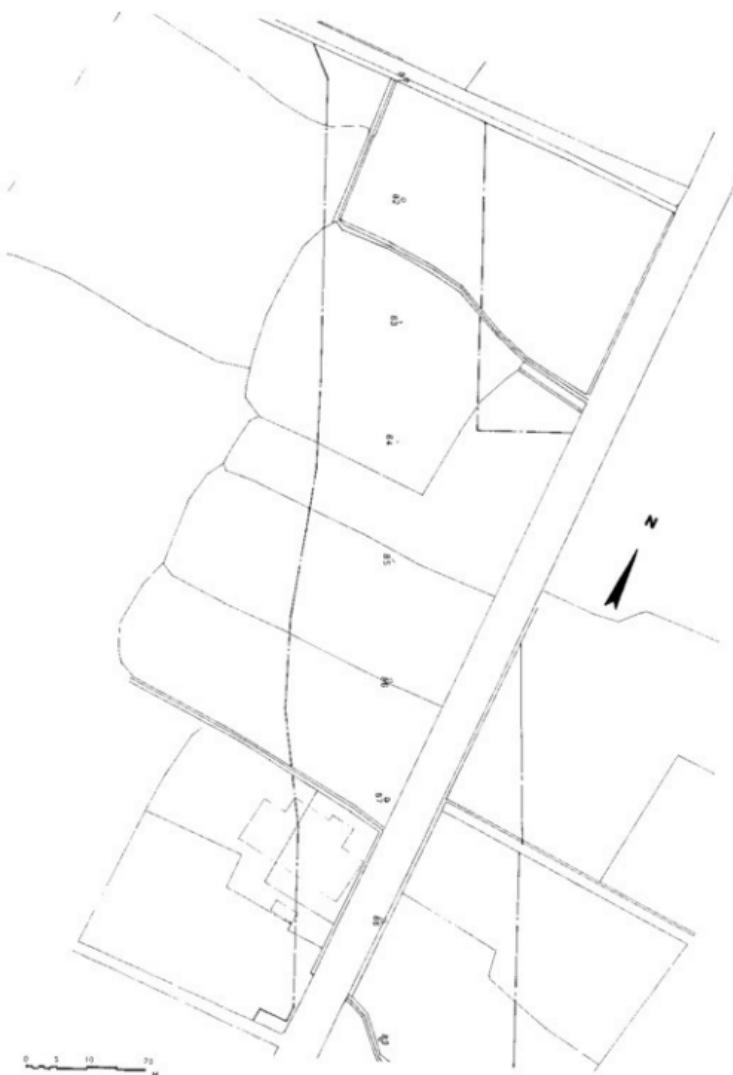
白磁は銅鏡の上部で検出され、高台を上にして伏せる形で出土した。同器の内面には朱に近い赤色の顔料が僅かに残っていた。器形は口径8.7cm、器高3.0cm、底部4.0cmのもので、口縁部は8角形にカットした口縁で、外縁部には面取りによる弧状面を残している。器腹面も大きく亀甲文様の面取りが施されている。本器は李朝時代の面取杯と推定されるもので、時代的には室町中期に充当させられよう。本器により土墳墓の時期も決定される。この遺物の製作年より下る時期で少なくとも室町時代中期以後であり、室町時代末葉期とされよう。

## 4 乃万の裏地区における小考

乃万の裏地区においても、他の発掘区と同様に細分化してA・B・C区とした。A区における遺構は、1条の東西に貫流する溝状遺構と、溝に平行して1列に打ち並べられた杭木(径約3cm)列と十箇状遺構2基のみであり、検出された遺物も細片化された土師器片であり、復元はもとより実測不可能な遺物であった。

B区及びC区もまた星ノ岡遺跡の北下地区と同様に、農地の改良工事による地山面の削平

第25図 農免地区発掘位置図



が行われており、僅かに遺構の基底部分を残すのみの残欠遺構であった。検出された遺構は、B区では竪穴式住居跡1基と土壙墓1基である。C区は掘立柱建物遺構に発展する柱穴を数個検出したにとどまった。

本地区での特記すべき遺構は、SB01 遺構の北方2.7mにて検出された土壙墓である。遺物は本文中に記述するところの銅鏡と八面に口縁部をカットした白磁であろう。磁器は面取环であり、時期的には室町中期にあたる李朝時代の姚物である。このことから土壙墓の形成時期は早くとも室町中期以後と推測される遺構である。被葬者は鏡と白磁が箱に納めて副葬され、しかも磁器の内面に紅が僅かに検出されていることで女性と見られる。また土壙墓の規模からみて少女か、成人に近い女性とみなされるが不明である。

さらに土壙墓と竪穴式住居跡との関係は今一つ明確に比定出来ないが、土壙墓より先行する遺構であることは明白であるが、出土遺物も極めて少なく困難であるが、平安中期かそれより僅かに時期的に早まる可能性がみられる遺構であろう。古老の語るところでは、東側に開園する大護幼稚園造成時に多数の墓が検出されたとのことであり、この墓地の端部に検出された土壙墓遺構と見るべきであろう。

## IV 農免地区における遺構と遺物

農免地区は、発掘予定位置図(第25図)における、中心杭No.83~86の区間を調査実施範囲に選び実施した。当地域の発掘状況は(国版第108図)にみられるように、全面的に単調な発掘調査となつた。遺構としては2条の小規模な溝状遺構であり、この溝状遺構と平坦な地表面との間に上器及び砥石の出土があったが、これらの遺物の外には住居跡も検出されなかつた。

検出された上器(上飾器)及び砥石類は何れも一ヶ所に集中しており、耕作地に対する祭祀的行事で放置された遺物とすることができる。耕作地における水口(みなくち)に対する農耕祭祀と推察されるが、この検出された遺物に対して生産遺構としての水田跡を確實に検出することが出来ず調査技術の未熟を悲しむ一人である。

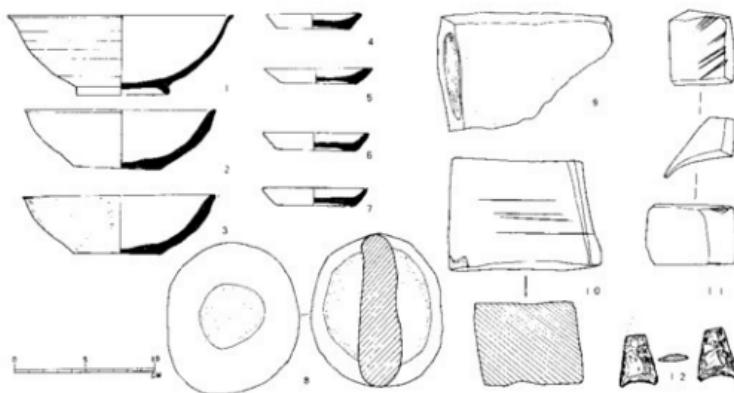
この生産遺構の検出に困難を生じた一大要因は、中心杭85~87地点は特に湿地帯であるために、発掘の手作業に対して、発掘者の自重による遺構面への擾乱作用とがあいまつたことに帰一する。

## 農免地区における出土遺物

種類	番号 西京出土	法量cm	形態の特徴	技法の特徴	備考	重量	
碗形土器	1	口径 器高 底部径	15.2 5.8 5.5	平底の基底部より内壁気味に上外方向にのび、口辺部で外方に屈曲し口唇端面は円面である。底部の基底部に高台を断面方形でもつ。	ミズビキ、マキアゲによる成形。底部に高台を貼り付ける。内面は回転ナデ調整。外表面はナデ痕によるにぶい棱をもつ。	焼成やや軟。胎土は密である。茶褐色。	1
碗形土器	2	口径 器高 底部径	13.7 4.2 6.2	平底が基底部より内壁気味に上外方向にのび、口辺部ですこぼまり僅かに外反する。口唇端面は円面をなす。	内面は回転ナデ調整、外表面はナデ調整であるが粗雑である。底部にヘラ削りがみられる。底面内面は回転ナデ痕あり。	焼成良好。胎土は密。黄褐色。	1
碗形土器	3	口径 器高 底部径	13.7 5.0 5.2	平底の基底部より内壁気味に上外方向にのび、口辺部外表面にくぼみをつくる。	全面回転ナデ調整で、底部内面に回転ナデ痕を残し、外表面にはにぶい棱をなす。	焼成良好。胎土は密。黄褐色。	1
皿形土器	4	口径 器高 底部径	6.8 1.0 5.2	平底の底部の中央部が内に彎入している。体部は基底部より上外方向に屈かくのび、口唇端面は丸い。	内外両回転ナデ調整である。底部ヘラ削り。	焼成良好。胎土は密。赤褐色。	1
皿形土器	5	口径 器高 底部径	7.7 1.0 5.2	平底の底面の中央部が内に彎入している。体部は基底部より上外方向に屈かくのび、口唇端面は内に内傾する。	内外両回転ナデ調整である。底部ヘラ削り。 体部の器厚は肥厚する。	焼成良好。胎土は密。赤褐色。	1
皿形土器	6	口径 器高 底部径	7.4 1.2 5.5	平底の底部の中央部が内に彎入している。体部は基底部より上外方向に屈かくのび、口唇端面は内に内傾する。	内外両回転ナデ調整であり、底部はヘラ削りである。	焼成良好。胎土は密。赤褐色。	1
皿形土器	7	口径 器高 底部径	7.4 1.3 5.5	平底の底部の中央部は内に彎入している。体部は基底部より、上外方向に屈かくのび口唇端面は弧状。	内外両回転ナデ調整であり、底部はヘラ削りである。	焼成良好。胎土は密。	1
石臼	8	直径 断面厚	10.8 3.0~2.0	卵形の円盤で中央部には内面とともに僅みがある。	臼石として利用されたものと推測される。	砂岩。	1
砥石	9	長径 短径 断面厚	12.5 8.5 2.0	方形の砥石で長辺の一部は欠損している。	破損部分は不明であるが、全面を研磨面として利用している。	砂岩。	1
砥石	10	長径 短径 断面厚	11.0 8.0 6.0	僅かに長方形の平面である。	全面をことごとく研磨面として利用している。図に示す1面には明らかに刃先の調整痕が残る。	頁岩。	1
砥石	11	長径 短径 厚	6.2 4.0 2.5	台状の器物で長辺を利用した砥石。	台状部の天井(上端面)には刃先の調整痕が残り、最長面は1の字形の研磨面がのこる。	頁岩。	1
石鎌	12	現全長 基部厚	3.6 2.8 0.5	推定される全長は5cm前後であろう。先端部を欠損するが二等辺三角形で基部が鋒人している。断面は鈍錐形である。	両面に刃先面を残し、周囲は細かく剥離を施し、刃部調整をしている。		

## 1 農免地区における出土遺物

第26図 農免地区遺物実測図



## 2 農免地区出土遺物についての小考

出土遺物の内、土器による時代区分は最も早い時期として平安時代が推定される。この時期を決定する上器として、遺物実測図1、2、3の土器があげられよう。さらに土器質の山皿4～7の遺物においては、さらに大きく時代の下がる時期のものと推考される。

石器遺物の内、9と10の砥石にみられる研磨面からみて、明らかに金属器を研磨対象としての研磨面が残されている。特に砥石10と11にみられる刃先調整のために刻まれた調整痕はまさに銃利な金属器の特徴を示す調整痕そのものである。

石鎌12は先尖部を欠損する遺物であるが、石質はサヌカイトの亜種系岩質であり、小剝離面を両面に造り出している外に、大剝離面を有しており本器の推定全長は5 cm内外とみられ、幅1.5 cmが石鎌基部に求められる。無茎の石鎌ではあるが、全体的規模からみて時代的にもまた刺傷する対象物も異なる器物である。時代的には弥生期の少なくとも中期か、もしくは中期後半に類似の遺物をみるものである。

以上農免地区における出土遺物は12の石鎌を除いて、他の遺物は明らかに2ヶ所において検出されたものであり、特に一括して出土した処に前述するごとく農耕用祭祀としての可能性が強い遺物である。

## V 北久米遺跡における小考

北久米遺跡は発掘区を、常堰地区、乃万の裏地区と農免地区に分割して、さらに発掘実施の便利性から、常堰地区をA・B・C区に細分し、乃万の裏地区もA・B・C区に細分した。

常堰A地区では、生活遺構は検出できなかったが、東方より西流する溝状遺構を検出した。溝状遺構の掘り込みは、地山面で10~15cm内外の掘り込みとなっており、溝遺構に充填する土層は4層からなり、第1層は黒褐色の粘性のある上層、第2層は黒色のシルト層、第3層は玄母を含む砂層、第4層は溝の構成基盤である黄褐色の粘土層（洪積層）であり、地山層と溝の遺構面とは容易に判別される層序構成であった。

溝状遺構と地山面の精査により、地山面に僅かに広がる面を発見し、水盛管により微コンタ…を計測した結果図第3図にみられる、やや不規則ではあるが、平坦面と僅かに隆起する面とが発見され、本文中で記述した水田遺構として取り扱った。さらに水田遺構としての断定資料として、土中に残された雑草の種子を検出した結果、筆者が熟知する水田雑草としてのコナギの種子を固定したことにある。（畑作雑草、湿地雑草、水田雑草についての分析は、笠原安男・梅木光次郎両博士の指導による。）現在松山平野における水田遺構として確認された遺構には、米住遺跡～赤生中期の水田跡と畑作跡、同遺跡における古墳時代の水田遺構、小坂3丁目の中坂遺跡は古墳時代の水田遺構とされ、本遺構を加え3例である。

常堰地区B区の調査結果は、堅穴式住居跡2基、掘立柱建物跡5基（完掘遺構のみ）と土壌状遺構である。

B区における生活遺構は大きく2分される集落であった。中心机No.50付近では、掘立柱建物群が検出されているが、建物の方位は不統一であり、数時期にまたがる構築が考えられる。この一群に対してSB1~4の建物遺構群は、僅かに主軸方位を異にするも、何れも主軸方位に統一性がみられる点にある。

掘立柱建物遺構の内SB4はSB02の平地式住居跡遺構に関連する建物遺構として理解されるものである。

SB02平地式住居跡には、SB2掘立柱建物遺構とSB3掘立柱建物遺構とが相前後して構築されている。SB01及びSB02住居跡は堅穴式住居とみられる住居跡でもあるが、星ノ岡遺跡B区のSB04の切土桁遺構と推測される支柱穴もみられないが、堅穴式と呼称しうるだけの床面の掘り込みもみられず、いわば中間的な住居跡といえる。だが、福音寺遺跡のSB04遺構での家屋復原図と同様の家屋が想定されることから、平地式住居跡と推測している。いまSB02遺構の平面プランは隅丸の長方形であり、この家屋に付随する建物遺構としてSB4遺構が推定される。

掘立柱建物遺構の比較図に示す建物の規模と機能からみて、最も小規模なSB4遺構は高

掘立柱建物遺構の比較図式

建物番号	桁 行 間			梁 行 間			柱		備 考
	桁行間全長	柱間心間距離	間数	梁間全長	柱間心間距離	間数	平柱	隔柱	
SB	桁行間全長	柱間心間距離	間数	梁間全長	柱間心間距離	間数	平柱	隔柱	SB 1・3・4・5における平柱の内梁間の柱は横持柱とする。
1	5.7m	1.9m	3	3.8m	1.9m	2	6	4	桁行間及び梁間ともに等尺の柱間心間距離である。
2	6.5m	2.0~2.5m	3	4.5m	1.5m	3	8	4	桁行間及び梁間は不規則な尺度間隔である。
3	4.7m	1.5m	3	4.0m	2.0m	2	7	4	桁行間及び梁間は等間であるが、桁行間が短尺である。
4	3.8m	1.9m	2	3.0m	1.5m	2	4	4	桁行間及び梁間とともに等間であるが、桁行間に長尺である。
5	4.5m	1.5m	3	400と420	2.0~2.20	2	6	4	桁行間では短尺での等間、梁間は20cmのずれがみられ長尺である。

床式建物が推定され、SB02 遺構の家屋に対する倉庫として理解したからである。これに対し SB 1 は SB 4 と同様に高床式建物であるが、倉庫ではなく住居として理解している。

その主な相違点は建物への入口（階段）が、2か所であると推定されることにある。また SB 2 と SB 3 は、共に掘立柱建物であり、高床式と区分される。

さらに建物尺度からみれば、SB 1 遺構が最も桁行間及び梁間も共に柱間の心間距離も等しく統一されているし、また柱穴の掘り方も方形である点等からみて最新の建物遺構と推測され、時期的には奈良後期下を下る時期とみたい。これに対して平地式住居を廃絶して SB 2 遺構の建物を、次に SB 3 遺構が建築されたと推測される。その根拠は当初は株持柱側に加重が掛かるとみる建築方法から、桁行間の加重を計算した尺度の変化に求めた推測である。

上墳状遺構では、特に SB 1 と SB 2 建物遺構南面で検出された遺構である。南面での SK 1 ~ 3 遺構はやや円形に近い土壙遺構である。SK 遺構断面図にも示すごとく、遺構それ自体の掘り込みも浅く、出土した遺物も土師器を中心とする壺形土器が主体をなめた。しかし充填土の上層部からは、須恵器片も出土している。以上の出土遺物からみて、土壙状遺構の形成時期は、平地式住居遺構と大差なき時期と推測されるが、機能面については、いま一つ確定しかねるものがある。

# 図版

# 福音寺遺跡

第1図 竹ノ下地区 発掘状況

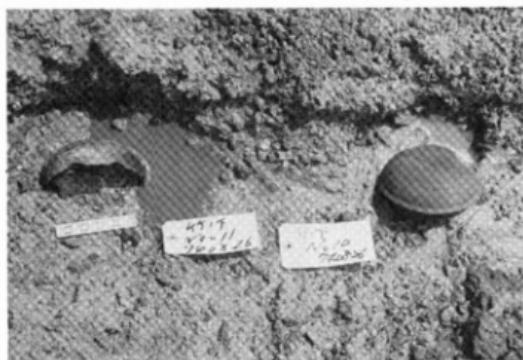
一雨があれば発掘区は  
まったくの沼地となる。



メジャー位置が第3層  
の砂質粘土層である。  
遺物はこの第3層と下  
部(4層)に集中した。



砂砾層の包含層にみら  
れる遺物



第2図 竹ノ下地区 護岸遺構

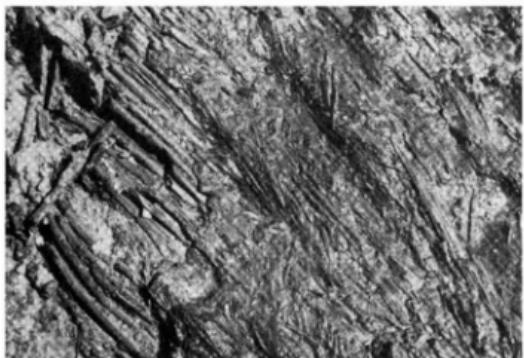
杭列により、護岸効果  
を計る。



護岸遺構の構築材には  
転用された建築用材が  
ある。



構築材の間には枝材と  
オギが敷きつめられて  
いる。

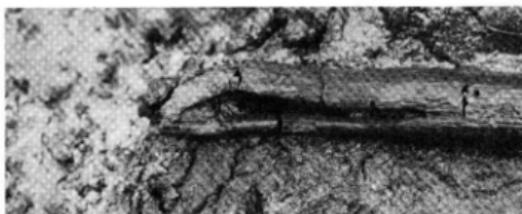


第3図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品1)

鎌の柄



鎌の着装部



斧か鍬の柄



建築用材

第4図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品2)

平 紙



木 梱



竹カゴ



第5図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品3)

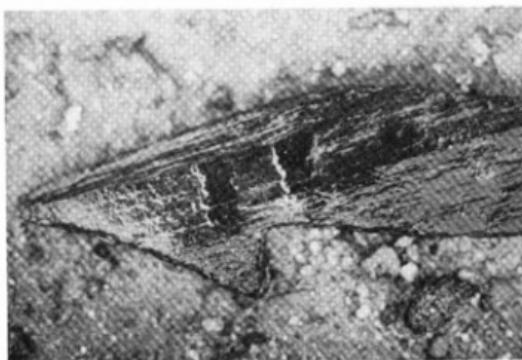
木盆の一部



鋤 ナスピ形の鋤先



二股鍔の一部



第6図 遺物出土状況(木製品4)

不明木器 琴の一部?



建築用材



建築用材

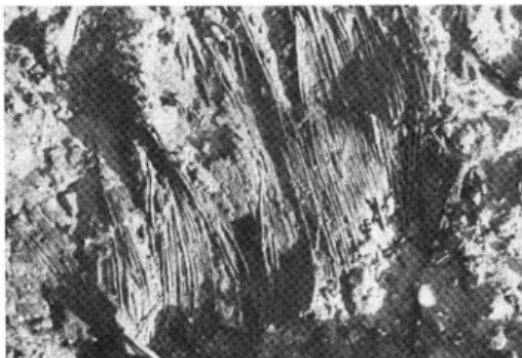


第7図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品5)

竹カゴ



コオリ



不明木器

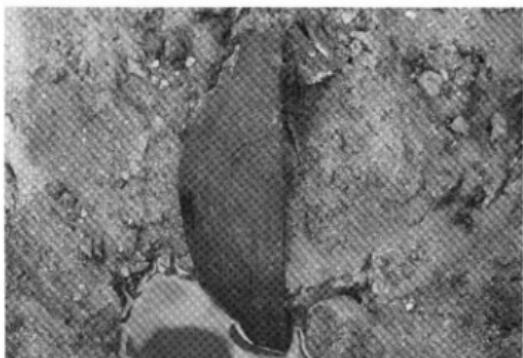
と

ヒョウタン



第8図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品6)

木 盆



不明木器



櫛の子

(編物の糸巻用具)



第9図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品7)

鉤の柄?



不明



縦形の櫛



第10図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品 8 )

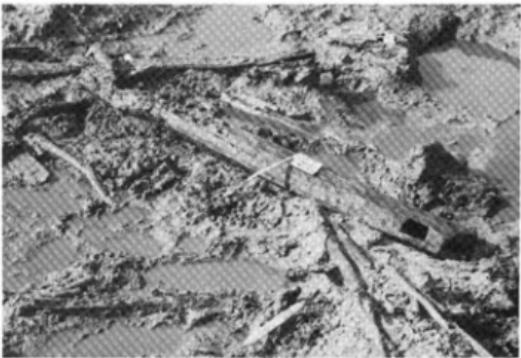
洪積層に打ち込まれた  
杭材



枘穴のある木器



建築用材

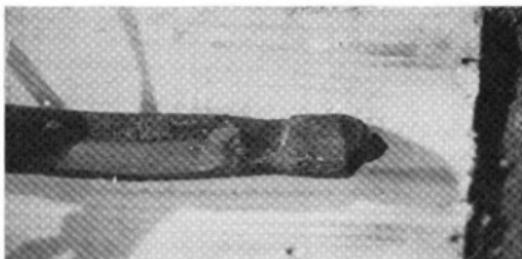


第11図 竹ノ下地区 遺物出土状況(木製品9)

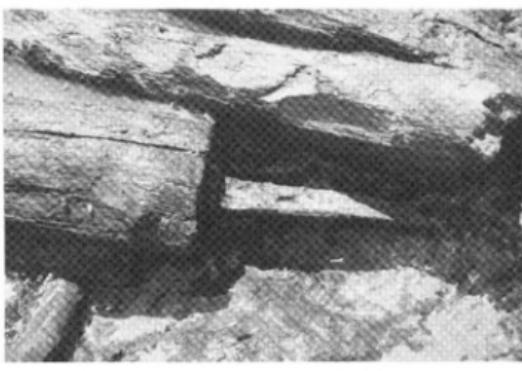
護岸の縦材



タルキ材



端部を抉り込んだ木器



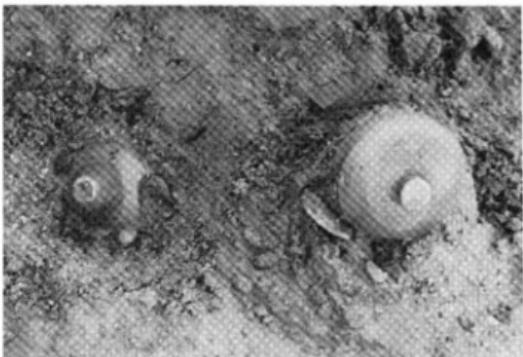
枘のある建染用材

第12図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器1)

須恵器



有蓋高壺



壺 蓋



壺 身

第13図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器 2)

土師の壺



土師質の手づくね土器

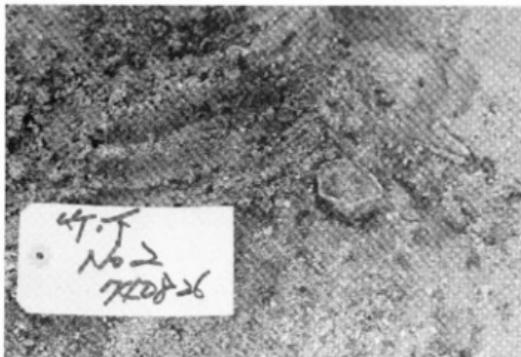


高 壱



第14図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器 3)

手づくね土器



环



环



第15図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器4)

高环と壺



高环と壺



壺形土器片と斧状の石器



第16図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器 5)

壺



丸底の壺



小型丸底壺



第17図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器 6)

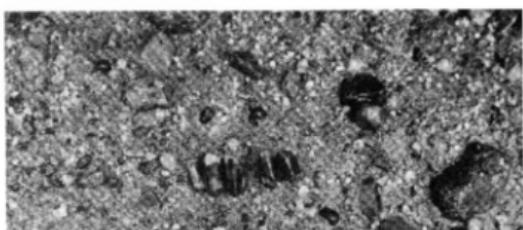
高環形土器



弓



動物の歯牙



木器と土器の出土状況



第18図 竹ノ下地区 遺物出土状況(土器 7)

壺形土器



壺形土器



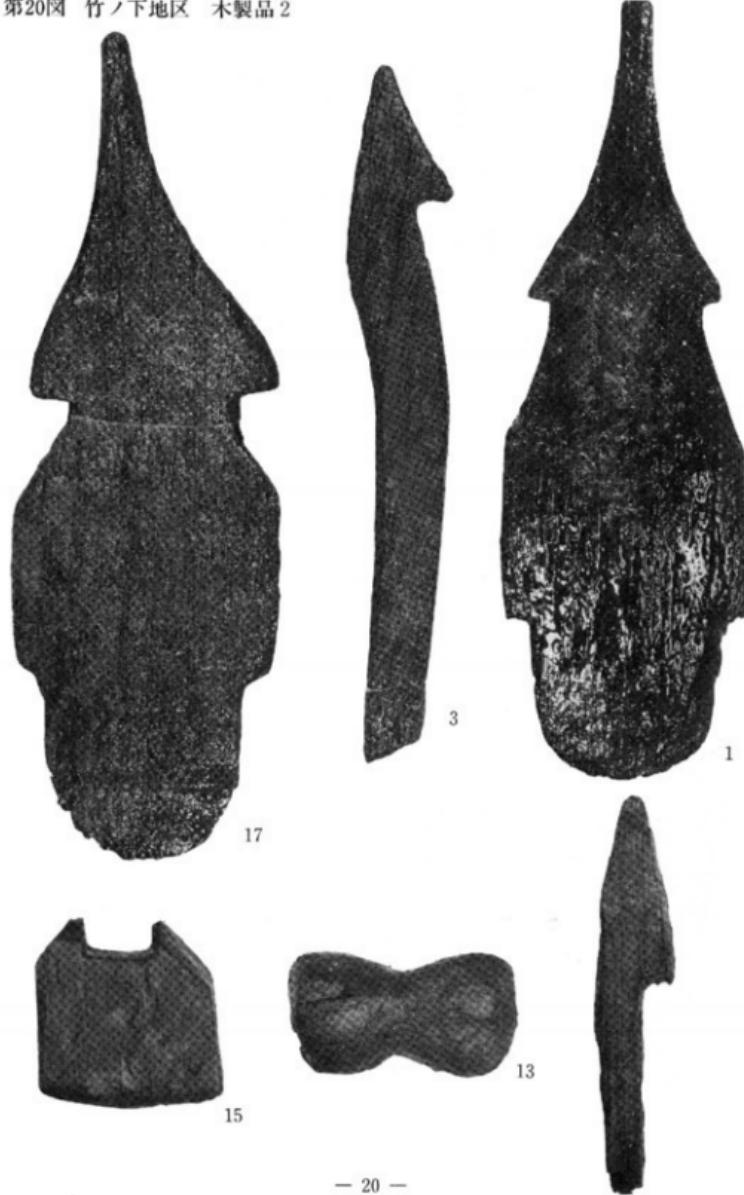
須恵器と土師器の出土



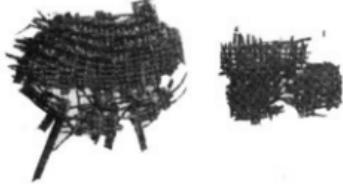
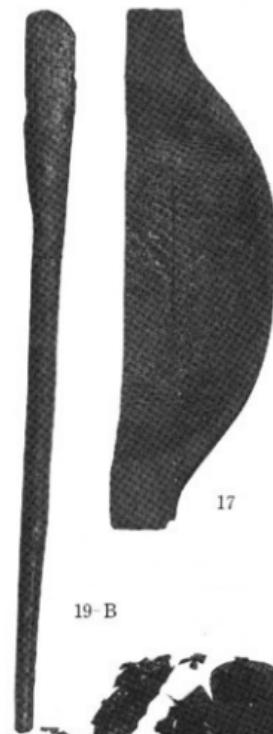
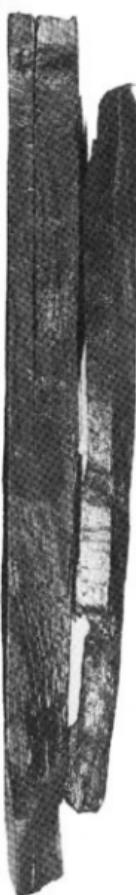
第19図 竹ノ下地区 木製品 1



第20図 竹ノ下地区 木製品2



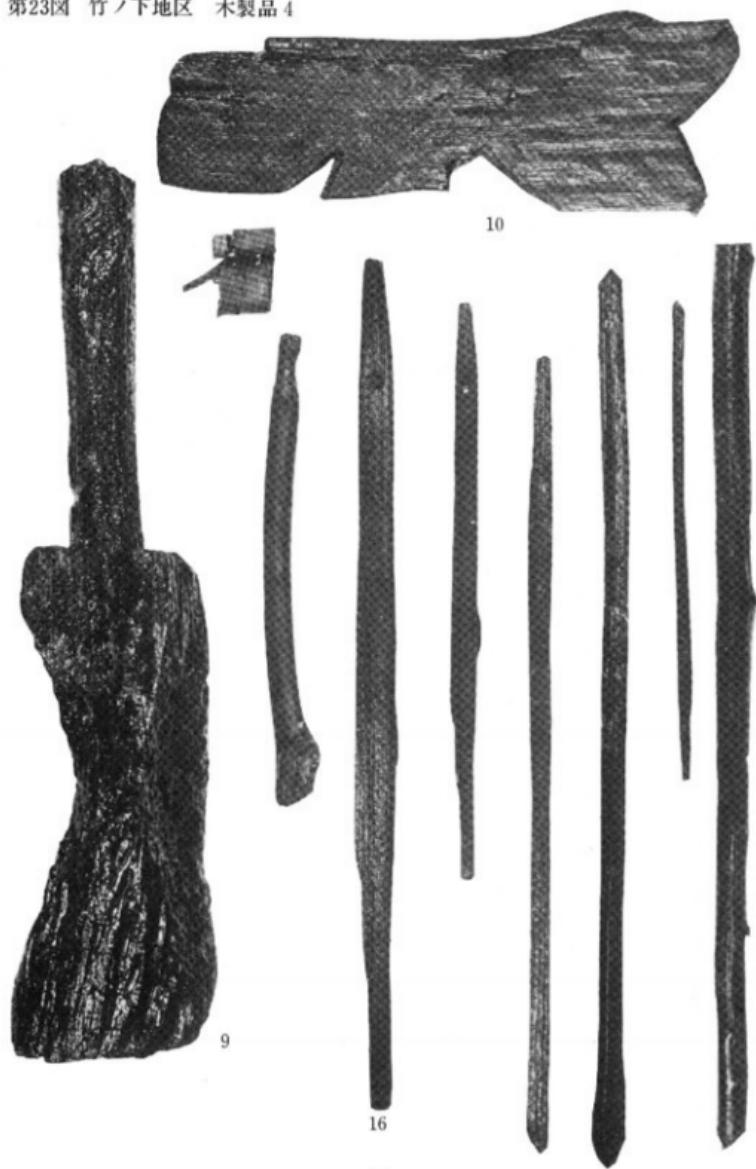
第21図 竹ノ下地区 木製品 3



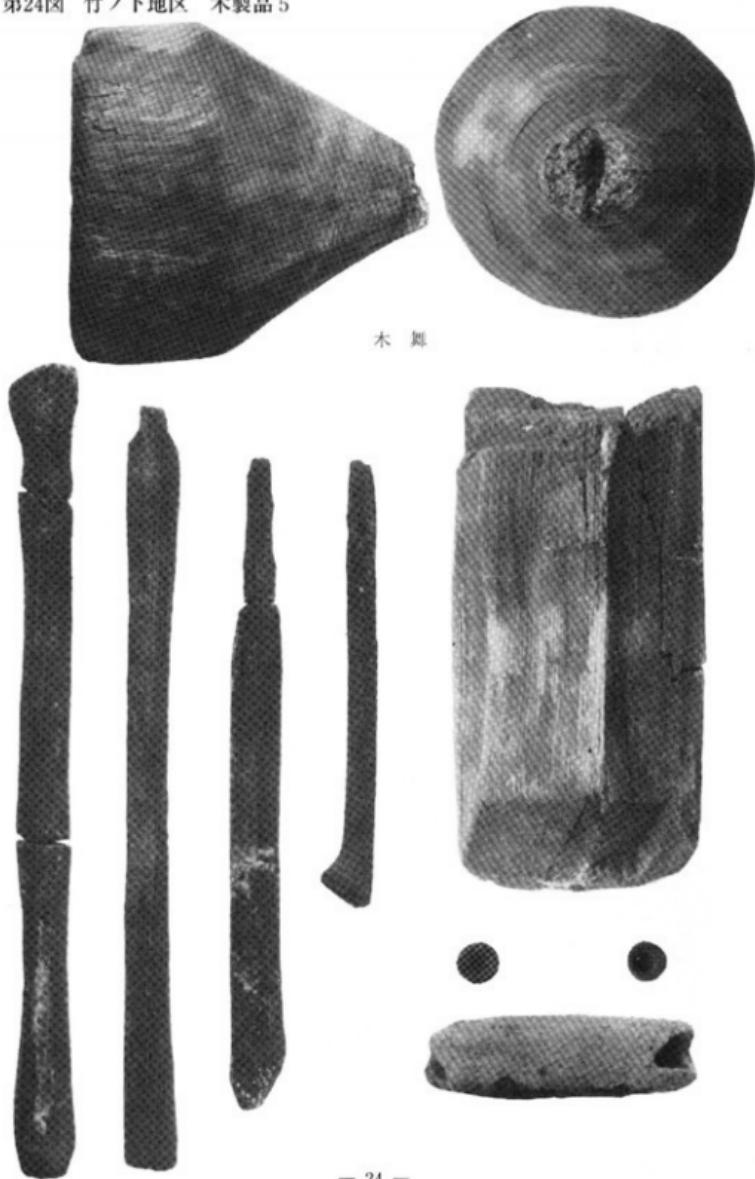
第22図 竹ノ下地区 上師器と石器



第23図 竹ノ下地区 木製品 4



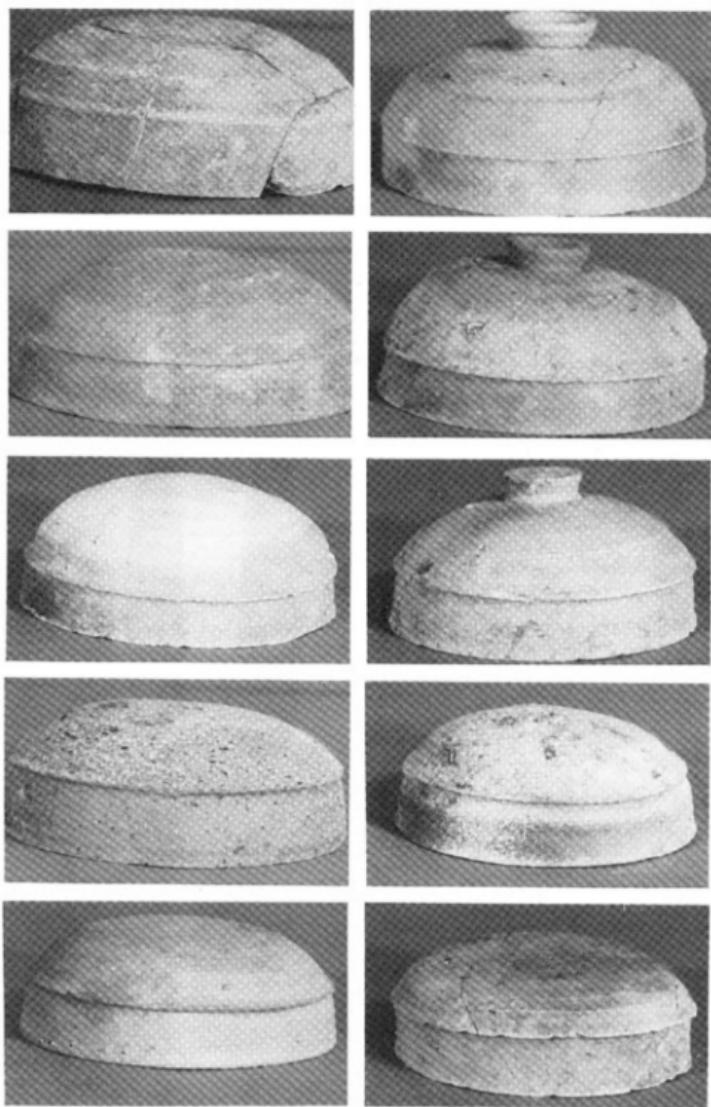
第24図 竹ノ下地区 木製品 5



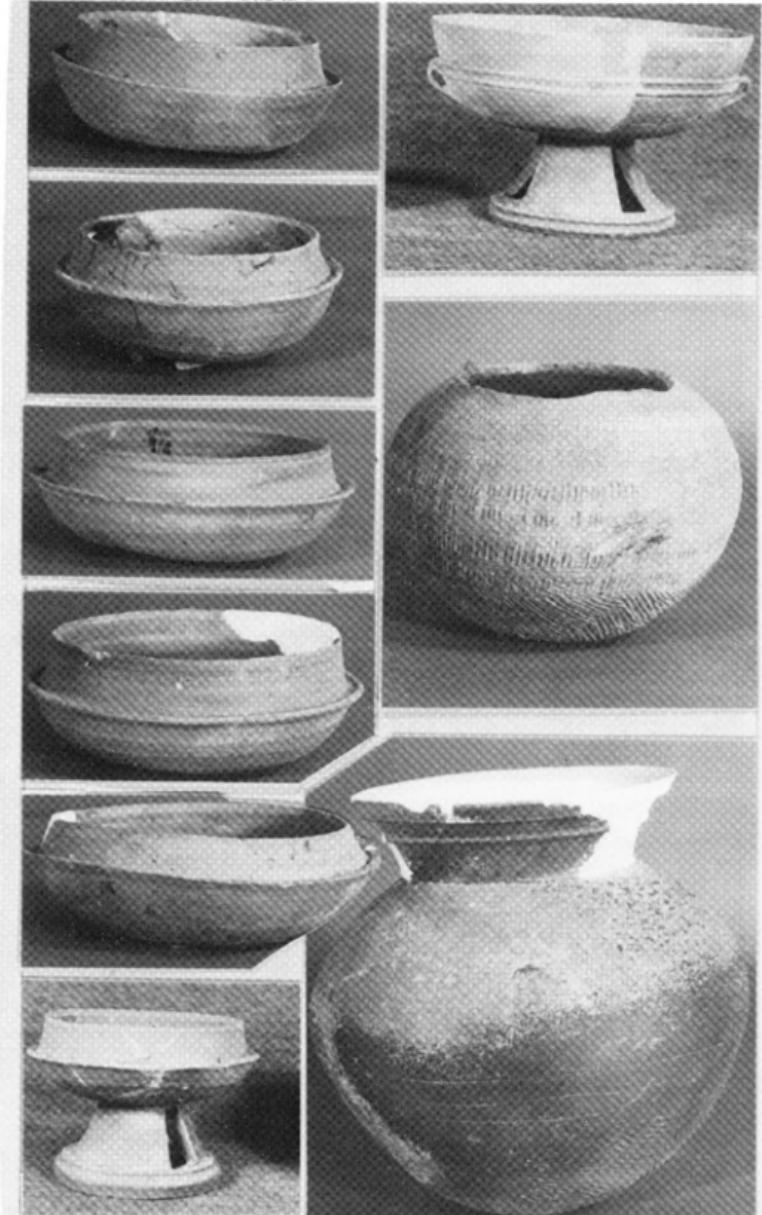
第25図 竹ノ下地区 木製品 6



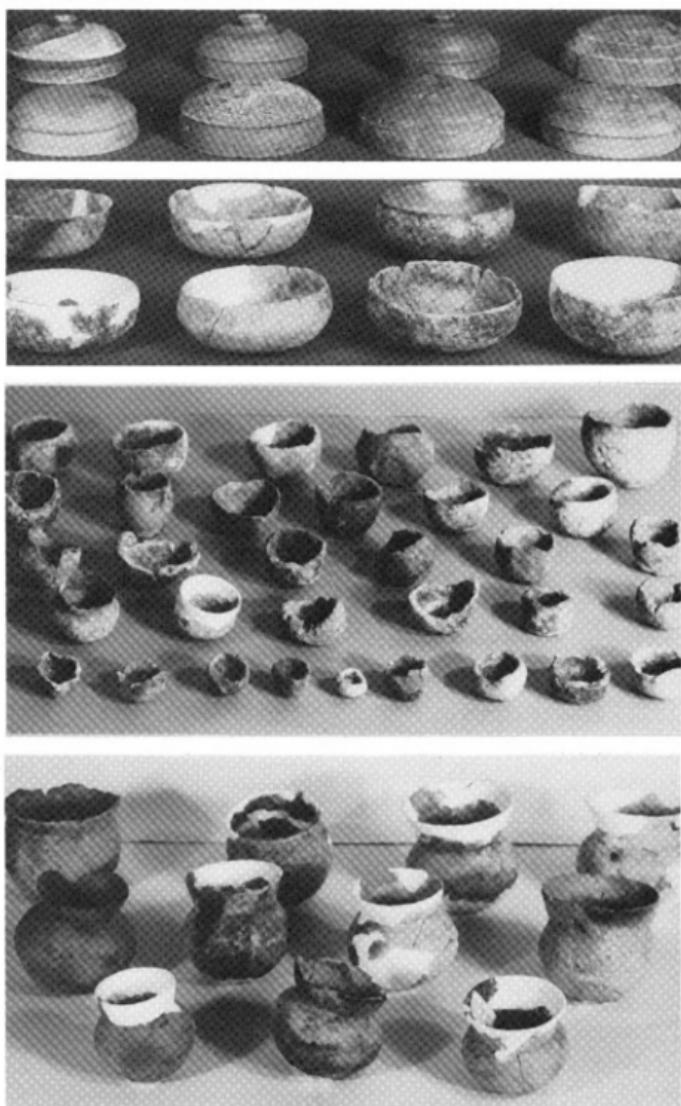
第26図 竹ノ下地区 須恵器 1



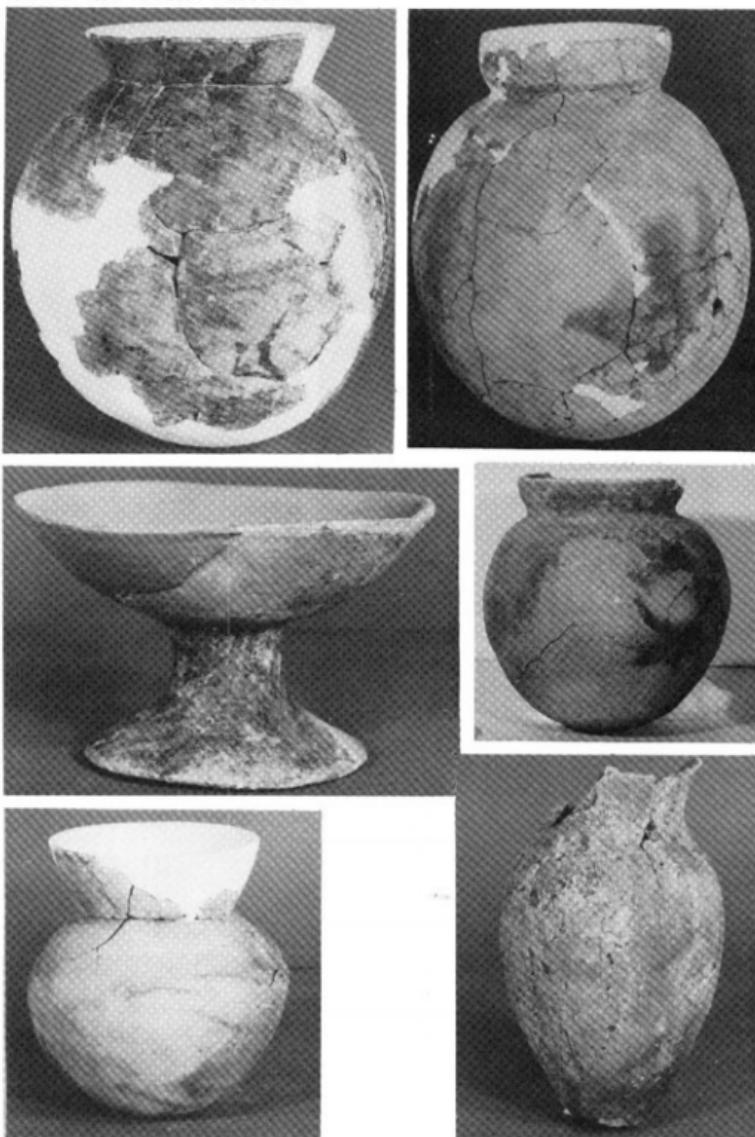
第27図 竹ノ下地区 須恵器 2



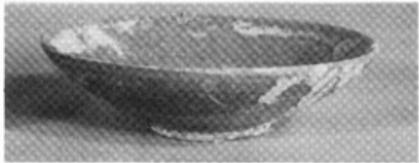
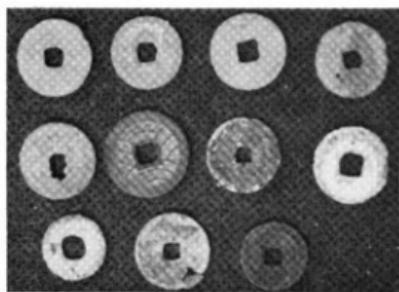
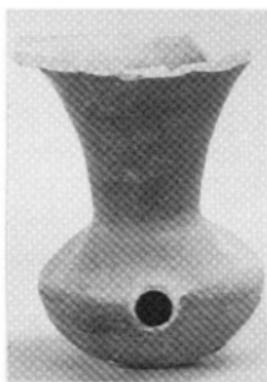
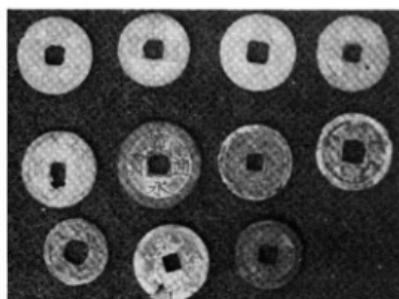
第28図 竹ノ下地区 須恵器と土師器 1



第29図 竹ノ下地区 土師器 2



第30図 川付地区 土塚墓出土遺物



第31図 筋違A区発掘状況 1



S B01遺構発掘状況



S B01遺構より筋違A区全貌を望む

第32図 筋違A区発掘状況図2

福音寺遺跡筋違A区の表土排除作業

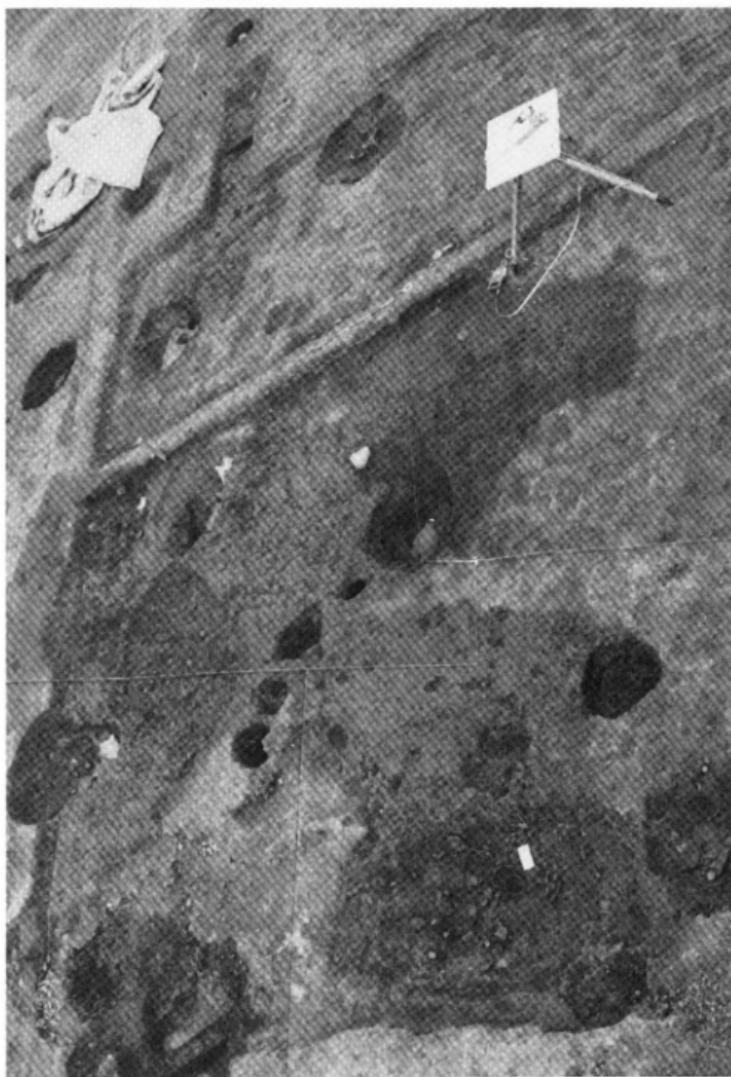


筋違A区のA溝完掘状況



4号住居跡出土状況  
小型丸底壺  
高环形土器

第33図 筋違 A 区発掘状況 3



筋違 A 区 S B04住居跡遺構の全景

第34図 筋達A区 S B 04遺構発掘状況



住居内の東壁面におけるピット状遺構よりの出土遺物

第35図 筋違A区S B04遺物出土状況

ピット状遺構内の出土  
遺物



同遺構内の小型丸底壺



第36図 筋違A区 S B06遺構と遺物の出土状況

筋違A区 6号竪穴式住  
居跡のようす



同地区の壁面に検出さ  
れた直刀



第37図 筋違A区S B05の遺構と遺物1

西壁面での出土状況  
(その1)



乾位溝での壺形土器の  
出土状況



北壁面におけるベッド  
状遺構の出土状況



第38図 筋違 A 区 S B 05 の遺構と遺物 2

5号竪穴式住居跡の遺  
物出土状況

手前は入口部



東北隅での出土状況



西壁面中央部での出土  
状況（その2）



第39図 筋違A区 S B05の遺構と遺物 3

5号竪穴式住居跡で検出された土器の出土状況



同上口縁部の状況



高杯形土器の出土状況



第40図 筋違A区 S B05の造構と遺物 4

高环形土器の出土状況



朝顔形口縁の壺形土器  
と作業石の出土状況

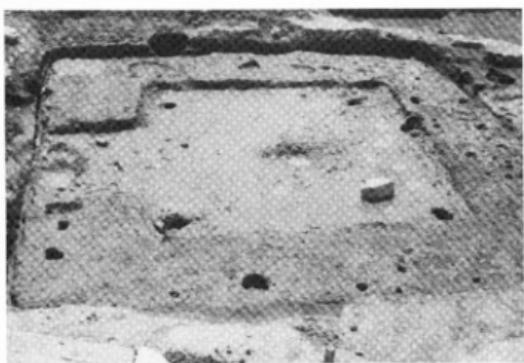


主柱P 3 の  
作業石と壺  
形土器



第41図 筋違A区S B05の造構と遺物 5

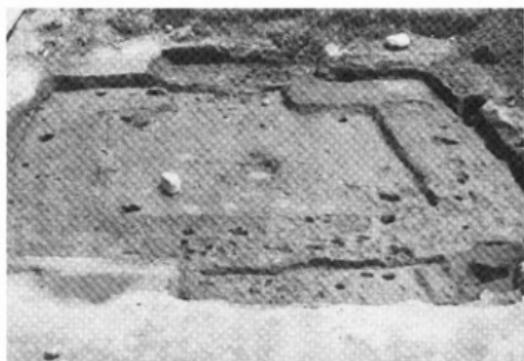
東側面より



南側面より



北側面より



第42図 筋違A区S B05の遺構と遺物 6



上

5号竪穴式住居の全景  
と主な遺物の出土状況



中

東壁面の周溝とベッド  
状遺構のようす



下

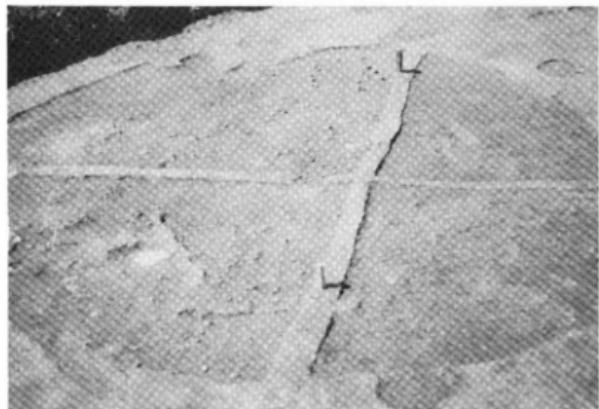
西側壁面の溝のようす

第43図 筋違B区発掘区全景



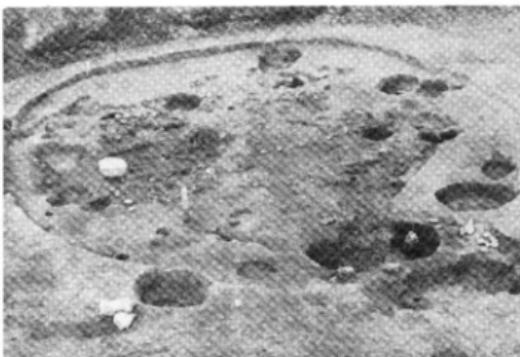
耕作土削除後グリッド設立、左手前が磁北

第44図 筋違B区発掘状況 1



筋違B区 1号竪穴式住居跡の検出状況

上 層序の調査



中 竪穴式住居と撲立



木質部の炭化遺物